西原土地区画整理事業第２工区に伴う
第15～第17次調査報告書

中越（なかこし）遺跡

2002年3月

長野県上伊那郡
宮田村教育委員会

西原土地区画整理事業第２工区に伴う
第15～第17次調査報告書

中越（なかこし）遺跡

2002年3月

序

伊那谷と木曽谷を分かつ中央アルプスの主峰、木曽駒ヶ岳に源を発して天竜川に注ぐ太田切川の、扇状地上に集落が営まれている宮田村は、東山道の駅の一つとして「宮田」の名が『延喜式』に記されているように、古くから開けた所として知られています。

中でも、村内で最も早く、1958年に初めて発掘調査された中越遺跡は、1968年と翌年の調査の成果によって、今から約6500年前の縄文前期の大規模な集落遺跡として知られ、多くの皆さんに親しまれるとともに、地域住民の誇りとされてきました。

多くの幼い村民に、土器や黒曜石製の矢尻などを「宝物」として提供してきたのもこの遺跡でした。

中越遺跡は、その集落規模の大きさと、他に類例のない底の尖った「中越式土器」によって、学界でも長い間「特異な遺跡」とされてきましたが、諏訪市や原村、富士見町などで同時代の規模の大きな集落が発見され、それらについて研究が進められた結果、この中越遺跡に代表される縄文前期初頭の中部高地の遺跡は、いわゆる「縄文海進」によって住む場所を失い、新天地を求めて内陸へと移動してきた、海辺の民によって営まれた集落であることがわかってきました。

中越遺跡はこの縄文前期ばかりでなく、縄文中期の非常に大きな集落と、縄文後期、平安時代、中世の集落が複合する遺跡です。

今回その中越遺跡で、３箇年をかけて西原土地区画整理事業第２工区の事業に伴う発掘調査を実施したところ、新たな遺構と遺物が多数発見され、多くの新知見を得ることができました。

詳細については本編をご覧いただきますが、中でも、駅仲町線の332号住居址から発見された縄文中期の大量の土器は、その量だけでなく、広い地域との交流を示す資料として評価されるものですし、縄文後期の遺跡で発見された方形石囲住居は、これまで認識されていなかった形態の住居として、極めて重要な発見ということができるでしょう。

発掘調査の成果は地域住民に還元し、その文化発展に寄与することが求められているわけで、この報告書がその一助となれば幸いです。

2002(平成14)年３月

宮田村教育委員会社会教育係
小　池　　孝

凡　例

1　本書は、西原土地区画整理事業に伴う中越遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査した遺跡は、遺跡台帳上は中越１、中越２、中越３に３区分されているが、これまで発行した報告書では「中越遺跡」として一括してあり、今回もそれに従った。

3　現場での発掘調査は1999年度から2001年度までの３箇年をかけて実施した。

4　区画整理事業は第２工区として実施されたものであるが、調査は第１工区からの一連とし、契約年度で区切って第15次から第17次調査として整理してある。

5　報告書に掲載した図面はおおよそ次の縮尺で作成し、それぞれスケールを付した。ただし、遺物の集合写真の縮小率は一定でない。

遺構実測図　住居址１/80、集石１/40

遺物　完形土器写真１／６、土器実測図１／４、黒曜石類実測図２／３

6　遺構実測図中の、土層図水平線右端の数字は、現地で導き出した標高（単位：m）である。

7　時間等の関係で、記述上必要なもの以外は、ほとんどの遺物は実測図で示すことができなかった。機会をみて作図の上公表したい。

8　遺跡地には1978年に広範囲にわたる分布確認調査を実施したときに10m方眼のグリッドが設定され、その後、遺跡地全体をカバーできるようにグリッド番号が修正されている。地球座標との整合性がないが、今回の調査で遺構等の位置はこのグリッドで表わした。

9　遺物のうち完形土器の写真撮影を(株)シン技術コンサルに委託し、遺物注記のため第一合成株式会社からジェットマーカーをリースした。

目　次

序

凡　例

第１章　調査の経過 …… 1
　1　調査にいたるまで …… 1

　2　調査前の中越遺跡 …… 1

　3　調査の方法 …… 3

　4　調査の組織 …… 3

　5　検出された遺構の概要 …… 5

　6　遺物の分類と所属時期 …… 11

第２章　遺構と遺物 …… 13
　第１節　縄文時代前期の遺構と遺物 …… 13

　　1　中越北線 …… 13
　　（１）竪穴住居址
　　１）　１・２・５号住居址　　２）　７・８号住居址　　３）　310号住居址
　　４）　311号住居址　　５）　312・313号住居址
　　６）　314号住居址

　　（２）土坑

　　2　区画道路38号線 …… 19
　　（１）　竪穴住居址
　　１）　48号住居址　　２）　290・359号住居址　　３）　297号住居址
　　４）　331号住居址　　５）　346号住居址　　６）　347号住居址
　　７）　348号住居址　　８）　349号住居址　　９）　350号住居址
　　10）　351号住居址　　11）　352号住居址　　12）　353号住居址
　　13）　354号住居址　　14）　355・356号住居址
　　15）　357号住居址　　16）　358号住居址

　　（２）　その他の遺構
　　黒曜石埋納遺構

　　3　区画道路39号線 …… 43
　　（１）　竪穴住居址
　　１）　166号住居址　　２）　167号住居址　　３）　168・380号住居址
　　４）　315号住居址　　５）　316号住居址　　６）　317号住居址
　　７）　318号住居址　　８）　319号住居址　　９）　320号住居址

　　（２）　土坑

4　区画道路42号線 …… 49
（1）　竪穴住居址
1）　360号住居址　　2）　361号住居址　　3）　362号住居址

5　1街区 …… 50
（1）　373・374号住居址

（2）　212号土坑

第2節　縄文時代中期の遺構と遺物 …… 51
1　区画道路4号線 …… 51
（1）　竪穴住居址
1）　368号住居址　　2）　369号住居址　　3）　370号住居址

（2）　210号土坑

（3）　ピット群

2　区画道路5号線 …… 57
（1）　371号住居址

3　区画道路6号線 …… 58
（1）　372号住居址

4　区画道路8号線 …… 59
（1）　363号住居址

5　区画道路11号線 …… 60
（1）　竪穴住居址
1）　375号住居址　　2）　376・377号住居址　　3）　378号住居址

（2）　土坑
1）　213号土坑　　2）　214号土坑

6　駅仲町線 …… 67
（1）　竪穴住居址
1）　325号住居址　　2）　326号住居址　　3）　327号住居址
4）　328号住居址　　5）　329・334・337号住居址
6）　330・332号住居址　　7）　333号住居址　　8）　335・336号住居址
9）　341・344号住居址　　10）　345号住居址

（2）　59号竪穴

（3）　土坑

（4）　集石
1）　4号集石　　2）　5号集石　　3）　6号集石　　4）　7号集石
5）　8号集石　　6）　9号集石　　7）　10号集石

7　12街区 …… 108
（1）　62号竪穴

第3節　縄文時代後期の遺構と遺物 …… 109
1　区画道路8号線 …… 109
（1）　石棺墓
1）　3号石棺墓　　2）　4号石棺墓　　3）　5号石棺墓

（2）　配石・石積遺構

2　駅仲町線 …… 111
（1）　住居址
1）　338号住居址　　2）　339号住居址　　3）　340号住居址
4）　342号住居址　　5）　343号住居址

（2）　2号石棺墓と11号集石

3　12街区 …… 119
（1）　住居址
1）　365号住居址と環状集石　　2）　366号住居址
3）　367号住居址

（2）　竪穴
1）　60号竪穴　　2）　61号竪穴　　3）　63号竪穴

（3）　6号石棺墓

4　区画道路5号線 …… 125
（1）　379号住居址

第4節　中世の遺構と遺物 …… 125
1　区画道路38号線 …… 125
（1）　中世建物址4

2　区画道路39号線 …… 127
（1）　中世建物址5

（2）　中世建物址6

3　区画道路36号線 …… 130
（1）　中世建物址7

第5節　近世以降の遺構 …… 130

第3章　まとめ …… 131

写真図版 …… 133

表紙写真：縄文後期の方形石囲住居（340号住居址）

第１章　調査の経過

１　調査にいたるまで

西原土地区画整理事業のうち第２工区として残されていた部分の工事が1999年度から開始された。

工事は主として必要な道路を敷設するものであったが、それに伴い工事区域内の埋蔵文化財が破壊されることから、記録保存するための発掘調査を実施することになった。

宮田村から委託された宮田村遺跡調査会は、2000年１月12日から調査を開始した。

調査の前提となる工事が、設定された道路を単位としておこなわれたことから、調査もそれに従って実施しており、「区画道路○号線」等の名称で調査地点も分けてある。

1994年度まで実施された西原土地区画整理事業第１工区に伴い、同様に埋蔵文化財の発掘調査をしており、一年度分を第○次調査として整理してきた。今回もその方法を踏襲して、1999年度契約分を西原土地区画整理事業第２工区に伴う第15次調査、2000年度契約分を同第16次調査、2001年度契約分を同第17次調査とした。それぞれの調査地点と調査期間、検出遺構は８ページの表１のとおりである。箇所数では16箇所となる。

遺構番号は種類別の一連番号であるが、調査した遺構のなかに過去にその一部を調査してあったものがあり、それらはすでに付されていた遺構番号で整理した。

２　調査前の中越遺跡

工事地点は、中越遺跡として周知の遺跡である。今回の調査開始時までに309軒の竪穴住居址が発見され、縄文前期初頭から中葉と、縄文中期初頭から縄文後期まで続く共に大規模な集落のほか、住居が散在する平安時代の集落と、中世の小規模な集落が確認されている。

遺跡が立地するのは天竜川の支流、中央アルプス木曽駒ヶ岳を源として東流する太田切川左岸に形成された扇状地上である。扇状地は形成されたあと流路を変えた流れによって開析され、二つの長尾根状の台地となっており、遺跡はそのうちの北側の、現在は南側に小田切川、北側に大沢川が流れる低地に挟まれた台地上の、天竜川に面した先端から約1.2㎞地点に位置する。

遺跡が立地する台地上は平坦でなく、南側に幅100mの、北側よりも２～４m低い面がある。この一段低い面と小田切川面との比高差は４mほどである。残りの面も一様ではなく、北西に一段高い面があるほか、南の一段低い面も含めて、台地上には東西方向の溝がいくつかあることがわかっている。

村内の全域にわたり圃場整備がおこなわれ、水田のための用水も全てU字溝を流れるようになった現在では見ることができないが、1970年代までは、台地の北側崖下の天竜川から1.5㎞地点と、台地の南側崖下の、同じく天竜川から900m地点に豊富な湧水があった。これらを含む太田切川の伏流水が、原始時代から続く集落を支える重要な要素となってきたことはまちがいないであろう。

はじめに今回の調査前に把握されていた遺跡の概要について記しておく。

縄文前期の集落が高燥な台地北半に展開している。規模は東西300m、南北180mで、そのうちの前期初頭の集落は、集落域の全体に、あまり密度が濃くない状態で展開しており、出土土器も多くが破片で、廃絶した住居内に集中して遺棄されることも少ない。この傾向は古い段階ほどより顕著である。前期中葉になると集落は集落域の西側に集約する。単位面積あたりの遺物量は多く、住居址埋土の下層から前期初頭の土器が、上層から前期中葉の土器が出土することが多い。

前期中葉の後半から前期末の空白期間を挟んで、縄文中期に、台地南半に集落が営まれはじめる。その規模は東西500m、南北170mと非常に広大である。遺跡全体からみれば調査面積はごくわずかであり、そのなかでの居住域の変遷や消長を知るまでには至っていない。

台地南側には、小田切川が開析し残した一段低い面があり、そこで縄文後期の遺構が発見されている。この時期に特有な大量の礫の間から、炭や骨片とともに遺物が出土しているが、明確な遺構の把握までには至っていない。

このほか、縄文中期の集落内から３軒の９世紀代の住居址と、縄文前期の集落の北縁から15世紀ころの竪穴建物址が確認されているほか、弥生前期の土坑もある。

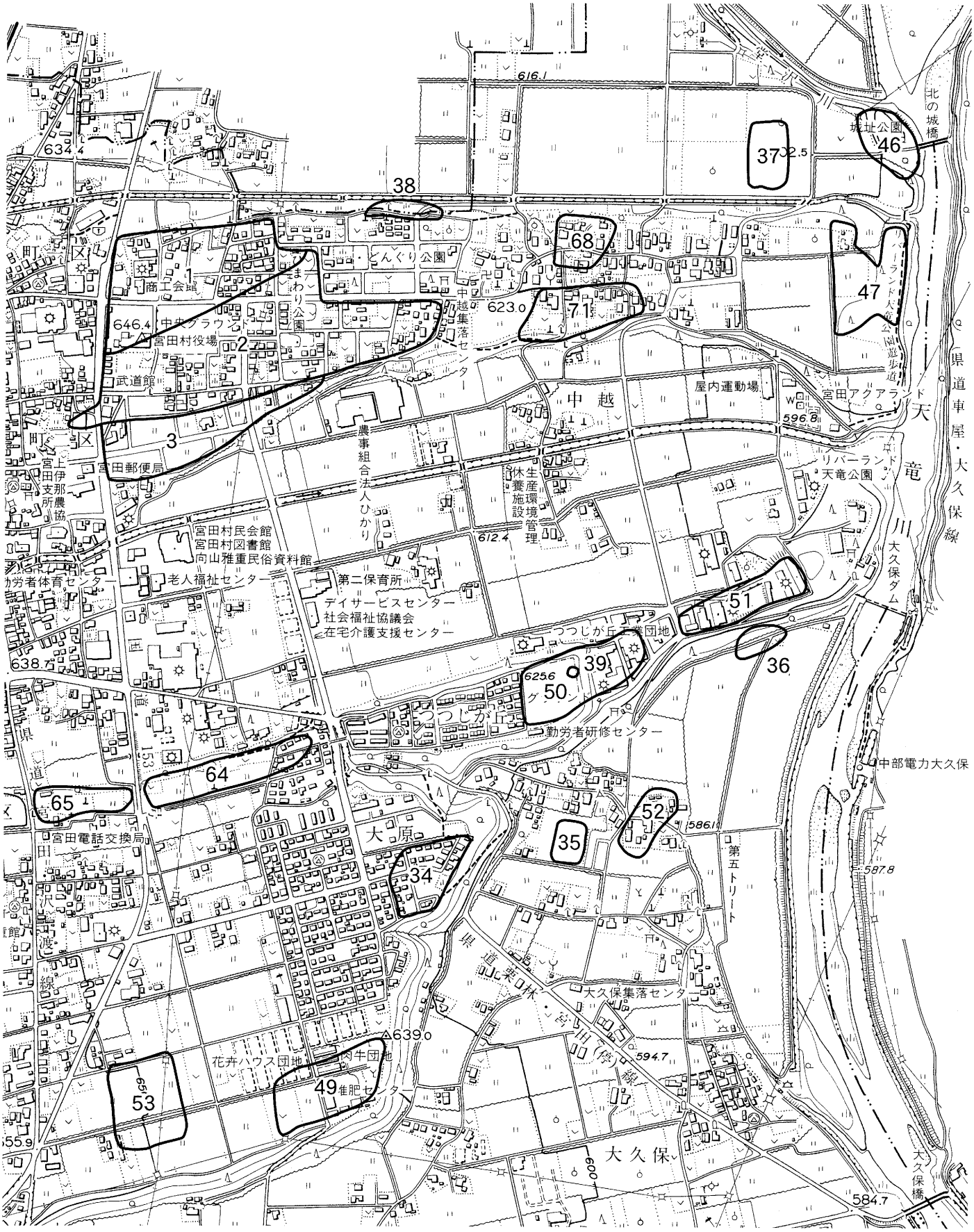


図１　宮田村遺跡分布図（部分）　１：10,000

現在遺跡は「中越１」「中越２」「中越３」に分けられており（遺跡番号１～３）、北側の最も高い面の「中越１」は縄文前期の集落域、台地南側の「中越２」は縄文中期の集落域、台地南端の一段低い面の「中越３」は縄文後期の遺跡とされてきたところである。

３　調査の方法

発掘作業は、表土を重機で除土したあと、ジョレンがけによって遺構を検出し、必要な部分をジョレンや移植ゴテで掘り下げながら記録を作成した。遺構平面の図化は平板測量によりおこない、調査地点近くの任意の場所に設定したベンチマークをもとに設置したレベルによって高さを記録してある。原則として竪穴住居址をはじめとする遺構実測図と土層図は１/20、遺構配置図は１/100もしくは１/200で作図したが、詳細図等必要な場合１/10や１/１で作図したものもある。

1958年以来の長い調査履歴を持つ中越遺跡には、10m方眼のグリッドが設定されている（宮田村教育委員会「中越遺跡発掘調査報告書」1990）ので、今回の調査でもそれによって位置を特定する方法を踏襲した。国道153号線と重なるグリッドの基準線は真北から51′30″西に振れている。

遺物はできるだけ遺構単位で取り上げることに努め、包含層の遺物はグリッドを単位に土色別に取り上げた。なお、駅仲町線では、調査中に、遺構が厚い遺物包含層の下にあることがわかった。その包含層を手作業で掘り下げることは時間的に不可能であったため、止むを得ず重機で包含層を掘削した上で下層の遺構を調査せざるを得なかった。

４　調査の組織

今回の発掘調査にかかわる組織と関係者名簿（1999～2001年度）

宮田村遺跡調査会

会長　友野良一

委員　唐木哲郎・太田　保・平沢和雄・加藤勝美・白鳥　剛・田中　勲

教育委員会事務局

教　育　長　小林　守

教育次長　酒井重彦

社会教育係長　小林敏雄

係　　小池　孝

発掘調査

遺構検出と遺物水洗　天野理津子・稲田宏子・植田尚美・大沢和子・太田　保・加藤多喜男・加納里子
唐木達雄・唐木三夫・唐木雄三・木村寿代・小田切里美・小田切守正・小林敏男
下平敏枝・杉山久美子・竹内京子・竹村俊文・谷　和子・谷口清子・夏目千鶴
林美弥子・平沢のぞみ・松下末春・本山智恵美・矢澤育代・安田美紀・和出玲子

遺構実測　天野理津子・植田尚美・大沢和子・杉山久美子・平沢のぞみ・小池　孝

写真撮影　小池　孝

整理作業

注記作業　谷　和子・矢沢育代・森さち子・植田尚美

復元・実測　平沢のぞみ・米田裕貴子・大森淑子・早川裕美子・板倉裕子・村上茂子・竹内みどり

遺構図トレス　平沢のぞみ・米田裕貴子

遺物写真撮影　シン技術コンサル・小池　孝

完形土器の写真撮影をシン技術コンサルに委託したほか、遺物注記のために、第一合成のジェットマーカーをリースで使用した。

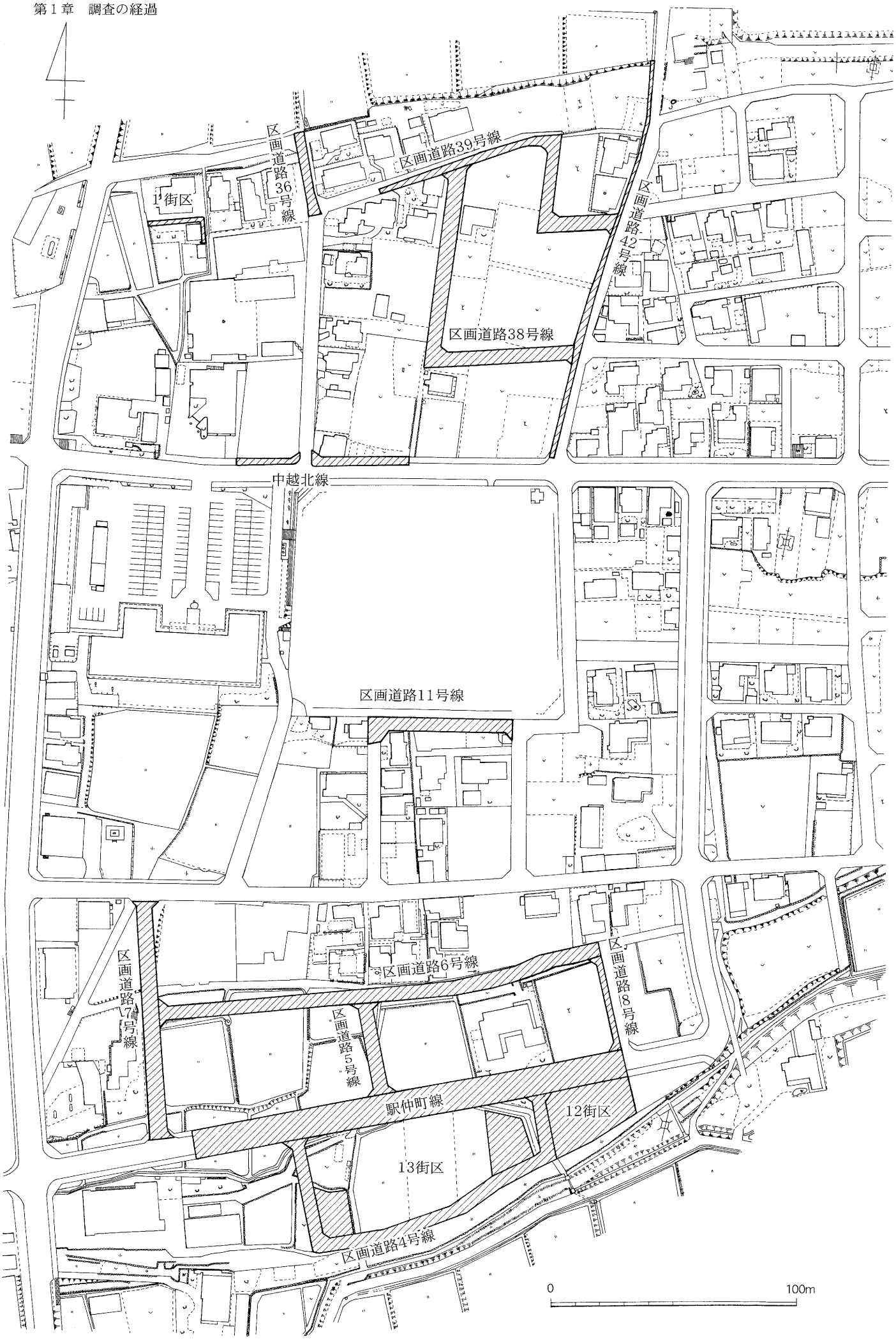
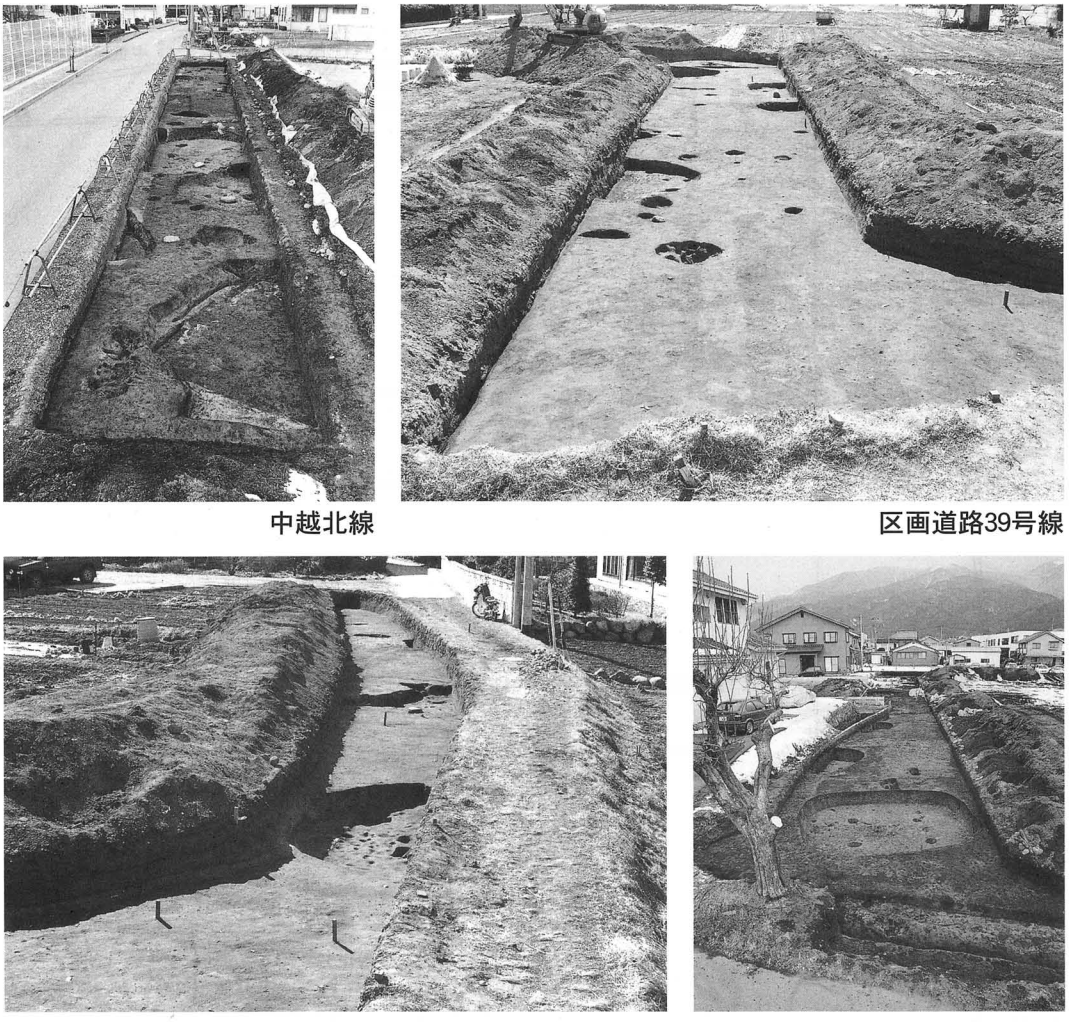


図２　西原土地区画整理事業第２工区に伴う発掘調査地点図

5　検出された遺構の概要

縄文前期初頭から中葉の集落の一部を中越北線、区画道路39号線、同38号線、同42号線、１街区で調査した。検出された遺構は竪穴住居址42軒、竪穴１基、土坑13基で、ほかに黒曜石埋納遺構１基がある。1958年に中越遺跡で初めてとなる発掘調査がおこなわれているのだが、中越北線でその当時の調査の痕跡を確認した。これにより当時の記録からは確定できなかった遺構の正確な位置を知ることができた。発見された遺構の主体は縄文前期初頭のもので、土器の量は少なく、遺物では黒曜石の石器と硬砂岩製の磨石が多い。住居址壁近くや遺構外から多くの石皿が発見されたことも目をひいた。黒曜石埋納遺構から出土した黒曜石は板状の原石を含む手頃な形と大きさの剥片と石核であり、定型石器加工の素材として集められたものとして注意される。



中越北線　　区画道路39号線

区画道路39号線　　区画道路38号線

写１　縄文前期の遺構の検出状況

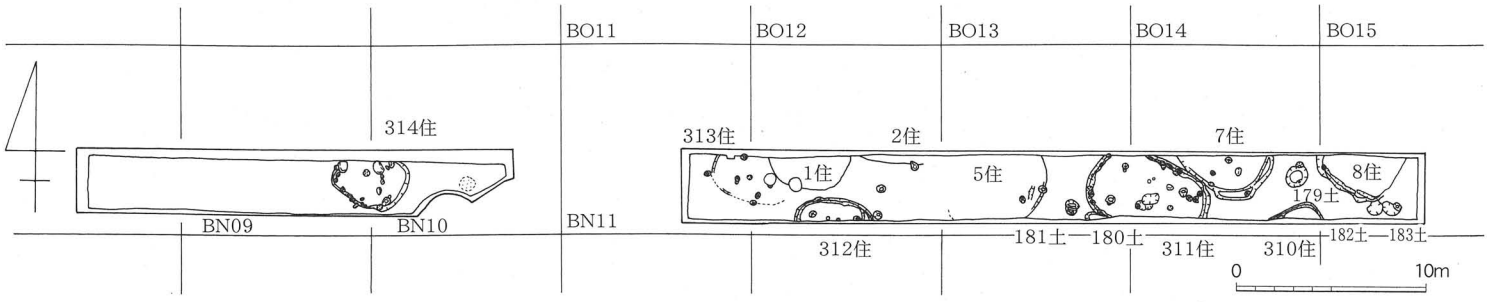


図３　中越北線調査全体図

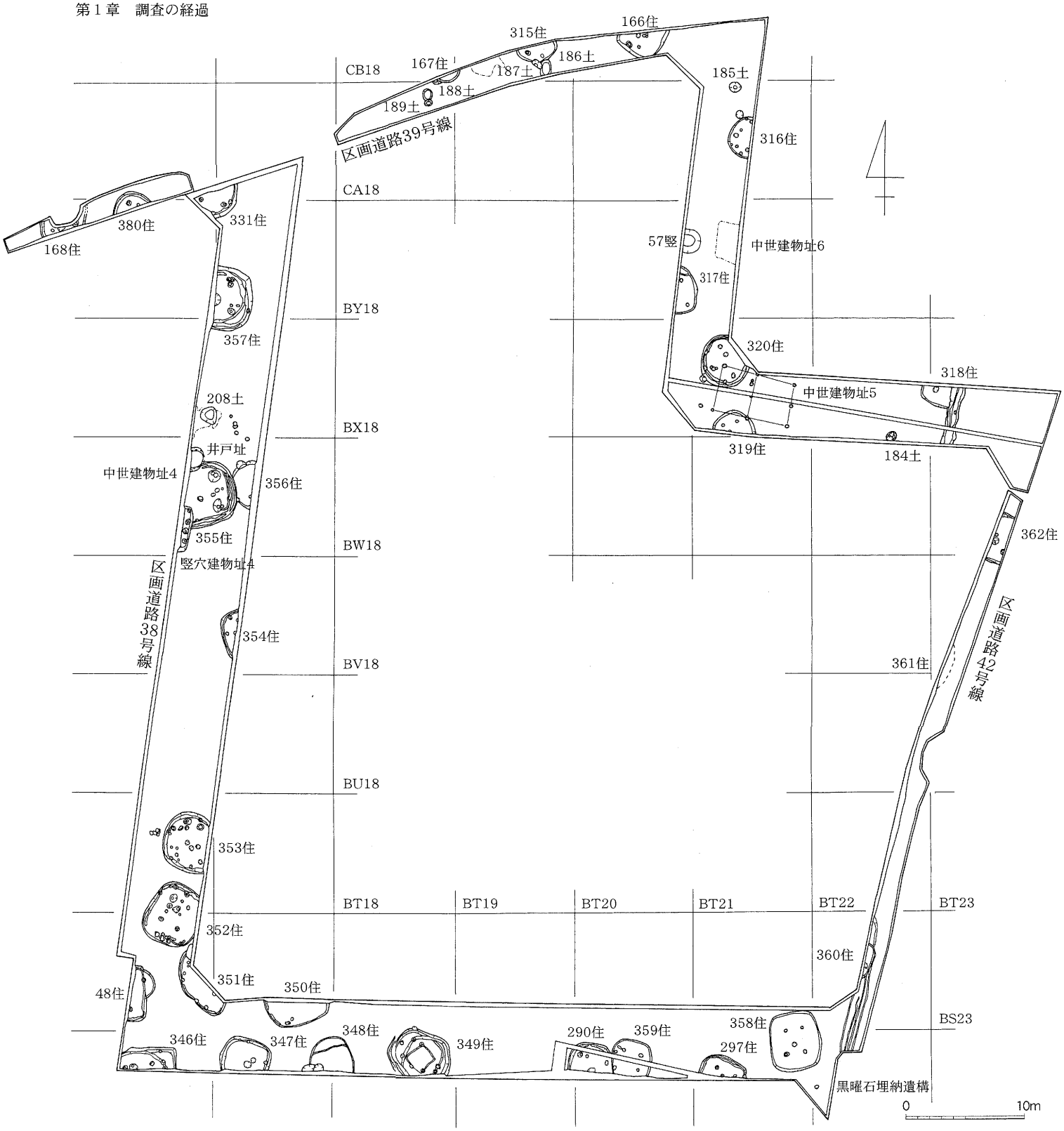


図４　区画道路38・39・42号線調査全体図

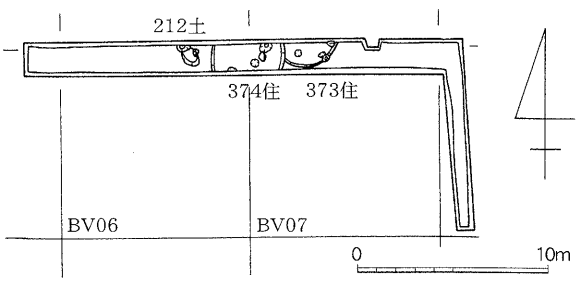


図５　１街区調査全体図

縄文中期の初頭から後葉の古い時期までの集落の一部を、駅仲町線を中心として、区画道路４号線・同５号線・同６号線・同８号線と、中央グランド南の区画道路11号線で調査した。検出した遺構は竪穴住居址26軒、竪穴１基、集石５基、土坑18基で、遺構を伴わない埋置された土器１点を発見している。

駅仲町線地点で、縄文中期の中葉末から後葉の初めにいたる濃密な集落が発見された。台地南縁に縄文中期の大規模な集落が確認されていたが、そこから一段低くなっているこの地点は、これまで縄文後期の遺跡が展開しているとされてきたところであり、その面まで縄文中期の集落の範囲が広がっていることが明らかとなったことの意味は大きい。中でも、大量の完形土器が埋土中に遺棄されていた332号住居址と、その上層に構築された規模の大きい集石遺構、６号集石は特筆すべきものであった。

この332号住居址をはじめとする住居址の埋土から、縄文中期中葉末土器の良好な資料を得ることができた。また、345号住居址の埋土などからまとまった量が出土した硬砂岩の剥片は、石器製作にかかわる遺物として注意される。

345号住居址調査状況

写２　駅仲町線の調査状況

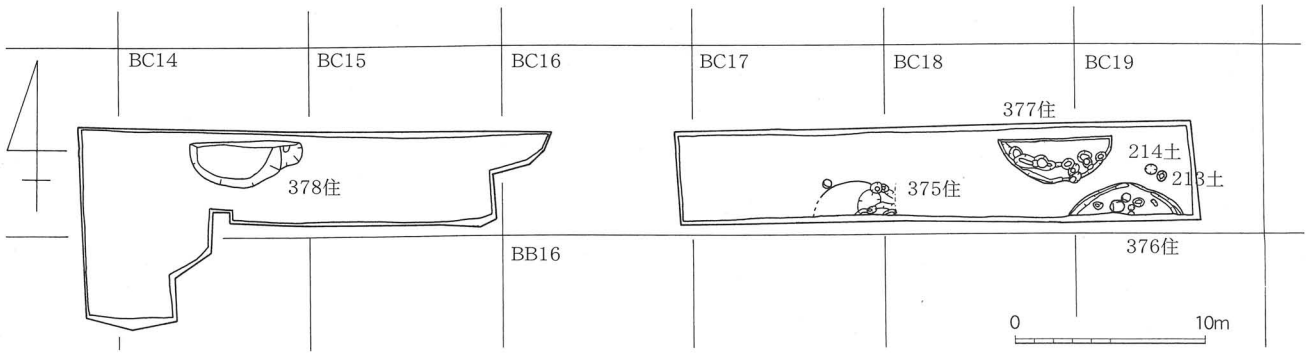
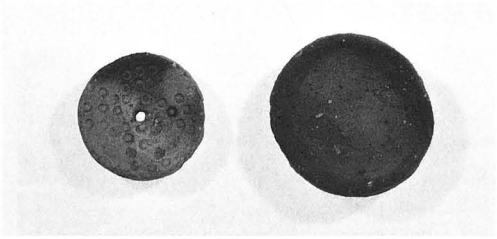


図６　区画道路11号線調査全体図

縄文後期の集落の一部を駅仲町線の東端、区画道路５号線、同８号線、12街区で調査した。検出した遺構には、住居址９軒、竪穴３基、石棺墓５基のほか、斜面に人為的に石を積み上げたと判断した石積遺構がある。遺物包含層中に大量の礫が混在し、遺構埋土も同様な状態であったことから遺構の検出に非常に苦労したが、敷石住居址とともに発見された、壁にあたる部分に拳大から人頭大の礫を積み上げた住居址「方形石囲住居」は、これまで明確な遺構の形を見出せなかった中越遺跡の縄文後期を特徴づける住居である。中でも12街区の造成に伴って発見された365号住居址は、その外側を環状にめぐる、人頭大よりも大きい礫による集石と一体のものとしてとらえることができ、当時の家の空間構成を知る手がかりを与えてくれた。また、これまで１例しか発見されていなかった石棺墓が、該期の普遍的な墓の形態であると予想できる数発見されたことも大きい。大量の土製耳飾りが発見されている同時期の田中下遺跡に比べ、わずか３点という中越遺跡での発見数も、耳飾りが特別な集落に集中するという従来からの所見を裏付けるものであった。

このほか、中世の遺構が台地北縁で調査され、宮田から「下牧」へ抜ける道を挟んだ段丘の縁辺部に該期の小規模な集落があったことが明らかにされた。遺構としては竪穴建物址、掘立柱建物址、竪穴、井戸址、土坑、床面（土間状の硬化面）などであるが、本報告では、これらの遺構によって構成される屋敷構えが想定されたことから、それらを一つの単位としてまとめることにした。

全体は一覧表で表す。



写３　AL20グリッド出土土製耳飾

No	調査地点	調査期間	実調査面積	検　出　遺　構
1	中越北線	H12/ 1 /11 ～ 2 / 2	230㎡	縄文前期の竪穴住居址10軒（1・2・5・7・8・310～314号）・土坑５基（179～183号）
2	区画道路 39号線	H12/ 2 / 7 ～ 3 / 2	420㎡	縄文前期の竪穴住居址10軒（166～168、315～320・380号）・土坑６基（184～189号）、中世の竪穴１基（57号）・掘立柱建物址１・硬化面３
3	駅仲町線	H12/ 4 /13 ～ 8 / 7	1500㎡	縄文中期の竪穴住居址15軒（325～330・332～337・341・344・345号）・竪穴１基（59号）・土坑14基（194～207号）・集石７基（４～10号）　、縄文後期の住居址５軒（338～340・342・343号）、石棺墓１基（２号）、集石１基（11号）
4	区画道路 ７号線	H12/ 9 /28 ～10/12	300㎡	なし
5	区画道路 38号線	H12/11/ 7 ～ H13/ 1 /17	840㎡	縄文前期の竪穴住居址18軒（48・290・297・331・346～359号）、中世の竪穴建物址１基（４号）・井戸址１基（１号）・土坑１基（208号）・硬化面１
6	区画道路 42号線	H13/ 1 /18 ～ 1 /24	110㎡	縄文前期の竪穴住居址３軒（360～362号）
7	区画道路 ８号線	H13/ 2 /13 ～ 3 /17	80㎡	縄文中期の竪穴住居址１軒（363号）、縄文後期の石棺墓３基（３～５号）　・石積遺構
8	区画道路 36号線	H13/ 2 /22 ～ 2 /26	30㎡	中世の掘立柱建物址１
9	12・13街区の 一部（試掘）	H13/ 3 /19 ～ 3 /23	210㎡	縄文中期の竪穴住居址１軒（364号）
10	12街区の一部	H13/ 3 /27 ～ 5 /16	510㎡	縄文後期の住居址３軒（365～367号）・竪穴３基（60・61・63号）・石棺墓１基（６号）
11	区画道路 ４号線	H13/ 5 /17 ～ 6 /11	520㎡	縄文中期の竪穴住居址３軒（368～370号）・土坑１基（210号）・ピット群
12	区画道路 ５号線	H13/ 6 /25 ～ 7 / 9	240㎡	縄文中期の竪穴住居址１軒（371号）、縄文後期の住居址１軒（379号）
13	区画道路 ６号線	H13/ 7 /10 ～11/ 1	730㎡	縄文中期の竪穴住居址１軒（372号）・土坑１基（211号）
14	13街区の一部 （２）	H13/ 9 /20 ～ 9 /28	70㎡	ピット群
15	１街区造成地 擁壁	H 13/10/22 ～10/25	50㎡	縄文前期の竪穴住居址２軒（373、374号）・土坑１基（212号）
16	区画道路 11号線	H14/ 1 /15 ～ 2 /14	270㎡	縄文中期の竪穴住居址４軒（375～378号）・土坑２基（213・214号）

表１　調査地点・調査期間と検出遺構

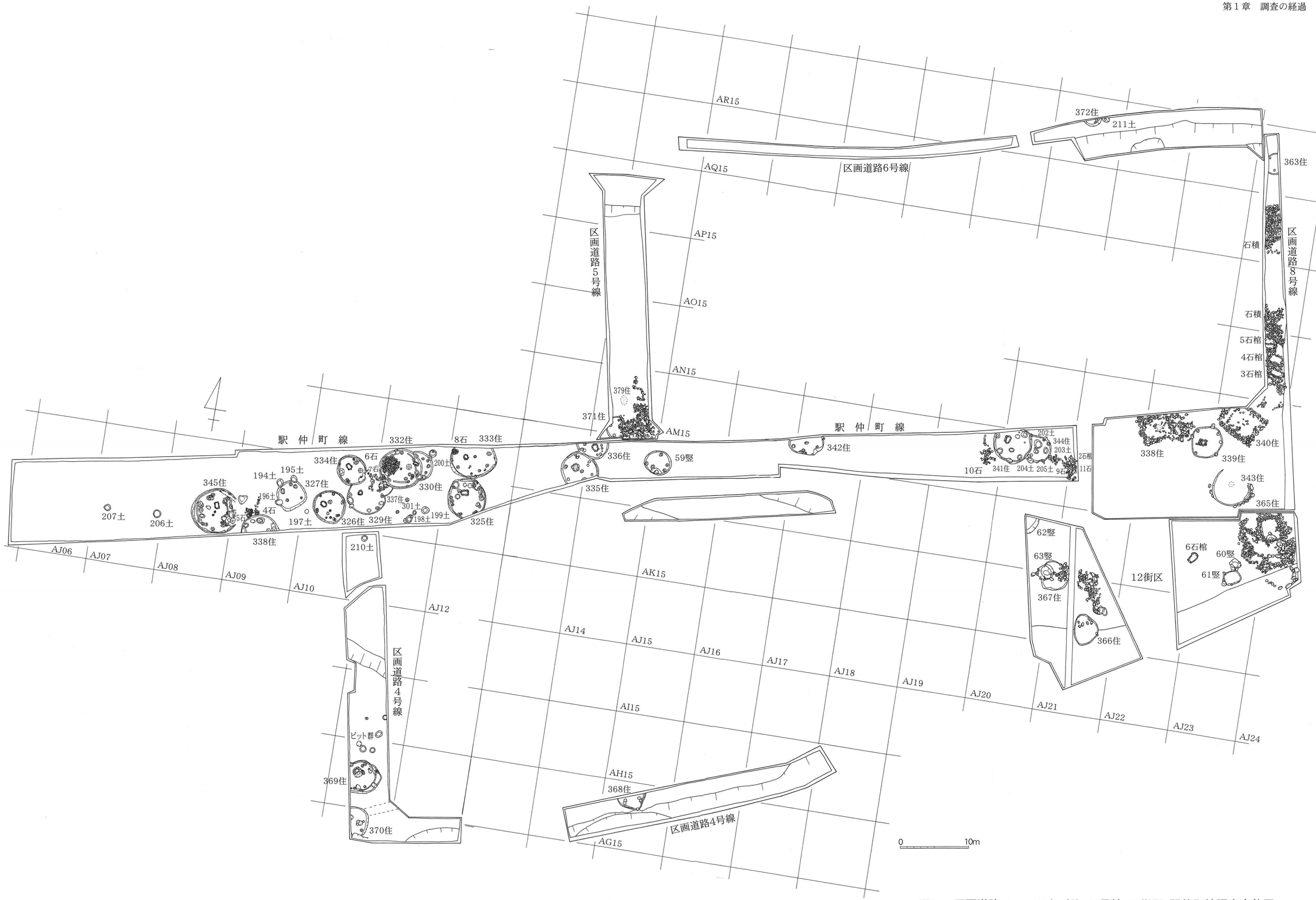


図７　区画道路４・５・６（一部）・８号線・12街区・駅仲町線調査全体図

６　遺物の分類と所属時期

基本的に縄文前期については「中越遺跡発掘調査報告書」(1990.3宮田村教育委員会)、縄文中期から後期については「長野県史考古資料編１巻(４)遺構・遺物」(1988.3長野県史刊行会) の時期区分に従った。ただし、ローマ数字で表現してあるものは可能な限り従来の土器形式名で表現することにした。

（１）縄文前期の時期区分と土器形式

時期区分		土器形式			
		Ⅰ群在地系	Ⅱ群関東系	Ⅲ群東海系	Ⅳ群北陸系
Ⅰ期	前期初頭中越期	中越式	花積下層式	清水ノ上Ⅰ式	＋※
Ⅱ期	前期中葉神ノ木期	神ノ木式	関山式	清水ノ上Ⅱ式	

※在地系の中越式に、胎土に細い棒状の繊維と透明な石英粒を含み、羽状縄文を地文とする土器が伴う。北陸系であるとのことであるが土器形式まではわからない。

（２）縄文中期の時期区分と土器形式

時期区分		土器形式
中期初頭	Ⅰ期	梨久保式前半・九兵衛尾根Ⅰ式
	Ⅱ期	梨久保式後半・九兵衛尾根Ⅱ式
中期中葉	Ⅰ期	狢沢式
	Ⅱ期	新道式
	Ⅲ期	藤内Ⅰ式
	Ⅳ期	藤内Ⅱ式
	Ⅴ期	井戸尻Ⅰ式
	Ⅵ期	井戸尻Ⅲ式
中期後葉	Ⅰ期	曽利Ⅰ式・梨久保Ｂ式
	Ⅱ期	曽利Ⅱ式

遺物量の多かった中葉の土器はかなり明確に地域差を把握できたので、系統を追って分けながら整理した。

（３）石器の分類と名称

廃絶した住居址が、日常生活で生じたゴミ類、使えなくなった道具などの廃棄場所であるとすれば、遺構から出土した石器も、多くが、破損品や石器の制作過程で生じた不要品、不良品なのであろう。

これまで石器についても様々な呼称が用いられているが、ここでは以下のような定義のもとに名称を使用した。

石鏃　全面に両面加工を施してありながら、形がほとんど整えられなかったものも石鏃に含めた。不定形で部分的にしか加工痕がみられなかったものは「二次加工のある剥片」とした。

スクレパー　刃部と特定できる片面加工を施した箇所があるものは広くこの中に含めた。

打製石錘　黒曜石の剥片類を素材とし、１対の抉りを入れただけの、縄文前期初頭から中葉に特有な石器。有抉顕磨石器。

礫端叩石　棒状礫の端部の稜を使用した石器である。その使用痕は軽い敲打痕が集中する平坦面をなし、胴部に凹石と同様の対をなす叩き痕、端部に近いところに軸線に対して横方向の線状痕が観察されるものもあり、複合石器とすることができる。黒曜石製石器製作のための石器とされている。先端顕磨石器。

磨石　硬砂岩や緑色岩類の扁平長円礫を使用した複合石器。平らな面の縁近くに磨石として使用した痕跡である平滑な面と、長辺の縁辺に叩石として使用した軽い打撃による摩滅があり、平らな胴部には一対の凹石状の叩き痕が残されたものもある。縄文前期の石器である。

横刃型石器　硬砂岩類の剥片の縁辺に、摩滅や細かな刃こぼれ状の剥離が観察されるもの。打剥により肥厚部分を調整してある例もある。粗形刃器。縄文中期に顕著な石器である。

叩石　棒状あるいは扁平棒状の礫の端部に、打ち欠いたような状態で叩いた跡が観察されるもの。打撃はかなり強く回数はさほど多くない。

敲打器　主として不整形な拳状の礫の尖った場所に、面を形成するようにして軽い敲打の跡が残る石器。緑色岩類が使用される。 縄文中期に顕著な石器である。

乳棒状石斧　緑色岩を棒状に加工し端部に刃をつけた伐採用の斧。全体を乳棒状に丁寧に調整するが、中に、稜を敲打によって調整した棒状礫の先端に刃をつけたものがあることから、稜を敲打によって調整した不定形な棒状礫片も含めた。

黒曜石類の剥片・屑片、石核　実際の石器制作の過程では、原石から定型的な剥片を打剥できたわけではないし、一次加工の段階で石器加工できない小さな剥片類も多く生まれたはずである。二次加工にあたって、それらの剥片類の中から、使える大きさ、形のものを拾い出していたのだから、住居址埋土を中心とする遺物包含層中に残された黒曜石類には、石器へ加工できない大きさ、形のものが非常に多い。それらも含めて「剥片・屑片」として一括した。また主要剥離面を見いだせない一次加工のあるものは、二次加工に耐えうる剥片が剥離されたか否かにかかわらず全て「石核」とした。

ピエス・エスキーユ　黒曜石の両極打法による打剥の痕跡があるもので、全体形が楔形に整ったものに限った。

なお、黒曜石、チャート、珪質頁岩など小型の利器のための石材の総称として「黒曜石類」を、硬砂岩、緑色岩、緑色片岩など大型の石器のための石材の総称として「硬砂岩類」を使用した。

第２章　遺構と遺物

第１節　縄文時代前期の遺構と遺物

１　中越北線

（１）竪穴住居址

１）１・２・５号住居址

1958年に中越遺跡で初めての発掘調査が実施され、遺構実測図も作成されたものの、遺構の位置を地図上に落とした記録がなく、これまで遺構の位置を特定することができなかったが、今回の調査で、ＢＮ12、ＢＮ13グリッドで１・２号住居址と５号住居址の調査痕跡を確認できた。それをもとに当時作成した遺構図をこの報告書で使っているグリッドの上に落とすと図８のようになる。

２）７・８号住居址

1968年に調査した遺構である。当時埋めた土を取り除いたあと、一部調査もれの箇所があったのでその部分を調査し、記録として残した。

３）310号住居址

ＢＮ14グリッドの北東隅に発見された。大部分が用地外となるため北隅のわずかを調査できたにすぎない。遺構検出面から床面までは30㎝を測り、炭混じりの褐色を呈する埋土は、下層の壁近くが黒みがかっており、上層の中央が少し赤みがかっていた。平面形は恐らく東北東方向に軸線をおく隅丸方形となろう。規模はわからない。周溝が壁直下をめぐる以外は、柱穴等調査範囲にはない。

遺物はごく少量で、土器は中越式の最も古い段階のものが主で、神ノ木式はない。石器は石鏃１点、スクレパー１点、石匙１点、礫端叩石１点のほか、黒曜石類の剥片・屑片79点、石核11点、ピエス・エスキーユ８点がある。

所属時期は中越期の最も古い時期であろう。

４）311号住居址

ＢＮ13とＢＮ14グリッドの南側で発見された。北のわずかが用地外のため、南側は道路敷となっているため調査してない。北東側にわずかに切りあって７号住居址が、南西外には土坑が２基（180号・181号）ある。平面形は西北西方向に長軸をおく6.4×4.1ｍの隅丸長方形を呈するが、隅の丸みが強く長円形に近い。炭と黄色土粒が混じる埋土は中層が少し赤みがかった褐色を呈する。壁直下を全周するとみられる周溝内には深さ10㎝から20㎝の浅いピットがいくつも穿たれている。柱穴はP_1～P_3と用地外の１本の４本で、床面からの深さが40㎝から50㎝以上といずれも深い。深さからみて柱穴を結ぶ長軸の中間にあるP_4、P_5、P_6にも柱が立っていた可能性がある。炉はP_4の東の浅い地床炉で、床には全面に粘土質の黄色土が貼られており、中央部が軟らかい以外は全体に堅い。P_3の西には丸みをおびた板状の石が床に据えられていた。

遺物は該期の住居址の中では比較的多い。土器はいずれも破片で、南東壁近くの床面直上にまとまって出土したのは中越式の中でも最も古い段階のもので、埋土の遺物も中越期の古い段階のものが圧倒的に多く、少量の清水ノ上Ⅰ式と、北陸系の土器がわずかに伴出している。石器は石鏃（両面加工された不整形な石器を含む）36点、スクレパー３点、石匙９点、磨石11点、礫端叩石７点、局部磨製石斧１点のほか、黒曜石類の剥片・屑片521点、石核116点、原石１点、ピエス・エスキーユ21点がある。石匙と磨石が多い点が注意される。

平面形が長円形に近く、掘り方が浅くないなど、遺構の形態としてはより新しい傾向がうかがえるが、出土遺物から、所属時期は中越期の古い段階としておきたい。

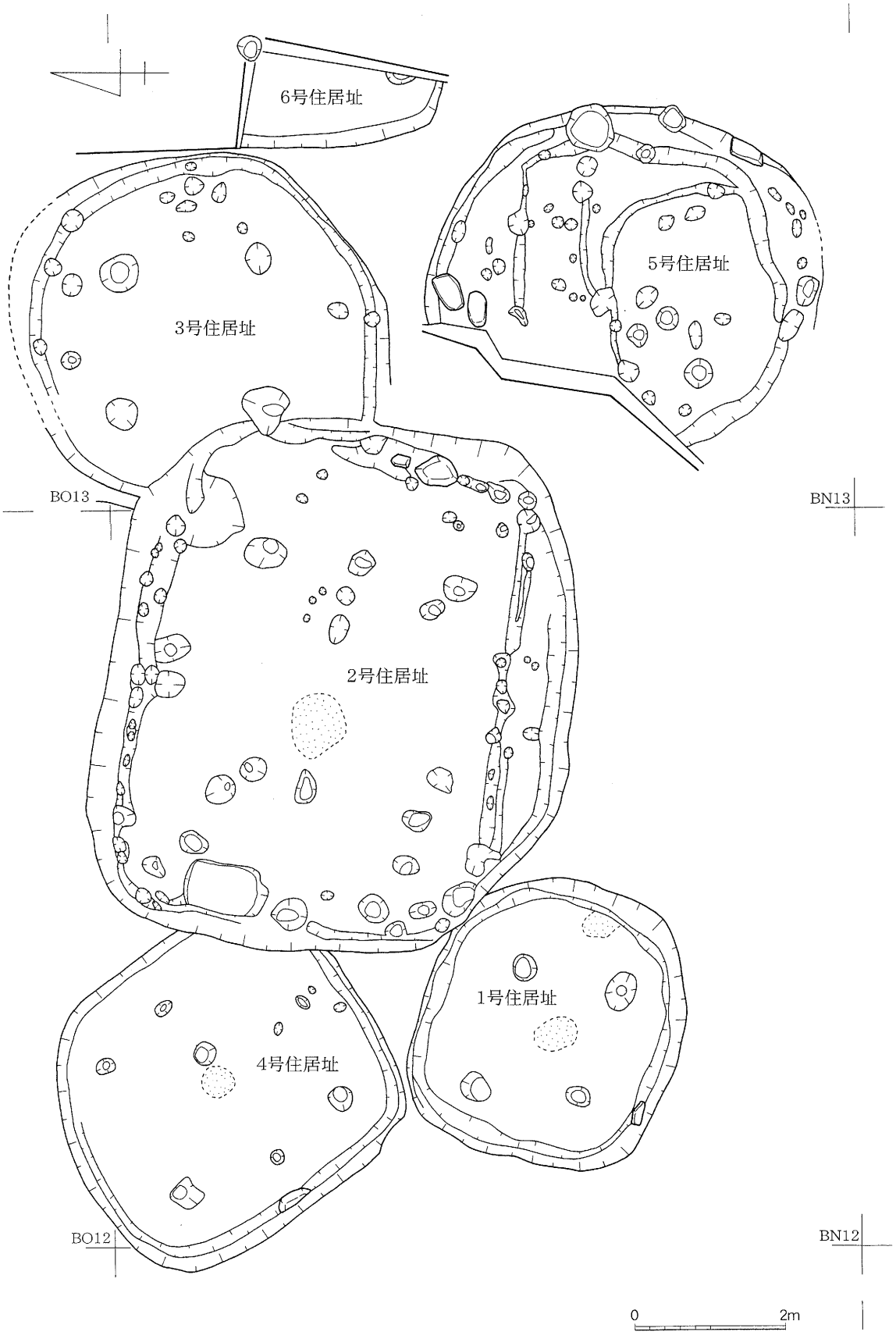
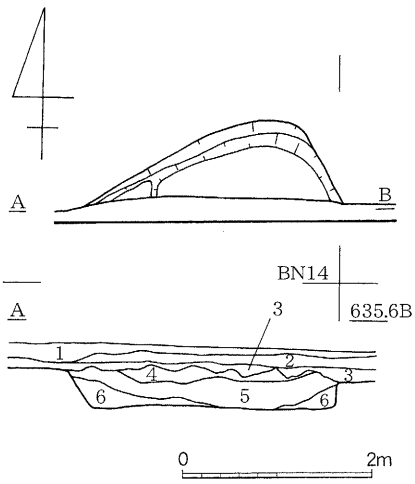
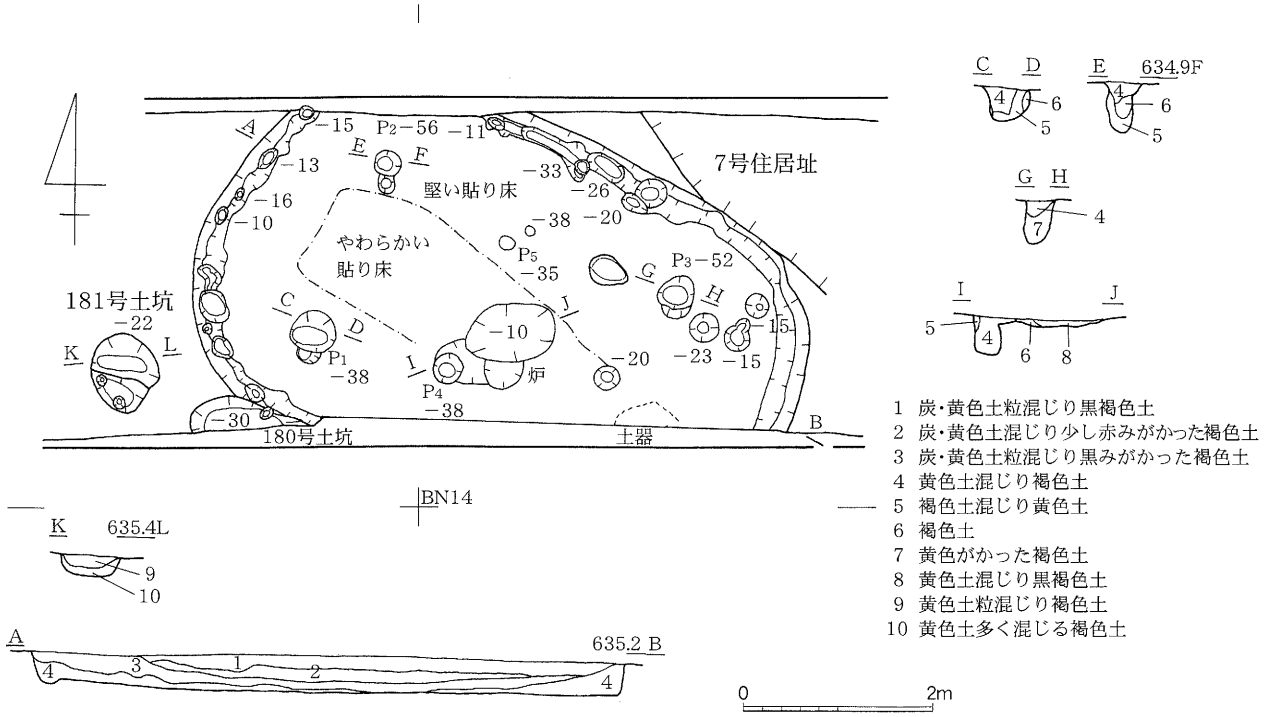


図８　１～５号住居址位置確定図



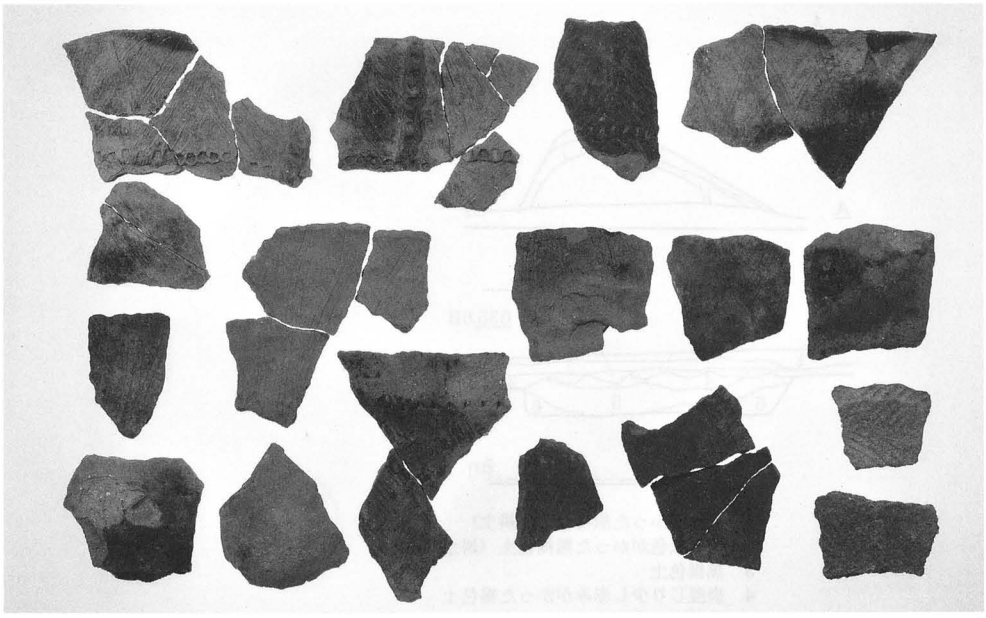
1　灰色がかった黒褐色土（耕土）
2　少し灰色がかった黒褐色土（耕土）
3　黒褐色土
4　炭混じり少し赤みがかった褐色土
5　炭混じり褐色土
6　炭混じり黒みがかった褐色土

図９　310号住居址実測図

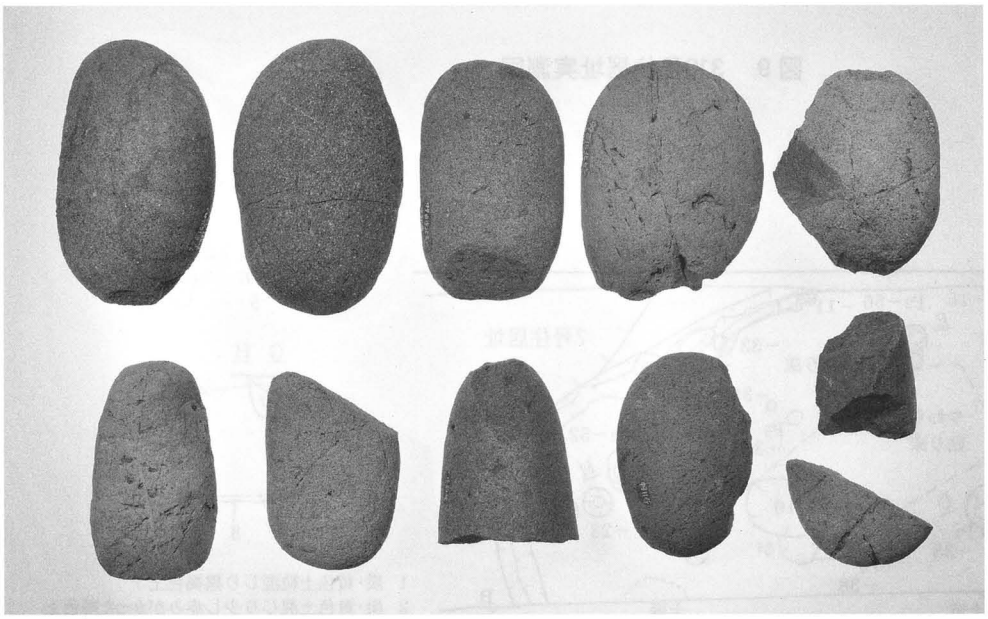


1　炭・黄色土粒混じり黒褐色土
2　炭・黄色土混じり少し赤みがかった褐色土
3　炭・黄色土粒混じり黒みがかった褐色土
4　黄色土混じり褐色土
5　褐色土混じり黄色土
6　褐色土
7　黄色がかった褐色土
8　黄色土混じり黒褐色土
9　黄色土粒混じり褐色土
10　黄色土多く混じる褐色土

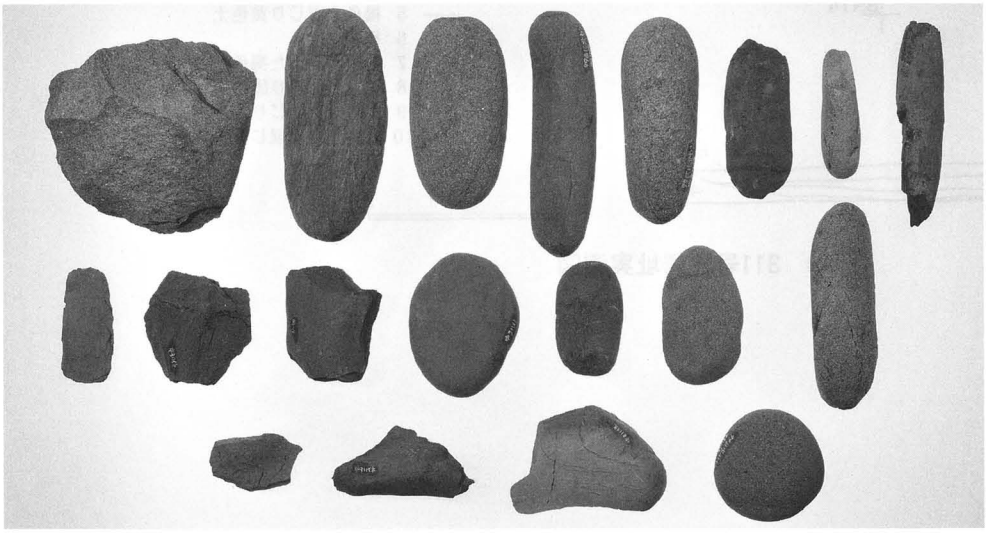
図10　311号住居址実測図



埋土出土土器片

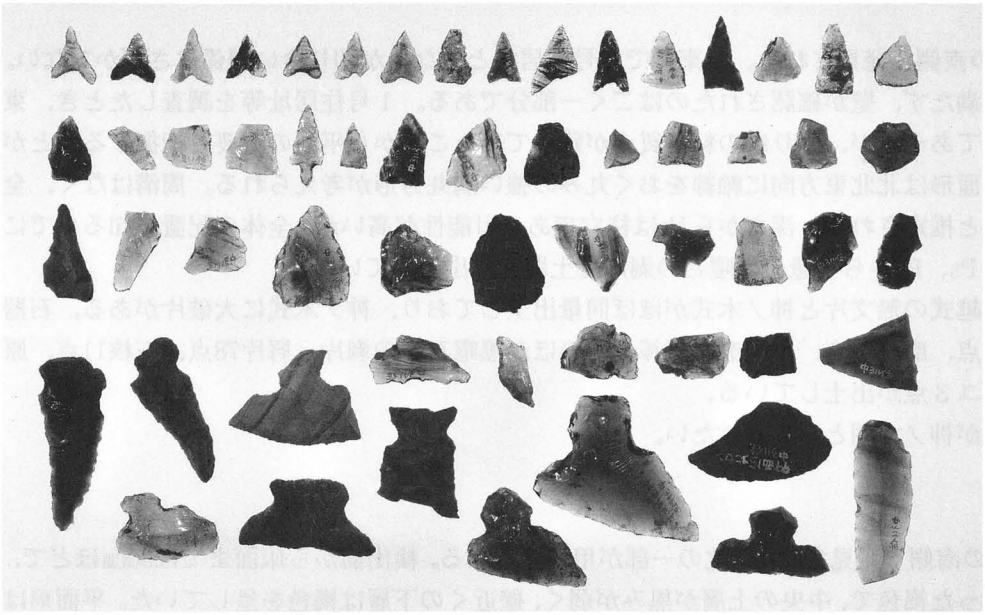


埋土出土磨石



埋土出土叩石・礫端叩石・
部分磨製石斧・
横刃型石器・小円礫

写４　311号住居址出土遺物（1）



埋土出土石鏃・石匙
スクレパー

写５　311号住居址出土遺物（2）

５）312・313号住居址

312号住居址

ＢＭ12、ＢＮ12グリッドの西で発見された。大部分が用地外であり調査できたのは北側の３分の１ほどである。北に1958年に調査された１号住居址がある。遺構検出面から床面までは25㎝ほどを測る。平面形は北からやや東に軸線をおく隅丸方形で１辺４ｍ弱ほどの規模となろう。壁直下を周溝がめぐり、床は全面が貼り床されている。深いP1、P4が柱穴で、方形に配置されているものと考えられる。P1～P4から少量の黒曜石の剥片類と無文の土器片が出土した。

遺物は少量で、土器は中越式の無文が主で神ノ木式も一定量出土し、石器は石鏃11点、石匙１点、石錐２点、スクレパー７点、磨石１点、礫端叩石１点のほか、黒曜石類の剥片・屑片431点、石核36点、ピエス・エスキーユ９点が出土している。

所属時期は中越期の新しい時期か神ノ木期であろう。

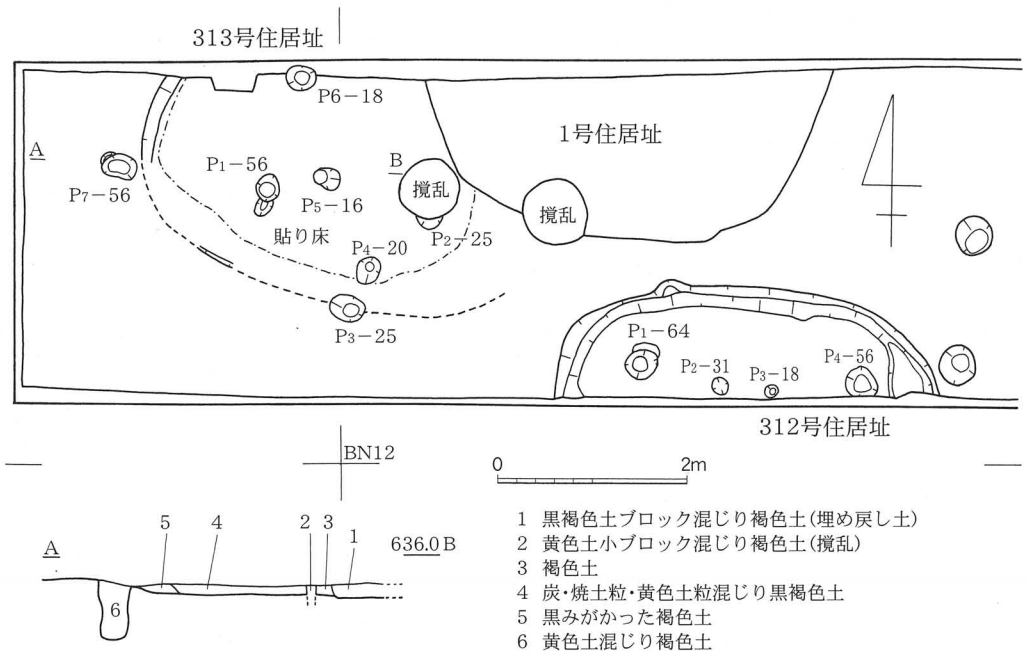


図11　312・313号住居址実測図

313号住居址

ＢＮ11、ＢＮ12グリッドの南側で発見された。北東側で１号住居址と重なるが切り合い関係はさだかでない。検出面から床面まで10㎝に満たず、壁が確認されたのはごく一部分である。１号住居址等を調査したとき、東半の床面まで削ってしまってあったが、貼り床の粘土質土が残っていたことから平面の概要を把握することができた。それによると、平面形は北北東方向に軸線をおく丸みの強い隅丸方形が考えられる。周溝はなく、全面に貼り床されていたものと推定される。深さからP1は柱穴である可能性が高いが、全体の配置を知るまでには至らなかった。P1、P3、P5、P6から少量の黒曜石の剥片と土器片が出土している。

遺物は少量で、土器は中越式の無文片と神ノ木式がほぼ同量出土しており、神ノ木式に大破片がある。石器は石鏃２点、スクレパー１点、磨石２点、小型磨製石斧１点のほか黒曜石類の剥片・屑片78点、石核11点、原石３点、ピエス・エスキーユ３点が出土している。

所属時期の確定は難しいが神ノ木期としておきたい。

６）　314号住居址

ＢＮ09、ＢＮ10グリッドの南側で発見された。北の一部が用地外となる。検出面から床面までは30㎝ほどで、炭の混じる埋土は黒みがかった褐色で、中央の上層が黒みが弱く、壁近くの下層は褐色を呈していた。平面形は西北西方向に長軸をおく隅丸長方形で、床からは大きな石がいくつも顔をだしていた。周溝はなく、柱穴も発見することができなかった。浅いP1は埋土が黒褐色であったことから地床炉であると考えた。

遺物は少ない。土器は中越式の無文片が主で神ノ木式はない。石器は石鏃６点、磨石２点のほか黒曜石の剥片・屑片89点、石核13点、原石２点、ピエス・エスキーユ９点が出土している。遺構は発見できなかったが、検出時に、この住居の東方に焼土を確認している。

所属時期は中越期の新しい時期であろう。

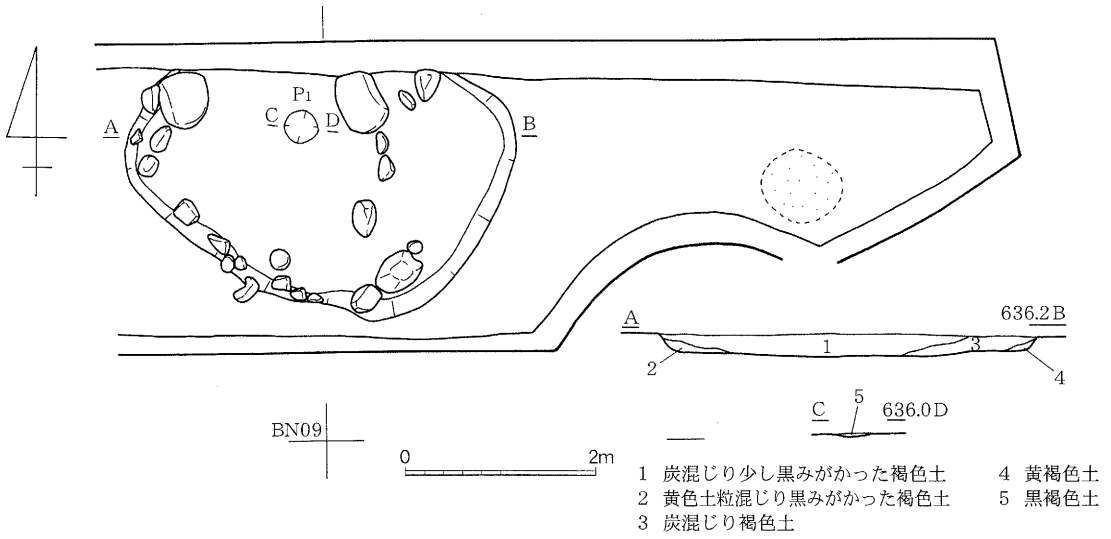


図12　314号住居址実測図

（２）土坑

311号住居址の南西に２基（180・181号）、７号住居址と８号住居址の間に１基（179号）、８号住居址の南に２基（182・183号）の５基がある。形態はいずれも不整形で掘り方もしっかりしてはいない。

180号土坑から中越式の無文片と礫端叩石１点、黒曜石の剥片３点、石核１点が、181号土坑から神ノ木式の土器片と黒曜石の石核１点、チャートの剥片１点が、182号土坑から神ノ木式の土器片と黒曜石の剥片２点が出土している。

出土遺物から、180号土坑が中越期の新しい時期、181、182号土坑が神ノ木期としておく。

２　区画道路38号線

（１）竪穴住居址

１）48号住居址

ＢＳ16グリッドの南西隅に発見された。調査時には346号住居址としたが、整理の際、1969年に発見した住居址の一部とすべきとの判断のもとに遺構番号を修正した。平面形から２軒の住居が重なっており、円形もしくは丸みのつよい隅丸方形の住居を方形の住居が切っていると判断した。規模がさほど大きくないであろう円形の住居址は、周溝がなく、検出面から30㎝ほどの床面は全面貼り床されていた。P2はこの住居の柱穴としていいであろう。一方ほぼ南北方向に軸線をおく方形の住居址は、南北4.8m、東西は不明である。検出面から床面まで40㎝ほどを測り、黄色土粒が混じる褐色土の埋土は上層ほど黒みが強い傾向が観察された。壁直下を周溝がめぐり、床は全面に貼り床されていた。柱穴は調査範囲ではP1の１本だけであった。

切り合う２軒の遺物を発掘中に分けることはできていない。

遺物量はやや多い。土器は中越式の新しい段階と神ノ木式の破片で、P2から出土したものの中に神ノ木式の小破片がある。石器には石鏃15点、石匙２点、打製石錘３点、スクレパー３点、磨石３点、同片２点、礫端叩石２点、小型石皿１点、磨製石斧の破片と思われるもの１点と、黒曜石類の剥片・屑片383点、石核68点、原石４点、ピエス・エスキーユ10点、硬砂岩類の小円礫や円礫片15点がある。これらの中に安山岩の磨石と小円礫が各１点あり、伊那谷以外の地域からもたらされたものとして注意される。

２軒とみられる住居を時期区分することはできないが、遺物から導かれるおよその所属時期は、神ノ木期としていいであろう。

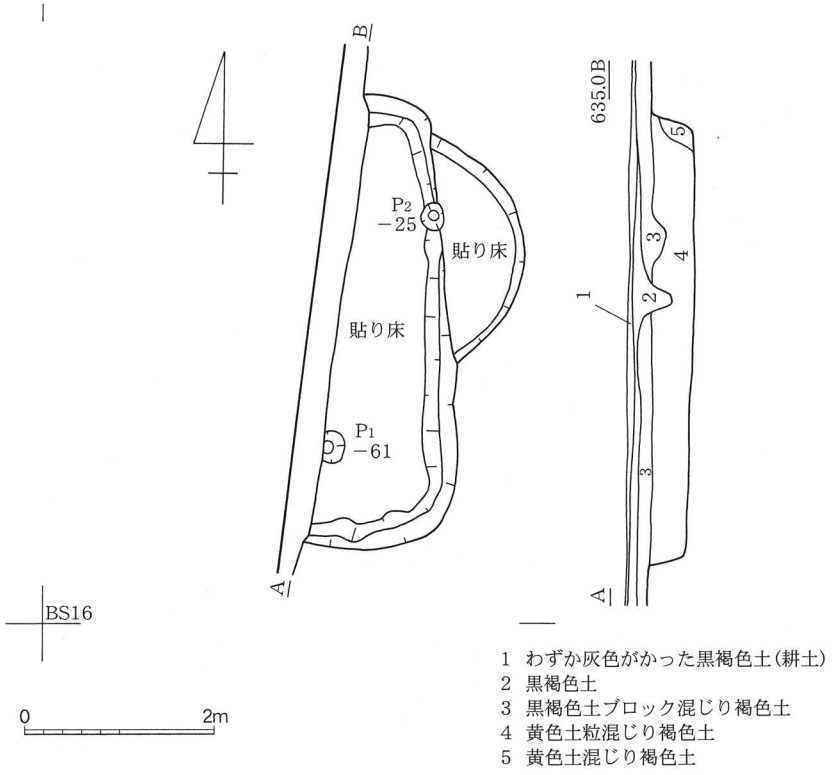
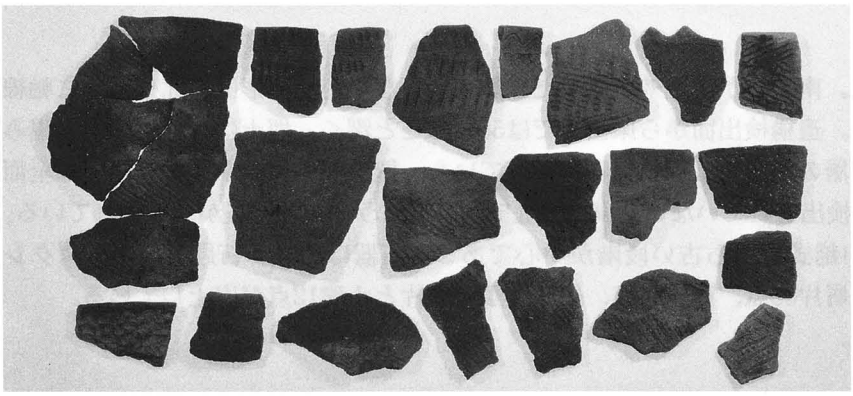
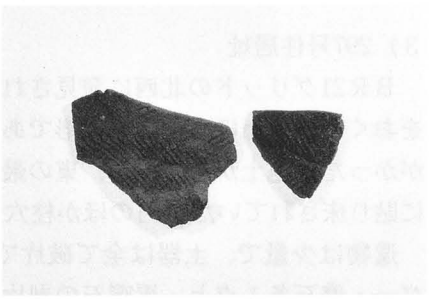


図13　48号住居址実測図





P2出土土器片

埋土出土土器片

写６　48号住居址出土遺物

２）290・359号住居址

290号住居址

ＢＲ20グリッドの北西隅に発見された。東に359号住居址が接し、同址の床の方が本址の床よりも５～10㎝ほど低く、同址によって本址の東壁が切らている。南のほぼ半分が用地外となるため推定だが、平面形は北からわずかに東の方向に軸線をおく一辺４ｍほどの丸みが強い隅丸方形と考えられる。埋土に関する記録はない。検出面から床面までは40㎝前後を測る。東側以外の壁直下を周溝がめぐるほか、西側の壁よりも内側に周溝があり、柱穴としていいピットに切り合いが見られることと合わせると建て替えが考えられる。柱穴は径の小さいP1、P2と用地外に２本、P1、P3と同じく用地外に２本の方形に配された４本で、用地際にある浅いピットが地床炉となろう。

遺物は少量で、土器は全て破片で中越式の最も古い段階が中心である。石器は石鏃５点、石錐２点、スクレパー１点のほか、黒曜石の剥片・屑片31点、石核10点が出土している。

所属時期は中越期の古い段階である。

なお、北壁近くの一部は、道路工事にあたり仮設の下水道管が敷設されていたため調査することができなかった。

359号住居址

ＢＲ20グリッドの北西に発見された。西に接する290号住居址の東壁を切っている。南の一部が用地外となるため規模は推定だが、平面形は北からわずかに東に軸線をおく一辺3.4mほどの丸みの強い隅丸方形を呈する。遺構検出面から床面までは30～40㎝を測る。周溝はなく床は壁直下以外は全面貼り床されている。柱穴は方形に配されたP1～P4の４本で、いずれも褐色土が埋まっていた。ほぼ中央に道路工事に伴い仮設の下水道管が敷設されていたため、炉があるであろう場所の調査ができなかった。

遺物は少ない。土器は中越式の最も古い段階の破片が主である。石器は石鏃３点、スクレパー２点、磨石の破片３点のほか、黒曜石の剥片・屑片７点、石核３点だけである。

所属時期は中越期の古い段階である。

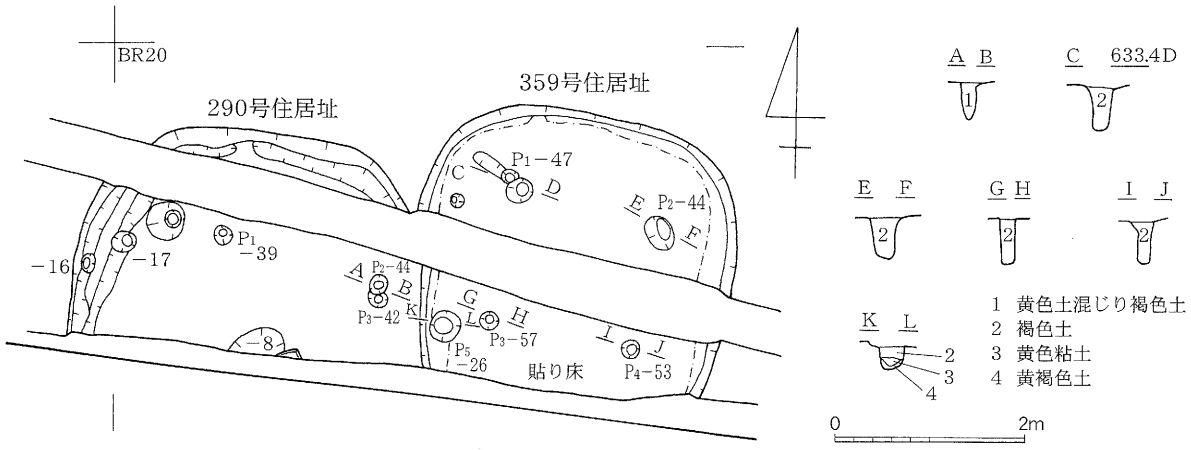


図14　290号住居址・359号住居址実測図

３）297号住居址

ＢＲ21グリッドの北西に発見された。南半分が用地外となるため調査してない。平面形は北北東方向に軸線をおく一辺４ｍほどの隅丸方形である。遺構検出面から床面までは55㎝ほどと深く、埋土は褐色土の上に黒みがかった褐色土が観察され、東の最下層の褐色土は少し黒みががっていた。壁直下を周溝がめぐり、床は全面に貼り床されていた。P1のほか柱穴は検出されていない。東壁に立てかけるようにして平石が発見されている。

遺物は少量で、土器は全て破片で中越式の最も古い段階が中心である。石器は石鏃・石匙各２点、スクレパー・磨石各１点と、黒曜石の剥片・屑片56点、石核23点、硬砂岩類の剥片と小礫12点が出土している。

所属時期は中越期の古い段階である。

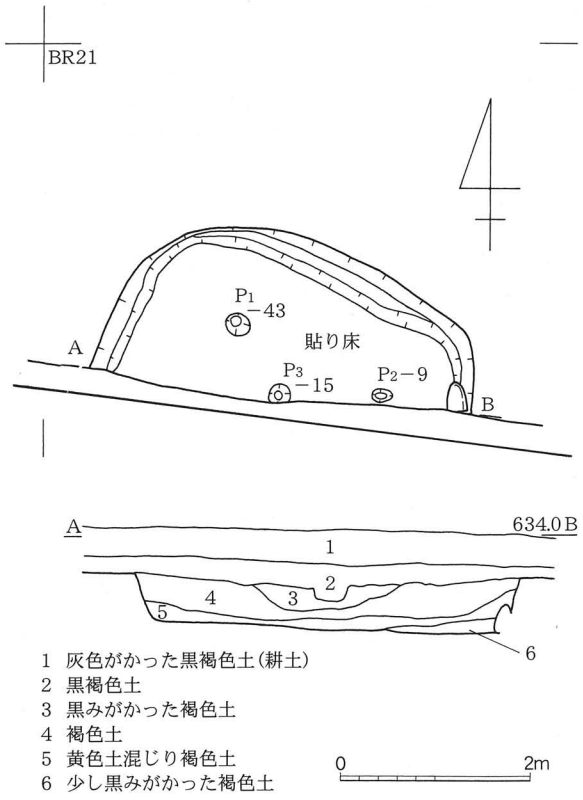


図15　297号住居址実測図

４）331号住居址

ＣＡ17グリッドの南西隅が中心にくる位置に発見された。用地の形状により、北西側と南西側が用地外となるため調査してない。平面形は北から少し東方向に軸線をおく丸みのつよい隅丸方形が想定される。規模は特定できない。遺構検出面から床面までは60㎝ほどと深く、壁下を周溝がめぐる。P1とP2が柱穴で方形に配置された４本としていいであろう。この２本の柱穴を結んだ線の中間内よりにある炭混じり黒色土が埋まる浅いピットが地床炉であろう。

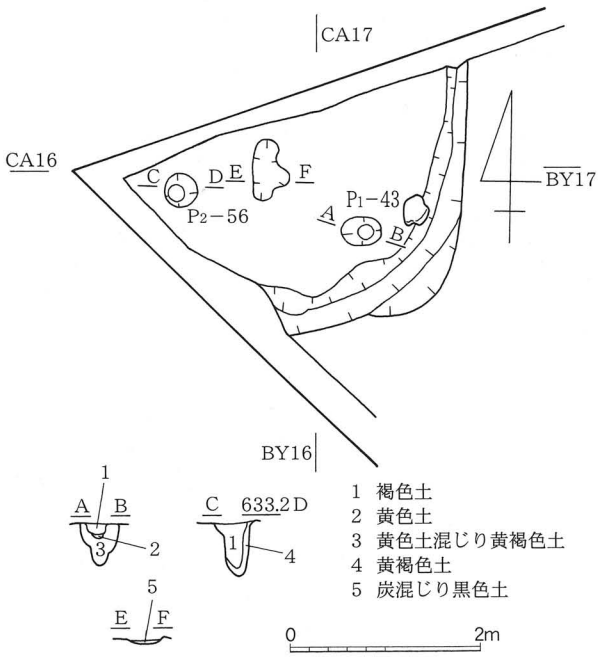


図16　331号住居址実測図

写７　331号住居址出土土器

遺物は少ない。土器は、ほぼ完形の中越式の新しい段階の無文土器(写７)が１点あるほかは中越式の古い段階から中ごろまでのものが少量出土しているだけである。石器は石匙１点、磨石５点、礫端叩石４点、小型の石皿１点のほか、黒曜石の剥片・屑片19点、石核10点、硬砂岩の小礫６点、粗大剥片１点が出土している。

所属時期は完形土器から中越期の新しい時期としておきたい。

５）346号住居址

ＢＲ16グリッドの北東で発見された。調査時には1969年に発見した48号住居址の一部と解釈したが、整理の過程で遺構番号を修正した。半分以上が用地外となり、西壁も最後まで追うことができなかった。平面形は壁直下を周溝がめぐる方形と円形の２軒の住居址が切り合っており、形態から新旧２軒の住居を想定した。

新址は南北に軸線をおく方形もしくは長方形の住居址である。東西4.0m、南北は不明である。周溝が壁直下をめぐり、旧址よりも床面のレベルが高く、円形の住居の埋土中にその床がしつらえられていたはずだが、現場でそれを把握することができなかった。柱穴も配置まではとらえられていない。

旧址は円形もしくは丸みの強い隅丸方形の住居址で、規模は直径４～５m程度となろう。床面のレベルは新址よりも５cmほど低く、全面が貼り床され、周溝が壁直下をめぐる。深いピットもあるが柱穴として特定できるまでには至らなかった。大型で深いP2の北東の床に焼土が観察された。

整理の過程で遺構に伴う遺物は把握できなくなってしまった。従って所属時期も特定できない。

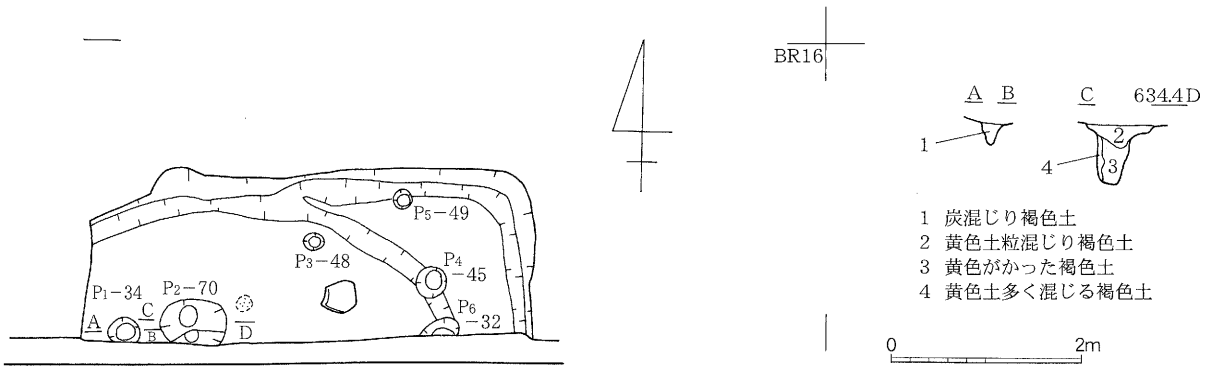


図17　346号住居址実測図

６）347号住居址

ＢＲ17グリッドの北西で発見された。南側の３分の１ほどが用地外となる。遺構検出面から床面までは50～60cmとかなり深い。埋土は下層が黄色土粒が混じる黄褐色土と黄色みが強く、その上の黄色土粒が混じる黒褐色土には、下層には炭が混じり、上層には大きな礫を含む層が中央に厚くレンズ状に観察された。平面形は西から少し北の方向に軸線をおく一辺４mほどの隅丸方形とした。壁直下を幅の広い周溝が全周し、南東の半分と西壁際に少し貼り床が確認された。柱穴はP1、P2、P5と用地外に１本の、住居のかなり内側に方形に配された４本である。わずかではあるが焼土を検出したことからP6を地床炉と考えた。炉の北西のNo.１は薄手の清水ノ上Ⅰ式である。

遺物　土器は在地系のほか東海系がかなりの量を占める。在地系は口縁から胴上部までを同じ条線による斜格子目文で埋めたあと、頸部に刺突をめぐらす、胴部の無文部の幅が広い中越式が中心で、神ノ木式が少し混じる。No.１の東海系清水ノ上Ⅰ式は、口縁部は４分の１個体ほどしかないものの、胴部以下は完形であったが、劣化が進み、つぶれたあとのゆがみも著しい。石器は石鏃19点、石匙３点、石錐１点、スクレパー３点、磨石７点、同片11点、礫端叩石５点、小型磨製石斧１点と、黒曜石類の剥片・屑片355点、石核85点、原石６点、ピエス・エスキーユ10点が出土している。埋土中に指で強くつまむとつぶれてしまう赤色の粒が10点ほどあった。遺物として採集したがそれ以上の分析はしてない。

所属時期は中越期の古い段階としておきたい。

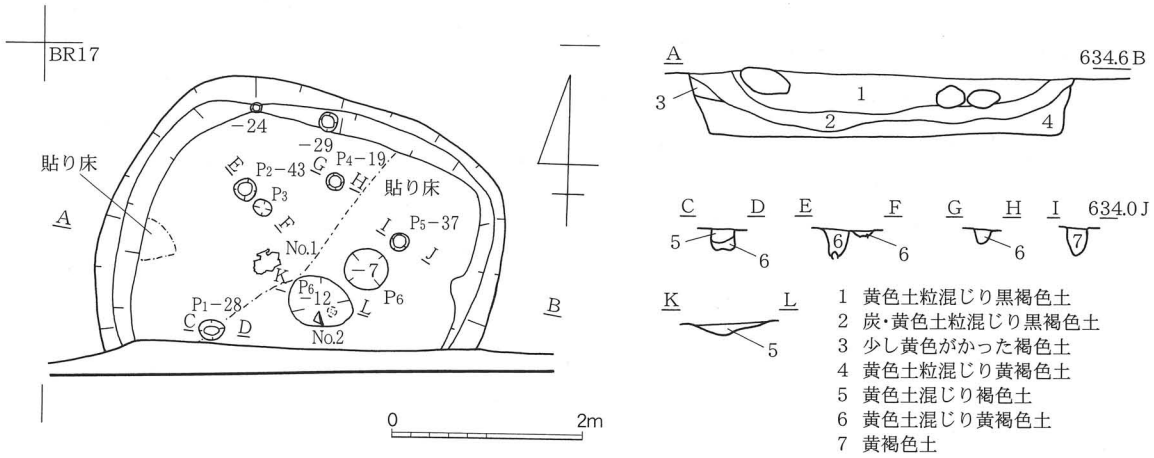
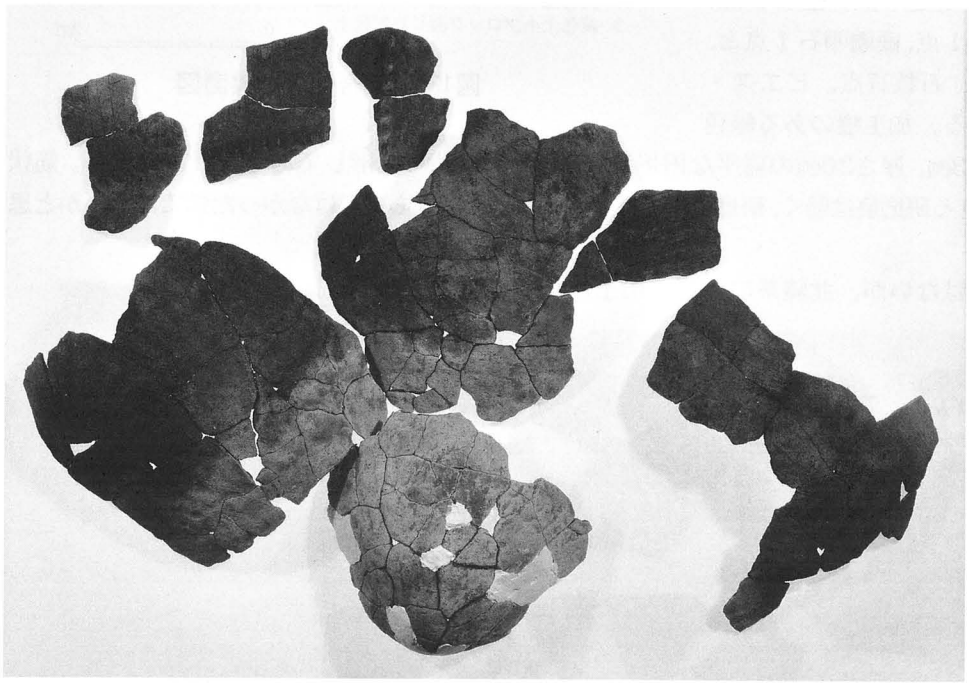
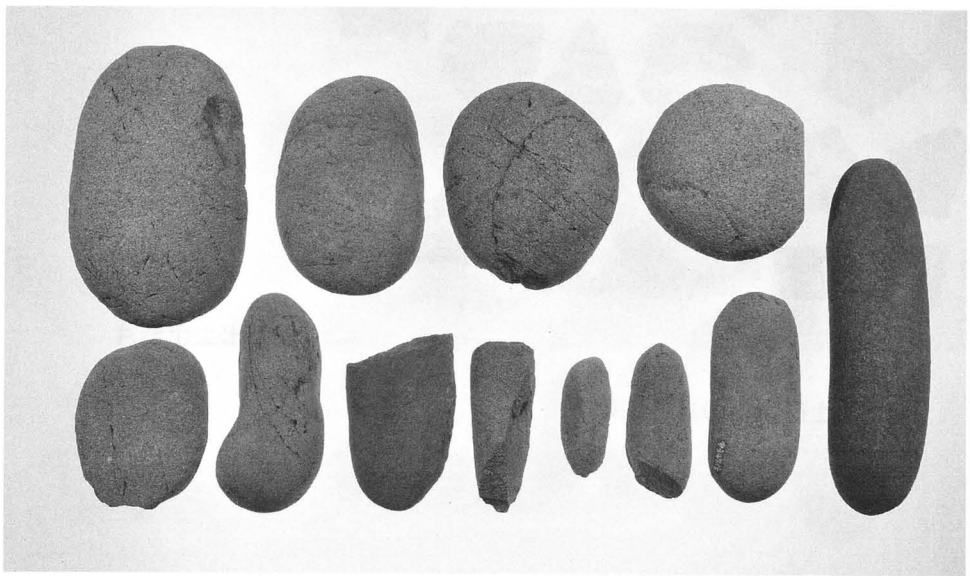


図18　347号住居址実測図



床面出土土器No.1



埋土出土磨石・礫端叩石

写８　347号住居址出土遺物

７）348号住居址

ＢＲ17、ＢＲ18グリッドの北端に発見された。南側は用地外となる。遺構検出面から床面まで30㎝ほどを測り、黄色土ブロックの混じる埋土は褐色土の上に黒褐色土がレンズ状に観察された。平面形は定型を見出すことができなかった。北側に５㎝ほど一段高い面がある。周溝はなく柱穴も特定できるようなものは発見できないなど、住居として必要な要素に欠けるところがあるが、部分的ではあるが貼り床が観察されたことから住居址とした。西壁の一部が破壊されている。

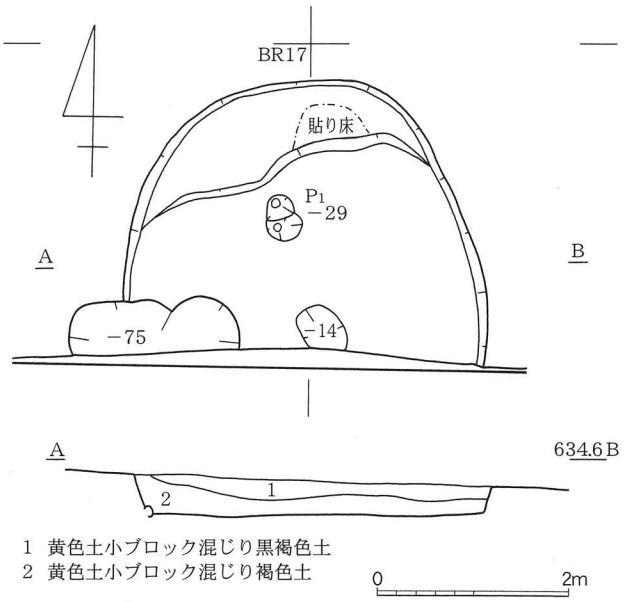
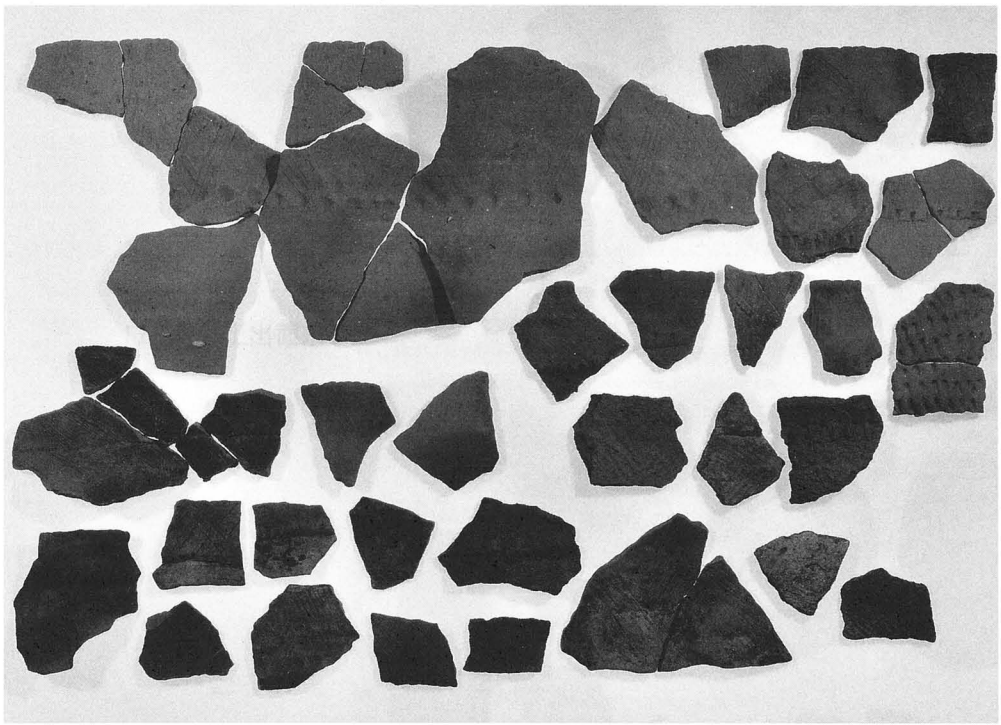


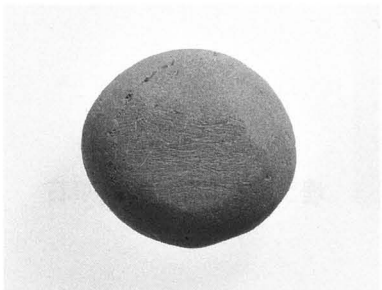
図19　348号住居址実測図

土器は中越式と神ノ木式の在地系のほか、北陸系の土器がまとまって出土している。量は少ない。石器もごく少なく、石鏃４点、石匙１点、磨石２点、加工痕のある緑色岩の小円礫１点、礫端叩石１点と、黒曜石類の剥片・屑片105点、石核17点、ピエス・エスキーユ４点が出土している。加工痕のある緑色岩の小円礫（写９）は、4.0×4.3㎝、厚さ2.0㎝の扁平な円形に、表面を研磨して成形してあるように見える。筋状の溝として観察することができる研磨痕は弱く、研磨による成形はさほど大きなものではなかったのではないかと思われる。

所属時期を特定できる遺物はないが、北陸系の土器の出土から中越期の可能性が高い。



埋土出土土器片



埋土出土研磨痕のある円礫

写9　348号住居址出土遺物

８）349号住居址

ＢＲ18グリッドの北東隅で発見された。平面形から２軒が切り合う住居址である。２軒の床面レベルに差はなく、遺構検出面から床面までは30㎝ほどである。4.4×3.8mの規模をもつ西側の住居址は、平面形は西北西方向に軸線をおく丸みのつよい隅丸方形で、壁直下を周溝がめぐり、柱穴はP1～P4の方形に配された４本であり、東側の住居址は、西から少し北寄りに軸線をおく同規模同形態で、やはり壁直下を全周する周溝は前者よりも深くて広く、柱穴は同様に配されたP5～P8の４本である。床には全面に貼り床されていた。No.１は石皿、No.２は硬砂岩大礫の叩石である。

この住居址の中央の床が一辺2.0mの方形に掘り窪められていた。貼り床はなく、底はほぼ平らで、中央に深さ27㎝のピットがある。土層観察ではその痕跡を見出すことができなかったが、希ではあるが同様の痕跡が他の住居址にもあり、ある時期に、埋没後の住居の中央あたりを掘りかえすような行為があったのではないかと想定している。

遺物のうち土器は、在地系では中越式を主体として神ノ木式も混在し、東海系も少量出土している。在地系の無文土器の大破片があり、所属時期の決め手となろう。石器は、床面から出土した石皿と叩石のほかは、石鏃・石匙・石錐・打製石錘・抉入刺突具各１点、二次加工ある剥片４点と、磨石５点、同破片３点、礫端叩石６点のほか、黒曜石類の剥片・

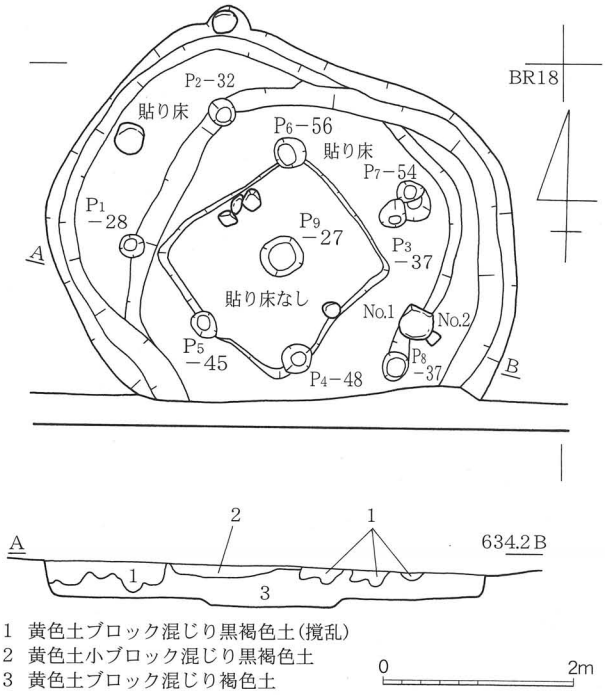
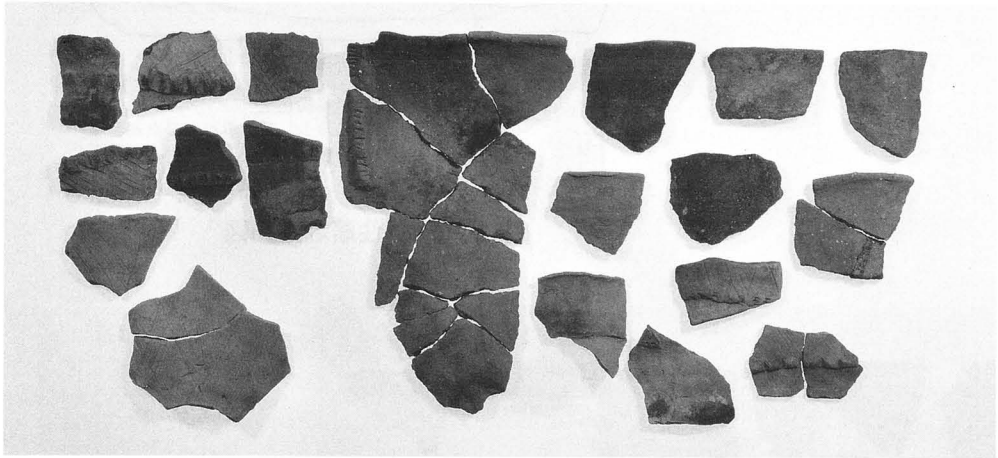
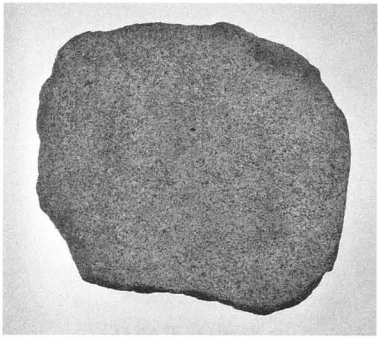


図20　349号住居址実測図



埋土出土土器片



床面出土石皿No.1

写10　349号住居址出土遺物

屑片193点、石核48点、ピエス・エスキーユ６点が出土している。石皿№１（写10下）は使用部分に敲打による成形痕があり注意される。

所属時期は中越期の新しい段階としておく。

９）350号住居址

ＢＳ17グリッドの南東隅に発見された。北側の３分の２ほどが用地外となる。遺構検出面から床面までは40㎝を測り、上面が遺構中央に向かってゆるく傾斜する埋土は黄色土粒の混じる褐色土で、上層は黒褐色を呈していた。平面形は一辺５ｍほどの北北西方向に軸線をおく丸みのつよい隅丸方形で、床面は図の破線の内側が段差のない状態で低くなっており、東側には一点鎖線の範囲に、破線から外側と同じレベルの貼り床が観察された。貼り床下の面で南東壁下との間に段差があったが理由は特定できなかった。住居内で２本のピットが発見されたが、柱穴かどうかは特定できない。

遺物はさほど多くない。土器のうち在地系は神ノ木式が主体である。 石器は埋土から石鏃12点、石匙１点と、磨石片１点、礫端叩石４点、叩石１点のほか、黒曜石類の剥片・屑片93点、石核32点、原石２点、ピエス・エスキーユ１点と、貼床下から磨石片と礫端叩石各１点と黒曜石の剥片・屑片18点が出土した。剥片の中に７点ほどではあるが珪質頁岩があり注意される。

所属時期は神ノ木期としておく。

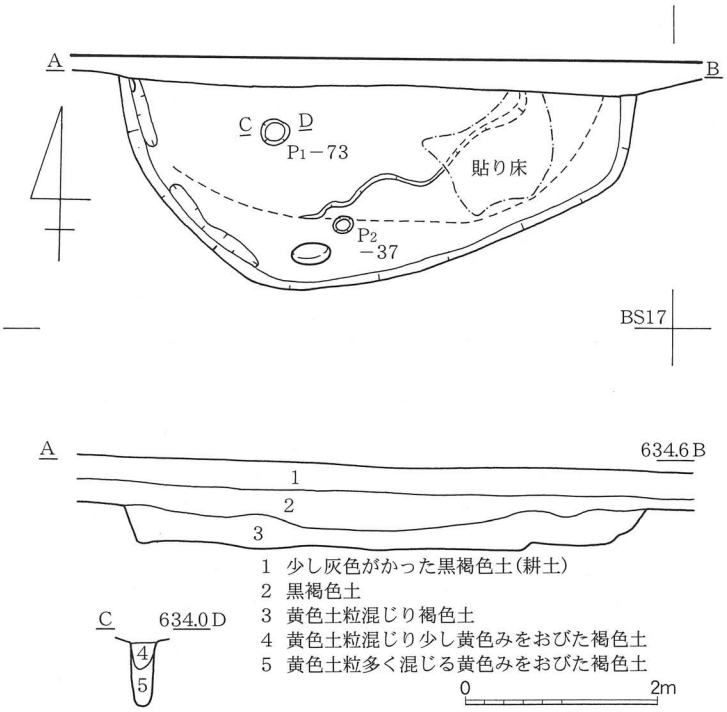
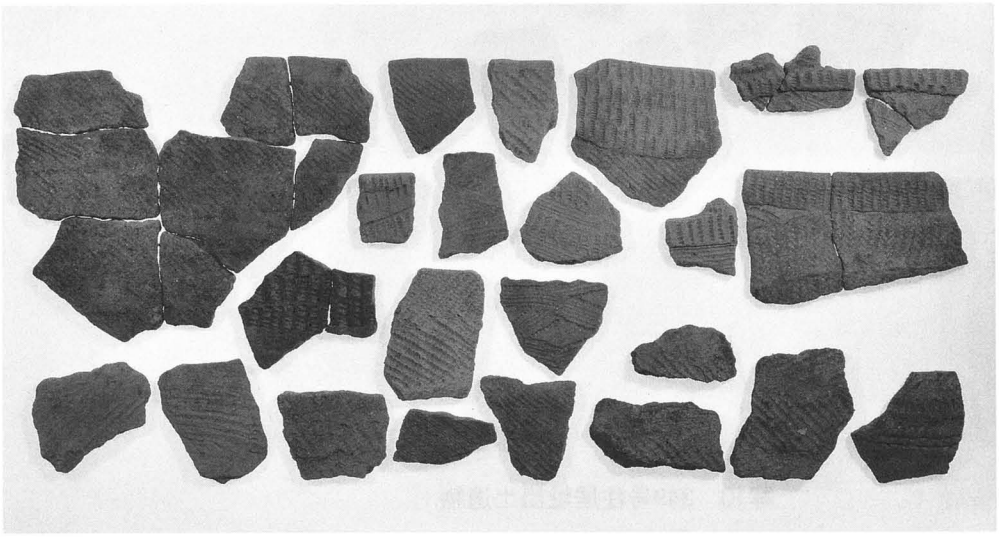


図21　350号住居址実測図



埋土出土土器片

写11　350号住居址出土遺物

10）351号住居址

ＢＳ16、ＢＳ17グリッドの南で発見された。北東の大部分が用地外となるほか、北の一部が風倒木によって破壊されていると判断した。掘り上がったところで平面形は不整形であり、丸みのつよい隅丸方形の住居が２軒切り合っていると見ることもできる。規模は不明としておきたい。遺構検出面から床面までは30㎝ほどである。壁直下を周溝がめぐり、床には全面に貼り床がされていた。P1とP3は柱穴としていいであろうが全体の配置等は明確でない。２軒であるとしたときに重なる位置の壁に立てかけるようにして№１の石皿が発見されている。

遺物は少量で、土器の在地系は中越式を主として神ノ木式が少量混じる。 石器は石鏃６点、石匙１点、石錐２点、二次加工のある剥片２点と、磨石７点、礫端叩石２点、部分磨製石斧３点(写12下)、石皿１点のほか、黒曜石類の剥片・屑片131点、石核33点、原石２点、ピエス・エスキーユ12点と、硬砂岩類の不定形な破片２点が出土している。

神ノ木式が少量あるが、床面近くからの出土が確認できなかったことから、所属時期は中越期としておきたい。

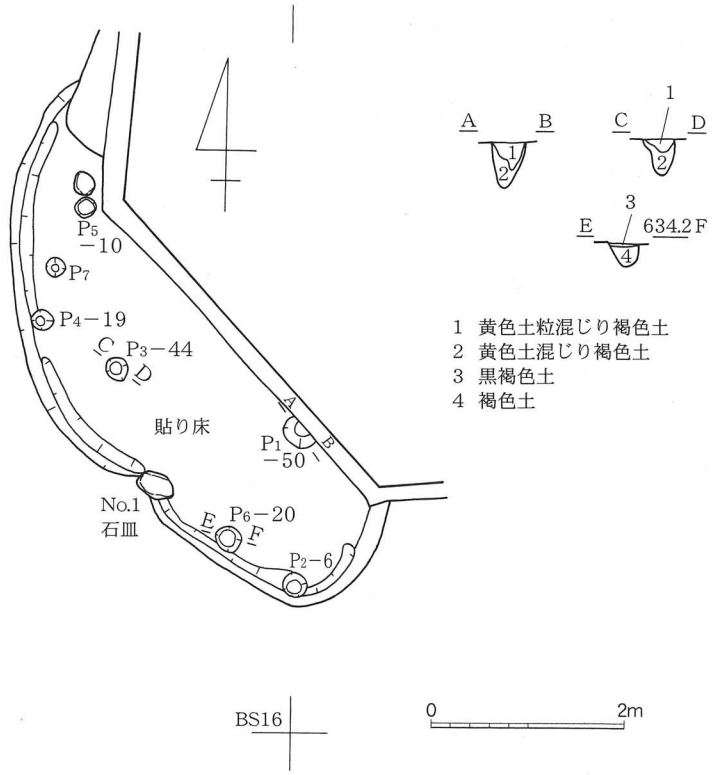
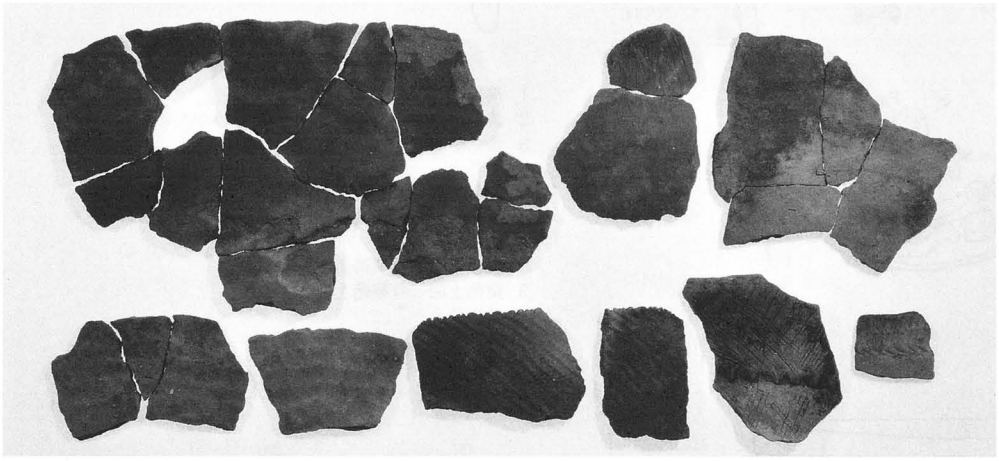
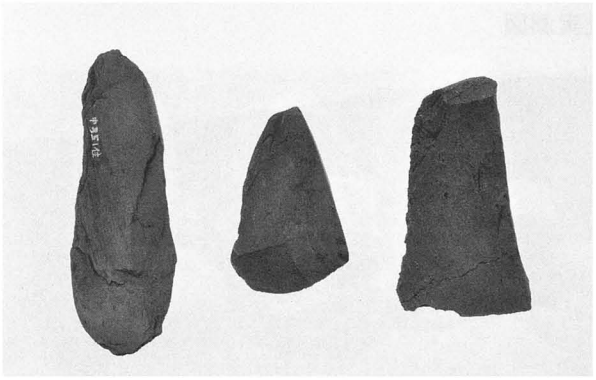


図22　351号住居址実測図



埋土出土土器片



埋土出土
部分磨製石斧

写12　351号住居址出土遺物

11）352号住居址

ＢＳ16とＢＴ16グリッドから発見された。東側の一部が用地外となるため調査してない。１ｍほどの間をあけて北に353号住居址がある。平面形は北北東方向に長軸をおく5.2×4.6ｍの丸みが強い隅丸方形を呈する。埋土は黄色土粒が混じる褐色土の上に褐色土ブロックが少し混じる黒褐色土が中央に厚くレンズ状に観察され、検出面から床面まで40㎝を測る。西側は壁際、北と南は壁から30㎝から50㎝ほど内側に断続して周溝がめぐり、周溝上に20㎝前後の深さのピットが穿たれている。柱穴は壁からかなり内側に配されたP1からP4の４本で、P2とP4は共に深く床面から64㎝を測る。炉は中軸線上の中央から北北東寄りに位置する浅い地床炉で、周溝の内側の床には粘土質の黄色土が貼られている。南壁下の周溝との間から３点の石皿が、住居の内側に傾いた状態で発見された(写13)。床面に接していないことから廃絶時に据えてあったとは言い難いが、遺構との関連性は強いと思われる。床に接して発見されたNo.１とNo.２は、神ノ木式の同一個体の土器片である。

埋土から出土した遺物量は多いが、土器は全て破片で、神ノ木式が主体を占めるほか、関東系の繊維土器の大破片が出土している(写14)。石器は石鏃23点、石匙２点、石錐１点、スクレパー３点、打製石錘２点と、磨石８点、同破片14点、礫端叩石１点、小型磨製石斧１点、石皿３点、滑石製玦状耳飾１点のほか、黒曜石類の剥片・屑片570点、石核127点、原石16点、ピエス・エスキーユ12点と、硬砂岩類の不定形な破片22点、小円礫３点が出土した。

P1からP6のピット内から黒曜石の剥片類とともに神ノ木式の土器片が出土していることと、床面に接して出土した土器片も神ノ木式土器であることから、所属時期は神ノ木期ということができる。

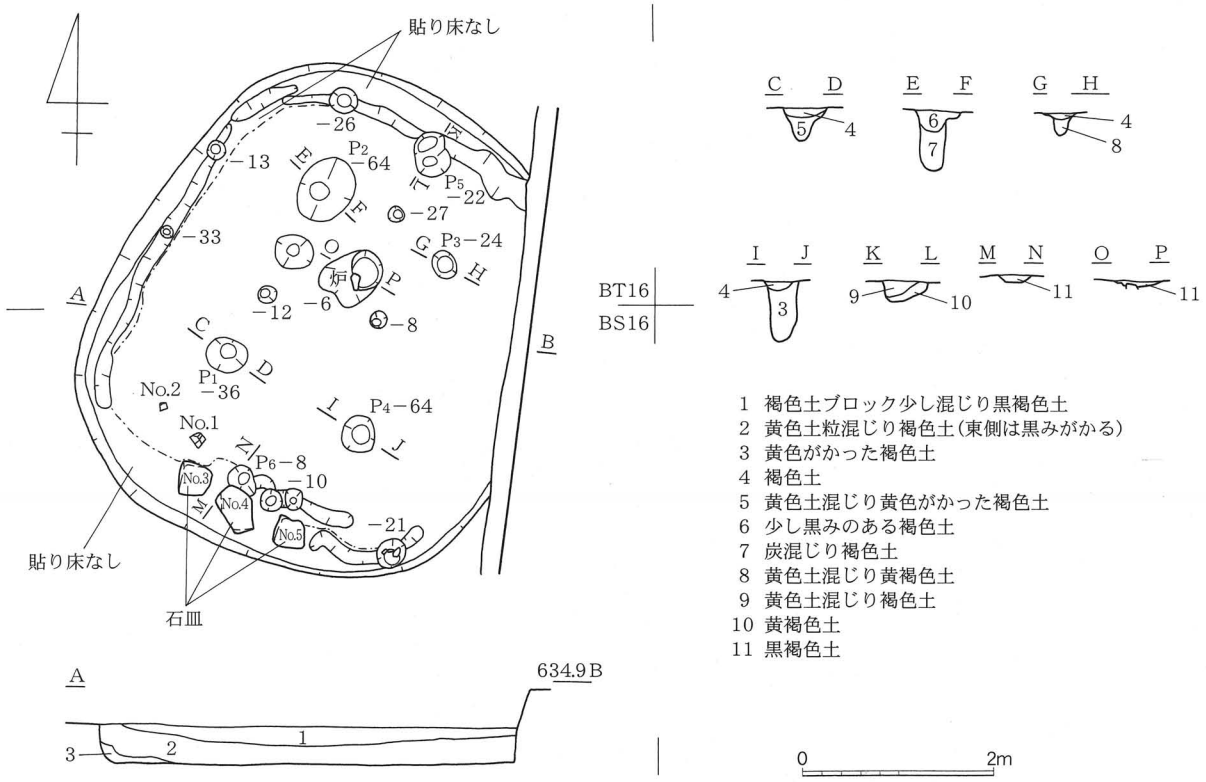
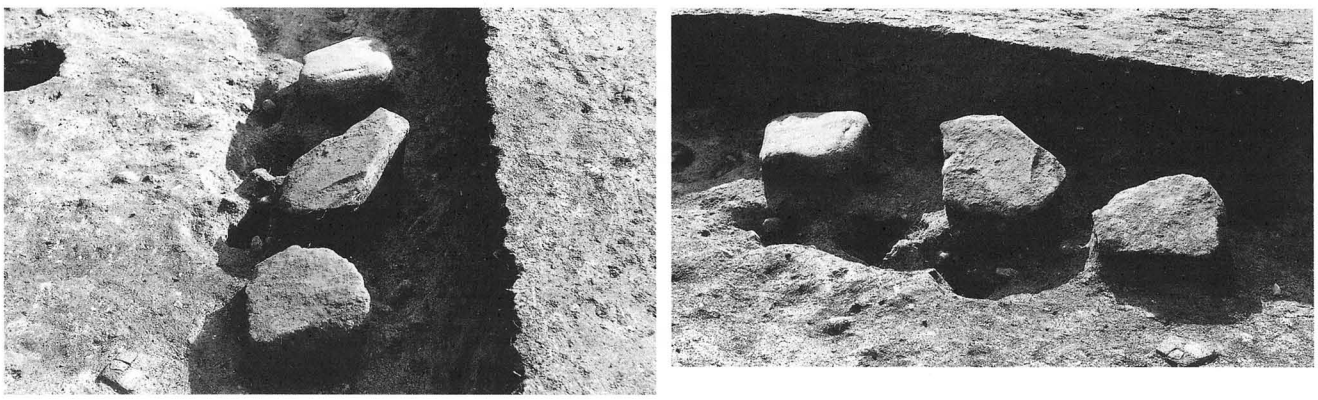
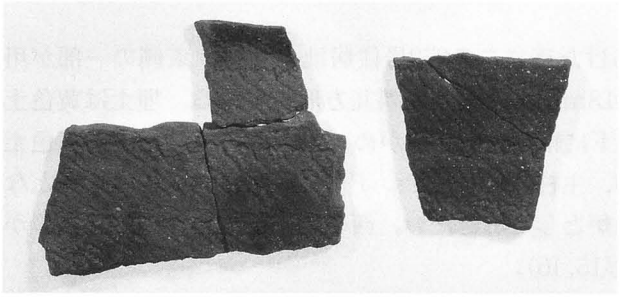


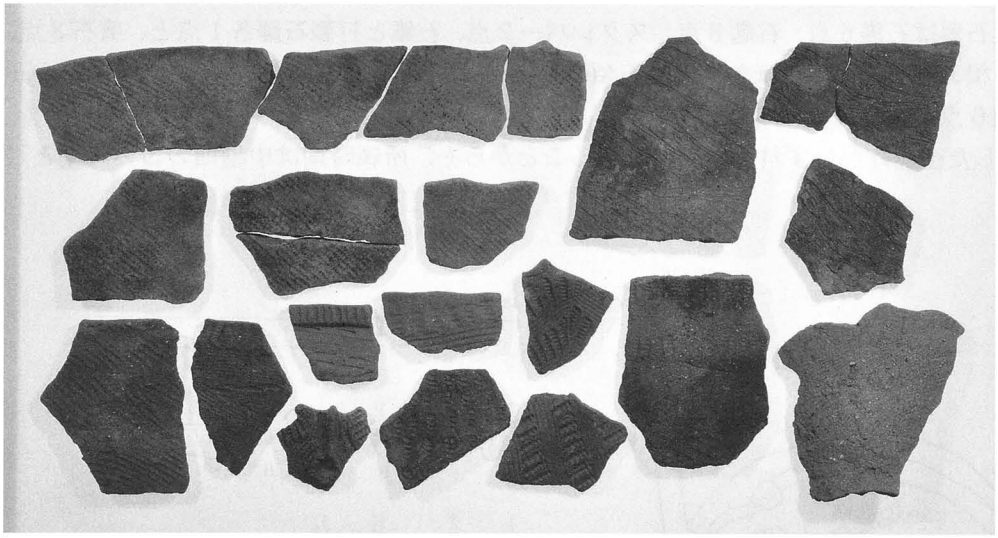
図23　352号住居址実測図



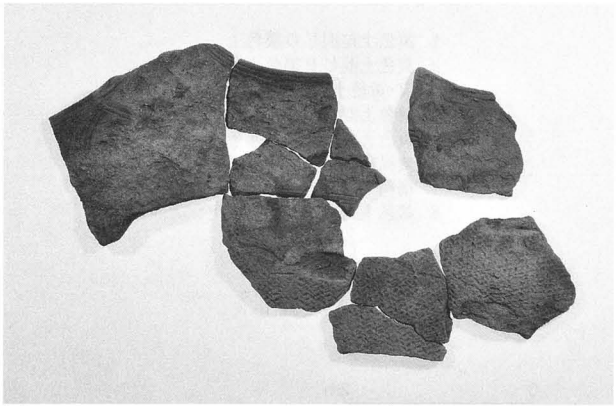
写13　352号住居址石皿No.3～５出土状況



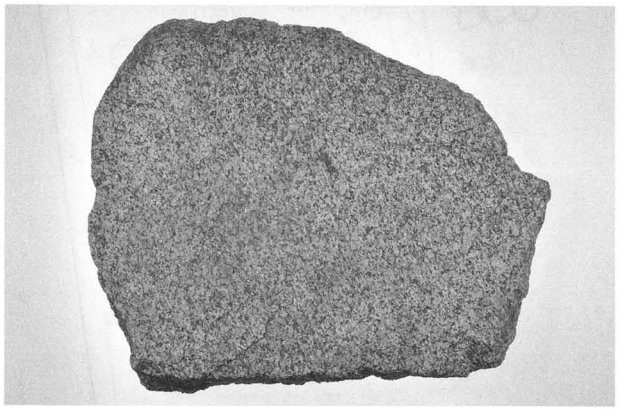
床面出土土器片（左No.1・右No.2）



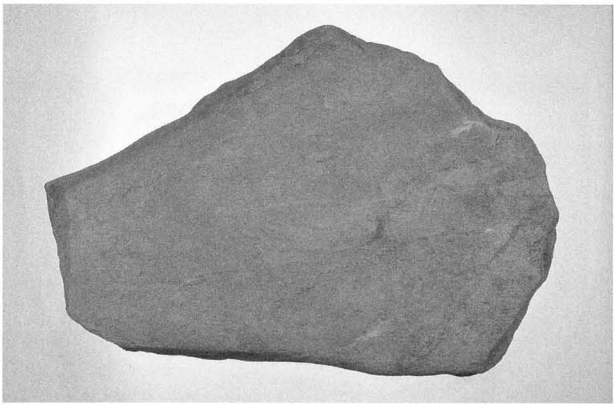
埋土出土神ノ木式土器片



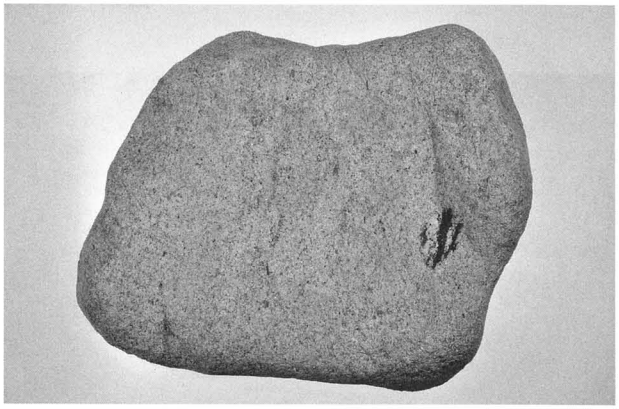
埋土出土関山式土器片



床面出土石皿No.3



床面出土石皿No.4



床面出土石皿No.5

写14　352号住居址出土遺物

12）353号住居址

ＢＴ16グリッドの北東隅で発見された。１ｍほど間をあけた南にある352号住居址と同様、東側の一部が用地外となる。平面形は西北西方向に軸線をおく推定で１辺4.8ｍの丸みが強い隅丸方形を呈する。埋土は黄色土粒が混じる褐色で、検出面から床面まで30㎝を測る。壁直下に幅の広い周溝がめぐり、床には粘土質の黄色土が貼られていた。床面上から多くのピットが発見されたが、主柱穴はP1、P5、P11と用地外の１本の４本となろう。埋土の上層に黒色土が発見されたことからP8を地床炉としておきたい。西の壁外に６個の人頭大の礫がかたまって発見され、その中に石皿が１点含まれていた（写15、16）。

遺物量は多くない。土器は、中越式の最も古い段階の完形土器１点のほかは、全て同時期のものに由来すると判断される破片である。石器は石鏃６点、石匙３点、スクレパー２点、石錐と打製石錘各１点と、磨石３点、同片４点、礫端叩石３点、横刃型石器１点のほか、黒曜石類の剥片・屑片94点、石核24点、ピエス・エスキーユ３点と、硬砂岩の小円礫６点が出土している。

P5、P6、P12内から出土した土器片がいずれも中越式であることからも、所属時期は中越期の古い時期としておきたい。

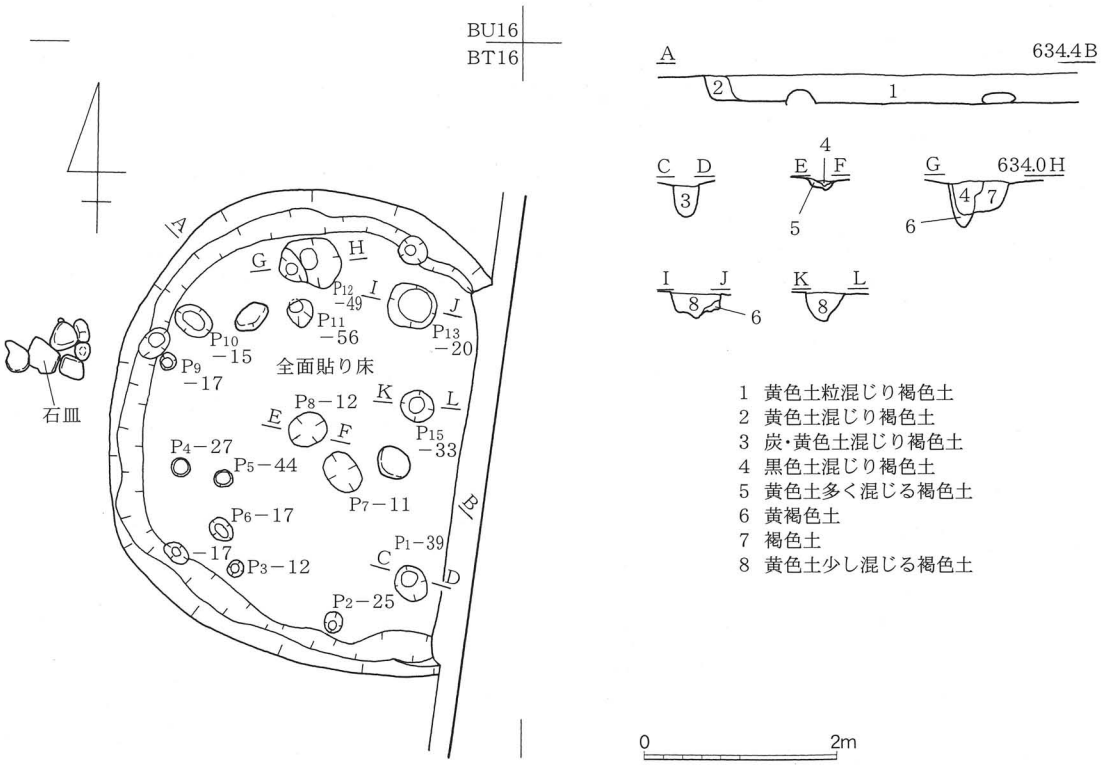
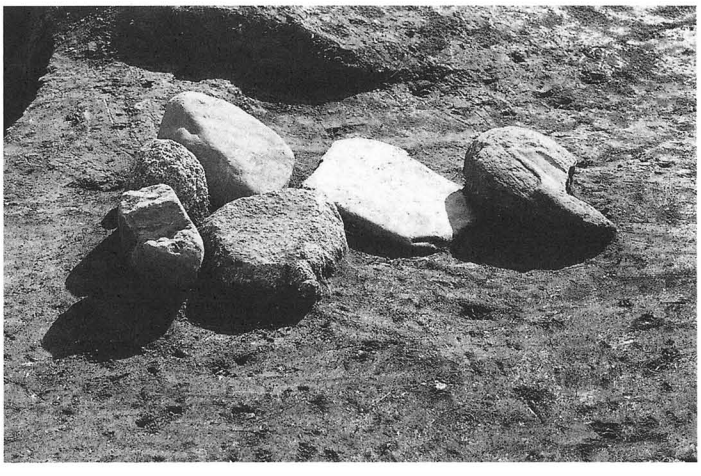
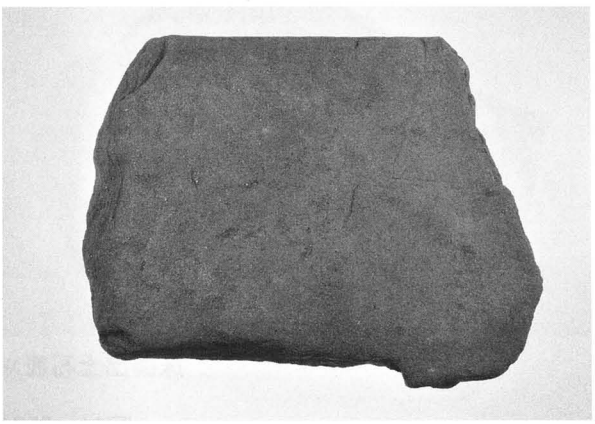


図24　353号住居址実測図



写15　353号住居址外石皿出土状況



写16　353号住居址外出土石皿

13）354号住居址

ＢＶ17グリッドの南西隅で発見された。大部分が用地外となるためごく一部が調査できただけである。平面形は隅丸方形と思われるが規模まではわからない。埋土は上層から中層にかけて黄色みの強い褐色土となっており、床面近くに炭が多く混じる黒褐色土が一面に観察された。全体の状況を把握できたわけではないが、埋土の状態と床の一部が焼けていることを考え合わせると、消失家屋である可能性がある。壁直下を周溝がめぐっており、P1は柱穴となろう。北西の壁下から石皿が出土している（写17）。床に接しており、本址に伴うものと解したい。石皿はそらまめ状を呈し、その深い凹みは他に例をみない。

この石皿以外には無文土器片が１点出土したのみであるが、黄色味が強い埋土から、中越期の住居址であることは言える。

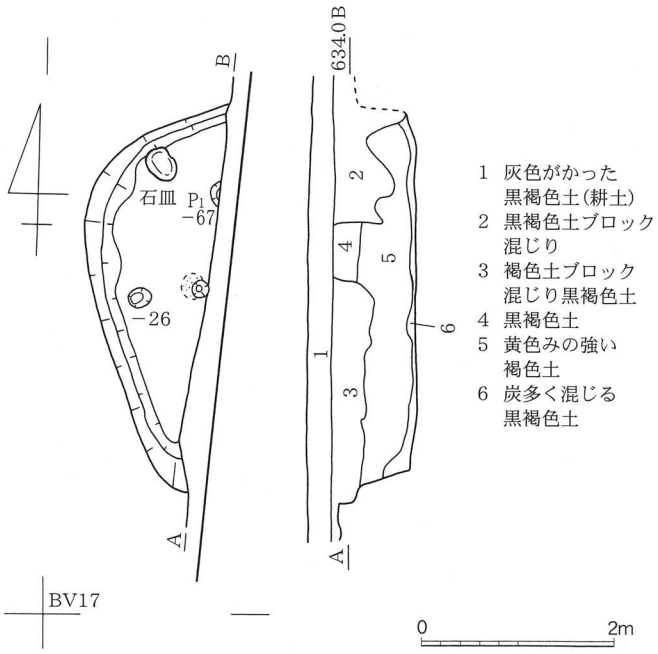
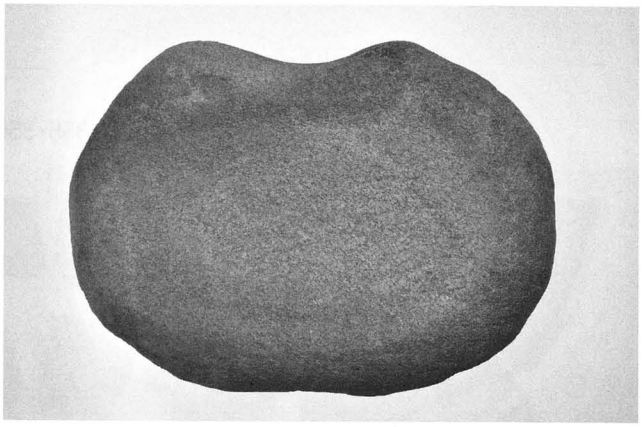


図25　354号住居址実測図

写17　354号住居址石皿出土状況



写18　354号住居址出土石皿

14）355・356号住居址

355号住居址

ＢＷ16とＢＷ17グリッドから発見された建て替えの痕跡のある住居址である。東側にある356号住居址をわずかに切るほか、用地外まで延びる西側を、中世の竪穴建物址と井戸によって切られている。平面形は南北方向に軸線をおく一辺５ｍ強の丸みが強い隅丸方形が考えられる。全体に炭粒が混じる埋土は、下層の褐色土や赤みがかった褐色土の上に、黒みがかった褐色土がレンズ状に観察された。西側の埋土下層に焼土粒が含まれていたほか、北側の床に焼けた箇所がある。検出面から床面まで40㎝を測る。壁直下に幅が広く深い周溝がめぐるほか、東と南側でその20㎝ほど内側に、幅が狭い周溝を検出した。壁直下の周溝よりも埋土に黄色みが強く、埋め立てられた状態が観察されたことから、建て替えられた旧址の周溝であると判断した。柱穴はP1、P3と、用地外と竪穴建物址に切られた箇所にある４本となろう。柱穴の周囲の床面が浅い摺鉢状に少し低く、土層観察のとき見付けることができなかったP4と、貼り床下から発見されたP3北西のピットは旧址のものとすることができる。炉は中軸線上の中央から南寄りに位置する浅い地床炉で、炉内の床面より少し低い高さに板状の石が発見された。周溝の内側の床には粘土質の黄色土が貼られている。床面から中越期の古い時期の大破片（№１）、南壁下の周溝内から長さ28㎝の緑色岩の扁平長大礫の叩石（№２）が出土している。

遺物量は多いが土器は全て破片で、在地系では中越式から神ノ木式まで出土しているほか、北陸系の土器片が少しまとまっている。石器は石鏃８点、石匙４点、石錐２点、スクレパー４点と、磨石11点、磨石片11点、礫端叩石８点のほか、黒曜石類の剥片・屑片110点、石核56点、ピエス・エスキーユ６点、原石１点と、硬砂岩

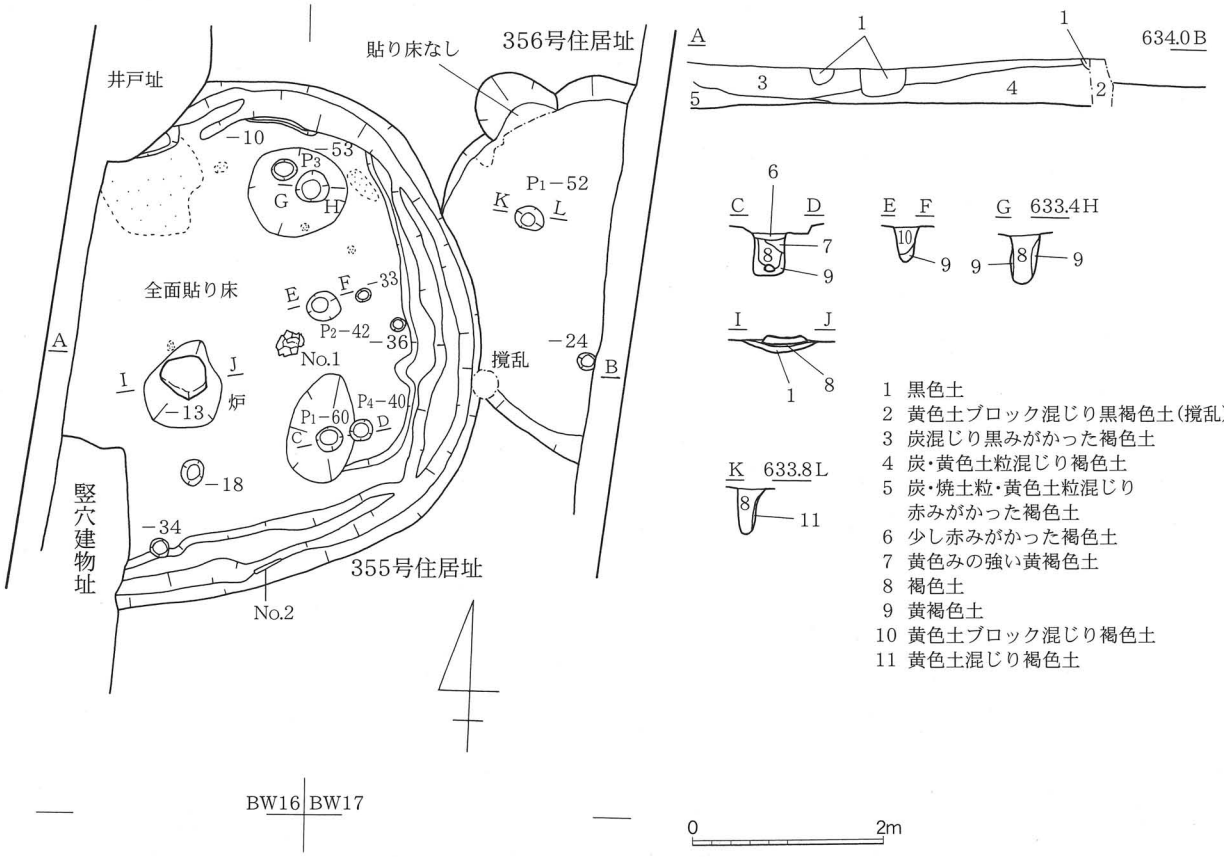
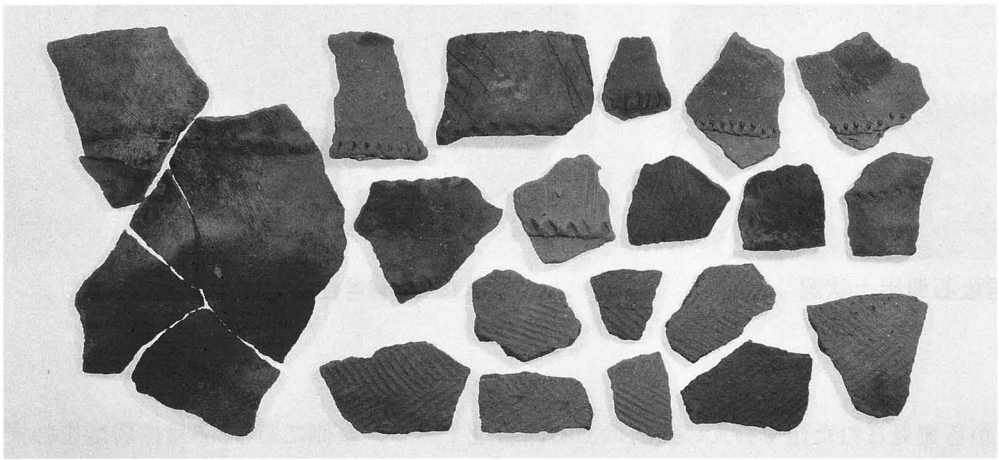
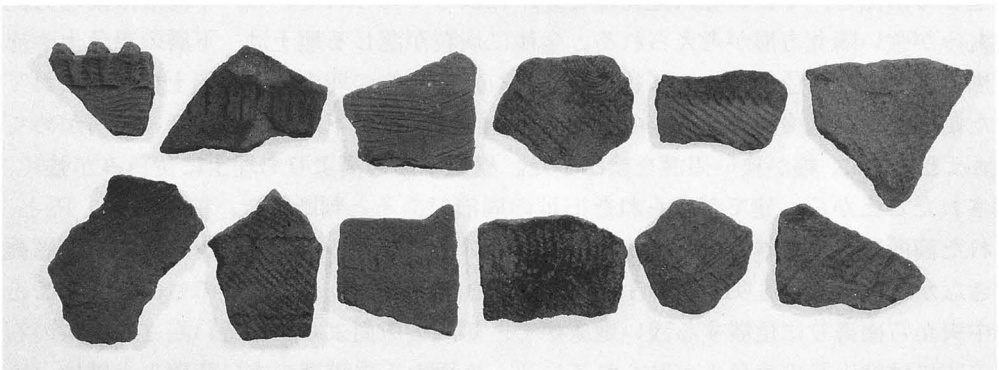


図26　355・356号住居址実測図



埋土出土
中越式・北陸系土器片



埋土出土
神ノ木式土器片

写19　355号住居址出土遺物

の小円礫22点、緑色岩類の粗大剥片10点がある。定形石器ではないが緑色岩類が多いのが目を引く。

所属時期は土器に明確な傾向がないことから細分は難しく、中越期のうちとしておきたい。

356号住居址

ＢＷ17グリッドに発見され、東側の大部分は用地外となり、西側をわずかに355号住居址に切られている。平面形は不明だが径４ｍに満たない規模の小さい住居址が想定される。周溝は観察されず、柱穴もP1がそれであるといえるのみである。床は全体に粘土質の黄色土で貼り床されていた。

遺物はごく少ない。土器は全て破片で中越式の古いものを主体としており、石器もスクレパーと磨石各１点以外は、夾雑物の非常に多い黒曜石の剥片・屑片10点、石核８点だけである。

所属時期は中越期の古い段階としておきたい。

15）357号住居址

ＢＹ16、ＢＹ17グリッドの南端に発見された。西半分は用地外となるため調査してない。平面形は南北に軸線をおく円に近い隅丸方形で、南北5.2m、東西は確定できていない。遺構検出面から床面までは40cmを測る。東側の貼り床の下から、周溝ともう１枚の床面が発見され、２軒がほぼ重なることから、建て替えられた住居址であると判断した。

新址　埋土は最下層の炭と焼土が混じる黒みがかった褐色土の上に、褐色土の層があり、その上の中央に小礫の混じる黒色土がレンズ状に観察された。住居址の東半分を調査したところでは、柱穴からその外側の旧址の周溝を覆うようにして、壁に近い方がわずかに高くなるしっかりした貼り床がされていた。新址の床面は中央に向かって少し傾斜していたものと判断され、住居の中央では新址に伴う貼り床を確認することはできなかった。柱穴は方形に配された大型のP1、P2と用地外の２本の４本である。炉は用地際に発見された地床炉で、焼土が多く混じる褐色土と炭混じりの黒色土が観察され、炉の縁も焼けていた。北東壁下に発見されたNo.１は斜

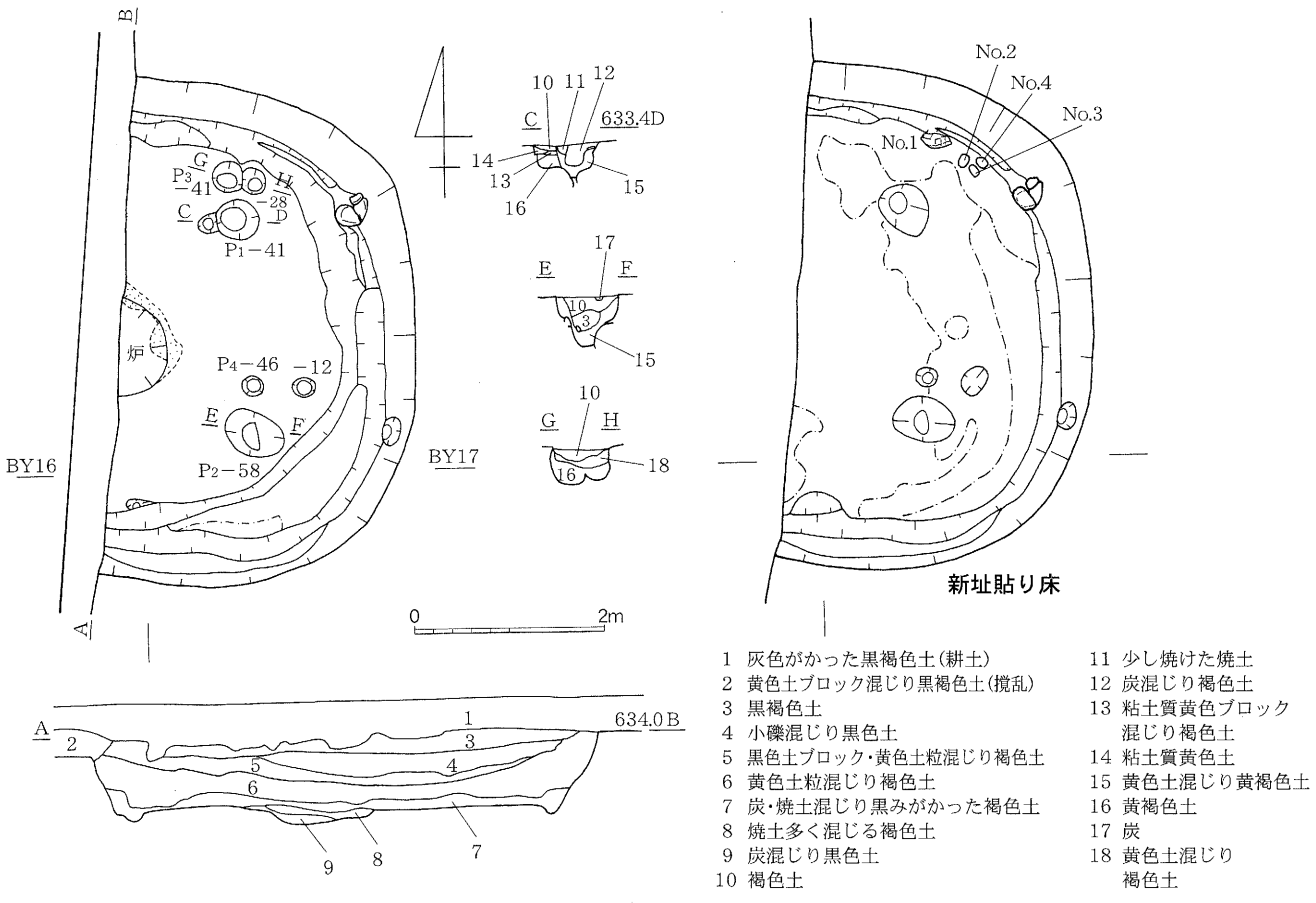
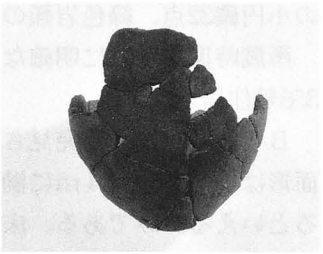


図27　357号住居址実測図

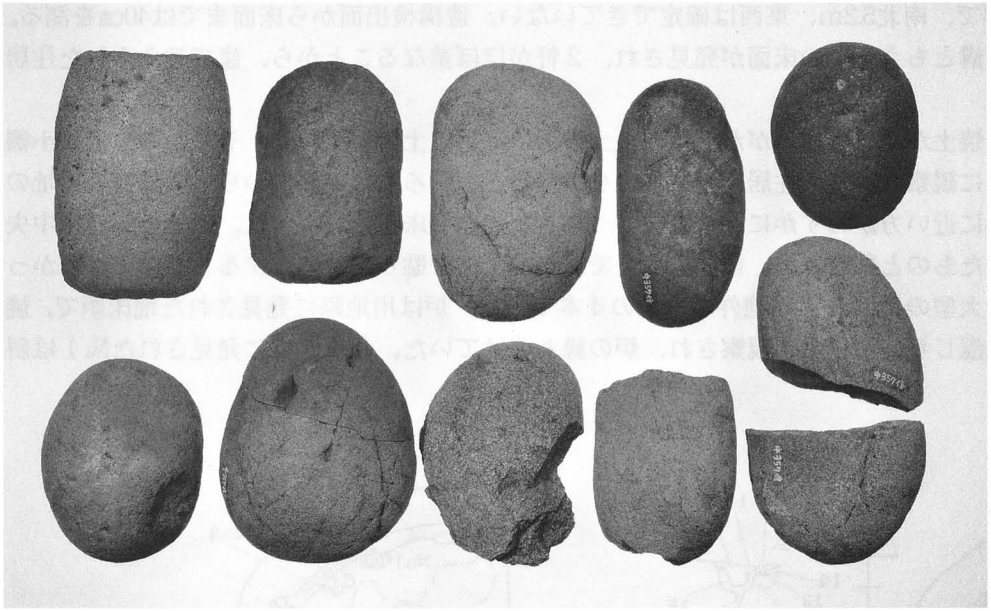
格子目文の上の頸部に刺突文をめぐらす中越式土器の大破片(写20)、№２～№４は磨石である。

旧址　新址の貼り床下から円を描く周溝と、その周溝の内側に最大10㎝の段差をもって床面が発見された。 新址を建て替えるときに、南東側に大きく広げていると判断されることもあって、柱穴は小さめのＰ3、Ｐ4であるとすることができる。

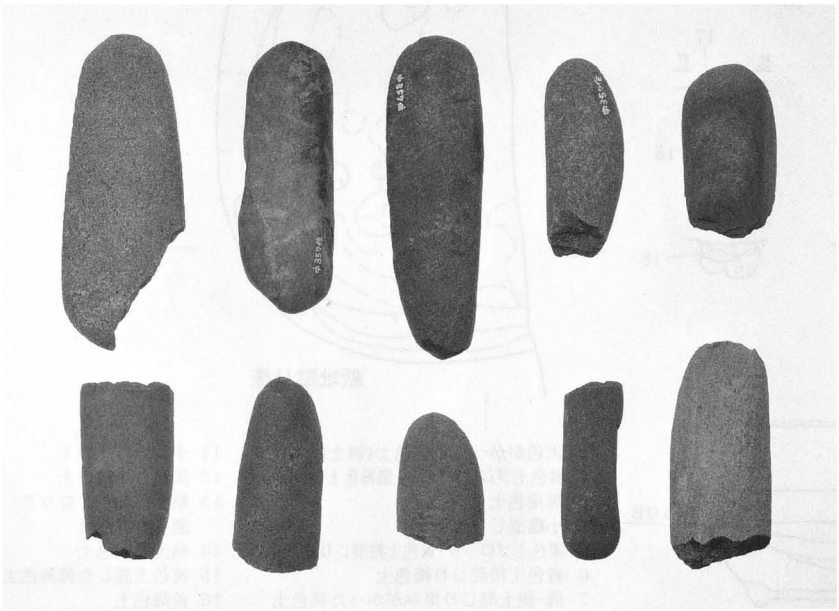


写20　357号住居址出土土器No.1

遺物のうち、埋土から出土した土器は多いがいずれも破片である。在地系は中越式の新しい段階の無文土器が主体で神ノ木式はない。埋土から骨片が出土しているほかＰ2と炉内からも土器片が出土している。石器は石鏃15点、石匙５点、石錐２点、スクレパー４点、つまみ持つ剥片・複数抉入石器・抉入刺突具各１点と、磨石11点・磨石片10点・礫端叩石10点・小型磨製石斧１点のほか、黒曜石類の剥片・屑片396点、石核79点、ピエス・エスキーユ９点、原石１点と、硬砂岩類の棒状



床面・埋土出土磨石

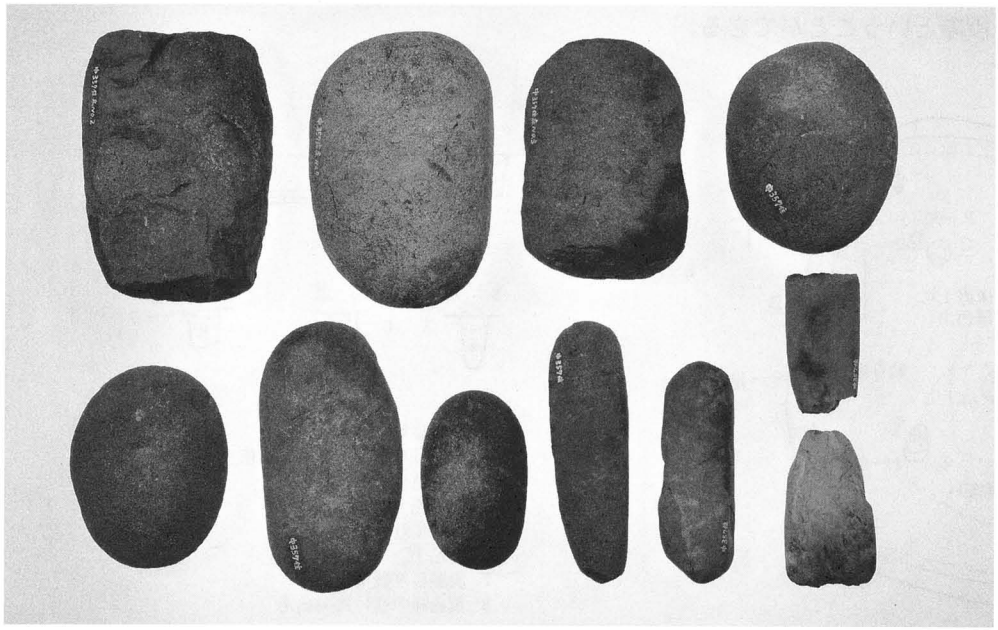


埋土出土礫端叩石

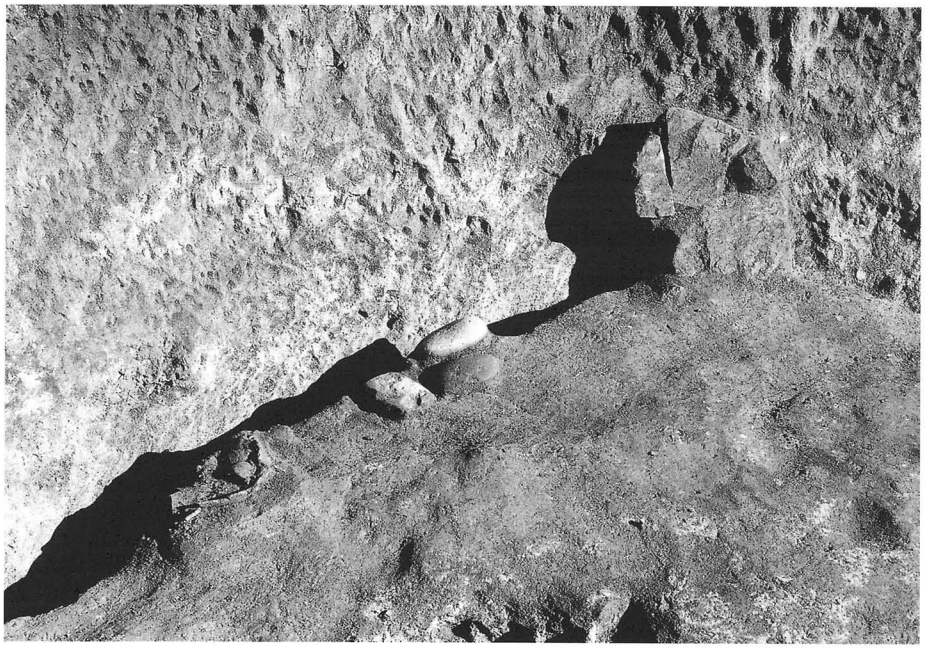
写21　357号住居址出土遺物

礫４点、小円礫11点が出土した。床面から出土した磨石をはじめ、礫端叩石、棒状礫、磨製石斧などの多くの石器に顕著なススの付着が観察された(写22)ことと、１点ではあるが発泡した黒曜石が出土していることから、埋土に痕跡はなかったが、上屋が焼けている可能性が高い。

所属時期は中越期の新しい段階であろう。



写22　357号住居址出土炭化物付着石器



写23　357号住居址遺物出土状況

16）358号住居址

ＢＲ21とＢＳ21グリッドから発見された。平面形は北から少し西へ振った方向に長軸をおく5.0×4.2mの丸みが強い隅丸長方形を呈する。埋土は黄褐色土の上に炭混じりの黒褐色土が中央に厚くレンズ状にあり、床近くに炭の混じる褐色土が観察された。検出面から床面まで50㎝を測る。周溝はなく、柱穴は壁からかなり内側に配されたP1からP4の４本で、西壁下と北東隅に径10㎝前後の浅く小さなピットがある。炉は中軸線上の中央やや南寄りに位置する浅い地床炉で、炉の周囲の床上に薄い黒色土が観察された。壁際の10㎝から15㎝の部分以外は全て粘土質の黄色土で貼り床されており、炉とP2、P3で囲まれた範囲の床面は特に堅くなっていた。

P2から黒曜石の剥片１点が出土している。

遺物量はさほど多くない。土器は全て破片で、在地系では中越式の古い段階のものが主体を占めている。石器は石鏃３点、石錐・石匙・打製石錘各１点と、磨石４点、礫端叩石５点、黒曜石類の剥片・屑片147点、石核47点、原石１点、ピエス・エスキーユ10点のほか、磨石の破片らしい硬砂岩片18点と硬砂岩類の礫15点があり注意される。

所属時期は中越期の古い段階ということができる。

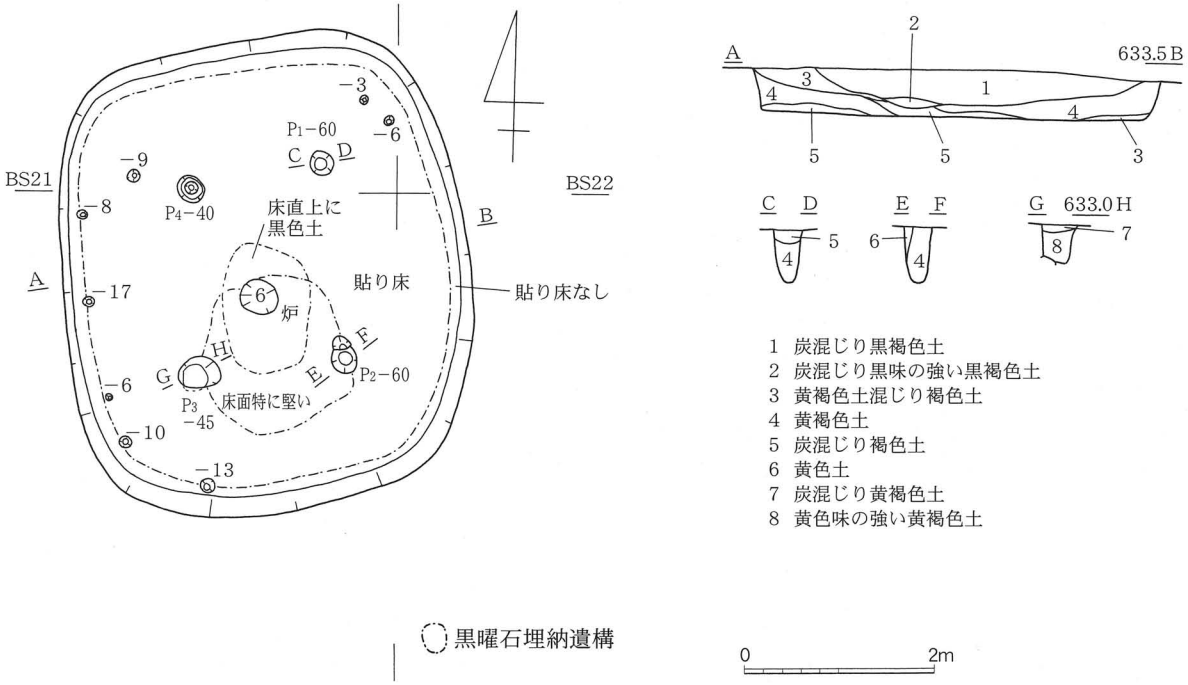
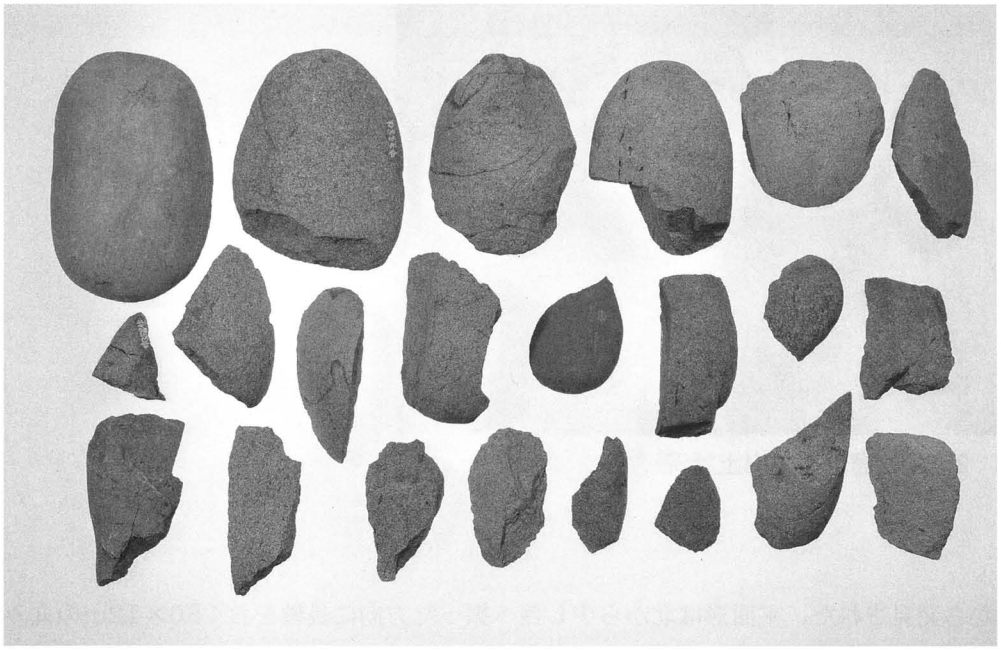


図28　358号住居址・黒曜石埋納遺構実測図



磨石とその破片

写24　358号住居址出土遺物

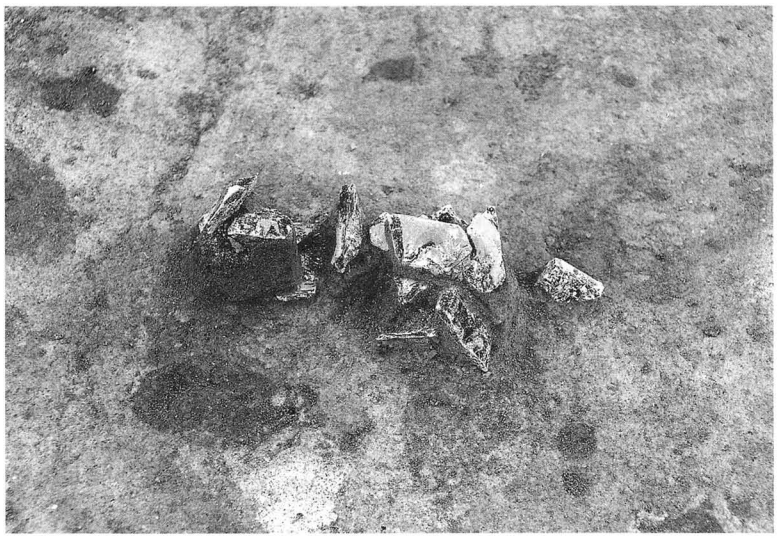
（２）その他の遺構

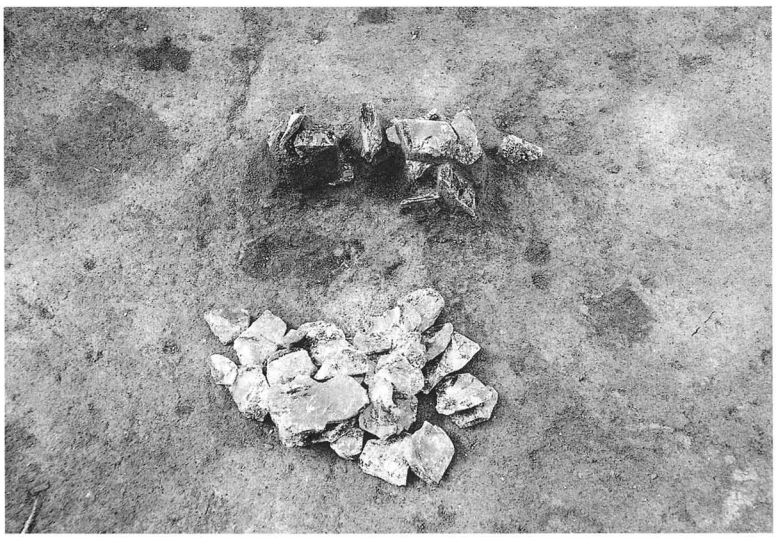
黒曜石埋納遺構

358号住居址の南東2.0mの遺物包含層中に、直径20㎝位に黒曜石が集中して出土した(図28)。発見時に上層の黒曜石の多くを動かしてしまい、その後黒曜石の周囲の土を観察したが、人為的に集めて置かれていたという以上の情報を得ることはできなかった。ただし、発掘の際に動かされなかった黒曜石が密に重なっていることから、小さな穴の中にかためて埋め置かれていたのではないかと想定している。

遺構から出土したと把握できた黒曜石(図38～42)は、剥片36点(１～34、38、40)、石核11点(35～37、39、41～47)、原石１点(48)の計48点である。剥片に１ｇ以下が１点あるが、２～９ｇが８点、９～16ｇが22点、16～23ｇが13点、23～30ｇが３点、40ｇ以上１点であり、目視した限りでは、石匙など、黒曜石製石器の中では大型の定形石器の素材となりうる大きさと形のものを選択して埋納したものと判断される。石質に２種類あり、夾雑物として流紋岩の小粒をわずかに含みながらもなめらかで黒色を呈するものと、網目状に細かい粒子が入るものである。

剥片類は、縁辺に細かいダメージが入っているものの二次加工は施されていない。これらが定形石器の素材であるという前提に立てば、石器加工の工程に、原材から剥片を剥離した段階で一旦作業をやめ、そのとき得られた剥片だけでなく石核や原石の中から、目的とする定形石器に適した大きさと形のものを選ぶという過程があったことを示唆する。剥離面から導き出される、最後の方で石核から剥離した剥片の大きさは、集められた剥片よりもはるかに小さいことから、目的とする大きさの剥片を剥離したあとも、石核そのものを、石器の素材として使える形になるまで加工したあとで素材の選別をしていたということも言えそうである。石核の状態から、原石はさほど大きくなく、そこから定形石器の素材となるような何枚もの剥片を剥離したとは思われない。





埋納遺構と出土した剥片類

写25　黒曜石埋納遺構

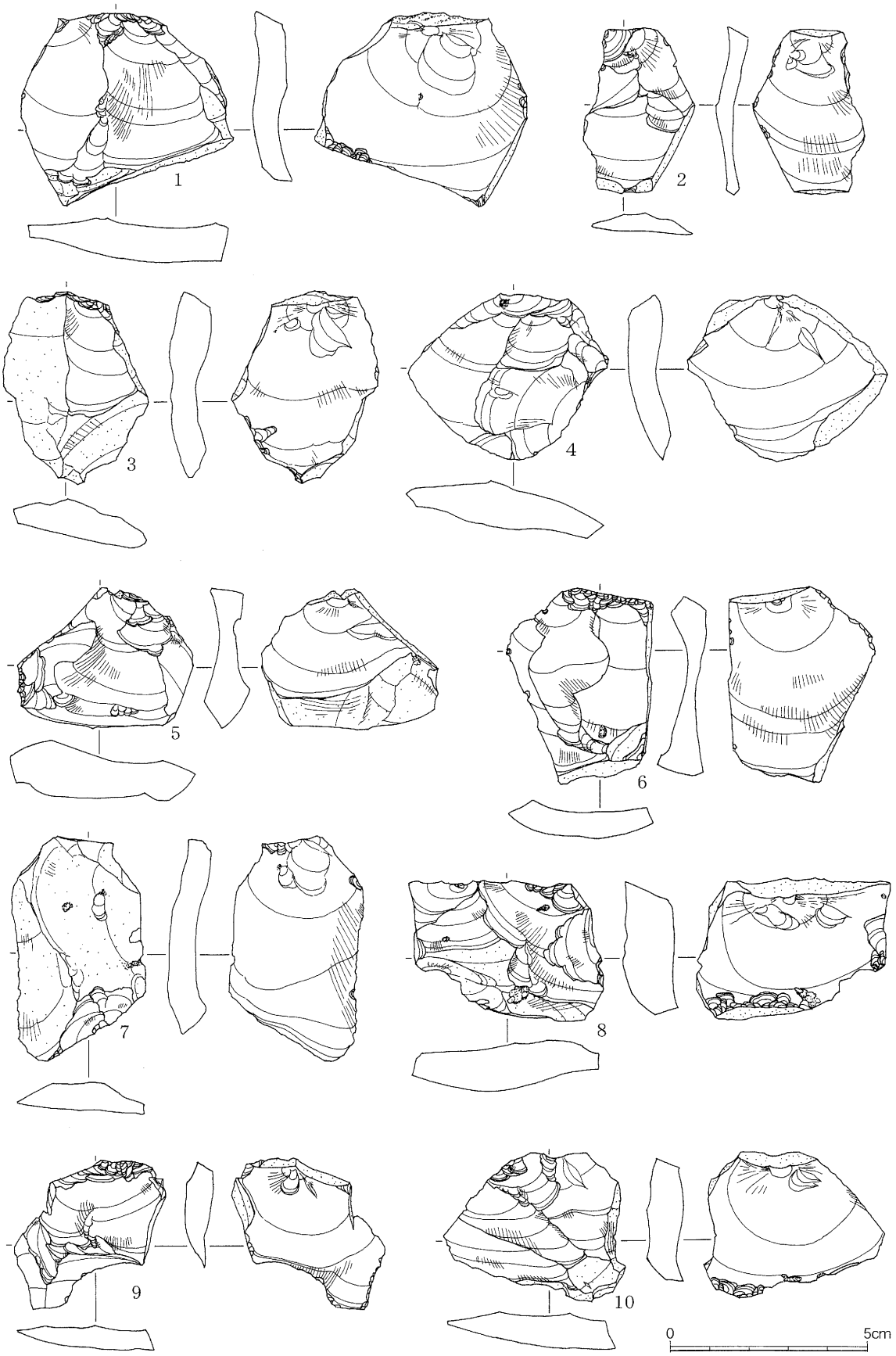


図29　埋納遺構出土黒曜石実測図（１）

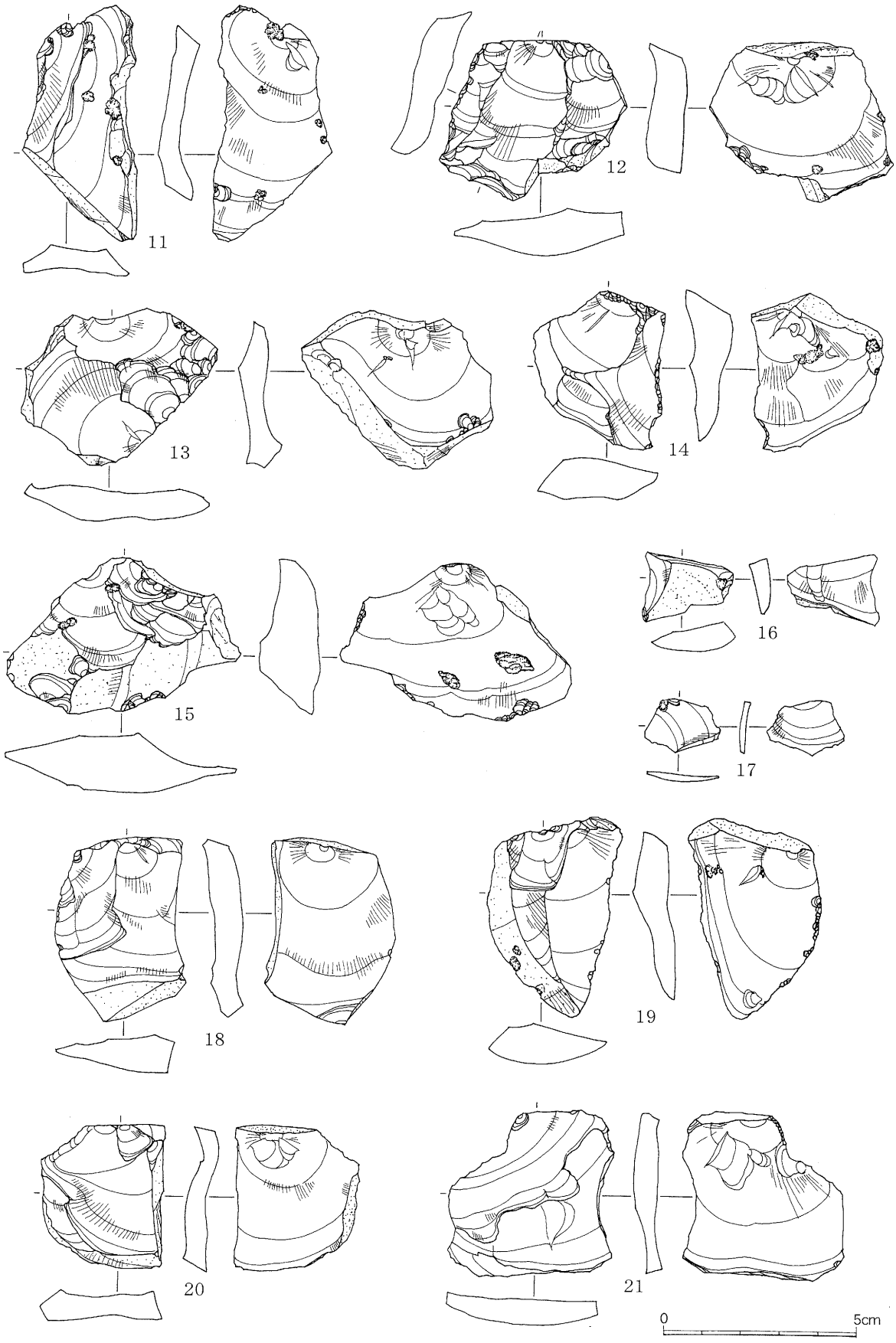


図30　埋納遺構出土黒曜石実測図（２）

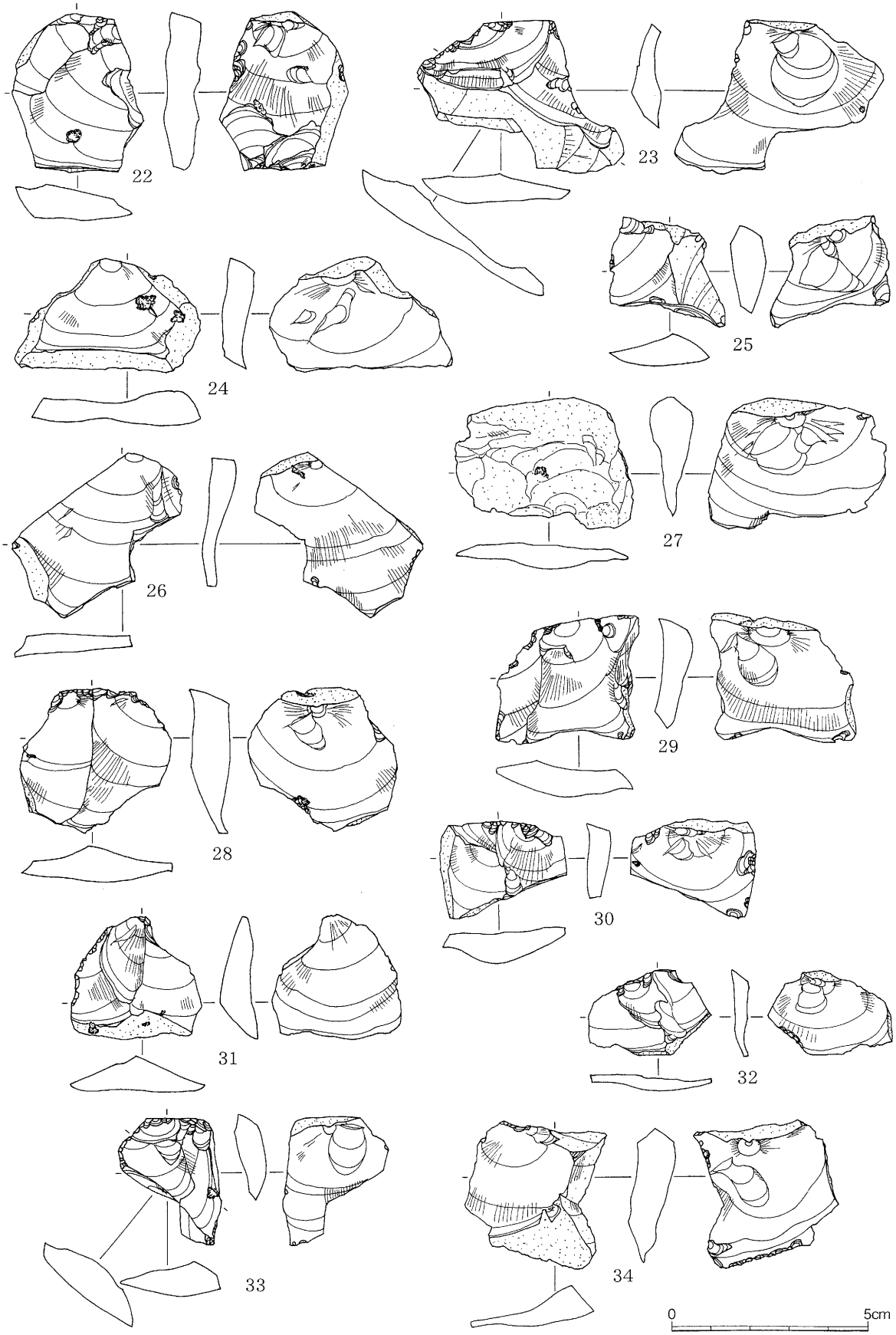


図31　埋納遺構出土黒曜石実測図（３）

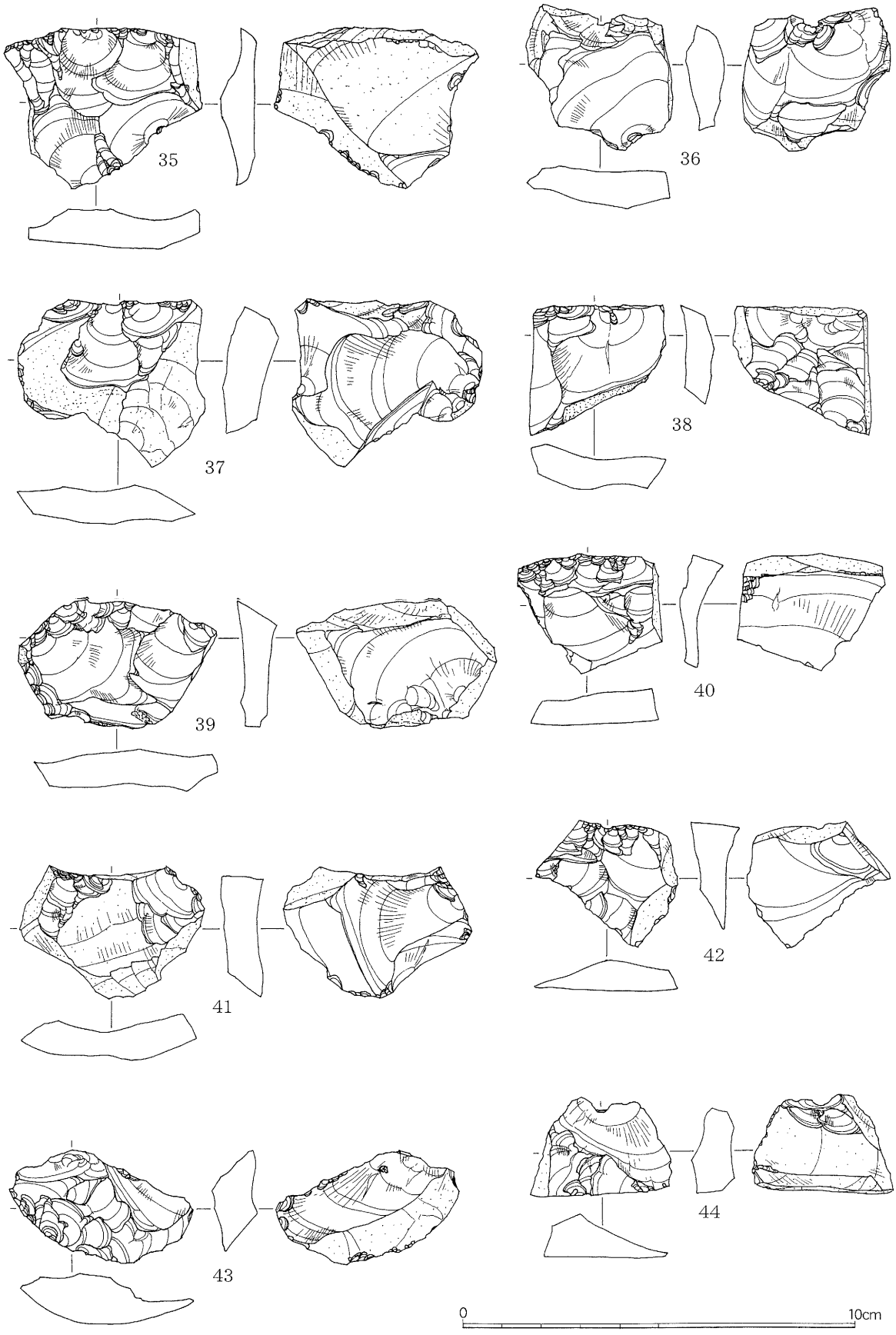


図32　埋納遺構出土黒曜石実測図（４）

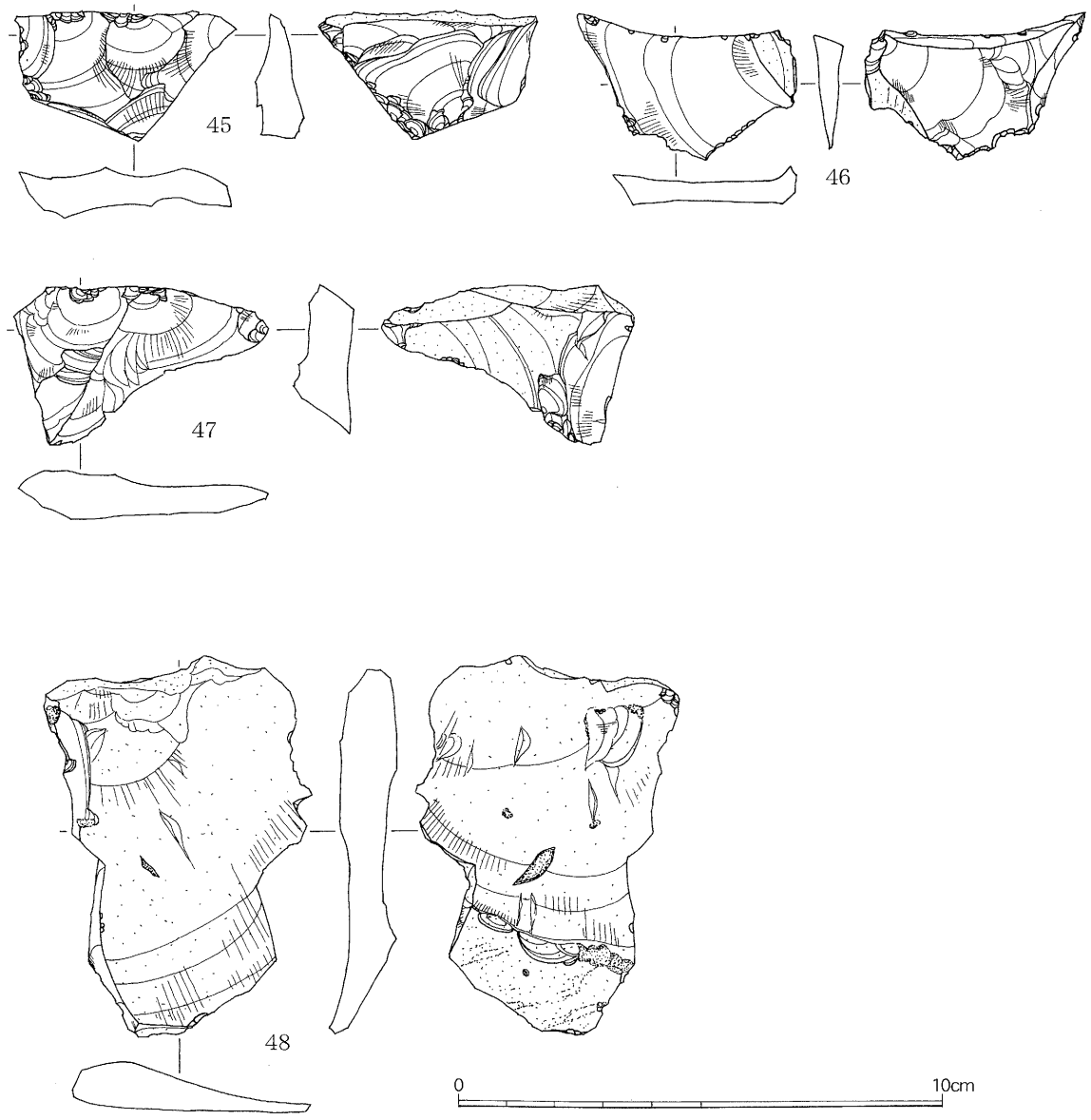


図33　埋納遺構出土黒曜石実測図（５）

３　区画道路39号線

（１）　竪穴住居址

１）166号住居址

ＣＢ20グリッドの南東で発見された。調査区が狭く、検出されたのは遺構の南半分だけである。平面形は北東方向に軸線をおく隅丸方形を呈し、１辺４ｍ弱ほどの規模が想定される。検出面から床面までは30㎝、埋土は黄色土粒が混じる褐色で、中央の上層がレンズ状に黒みが強く、壁はゆるく立ち上がっていた。周溝は検出されず、発見されたピットをもとに柱穴を想定するのは困難であった。

遺物は少量で、土器は中越式の古い段階のものに限られ、石器には石鏃１点、磨石４点と、黒曜石の剥片・屑片18点、石核８点がある。

所属時期は中越期の古い時期であろう。

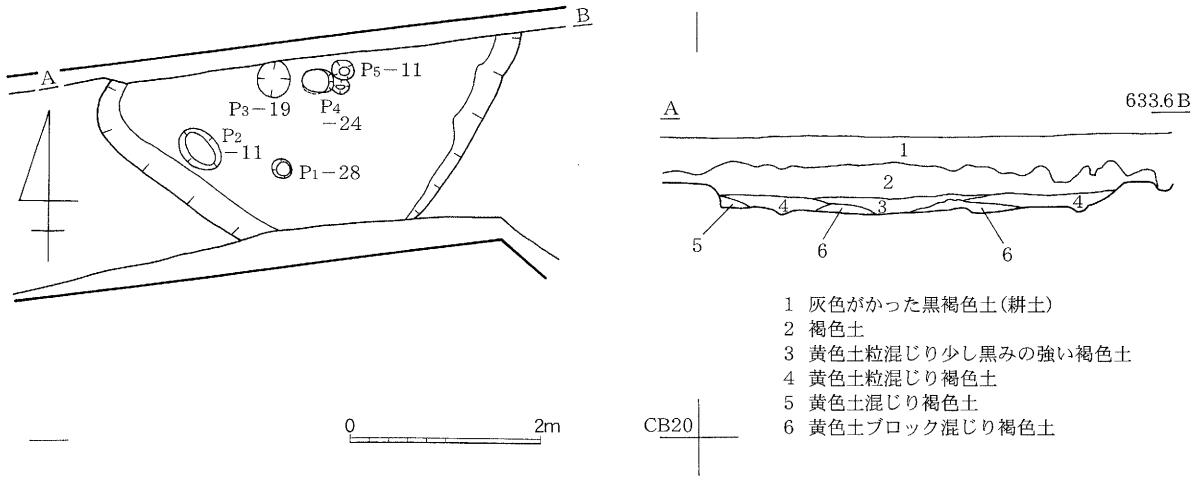


図34　166号住居址実測図

２）167号住居址

ＣＣ19グリッドの南東隅に発見された。南西に188・189号土坑がある。南東隅のごく一部が調査できただけで、柱穴や炉も確認できていない。平面形は東西方向に軸線をおく隅丸方形が推定できる。

この遺構に伴う遺物は特定できず、従って所属時期も推定でしかないが、おそらく中越期の遺構であろう。

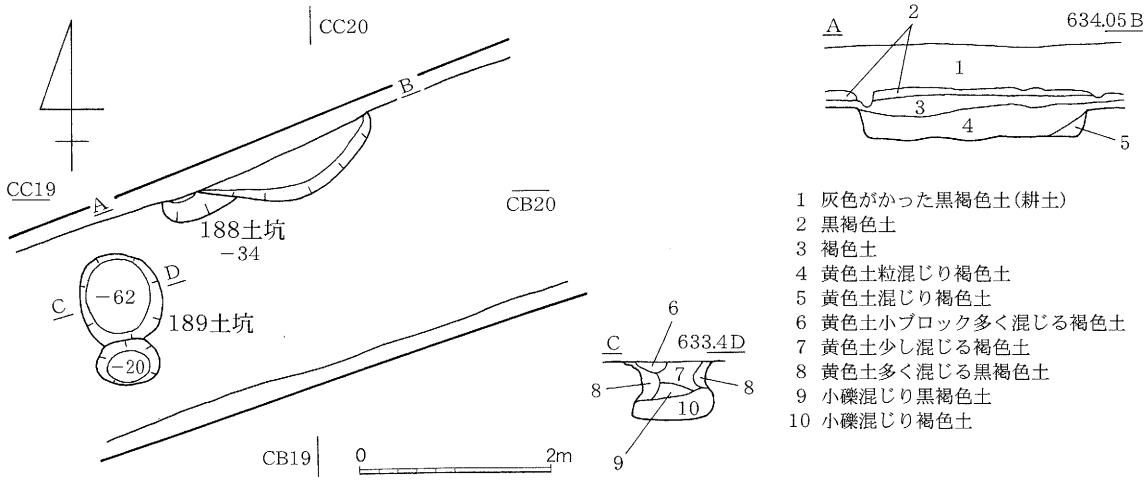


図35　167号住居址実測図

３）168・380号住居址

168号住居址

ＣＡ15グリッドの北東隅で発見された。道路拡張部分の狭長な調査区で、住居址のほぼ中央にめくら排水が設けられており、存在を確認した程度である。平面形は北から少し東の方向に軸線をおく隅丸方形を想定した。西の壁下に周溝があり、床は貼り床されており、P_1は柱穴としていいであろう。

遺物は調査できた範囲からすると多い。土器は中越式の新しい段階である無文を主とし、神ノ木式はない。石器には石鏃５点、石匙・スクレパー各４点、石錐・打製石錘各１点、磨石４点、礫端叩石１点のほか、黒曜石の剥片・屑片95点、石核17点、原石２点、ピエス・エスキーユ１点が出土している。

所属時期は中越期の新しい時期であろう。

380号住居址

ＢＹ16グリッドの北西隅で発見された。狭長な調査範囲の中で検出した遺構であり、全容は把握できていない。埋土についても記録を残すことができなかった。遺構検出面から床面までは50㎝と深く、平面形は北北東方向に軸線をおく一辺３ｍほどの丸みのつよい隅丸方形で、壁直下を幅の広い周溝がめぐり、床は全面に貼り床されていた。柱穴は方形に配置され、P_1がそのうちの１つであろう。

遺物は少ない。土器は中越式の新しい段階を主として神ノ木式も少量ある。石器は石鏃２点、スクレパー１点、磨石２点、礫端叩石１点のほか、黒曜石の剥片・屑片41点、石核６点が出土している。

所属時期は中越期の新しい時期か神ノ木期であろう。

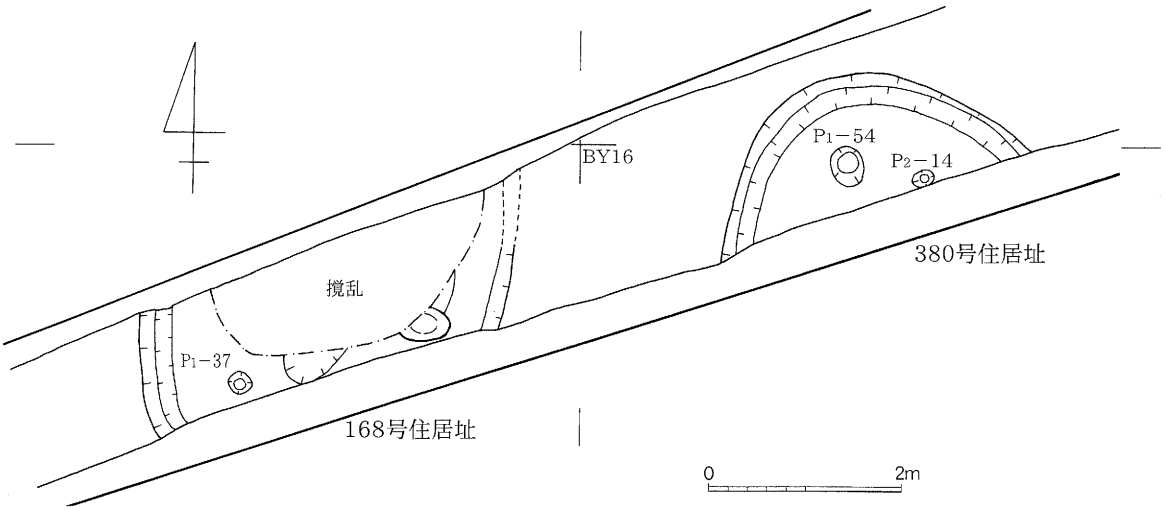


図36　168･380号住居址実測図

４）315号住居址

ＣＢ19グリッドの南東隅で発見された。北側半分は用地外となる。遺構検出面から床面までは20㎝前後と浅く、黄色土粒混じりの少し黒みがかった褐色を呈する埋土は、下層に黄色土が混じる褐色土が観察された。壁はゆるやかに立ち上がり、周溝はなく、柱穴も発見することはできなかったが、床の中央部に貼り床を確認することができた。この住居址を切るようにして２基の土坑（186・187号）がある。

遺物は非常に少ない。土器はいずれも中越式の古い段階のものに限られ、石器は石匙２点、磨石１点、黒曜石の石核３点、剥片４点だけである。

所属時期は中越期の古い段階であろう。

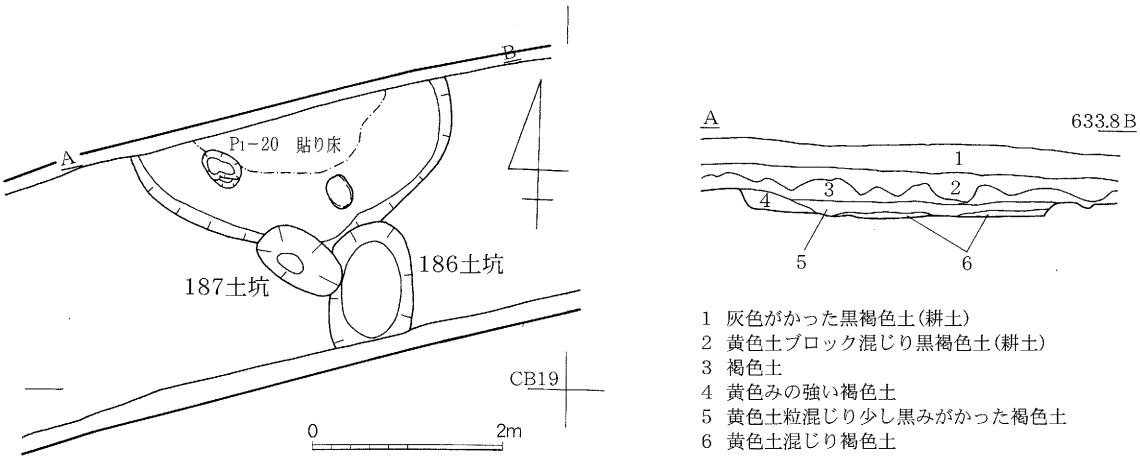


図37　315号住居址実測図

５）316号住居址

ＣＡ21グリッドから発見された。東側半分が用地外となるため調査してない。平面形は推定だが、北東方向に軸線をおく一辺3.5m弱の円に近い隅丸方形を呈するであろう。埋土は黄色土粒が混じる褐色土の上にわずかに黒みがかった褐色土がレンズ状に観察された。検出面から床面まで30㎝ほどで、周溝はなく、柱穴もP1がその可能性が高いこと以外は不明で、炉も確認できなかった。床の中央部には粘土質の黄色土が貼られている。P1に一部入り込むようにしてNo.１の中越式の土器３分の１個体分が発見された。

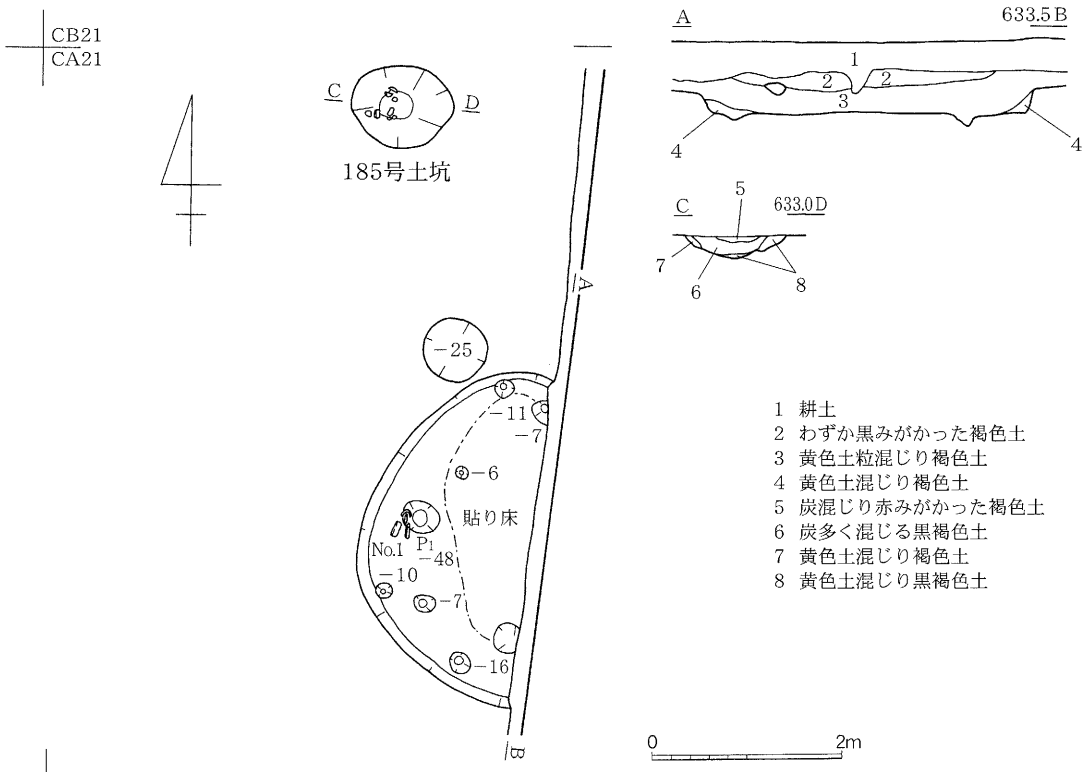
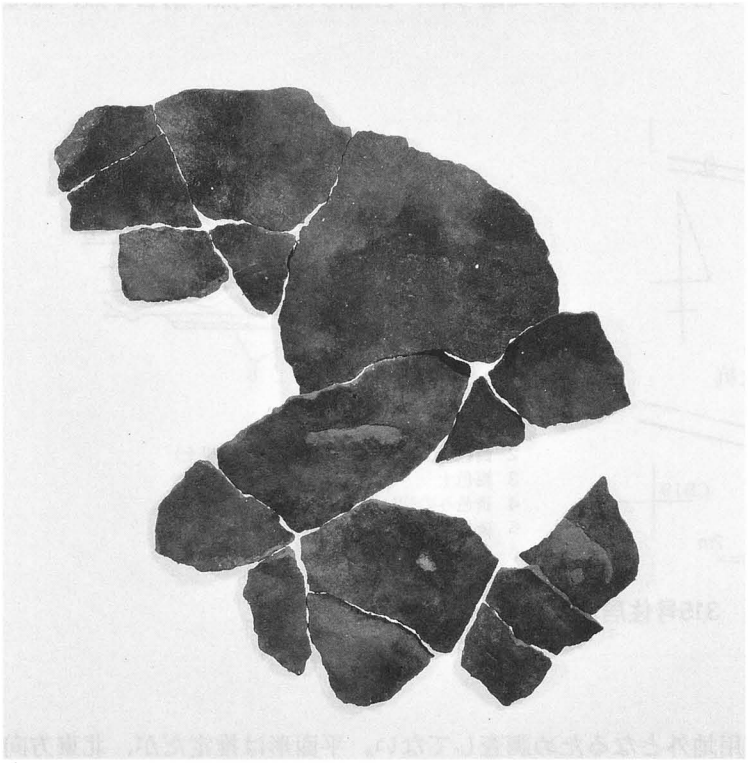


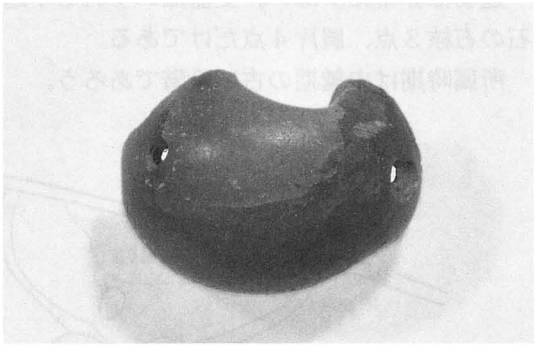
図38　316号住居址・185号土坑実測図

遺物は少量で、土器のうちP1で発見された中越式は口縁部に斜格子目文を施すもの(写26左)で、それ以外も中越式の古い段階から中ごろまでのものである。石器は石鏃２点、破片を含む磨石５点、礫端叩石３点と、割れた丸玉に２つの孔をあける再加工を施した滑石製の錘飾品(写26右)１点のほか、黒曜石の剥片・屑片15点、石核２点、原石１点、ピエス・エスキーユ１点が出土している。磨石の中に安山岩製が１点ある。

所属時期はピットに埋まるようにして出土した土器から、中越期の中ごろとしておく。



P1 出土土器



埋土出土垂飾品

写26　316号住居址出土遺物

６）　317号住居址

ＢＹ20グリッドの南東隅に発見された。西側半分以上が用地外となる。平面形は北から少し西の方向に軸線をおく一辺４ｍほどの丸みをおびた隅丸方形が推定される。検出面から床面までは20㎝程度と浅く、黄色土粒の混じる褐色の埋土は壁近くが少し黒みをおびており、中央にはその上に赤みをおびた褐色土ブロックを含む黒褐色土がレンズ状に観察された。周溝はなく、床面は北側が一段高くなっており、中央部に貼り床が確認できた。位置からするとP1、P2は柱穴であろうがいずれも浅い。

遺物量はごく少ない。土器は中越式の最も古い段階に限られ、石器は石鏃・スクレパー各１点、磨石４点、扁平棒状の叩石１点と、黒曜石の石核３点、剥片･屑片24点だけである。

所属時期は中越期の最も古い段階としていいであろう。

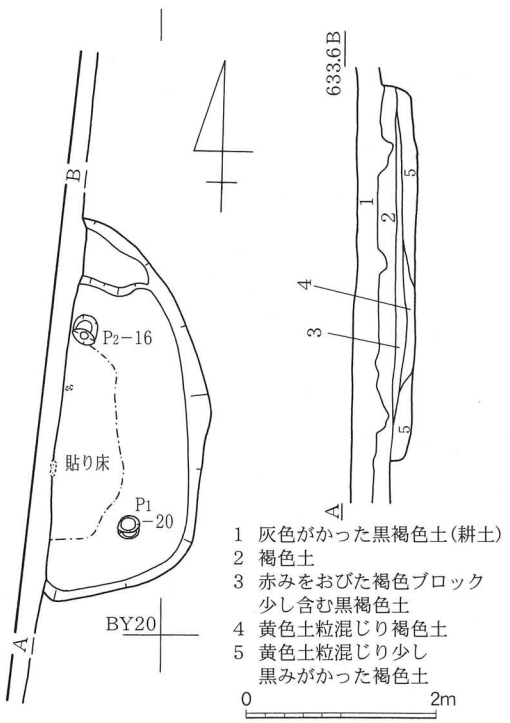


図39　317号住居址実測図

７）318号住居址

ＢＸ22グリッドの西北で発見された。北半が用地外となるほか、東壁を新しい時期の溝によって切られている。平面形は推定で北から少し東の方向に軸線をおく一辺３ｍほどの丸みのつよい隅丸方形となろう。埋土は黒色土粒が混じるわずかに黒みがかった褐色で、下層の壁際に黄色土が混じる褐色土が観察された。周溝は見られず、柱穴も内部には発見することができなかった。中央の西よりに貼り床が見られた。

遺物はごく少量で土器は中越式の最古のものに限られる。石器は磨石３点のほかは黒曜石の剥片６点、石核１点である。磨石の中に安山岩製のものが１点含まれており注意される。

所属時期は中越期の最も古い時期としていいであろう。

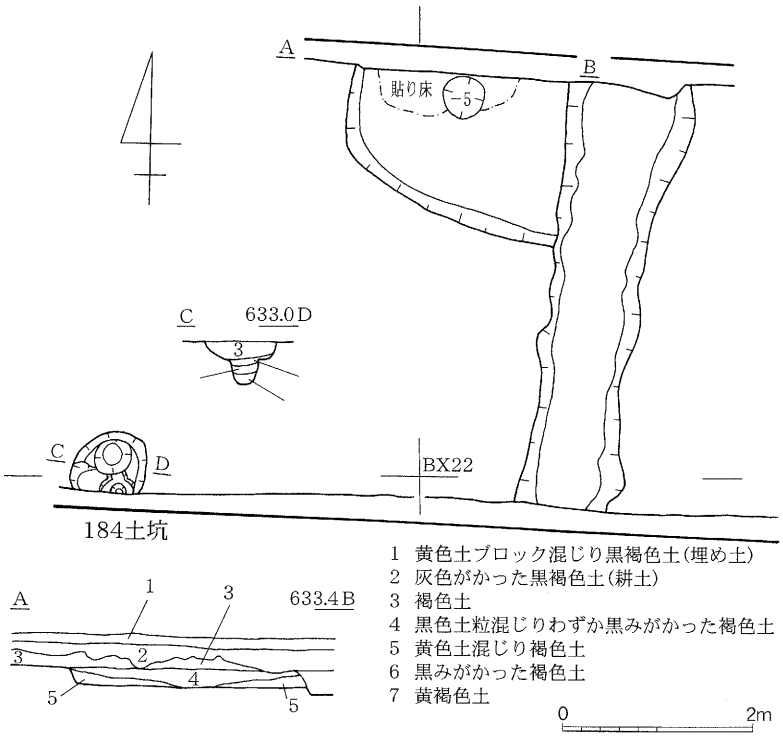


図40　318号住居址・184号土坑実測図

８）　319号住居址

ＢＸ21グリッドの南西隅で発見された。南半が用地外となる。検出面から床面までは30㎝ほどであるが、埋土についての観察記録は作成することができなかった。平面形は北西方向に軸線をおく一辺３ｍほどの丸みのつよい隅丸方形となろう。壁は比較的ゆるやかに立ち上がり、周溝はなく、柱穴から内側程度の比較的狭い範囲に貼り床がみられた。P_1、P_2が柱穴で方形に配された４本柱の建物となろう。貼り床の西の隅に２枚目の貼り床があったが、確認できたのはごくわずかであり、全体の様子はわからない。

遺物はごく少量で、土器は中越式の古い段階のものが主で神ノ木式はない。石器は磨石４点、礫端叩石３点のほか、黒曜石の剥片35点、石核４点、原石１点と粗大剥片１点が出土している。

所属時期は中越期の古い時期であろう。

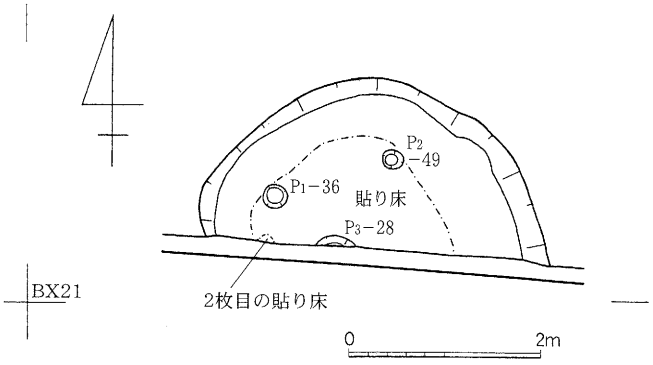


図41　319号住居址実測図

９）320号住居址

ＢＸ21グリッドから発見された。北東の一部が用地外となる。平面形は北から少し東方向に軸線をおく4.4×4.1ｍの丸みが強い隅丸方形で、検出面から床面までは40㎝を測る。壁下を幅の広い周溝が全周しており、周溝内には西側に３個、南に１個の浅いピットがある。柱穴は方形に配されたP1からP3と用地外の１本の４本で、中央南よりの浅いピットを、埋土下層にわずかではあるが焼土粒を含んでいることから地床炉と判断した。床は粘土質の黄色土で貼り床されており、東側は貼り床に使われた土が少なく床面も軟らかい。土層図の１は土色を記録することができなかった。

遺物は少量で、土器は中越式の古いものが主で神ノ木式はない。石器は石匙２点、スクレパー１点、磨石４点、礫端叩石２点のほか、黒曜石の剥片・屑片58点、石核25点、ピエス・エスキーユ４点、粗大剥片１点が出土している。

所属時期は中越期の古い時期であろう。

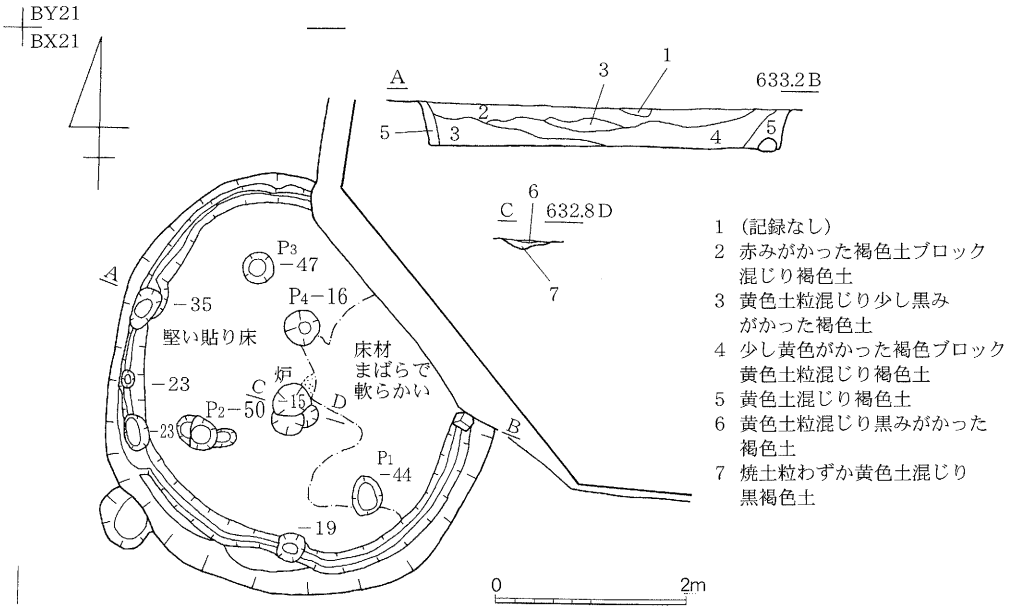


図42　320号住居址実測図

（２）　土坑

調査範囲からの６基の土坑（184～189号）が発見された。318号住居址の南西に184号土坑、316号住居址の北に185号土坑、315号住居址の南に接して186・187号土坑、167号住居址の南西に188・189号土坑がそれぞれあるが、遺構に伴う遺物として184号土坑と189号土坑から硬砂岩礫が出土しているだけであり、所属時期はいずれも特定できない。

４　区画道路42号線

（１）竪穴住居址

１）360号住居址

ＢＳ22グリッドの北寄りに発見された。東側のごくわずかが用地にかかったもので、平面形は北から少し東寄りに軸線をおく一辺４ｍに満たない隅丸方形が想定される。壁直下を15㎝以上の深さの周溝がめぐり、床面は全体が軟らかい貼り床であった。東壁近くの床に石皿が据えられていた。

埋土から出土した遺物は清水ノ上Ⅰ式と思われる無文片１点と石皿１点のみで、所属時期は中越期の古い時期と推定される。遺物量がごく少ない点も該期の特徴と一致する。

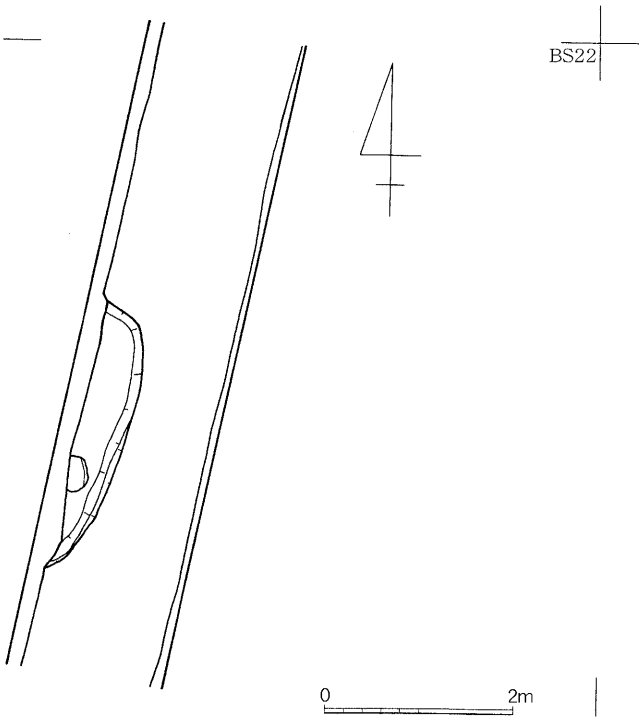


図43　360号住居址実測図

２）361号住居址

ＢＶ23グリッドの南西隅に発見された。一段低い道路に面し、耕作等によって荒されているため、狭長な調査範囲では平面形や規模、床面施設等は全く明らかにできていない。わずかに貼り床の存在によって住居址があると判断できたにすぎない。

遺物もごく少なく、土器は中越式と神ノ木式がほぼ同数で、石器は磨石１点のほか、黒曜石の剥片・屑片４点、石核２点、粗大剥片１点が出土している。

所属時期は神ノ木期としておきたい。

３）362号住居址

ＢＸ23グリッドの南東隅に発見された。床面から検出面まで南側で30㎝、北側で10㎝しかなく、狭小な調査範囲のため形態や規模は特定できなかった。壁直下を周溝がめぐり、南の壁際の一部以外は全面が貼り床されており、P_1は柱穴、P_3は埋土からみて地床炉であろう。床上に炭化材があり消失家屋である可能性がある。北壁下の床面から緑色岩の叩石（№１）と安山岩の磨石（№２）が出土している。

遺物は調査面積からすると多い。土器は中越式の古い段階が主体を占め、神ノ木式はない。石器は、床面の叩石と磨石のほか、埋土から石鏃２点、石匙１点、二次加工のある黒曜石の剥片１点、磨石４点と、黒曜石の剥片・屑片17点、石核３点が出土している。№２の安山岩の磨石は、石鹸状に調整された優品である。

所属時期は中越期の古い時期であろう。

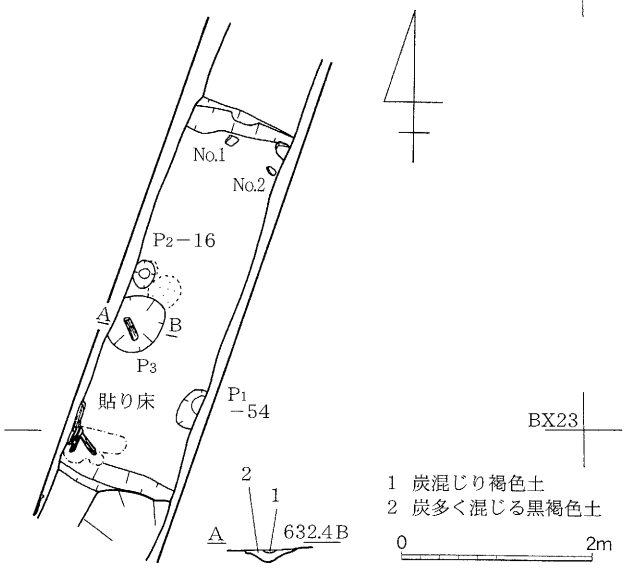


図44　362号住居址実測図

５　１街区

（１）373・374号住居址

ＢＶ07、ＢＷ07グリッドの西端で発見されたわずかに切り合う住居址で、西の外に212号土坑がある。水田の整地により包含層はかなり深くまで削平されており、狭小な調査範囲であるため遺構の形態を把握できなかったところが多い。東側の373号住居址は、遺構が検出されたのが床面から10㎝ほど上で、埋土は赤みがかった褐色を呈し、平面形は丸みがあるということ以外は特定できない。周溝はなく柱穴もはっきりしない。中央に貼り床が検出された。一方西側の374号住居址は、床面まで30㎝弱で、やはり平面形は特定できず、周溝はなく全面ではないが貼り床が確認できた。P_1は柱穴であろうがそれ以外のことはわからない。

373号住居址埋土から出土した遺物はごく少なく、土器は数点で全て中越式で、石器は黒曜石の屑片２点と硬砂岩の粗大剥片１点。374号住居址から出土した遺物は、土器は全て中越式で、粗い斜格子目文が付される。石器は石鏃６点、磨石１点と、黒曜石の剥片・屑片82点、石核19点、原石１点、ピエス・エスキーユ７点が出土した。

所属時期は中越期で、374号住居址が中ごろであろうと推定されるが、切り合いも含めて両址の前後関係は特定できない。

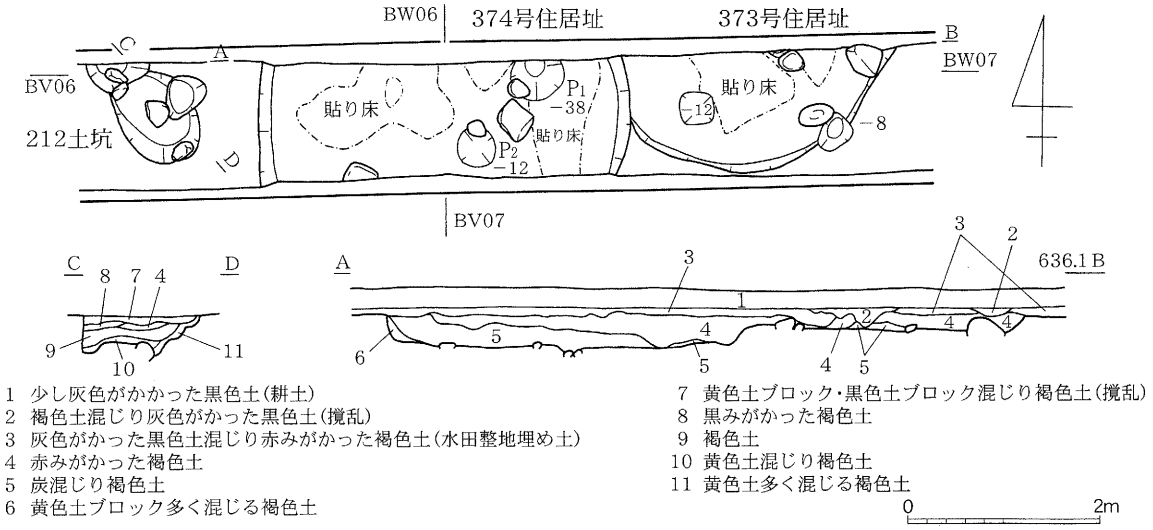


図45　373・374号住居址・212号土坑実測図

（２）212号土坑

374号住居址の西外、ＢＶ06グリッドに発見された。平面形は北西方向に長軸をおく100×80㎝の長円形で、検出面からの深さは30㎝ほどである。上層の土が大分動かされているが、埋土は上層に赤みがかった褐色土が、下層には褐色土が観察された。北西の用地外に、接するようにして土坑かピットが想定できる。

数点出土した土器片の中に神ノ木式があり、神ノ木期の遺構とした。石器は黒曜石の剥片１点、石核２点が出土している。

第２節　縄文時代中期の遺構と遺物

１　区画道路４号線

（１）　竪穴住居址

１）368号住居址

ＡＧ15グリッド北西で発見された。北側半分が用地外となる。東北東方向に延びる台地の縁辺に位置し遺構検出面から床面までは西側で20㎝、東側で15㎝ほどを測る。平面形はほぼ南北に軸線をおく一辺４ｍほどの方形が推定できる。埋土は炭とこぶし大礫が混じる黒みの強い黒褐色を呈し、床上に炭が多く混じる黒色土や焼土混じりの黒褐色土が観察された。床上に炭化材が残されており、消失家屋である可能性が高い。南と東の壁下に部分的に周溝があり、床面は中央に粗い貼り床がされていた。P_1とP_2は柱穴と判断されるが、その中からこぶし大から人頭大の礫が多数発見された。ほぼピットを埋めつくす量であり、住居廃絶時に柱穴を意図的に礫で埋めてある可能性が高い。

遺物量は少ない。土器では中期中葉Ⅵ（井戸尻Ⅲ）期末期のほぼ完形土器(写27)が出土しているほかは全て小破片である。石器は、打製石斧４点、粗大石匙２点、乳棒状石斧２点、部分磨製石斧２点、小型磨製石斧２点、叩石１点、粗大剥片５点、黒曜石の剥片・屑片15点、ピエス・エスキーユ２点が出土している。

所属時期は中期中葉末、井戸尻Ⅲ期としておく。

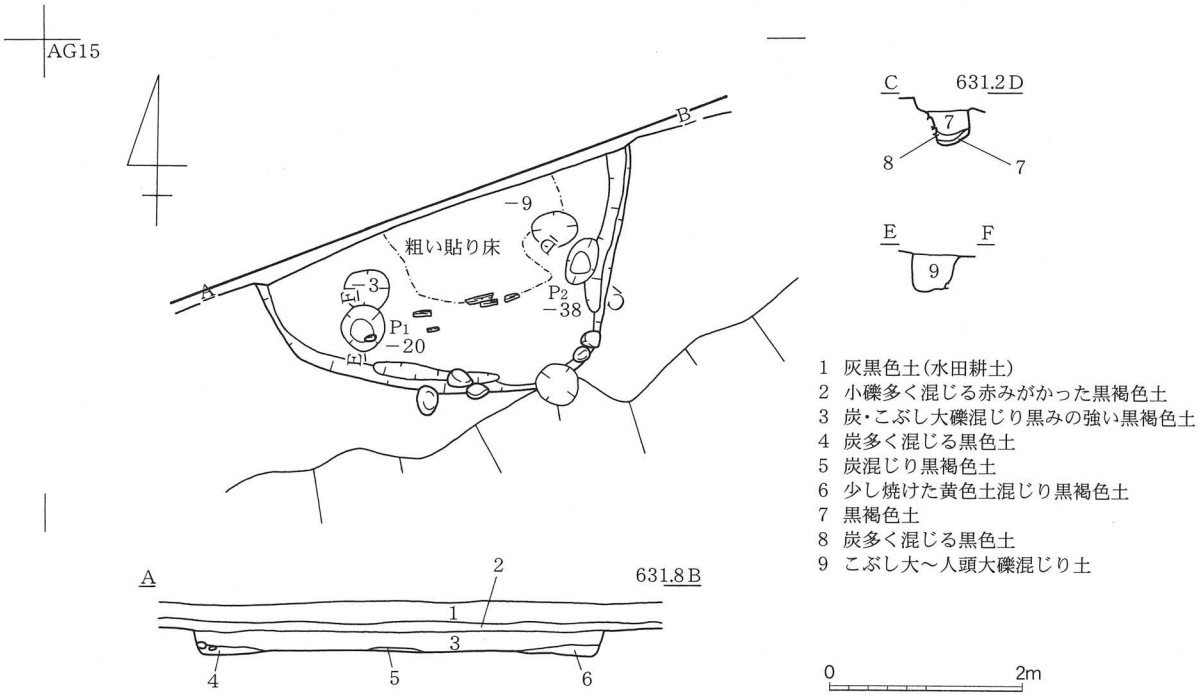
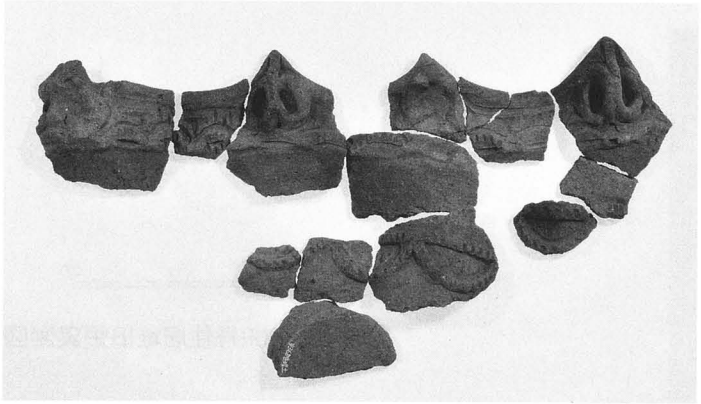


図46　368号住居址実測図



写27　368号住居址出土土器片

２）369号住居址

ＡＧ11グリッドに発見された。西側の一部が用地外となる。東側に一段高い部分があり、炉に掘り直した痕跡が見られたことから、少なくとも２回の建て替えがあったものと想定した。最も新しい住居址は、平面形は北西方向に軸線をおくほぼ円形で、規模は4.3×4.8mと推定され、埋土にはこぶし大から人頭大の礫を含む褐色から黄褐色の土がレンズ状に厚く観察された。北半の壁下を周溝がめぐり、壁際以外の床は貼り床されていた。南東の壁から30㎝ほど間をあけて蓋石を持つ埋甕が埋置されており、そこを入口部とすると、壁際に配されたP3、P6、P11を柱穴とすることができよう。炉は中央部が深く掘られていて、炉石が抜かれているが、掘炬燵状の石囲炉ではなかったかと思われる。埋甕のほかこの新址の埋土からは多くの遺物が発見された。横たわって発見されたNo.２のほかNo.７、No.12、No.14など、ほぼ完形の土器が床面近くの埋土中から出土している。

この住居址の炉の北西の貼り床下に古い炉の痕跡を発見した。最新の炉よりやや浅く、炉石も抜き取られているが、形状からやはり掘炬燵状石囲炉であったと判断される。この炉に伴う柱穴等は特定できなかった。埋甕はなかったものであろう。この１回の建て替えを経た住居址によって大部分を切られた最も古い住居址が東の一段高い面であると想定した。床は貼り床されておらず、柱穴は壁際に配されたP10とP13を想定した。この住居址を切っている方の住居址の貼り床を剥がせば柱穴を発見することができたかもしれないがそこまでのことはしてない。P14、P15も補助柱穴としていいかもしれない。

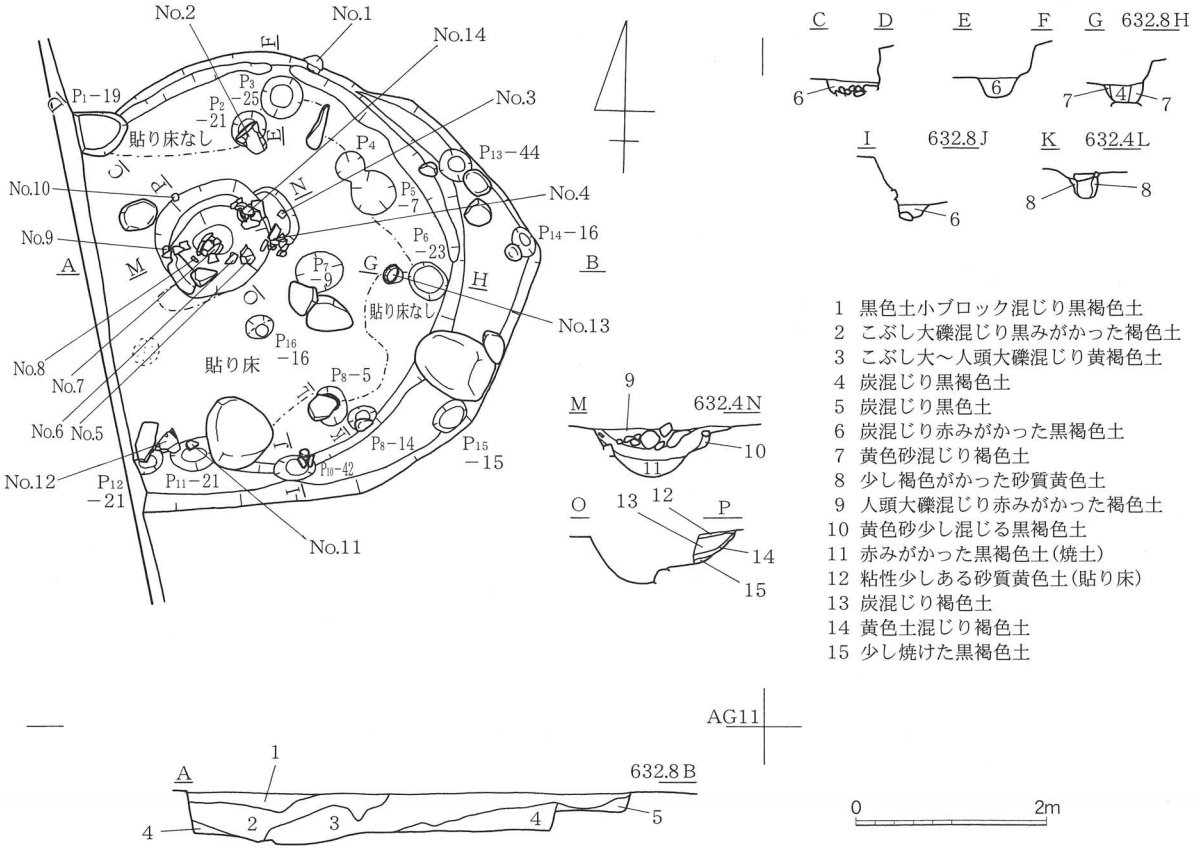


図47　369号住居址実測図

写28　369号住居址　炉

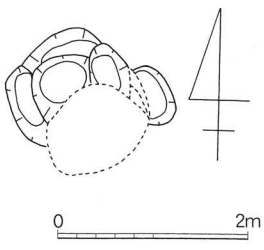


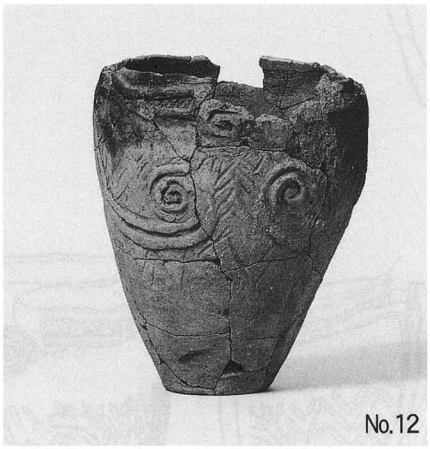
図48　369号住居址旧炉実測図

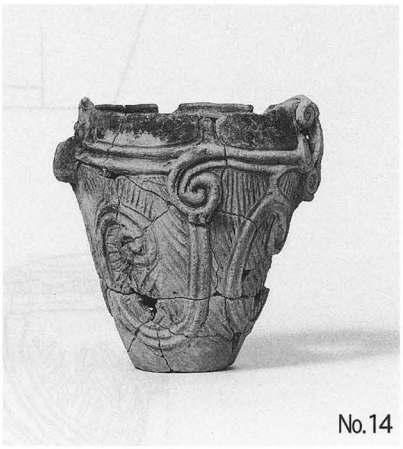
遺物のうち土器は多く、埋甕のほか、底部や口唇部を欠く完形の状態で３個体の土器が埋土中から発見された。№15の埋甕（写29-1、図49-1）は、内湾するであろう口縁部を欠き、縦方向の細い条線で器面を埋めたあと、胴部に３本単位の弧状の沈線を連続させる咲畑式。口縁部の施文は不明である。埋土から出土したのは、唐草文系の小型の深鉢、№12（２）、№14（３）と、加曽利Ｅ系の深鉢№２（４）、頸部がふくらむ曽利系の頸部№13（５）のほか、唐草文系の大破片（№１、№４、№５など）が多い。

石器は埋土から打製石斧６点、横刃型石器６点、乳棒状石斧１点、礫石錘１点、敲打器２点、黒曜石のスクレパー１点と、粗大剥片６点、緑色岩の棒状礫１点、黒曜石の剥片・屑片50点、石核６点、ピエス・エスキーユ２点が、旧炉の埋め土を含む旧址の埋土から打製石斧と粗形刃器各１点、黒曜石の剥片２点が出土している。埋甕の蓋石には石皿が使われていた。

最も新しい住居の所属時期は中期後葉Ⅱ（曽利Ⅱ）期である。

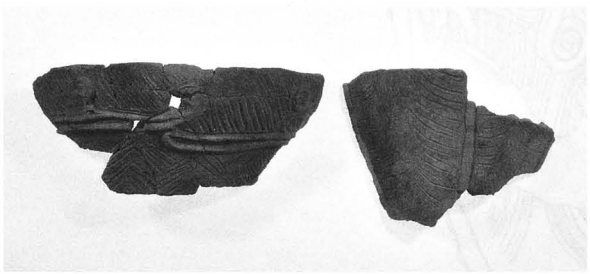
No.15　埋甕


No.12


No.14

No.2

No.13


埋土出土土器片

埋土出土土器片

写29　369号住居址出土遺物

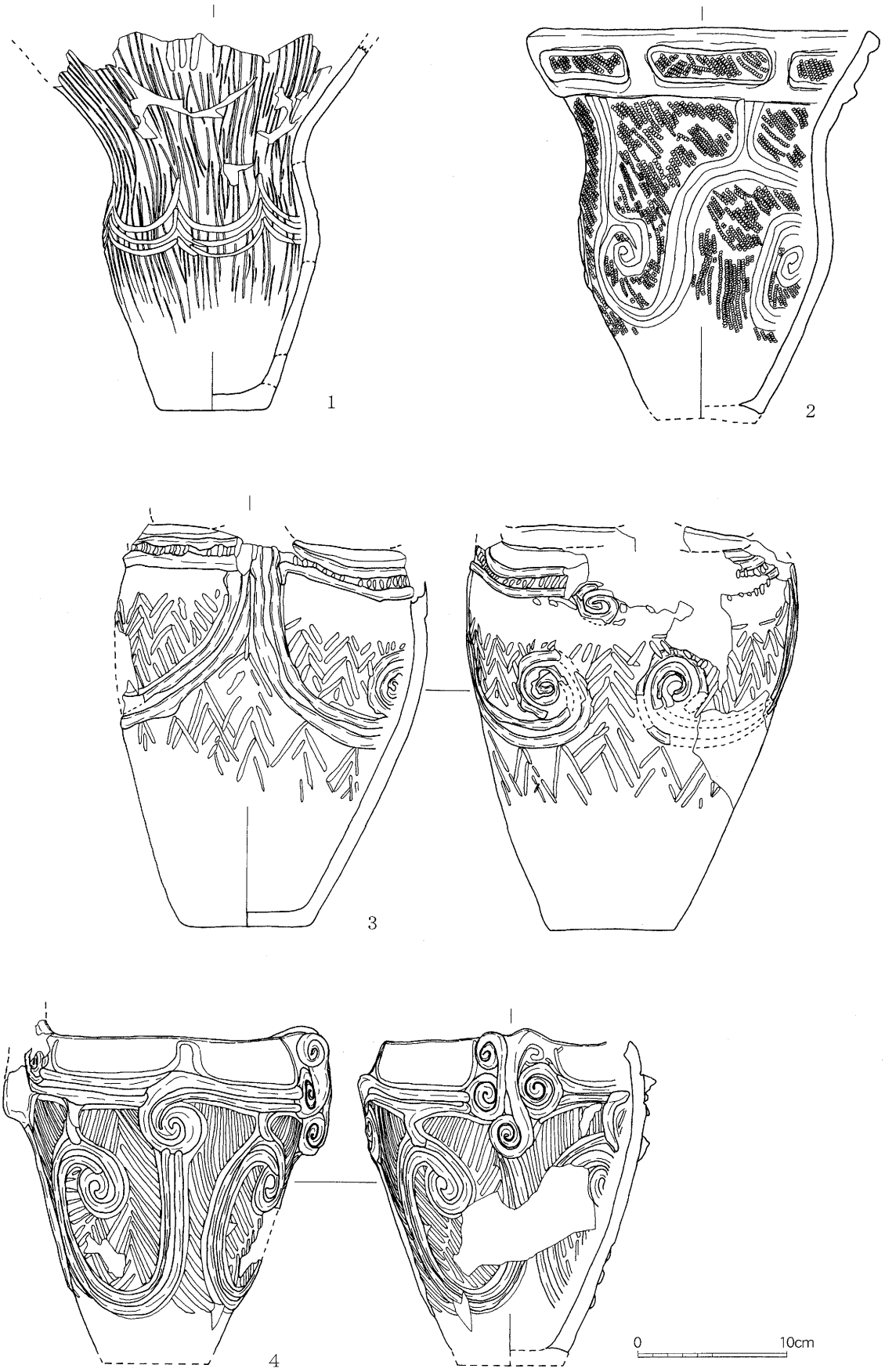
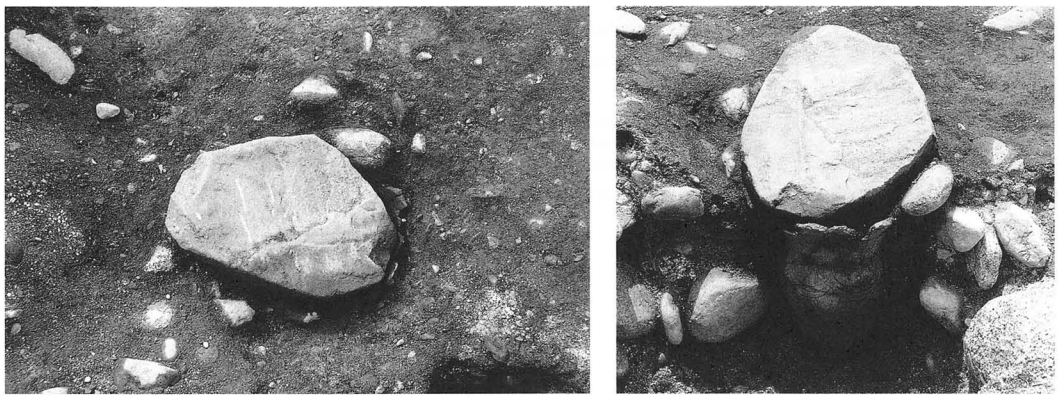


図49　369号住居址出土土器実測図（１埋甕　２No.2　３No.12　４No.14）



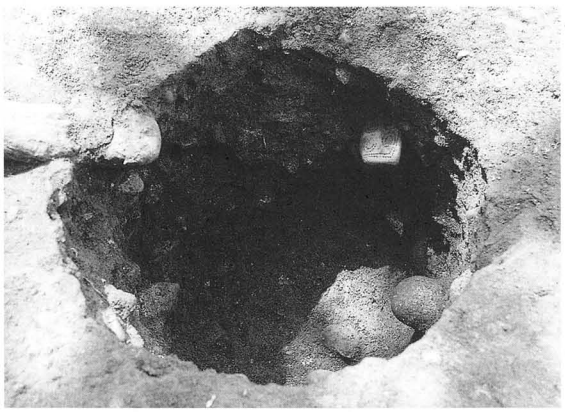
写30　369号住居址埋甕

３）370号住居址

ＡＦ11グリッドの北端から発見された。西側は用地外となるため調査してなく、台地南縁に位置しているため、住居南端は斜面の崩落によって欠けているが、平面形はほぼ南北に軸線をおく５×４ｍほどの長円形となるものと推定される。少し赤みがかった黒褐色土下の埋土は炭粒が混じる黒色で、下層は黄色みがかった黒褐色を呈する。周溝はなく、床は細かい粘土質土がごくわずかに散らばっている程度であった。柱穴もP2以外は検出できなかった。そのP2からは、粗大剥片１点と、住居の床面から３分の１の深さから、三角壕土製品が出土している。

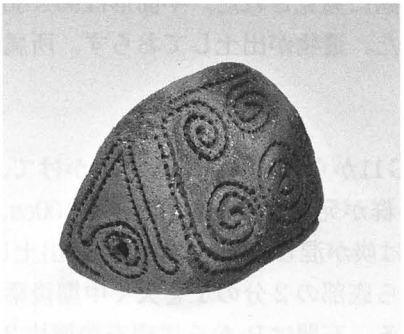
遺物は少ない。土器はいずれも破片で中期後葉Ⅰ期からⅡ期である。石器は打製石斧２点、横刃型石器１点、乳棒状石斧１点、優美で大型の石鏃１点と、粗大剥片７点、黒曜石の剥片・屑片26点、石核１点だけである。

P2から出土した三角壕土製品は底面が特定できる。その面を下に置くと、長さ8.0㎝、幅5.0㎝、高さ5.5㎝。断面三角形を呈し、底面から1.0～1.3㎝上の中央に直径３～４㎜の穴が貫通している。両側面は刺突を伴う沈線で縁取りした中を同様の沈線による２つずつ連結する４つの渦巻文で埋め、三角形を呈する穴が貫通する面も、刺突を伴う沈線で、一筆書き状に両側辺と穴を二重に縁取ってある。底面の、四隅と長辺の中央に摩滅とわずかな打剥痕が、側面の三角形の頂点に明瞭な打剥面が観察されており（図51）、この土製品の使用方法を知る上での手がかりとなろう。



写31　370号住居址三角壕土製品出土状況

埋土出土石鏃



P2出土三角壕土製品

写32　370号住居址出土遺物

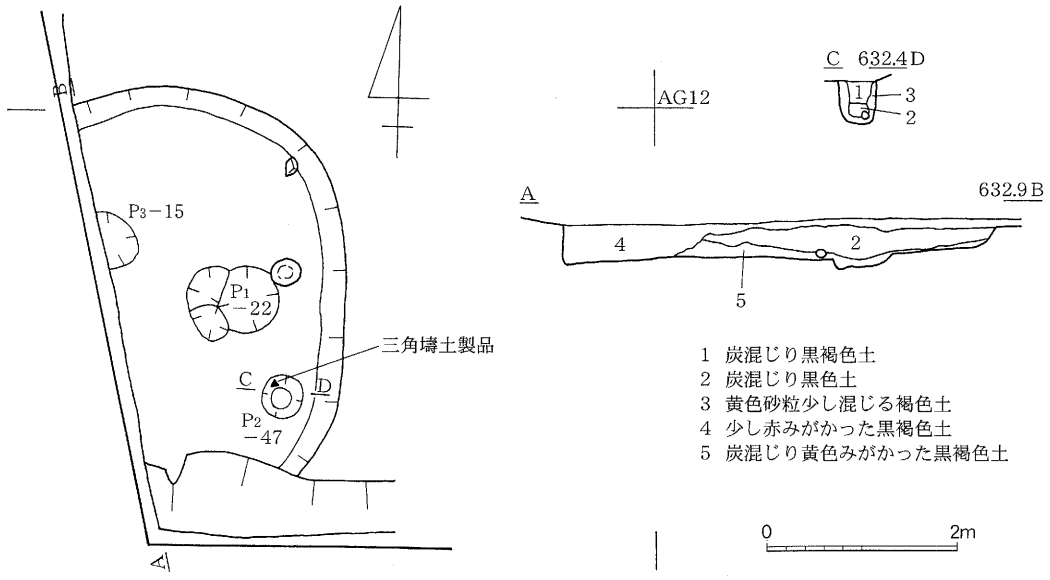


図50　370号住居址実測図

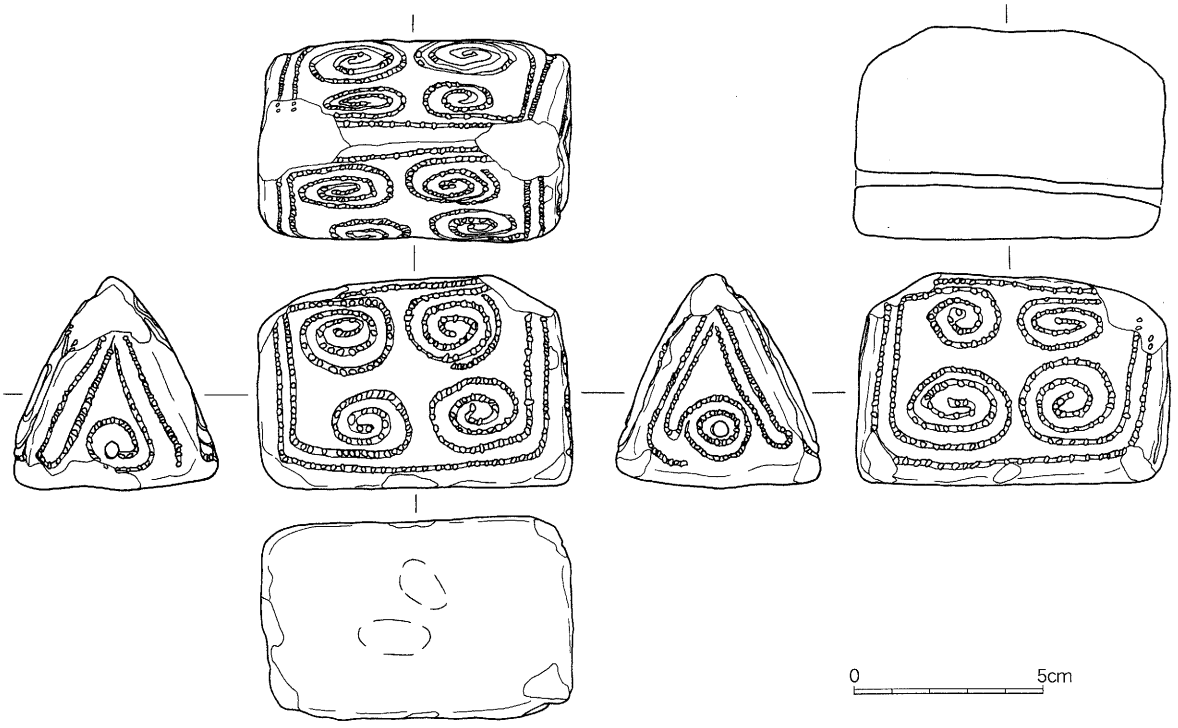


図51　370号住居址出土三角壕土製品実測図

（２）210号土坑

ＡＪ10グリッドの北東隅に発見された。平面形は90×80㎝の円形で検出面からの深さは18㎝を測るが、耕作等でかなり削平されていた。遺物が出土しておらず、所属時期は不明である。

（３）ピット群

369号住居址の北、ＡＧ11からＡＨ11グリッドにかけて、水田の整地によって包含層をかなり削平したところに６基からなるピット群が発見された。直径80～100㎝、深さは検出面から17～34㎝を測る。埋土は黒褐色または褐色を呈し、P_5には炭が混じっていた。遺物が出土し掘り方も深いP_1、P_2、P_5は直線上に並ぶ。

遺物は、P_5から胴部から底部の２分の１を欠く中期後葉Ⅰ期の深鉢が出土しているほか、P_1、P_2、P_6からも同期の土器が出土している。石器はP_1から黒曜石の屑片３点、P_2から黒曜石の屑片１点、P_5から横刃型石器２点が出土した。

いずれも中期後葉Ⅰ期のピットであり、床面下まで削平されてしまった住居址である可能性もあろう。

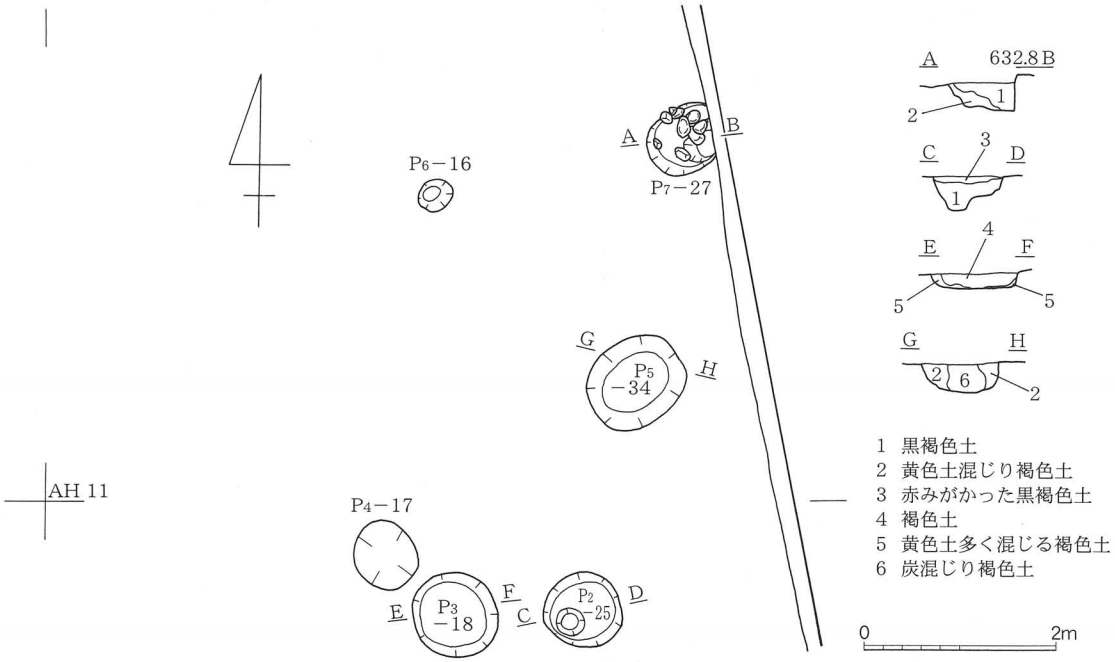


図52　369号住居址北ピット群実測図

2　区画道路５号線

（１）371号住居址

ＡＮ14グリッドの南端で発見された。厚い遺物包含層の下にあり、検出面までの深さが非常に深かったこともあり、南と北西の一部が調査し切れてない。規模は小さく、平面形は北北西方向に長軸をおく3.5×3.0mほどのほぼ円形と判断される。埋土は炭混じりの黒褐色で上層が黒みが強く、中央下層にこぶし大の礫を含む褐色土がレンズ状に観察された。検出面から床面まで30㎝を測る。床は壁際の20～40㎝を除いて貼り床されており、中央に近くなるほど堅い。炉は５個の丸い平石を平に組んだ小型の円形石囲炉である。柱穴は方形に配されたP1～P4の４本で、P2が33㎝とやや浅いほかは50㎝以上といずれも深い。炉の南の床直上から№１の土器がつぶれて発見された(写33)。

遺物はさほど多くない。№１の土器(写34)は胴部に櫛形文をめぐらす東海系の底部を欠く２分の１個体、それ以外は中期中葉の土器片である。石器は打製石斧５点、横刃型石器３点、乳棒状石斧１点、敲打調整のある小型の打製石斧１点、礫石錘１点と、粗大剥片５点、黒曜石の剥片・屑片３点、石核２点、原石２点が出土している。

所属時期は中期中葉Ⅵ(井戸尻Ⅲ)期あたりが適当であろう。

写33　371号住居址炉と遺物

写34　371号住居址埋土出土土器No.1

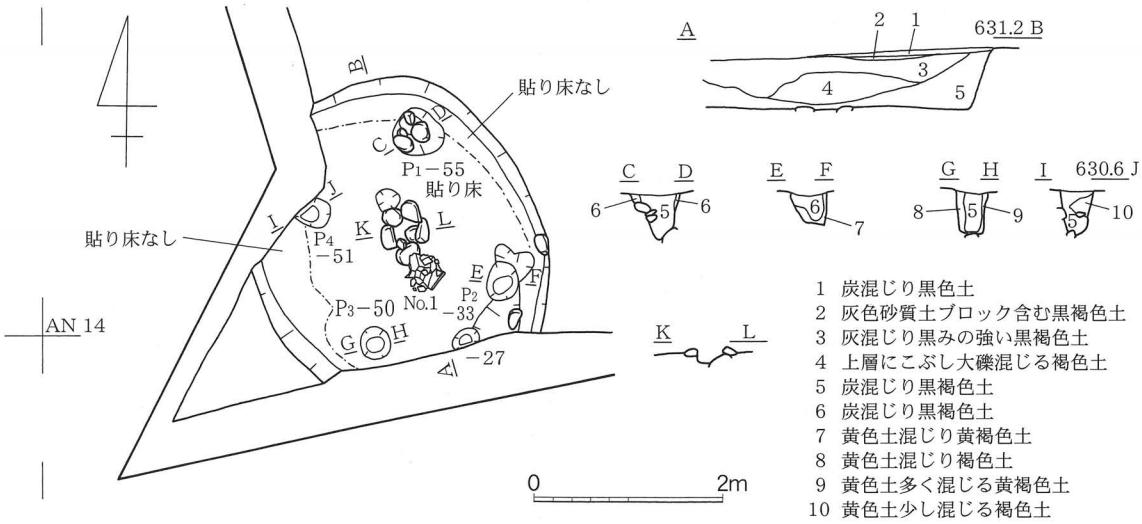


図53　371号住居址実測図

写35　371号住居址
埋土出土土器片

3　区画道路６号線

（１）372号住居址

ＡＲ20グリッドに発見されたが、大部分が用地外となるため南の一部を調査したにとどまる。台地の南縁に位置し、東に接して211号土坑がある。規模や平面形は確定できない。調査した範囲では床面に貼り床は観察されなかった。用地ぎりぎりの南西壁下に蓋石を持つ埋甕が発見された(写36)。

埋甕として使われていた土器(図55、写37)は底部を欠く咲畑式の深鉢で、土器は口縁部の内湾する部分を欠き取った上で埋設されていた。縄文を地文とし、胴部と口縁部に６条ほどの弧状の沈線をめぐらす。それ以外の遺物は少ないが、埋土上層から中期後葉Ⅱ期唐草文系の大破片（№１）が出土している。

所属時期は中期後葉Ⅱ（曽利Ⅱ）期である。

211号土坑は直径1.0m前後の不整円形を呈すると思われる擂鉢形で、検出面からの深さは49㎝を測る。遺構に伴う遺物は確認できなかったことから、所属時期も特定できない。

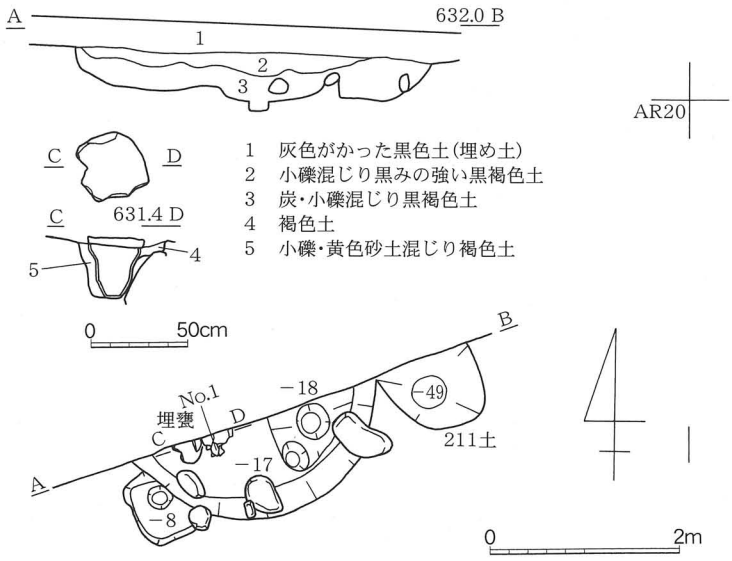


図54　372号住居址実測図

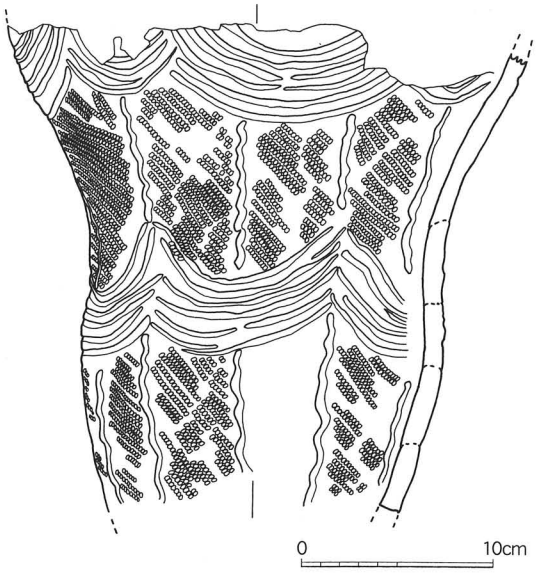
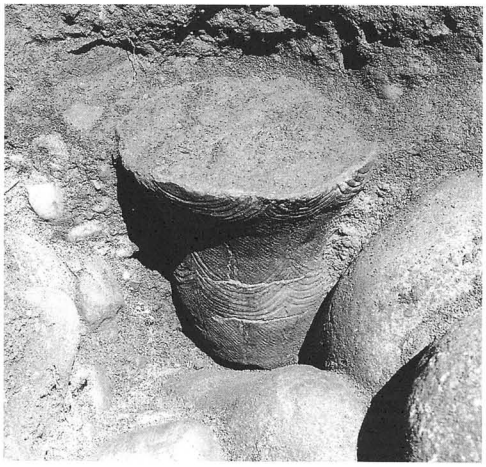


図55　372号住居址埋甕実測図



写36　372号住居址埋甕出土状況

写37　372号住居址埋甕

4　区画道路８号線

（１）363号住居址

ＡＲ23グリッドの西側で発見された。南にある縄文後期の石積遺構の北側で縄文中期の遺物包含層が確認され、それを掘り下げたところ地表下140㎝ほどのところで竪穴住居址を発見した。土層観察によれば、遺構が掘り込まれていた特徴的な赤みをおびた褐色土の上に、縄文後期の石積遺構を含む黒褐色土が厚く堆積している。狭小な調査範囲であり正確なプランを把握できなかったが、直径３ｍほどの規模の小さい円に近い平面形が推

定できる。段丘下の南へ傾斜した場所に築かれた住居址であり、床面もまた南へ向かって傾斜し、南側では貼り床が観察されなかった。柱穴は特定できず、炉は発見できていない。

遺物は少なく、土器は数点で、半截竹管の内側を使った平行沈線文が見られる。石器は乳棒状石斧１点、叩石１点と、粗大剥片１点、黒曜石の剥片・屑片３点のみである。

所属時期は中期初頭Ⅰ（九兵衛尾根Ⅰ）期であろう。

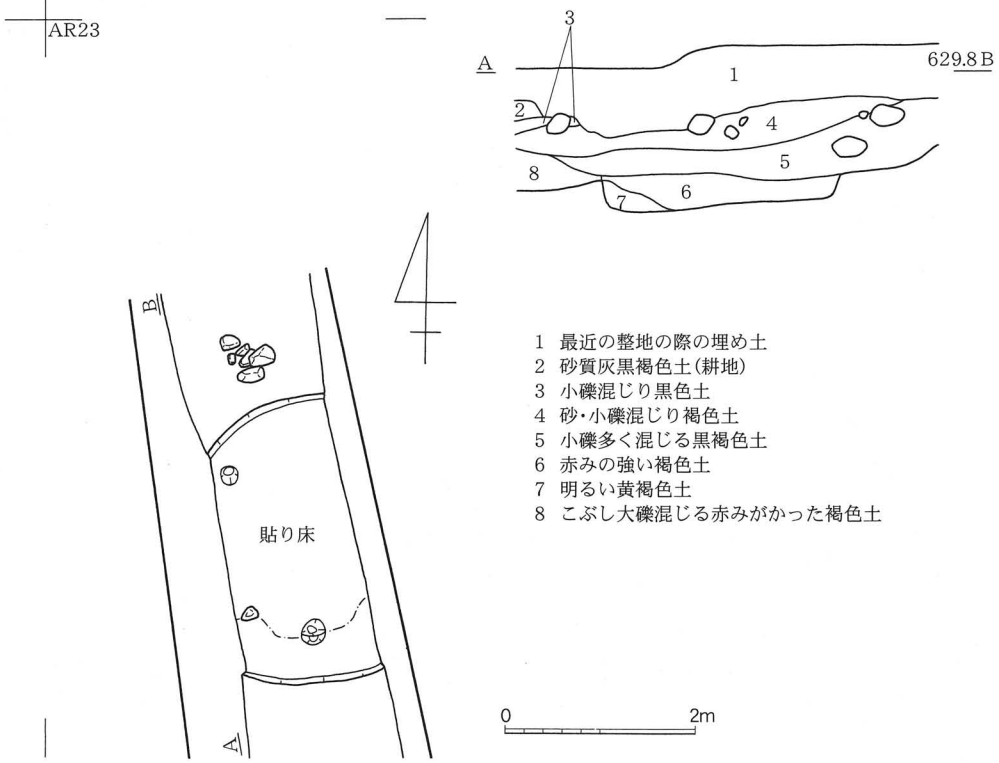


図56　363号住居址実測図

5　区画道路11号線

（１）竪穴住居址

１）375号住居址

ＢＣ17とＢＣ18グリッドにかけての南端で発見された。南側の３分の２ほどが用地外となるほか、東側は後世の工事によって破壊されていた。検出面から床面まで浅く、床面を追うことによってかろうじて平面形を把握したが、西側は明確にすることができなかった。規模や平面形も特定できず、柱穴もP2以外は明らかでない。P6は袋状となる。

P2の南西から、床に接して№１の土器がつぶれた状態で発見された。

遺物は少ない。№１は焼成のよくない平出Ⅲ Ａ式（写38）。これ以外は小破片で、中期中葉から後葉初めの土器が混在しているが、ピットから一定量の土器が出土しており、それらはいずれも中期中葉に限られる。

石器もごく少なく、埋土からは打製石斧１点と黒曜石の剥片と石核各１点のみで、P6から叩石１点、P1から粗大剥片１点が出土している。

所属時期は、P3出土の土器片等から中期中葉でも古い時期と考えられる。

写38　375号住居址埋土出土土器№1

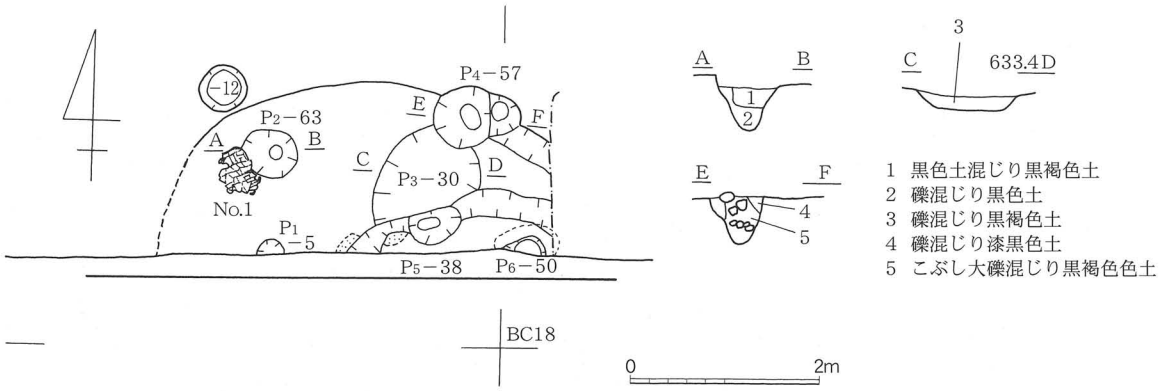


図57　375号住居址実測図

２）376・377号住居址

376号住居址

ＢＣ19グリッド南西隅で発見されたが、大部分が用地外となるため、北側の一部を調査したのみである。平面形が不整形となることから切り合いも考えられる。検出面から床面まで40～60㎝と深く、埋土には黄色土ブロックが混じる黒褐色土の上に、こぶし大から人頭大礫が混じる黒色土、黒褐色土が、中央に厚くレンズ状に観察された。壁直下を周溝がめぐり、床は一部に貼り床が見られた。床面から柱穴としていいピットが発見されたが、確定はできなかった。P4の北から土器№１が出土している。

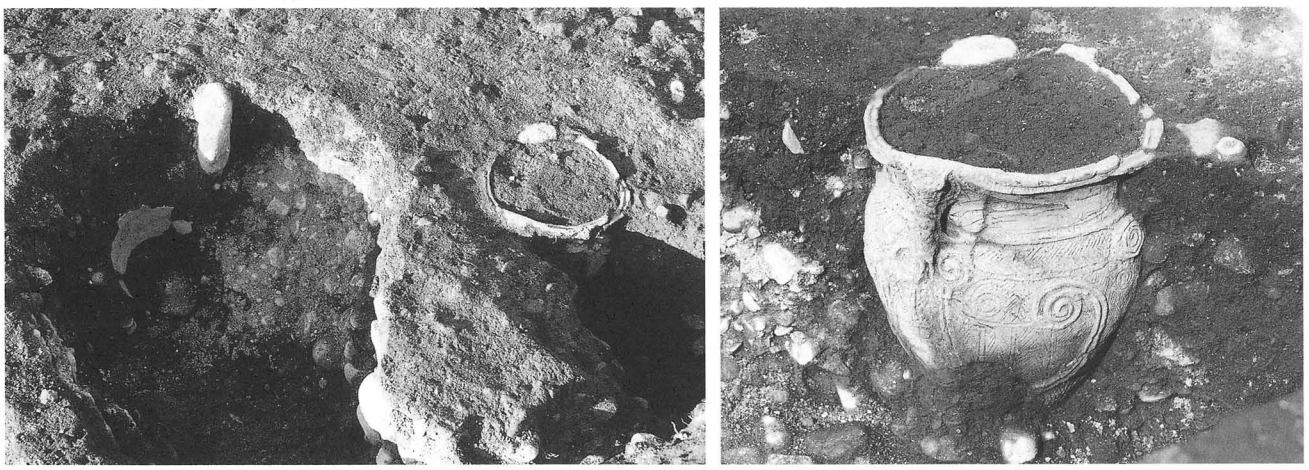
写39　376号住居址土器No.1出土状態

遺物は多い。土器は、中葉Ⅴ期からのものが少量混在しているが、主体は後葉Ⅰ期で、№１も、口縁部を隆帯貼付、胴部を縦位の沈線で埋める後葉Ⅰ期である。

石器は、打製石斧13点、横刃型石器５点、粗大石匙１点、乳棒状石斧片１点、叩石３点、礫石錘１点と、粗大剥片26点、黒曜石の剥片・屑片25点、石核１点、ピエス・エスキーユ１点が出土している。

上層から寛永通宝１枚が出土している。

所属時期は中期後葉Ⅰ（曽利Ⅰ）期である。



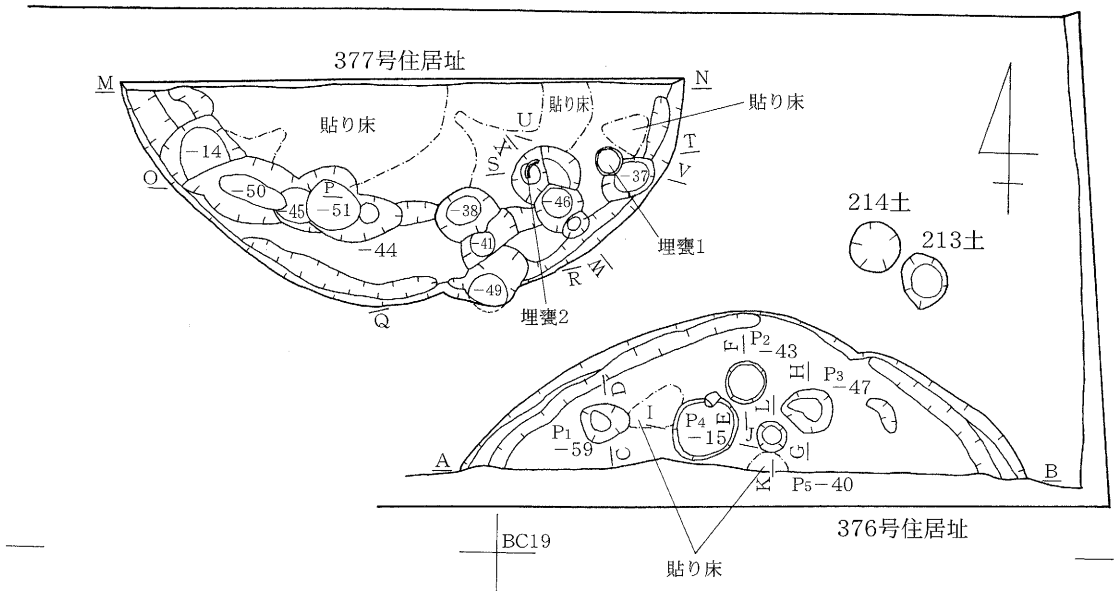
左 埋甕２、右 埋甕１　　埋甕１

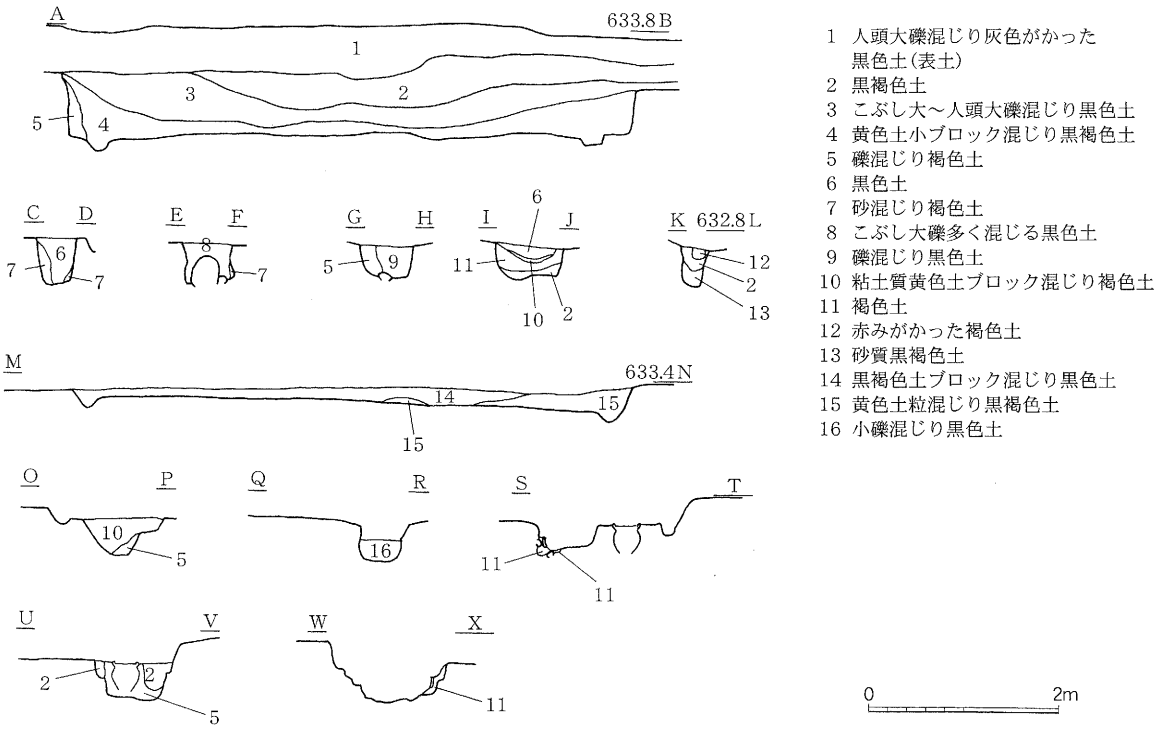
写40　377号住居址埋甕出土状況

377号住居址

376号住居址の北西にＢＣ18とＢＣ19グリッドにまたがって発見された。北半は用地外となる。規模が直径５ｍを越えて大きく、平面形は北西に軸線をおく円形を想定した。埋甕が２点ある(写40左)ことから１回は建て替えが考えられる。検出面からの深さは10㎝ほどと浅く、床には黄色の粘土粒が少し混じる程度の貼り床が観察された。床には多くのピットが穿たれていたが、セット関係は特定できなかった。２点のうち胴下半部の一部だけが残された埋甕２の方が、旧址に伴うものなのであろう。

土器のうち埋甕１は、頸部がくびれ、横位に区画された肩部を横方向の、胴部を縦方向のそれぞれ綾杉状の沈線で埋める、底部を欠く土器(図59上、写41左)と、おなじく綾杉状の沈線を地文とする土器の底部のみ(図59下、写41右上)が組み合わせて埋置されていた。前者は胴下半部のゆがみが著しく、いずれも曽利Ⅱ式である。埋甕２は、細い条線の地文の上に沈線で渦巻き文を施文する下伊那系の深鉢胴部片(写41右下)である。このほか埋土からは中期後葉Ⅰ(曽利Ⅰ)～Ⅱ(曽利Ⅱ)期の土器片が出土している。





1　人頭大礫混じり灰色がかった黒色土(表土)
2　黒褐色土
3　こぶし大～人頭大礫混じり黒色土
4　黄色土小ブロック混じり黒褐色土
5　礫混じり褐色土
6　黒色土
7　砂混じり褐色土
8　こぶし大礫多く混じる黒色土
9　礫混じり黒色土
10　粘土質黄色土ブロック混じり褐色土
11　褐色土
12　赤みがかった褐色土
13　砂質黒褐色土
14　黒褐色土ブロック混じり黒色土
15　黄色土粒混じり黒褐色土
16　小礫混じり黒色土

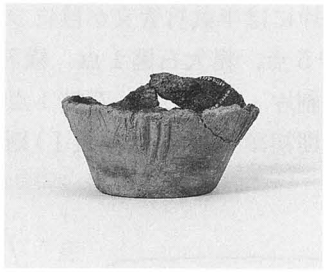
0　2m

図58　376･377号住居址実測図

石器は埋土から打製石斧３点、横刃型石器２点、乳棒状石斧１点、鑿状の小型磨製石斧１点、礫石錘２点と、粗大剥片３点、黒曜石の剥片・屑片17点が出土したほか、P2から打製石斧と定角式磨製石斧、横刃型石器各１点、P4から打製石斧、黒曜石の剥片、原石が各１点、P5から黒曜石の石核１点、P7から横刃型石器１点、P8から横刃型石器１点がそれぞれ出土した。

埋土から元豊通宝２枚、熙寧元宝、紹聖元宝各１枚、計４枚の宋銭が錆びて密着した状態で出土した。376号住居址上層から発見された寛永通宝と同様、住居址の東方にあった墓地に関連するものであろう。元豊は1078～1085年、熙寧は1068～1077年、紹聖は1094～1098年のいずれも北宋の元号となる。

所属時期は中期後葉Ⅱ（曽利Ⅱ）期である。



左 埋甕１、右上 埋甕１、右下 埋甕２

写41　377号住居址出土埋甕

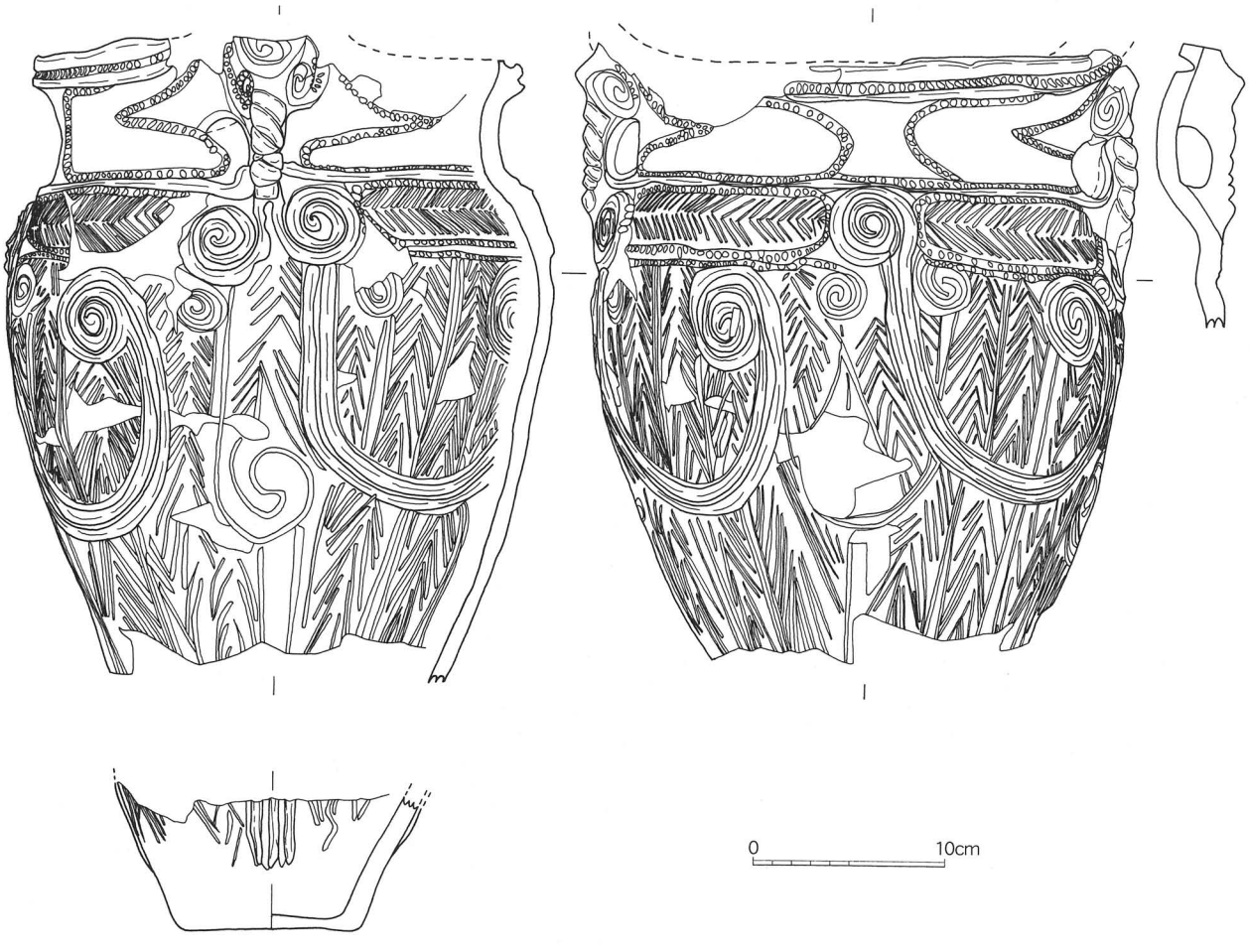


図59　377号住居址出土埋甕１実測図

３）378号住居址

ＢＣ14グリッドから発見された。北半分が用地外となるため調査してない。平面形は明確にできなかったが径４～５ｍ程度の規模が想定される。掘り方が非常に深く、検出面から床まで1.0ｍを測る。埋土は、黒色土の上に、直径30～40㎝と非常に大きな石を多く含む少し赤みがかった黒褐色土が、中央に厚くレンズ状に観察された。床は貼り床のない砂質土で、柱穴も住居内には検出されなかった。ほぼ中央に発見された炉は土器を埋設したもので、土器内には下層に漆黒色土が見られた。

遺物は多い。土器は、埋土中に発見されたほぼ完形の１個体と炉に使用された土器以外は全て破片である。炉の土器(写43左､図61-1)は縄文を地文とし、半截竹管による平行沈線と、口唇と隆帯に太い半截竹管による蛇腹状の押し引きが見られる。埋土上層から出土したNo.１(写43右､図61-2)は、口縁を三角状の沈線で埋め、胴部は無文で上から下へ強いナデ痕を残す。土器片には半截竹管文が目につく。

石器も豊富で、打製石斧15点、乳棒状石斧５点、粗大石匙１点、横刃型石器９点、叩石２点、礫石錘５点、棒状垂飾１点と、粗大剥片24点、黒曜石類の剥片・屑片７点、石核１点が出土している。

炉に使用されていた土器に従えば、縄文中期初頭Ⅰ(九兵衛尾根Ⅰ)期の住居址ということになる。

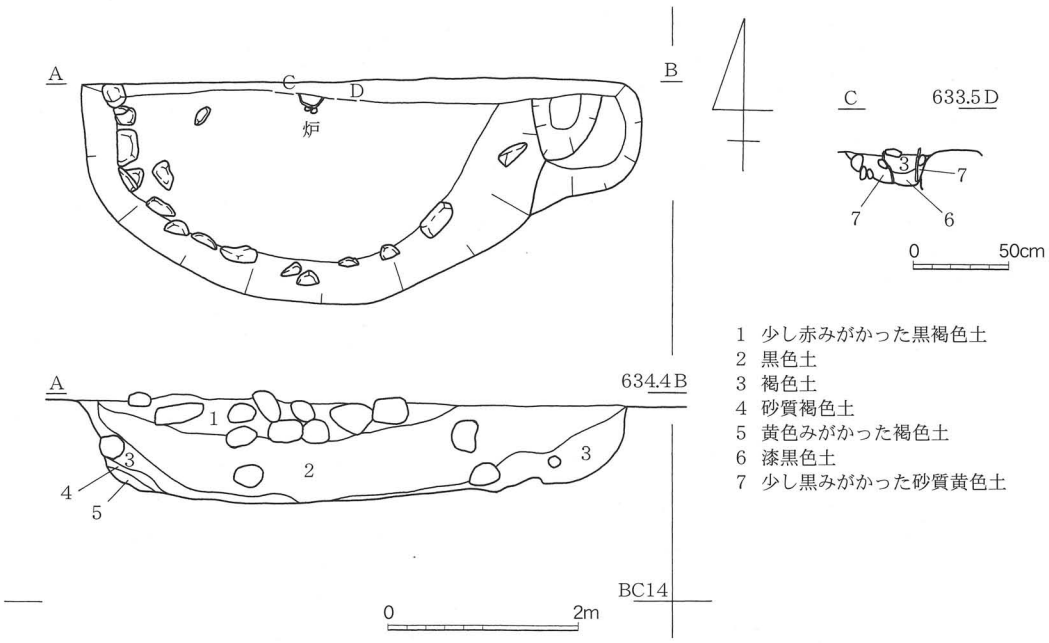
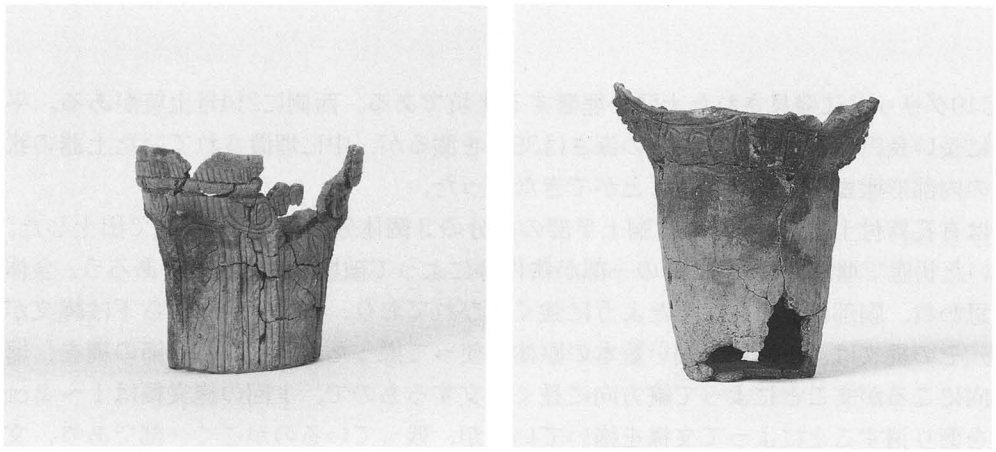


図60　378号住居址実測図

炉

土器No.1

写42　378号住居址土器出土状況



左炉、右No.1

写43　378号住居址出土土器

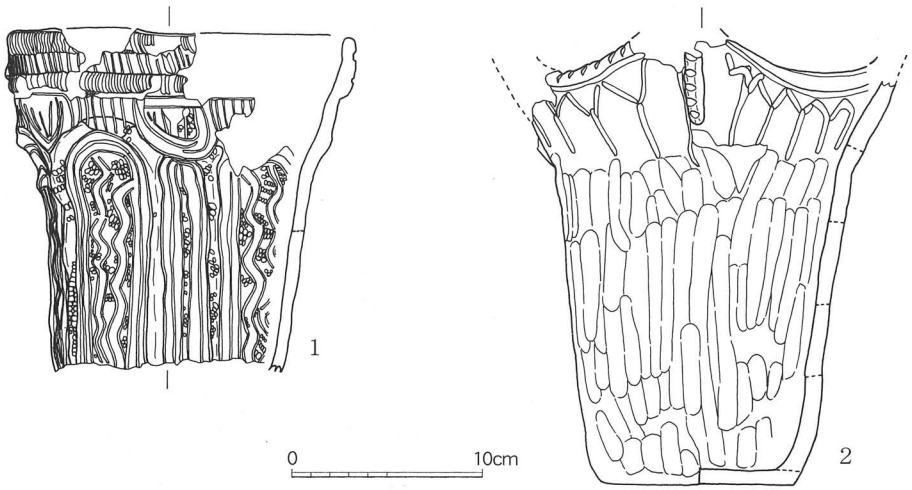
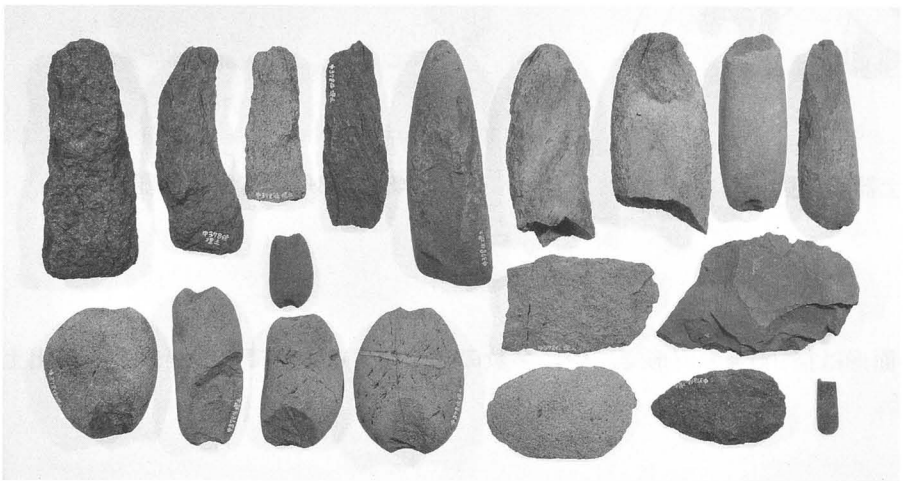


図61　378号住居址出土土器実測図（１炉　２No.1）



打製石斧、乳棒状石斧、礫石錘
横刃型石器、棒状垂飾

写44　378号住居址出土石器

（２）土坑

１）213号土坑

376号住居址の北東、ＢＣ19グリッドに発見された土器を埋置する土坑である。西側に214号土坑がある。平面形は、120×100㎝の南北に長い長円形で、検出面からの深さは35㎝を測るが、中に埋置されていた土器の状態を記録したものの、土坑の内部形態までは調査することができなかった。

土坑に埋置されていたのは有孔鍔付土器で、口縁から胴上半部の４分の３個体分が、逆位の状態で出土した。当初から胴下半部以下を欠いた状態で埋置され、後にその一部が耕作等によって破壊されたものであろう。全体形は口の広い瓢形となると思われ、胴部はタガをはめたように強くくびれており、鍔の下５㎝から下は縄文が地文として施文されている。その縄文は、１段目に細い数本の原体を使って撚ったと思われる単節の縄を、器壁に左下がりに置き、右方向にころがすことによって縦方向に長く施文するもので、１回の施文幅は１～２㎝程度である。２段目は縄文を磨り消すことによって文様を描いているが、残っているのがごく一部であり、文様パターンは特定できない。

鍔の下の無文帯は、その下端の厚さが、縄文施文部よりも明らかに薄くなっており、縄文を施文したあとに、強く磨り消すことによって作られていることがわかる。

原体を斜めに置いて施文される縦走する縄文は、中期中葉Ⅳ～Ⅴ期に特徴的に見られる手法であり、所属時期もその中に求められよう。

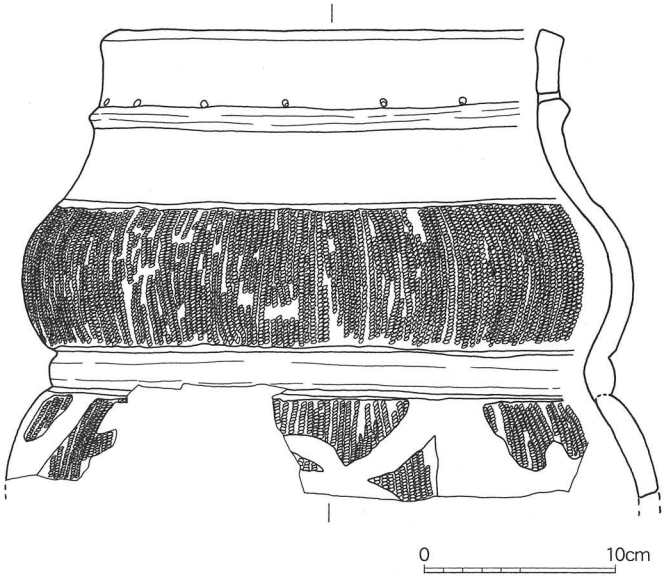


図62　213号土坑埋置土器実測図

写45　213号土坑出土土器

２）214号土坑

213号土坑の東に発見された。平面形は径100㎝の円形で、中に多数の礫が埋まる土坑であるが、土器が出土しておらず、所属時期は不明である。

６　駅仲町線

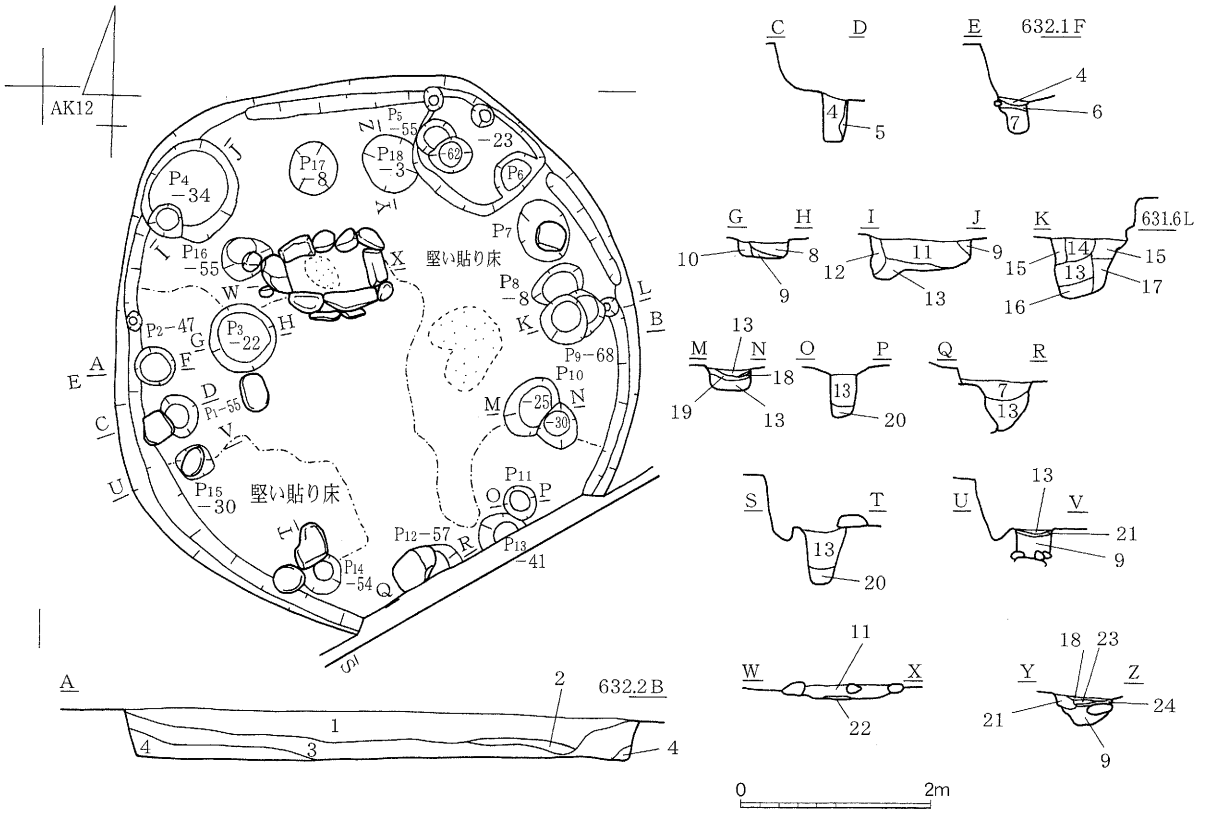
（１）竪穴住居址

１）325号住居址

ＡＫ12グリッドの北西隅で発見された。南東の隅わずかが用地外となる。直径6.0m弱と規模が大きく、平面形は五角形としていいであろう。北東方向にゆるく傾斜する遺構検出面から床面まで、50㎝ほどを測る。全体に炭粒を含む埋土は、黄色みをおびた黒褐色土の上に、上層ほど黒みが強い黒褐色土がレンズ状に観察された。壁直下を周溝がほぼ全周し、壁近くには多くのピットがある。それらのうち五角形の平面形の各頂点に配されたP1、P5、P9、P12、P16の５本を主柱穴と考えたが、深さ40㎝を超えるP2、P11、P13、P14などの柱穴としていいピットがあることと、浅い窪み状を呈するP10、P18が、埋まったピットの上面に貼り床したものであることから、建て替えを経た住居址であると判断した。床は全体に貼り床されており、北から東にかけてと南西側は特に堅く、中央北寄りに築かれた炉は、細長い平石を長方形に組んだ石囲炉である。炉床の中央が焼けていたほか、中央東寄りの床面にも焼けている箇所があった。調査中にまとまって出土した遺物はない。

P3、P5、P10、P12、P14、P15からそれぞれ数点の土器片が出土している。

遺物のうち土器は多い。写46の加曽利Ｅ系の胴部以外はいずれも小破片で、井戸尻Ⅲ式が混在しているが、主体をなすのは曽利Ⅰ期の深鉢片である。中に小型の有孔鍔付土器やミニチュア土器があり注意される。



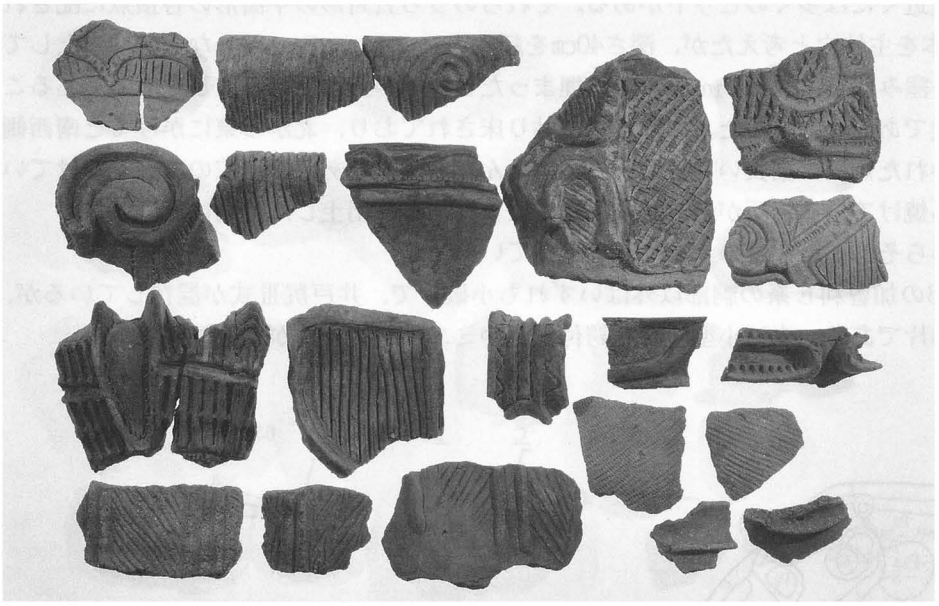
1 炭・焼土混じり黒みの強い黒褐色土
2 炭多く混じる黒褐色土
3 炭混じり黄色みをおびた黒褐色土
4 炭混じり黒褐色土
5 黄色砂混じり黒褐色土
6 粘土質黄色ブロック混じり褐色土
7 黒褐色土
8 炭多く混じる黒みの強い黒褐色土
9 黄褐色土
10 明るい粘土質黄褐色土
11 焼土・炭混じり褐色土
12 炭混じり黒みがかった褐色土
13 褐色土
14 黒みの強い黒褐色土
15 黄色ブロック混じり褐色土
16 黒みがかった褐色土
17 黄色土ブロック少し混じる黒みがかった褐色土
18 粘土質黄色土(貼り床)
19 粘土質黄色土多く混じる褐色土
20 砂質黄色土混じり褐色土
21 黄色土混じり褐色土
22 焼けた褐色土
23 粘土質黄色土
24 黄色土少し混じる黒褐色土

図63　325号住居址実測図

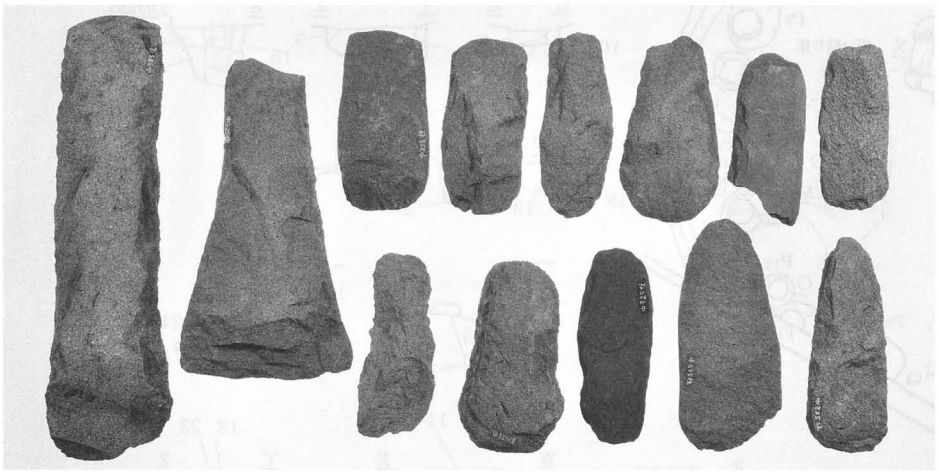
石器は多く、石鏃２点、スクレパー１点、打製石斧25点、横刃型石器35点、粗大石匙２点、乳棒状石斧４点、部分磨製石斧１点、棒状礫の先端に打剥が観察される叩石３点、不整球形の礫の角に敲打痕が観察される敲打器３点、礫石錘５点のほか、黒曜石類の剥片・屑片50点、石核２点、ピエス・エスキーユ２点、粗大剥片49点、硬砂岩の棒状礫３点が出土した。硬砂岩類を素材とする横刃型石器や粗大剥片など、大型の刃器が多い。

所属時期は中期後葉Ⅰ（曽利Ⅰ）期である。

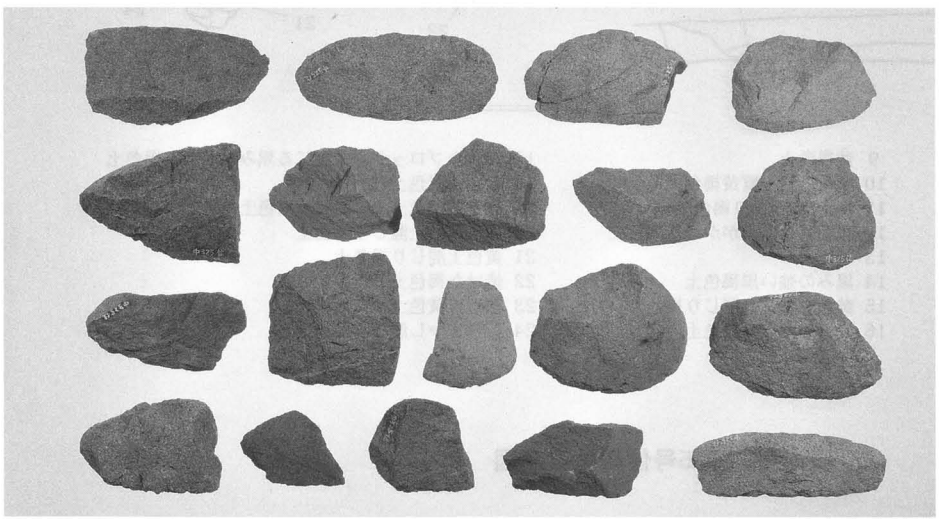
写46　325号住居址出土土器



土器片



打製石斧



横刃型石器

写47　325号住居址出土遺物

２）326号住居址

ＡＫ10グリッドの南西に発見された。平面形は不整円形を呈し、直径4.8mを測る。遺構検出面から床面までは30㎝程度とやや浅い。周溝が壁直下をめぐり、床は全面が貼り床となっているが、周溝のない南側の壁ぎわと、南西の下から顔を出す石の周囲は部分的に貼り床がない。炉は西寄りに築かれた北西方向に長軸をおく長円形に平石を配した石囲炉で、炉内の中央が焼けていたほか、その東側、ちょうど住居の中央部の床も焼けていた。柱穴はやや浅いが六角形に配されたP1、P5、P6、P7、P8、P9の６本が考えられる。北壁際に加曽利Ｅ系の口縁部が発見されたほか、炉の東からも大きな土器片が出土している。

遺物のうち土器は多量ではないが、中に加曽利Ｅ系土器が比較的多い。北壁際に発見された加曽利Ｅ系の口縁部№１（写49-1）は、本来あるべき地文の縄文が施文されておらず、隆帯も粘土紐貼付後の整形を省くなど造りの粗い土器。№２（２）は縄文地文で、簡略化した大きな波状把手が付く。ほかに埋土から縄文地文で肥厚した口縁の直下に波状の隆帯を貼付する加曽利Ｅ系（３）や、口縁が直線状に開き、頸部が膨らむ沈線を地文とする曽利Ⅰ式（４）が出土している。石器は少なく、打製石斧４点、横刃型石器６点、粗大石匙１点、乳棒状石斧１点のほか、黒曜石の剥片とピエス・エスキーユ各１点、粗大剥片７点が出土している。

所属時期は中期後葉Ⅰ（曽利Ⅰ）期である。

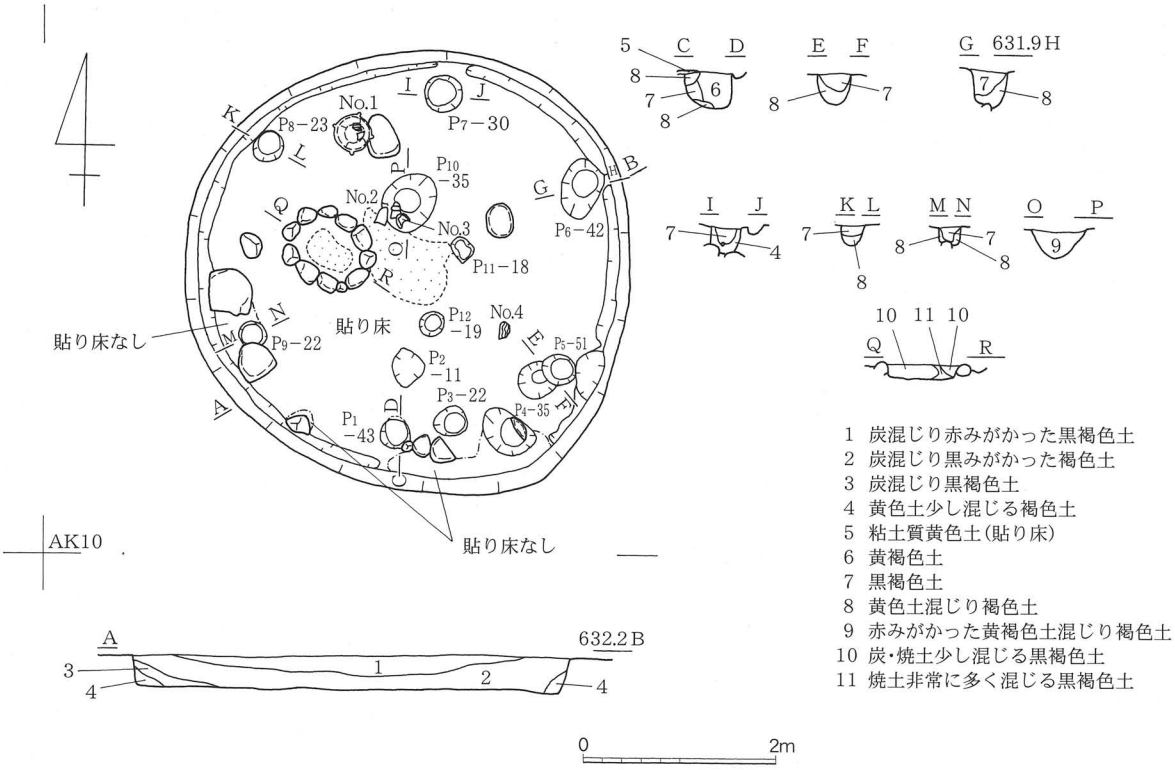
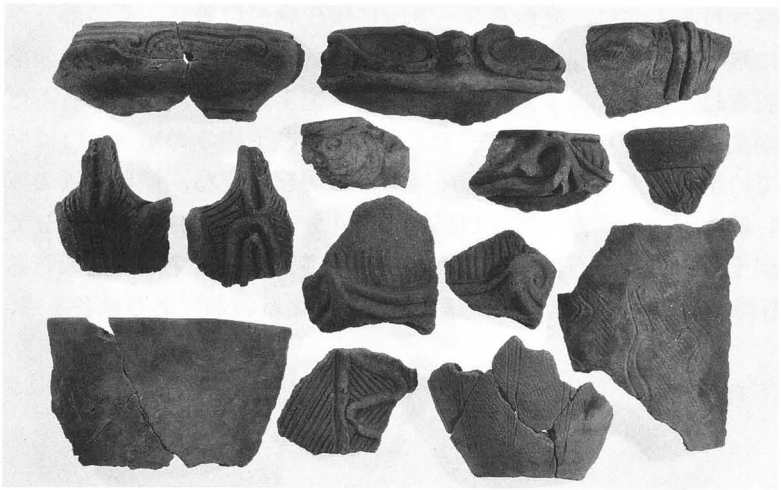
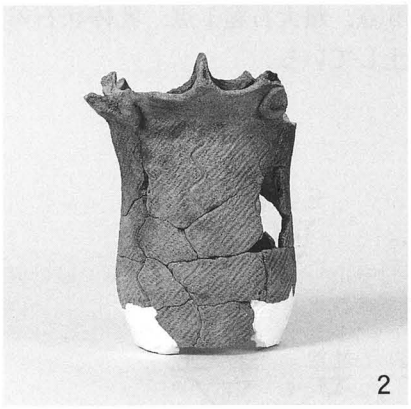


図64　326号住居址実測図



写48　326号住居址出土土器片

1 No.1、2 No.2
3・4 埋土出土



写49　326号住居址出土土器

３）327号住居址

ＡＫ09グリッドの南東から発見された。南東方向にゆるく傾斜する検出面から床面まで60～40㎝とやや深い。埋土は炭が混じり、褐色で上層がより黒みが強いが、最上層に、中央に厚くレンズ状に赤みがかった黒褐色土が観察された。住居址の土層観察の際194号土坑の埋土の土色を記録してない。北西の壁を切るようにして３基の土坑(194～196号)と、南東外にやや袋状となる197号土坑がある。住居址は小形で、平面形は１辺4.0mの円に近い隅丸方形を呈し、周溝はなく、傾斜をもって立ち上がる壁ぎわ以外の床は貼り床されていて、南東の壁際には大きな石が顔を出している。柱穴は方形に配されたP1、P3、P5、P8の４本で、中央の炉は円形に平石を配する石囲炉である。炉の西の床上から完形の有孔鍔付土器が出土している。

壁を切るようにして発見された土坑のうち、196号土坑の底部は焼けていた。

出土遺物は多い。そのうち、№１(写51-1)の有孔鍔付土器は完形で高さ35㎝。胴部は低い断面四角形の隆帯と４つの大型把手で区画され、そのうちの一つに鎌首をもたげ大きく口をあけた蛇が正面から、その反対の区画には、若干抽象化されているが同様にして蛇の背面が表現されている。土器の外面は全体に劣化が見られ、内面は底部以外の広い範囲に顕著な黒変が観察されると共に、底から２～３㎝に炭化物が付着し、その部分が劣化するなど、煮沸具としての使用痕を顕著に残している。埋土から出土した深鉢(２)は、口唇に残った頭部から大きな蛇体把手が付くと判断される。精製された胎土で、１対の環状の大きな把手が付き、丸く膨らんだ頸部とシャープにくびれた胴部に、撚糸文を地文として施す井戸尻Ⅰ式である。胴部以下のみの№２(３)は頸部に櫛形文をめぐらす。このほか復元するまでに至らなかったが、口縁に半球状の突起を連ね、横位区画の下側をキャタピラ文で埋める中期中葉Ⅲ（藤内）期の円筒形土器の破片(写52下)が４分の１個体分ほど出土しているほか、中期中葉の土器片、土偶の脚部が出土している。石器は打製石斧10点、横刃型石器７点、粗大石匙２点、叩石５点、乳棒状石斧１点、部分磨製石斧１点、凹石１点、礫石錘２点と、黒曜石の剥片と石核各１点、粗大剥片13点が出土した。

所属時期は中期中葉Ⅴ（井戸尻Ⅰ）期としておきたい。

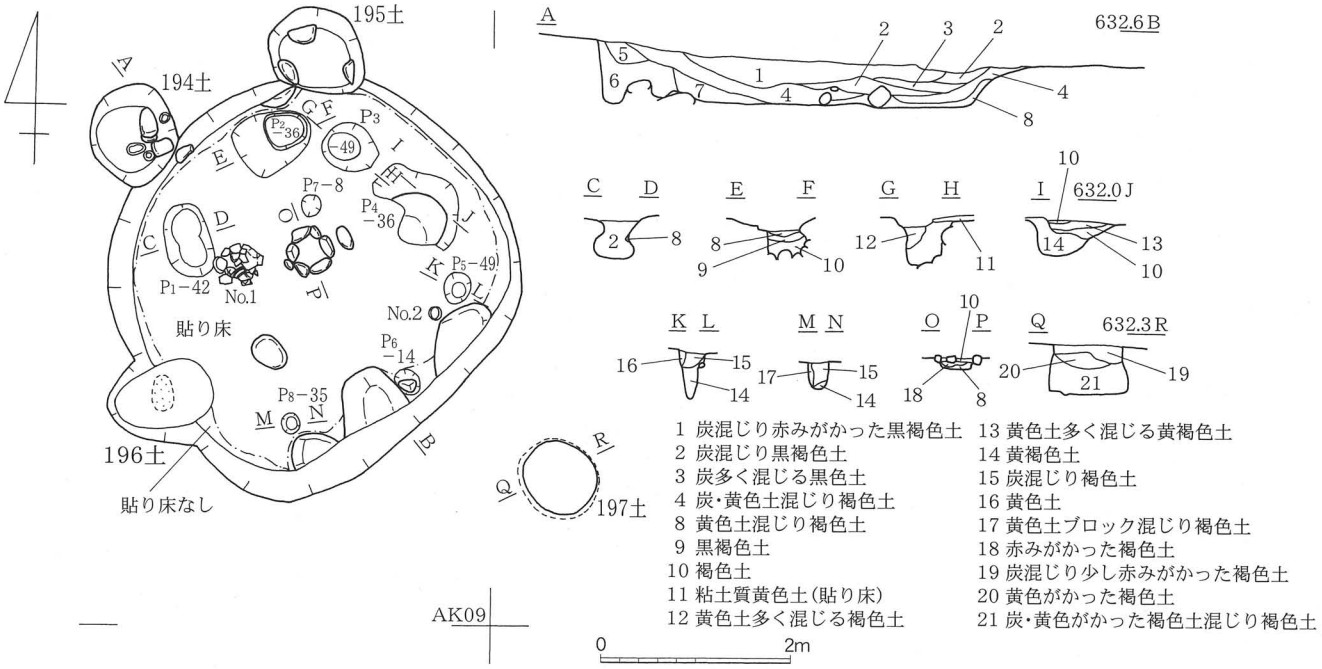
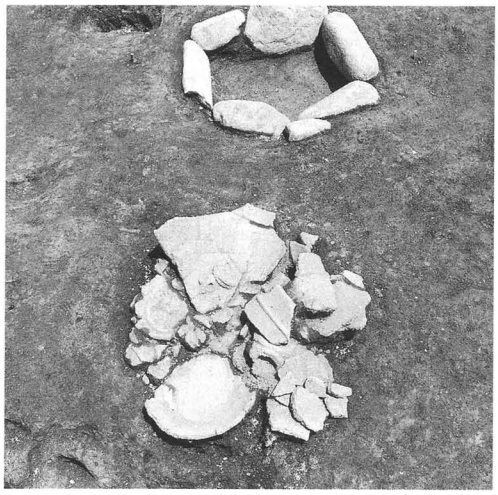
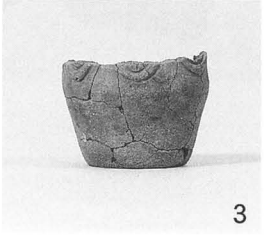


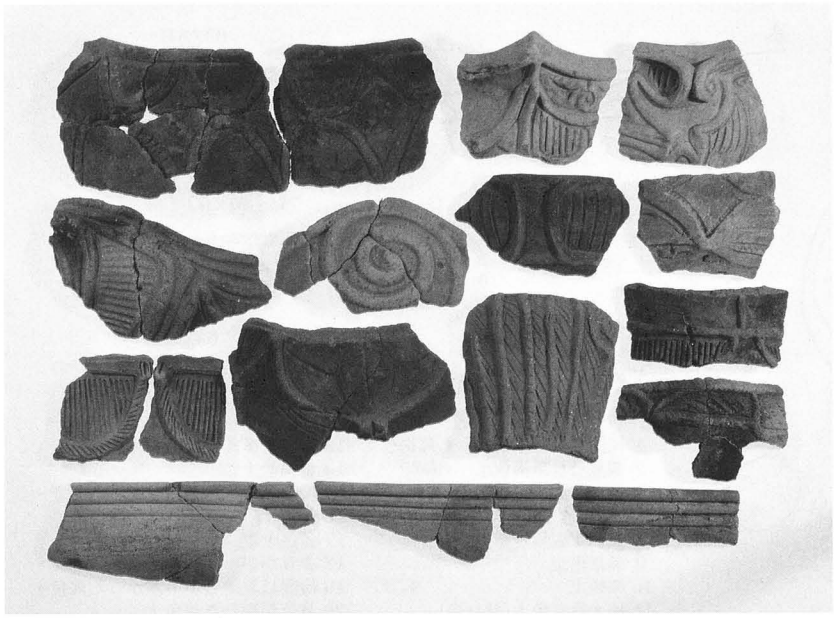
図65　327号住居址実測図



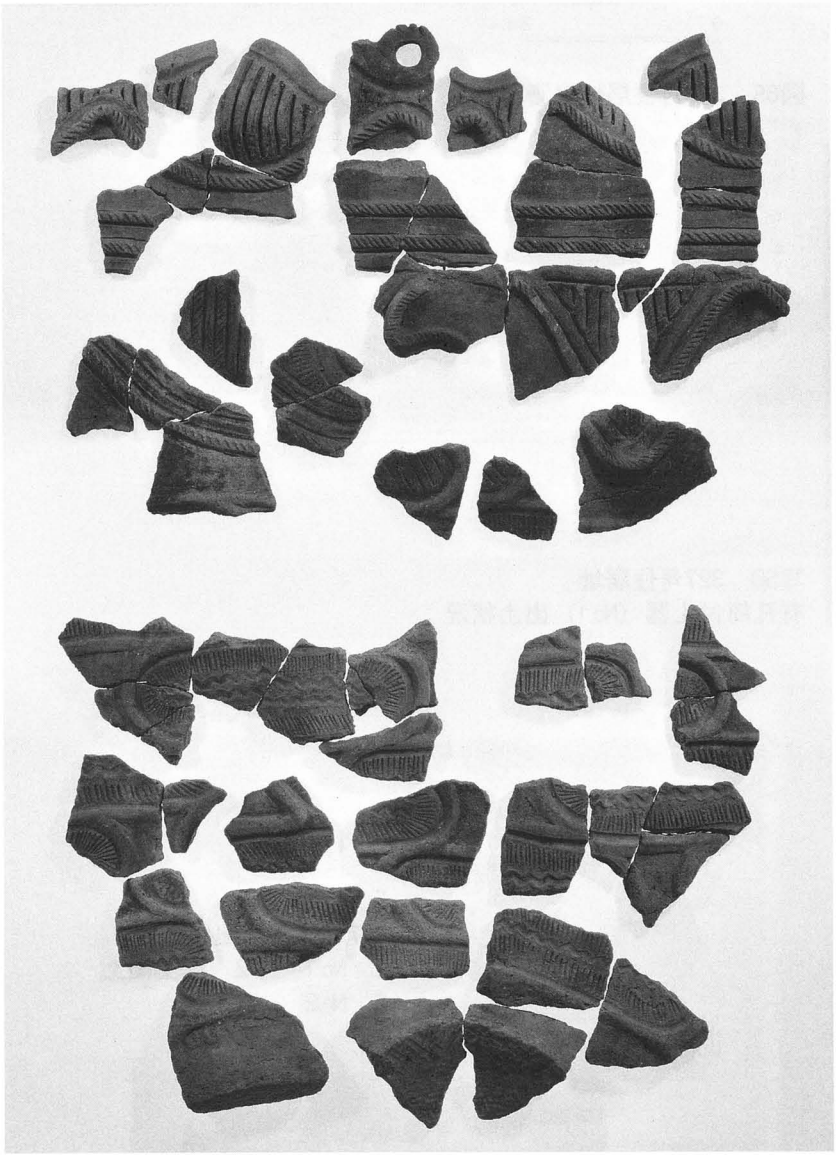
写50　327号住居址
有孔鍔付土器（No.1）出土状況



写51
327号住居址出土土器
1　No.1　　2　埋土出土
3　No.2



埋土出土土器片



埋土出土藤内式土器

写52　327号住居址出土遺物

４）328号住居址

ＡＪ09グリッドの北端で発見された。南側は既存の道路にかかったため調査してない。全体形は明らかにできなかったが、直径５ｍほどの円形に近い平面形が想定できる。炭混じりの褐色を呈する埋土は上層がレンズ状に黒みが強く、中層に小礫と黄色土粒が多く混じる黒褐色土が観察された。周溝はなく、壁に近い周囲に貼り床はない。元々大きな石がある場所で、西壁直下にも大きな石が顔を出しているが、P_4内のこぶし大から人頭大の礫は投げ込まれたかのような状態にあった。柱穴は特定できない。南の調査区境に発見された炉は円形に平石を置き並べた石囲炉で、炉の北外の床が焼けているのが観察された。

遺物のうち土器は全て破片であまり多くなく、焼成がよくない井戸尻Ⅰ式の大破片や東海系が出土している。石器は石匙１点、打製石斧４点、横刃型石器６点、粗大石匙１点、敲打器３点、礫石錘５点、部分磨製石斧２点と、黒曜石の剥片・屑片２点、石核４点、原石１点、ピエス・エスキーユ１点、粗大剥片13点が出土した。このうち石匙は、下呂石に似た石質で、形態的にも技術的にも縄文中期の中部高地で作られたとは言い難い。

所属時期は中期中葉Ⅴ（井戸尻Ⅰ）期である。

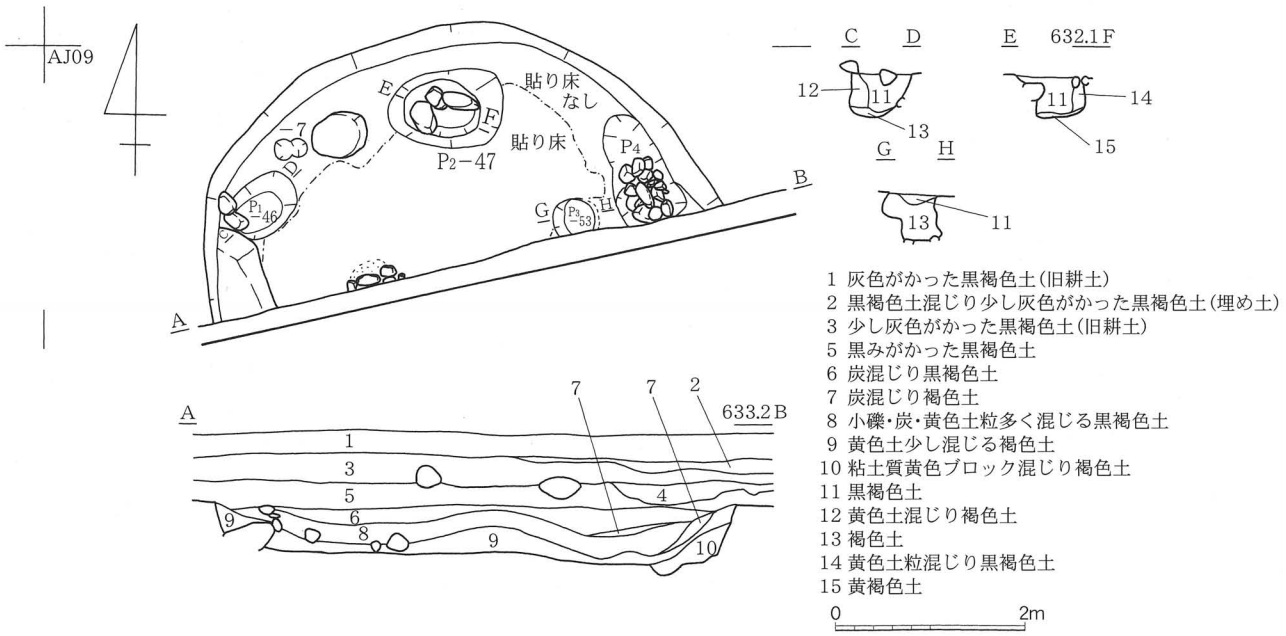


図66　328号住居址実測図

埋土出土土器片

石匙

写53　328号住居址出土遺物

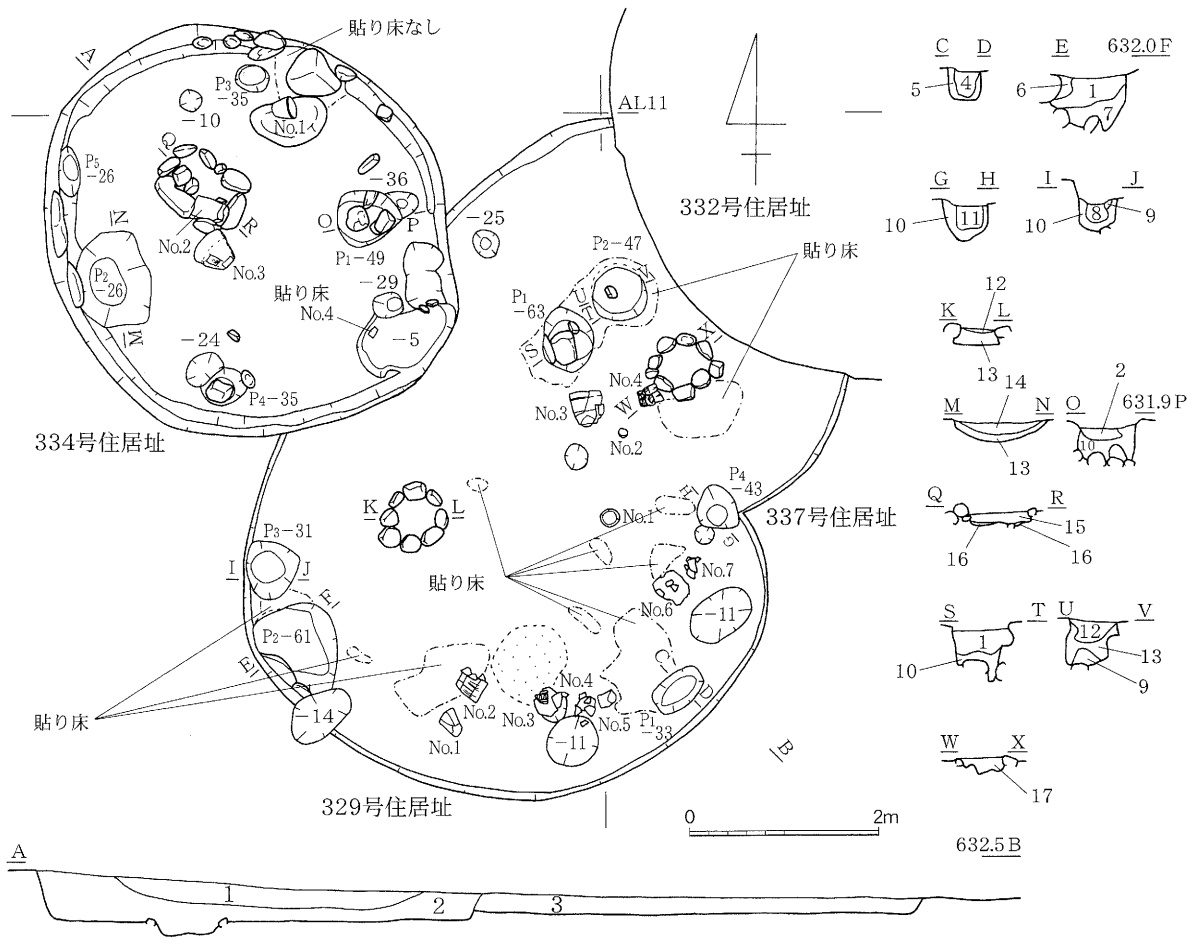
５）329・334・337号住居址

329号住居址

ＡＫ10、ＡＫ11グリッドに発見された。北側が同じ高さで337号住居址と重なり、北西の隅は334号住居址の埋土にかかっている。黒褐色土中に築かれた住居であり、遺物包含層を掘り下げ中に大きな土器片が出土するところに炉石の上部が発見されて住居址であると分かるような状態であった。検出面から床面までは20㎝ほどの比高差があるものの、土色がほとんど同じであるため平面形を確実にとらえることができなかったが、直径５ｍ強の円形に近いものと判断した。周溝は確認できず、床面も、南半を中心にブロック状に貼り床を検出した程度であった。柱穴も特定できない。炉は中央北西寄りに築かれた円形に平石を配する石囲炉で、焼土は見られなかった。南側の床上から№１から№７の土器の大破片が出土している。P_2とP_5から数点の土器片が出土した。

遺物のうち土器は多い。№１（写54-1）は、波状口縁を呈する中信系の、胴下端が劣化した№３（４・図68）は、頸部と胴部を同じパターンの隆帯貼付で埋める下伊那系の共に完形土器で、№２（２）は筒形で底面のみを欠く曽利Ⅰ、№６（３）は大きな波状口縁で胴部に櫛形文を付す口縁から胴部の４分の１個体と底部を欠く中信系である。№３の胎土には長径10㎜前後の豆粒状の炭化種子が多く含まれている（５）。このほか埋土から出土した破片は井戸尻Ⅲ期から曽利Ⅰ期のものである。石器は打製石斧５点、横刃型石器10点、粗大石匙２点、乳棒状石斧片１点、叩石２点と、黒曜石の剥片・屑片７点、ピエス・エスキーユ１点、粗大剥片18点が出土した。

所属時期は中期中葉Ⅵ（井戸尻Ⅲ）期から後葉Ⅰ（曽利Ⅰ）期で、重複する337号住居址との時期差は明確にできなかった。334号住居址は本址よりも新しい。



1 炭混じり黒褐色土
2 炭混じり黒みがかった褐色土
3 炭多く混じる黒色土
4 炭多く混じる黒みがかった褐色土
5 黄色土混じり褐色土
6 褐色土
7 黄色土小ブロック混じり褐色土
8 炭多く混じる黄褐色土ブロック混じり黒褐色土
9 黒みがかった褐色土
10 黄褐色土
11 炭混じり黄色土ブロック混じり黒褐色土
12 炭多く混じる黒褐色土
13 炭混じり褐色土
14 炭混じり黒みの強い黒褐色土
15 焼土粒混じり黒褐色土
16 少し焼けた黒褐色土
17 炭・焼土粒混じり黒褐色土

図67　329・334・337号住居址実測図

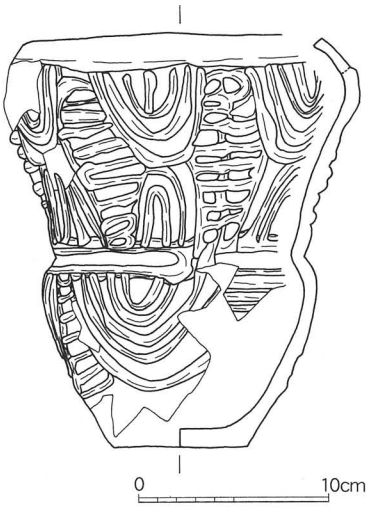
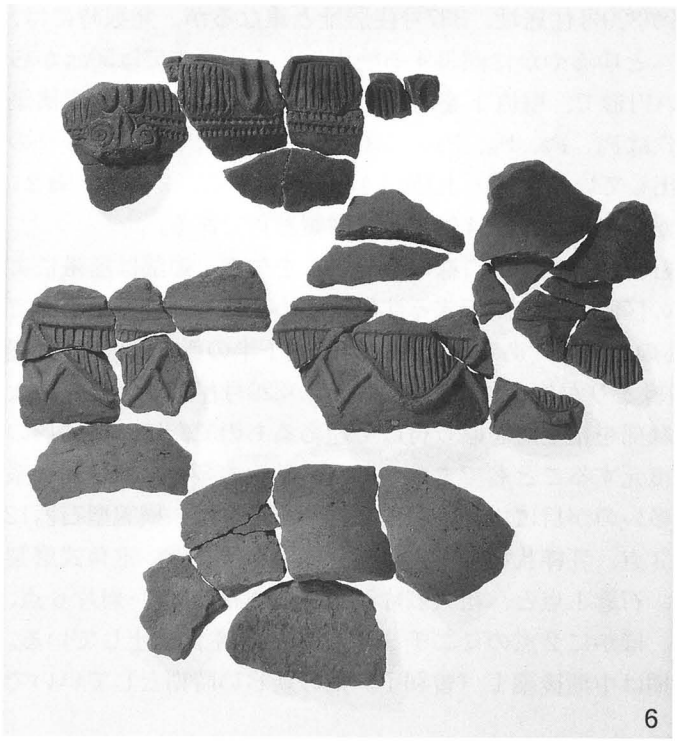
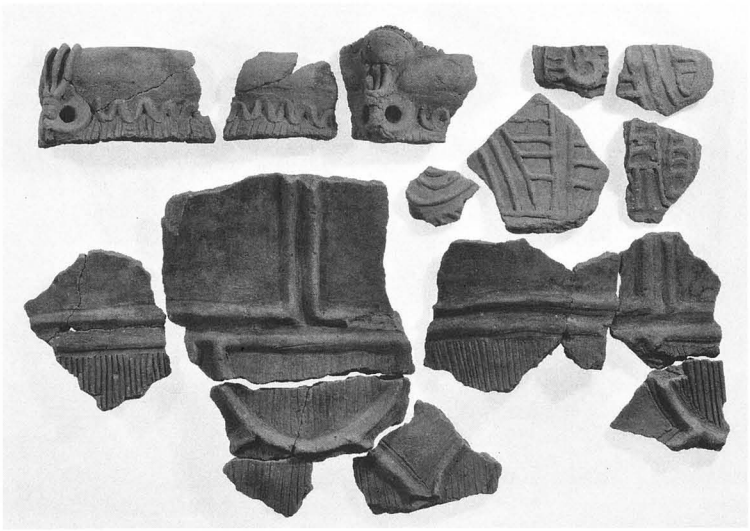


図68　329号住居址出土土器No.3実測図

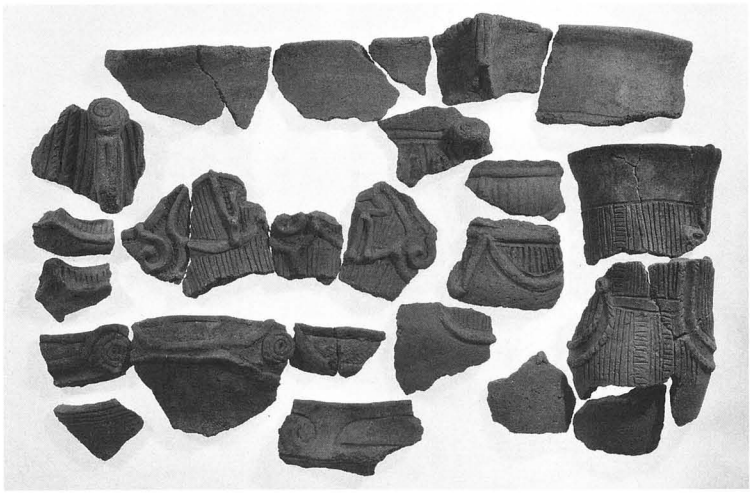


1 No.1　2 No.2　3 No.6
4 No.3　5 No.3 胎土の豆粒状炭化物
6 No.4

写54　329号住居址出土遺物



埋土出土土器片



埋土出土土器片

写55　329号住居址出土遺物

334号住居址

ＡＫ10、ＡＬ10グリッドに発見された。南東の一部が329号住居址、337号住居址と重なるが、発掘時には、遺構から前後関係を特定することはできなかった。南へとゆるやかに傾斜する検出面から床面までは50㎝から30㎝を測る。平面形は4.0×4.4mの北西方向にやや長い円形で、壁直下を周溝がめぐる。床は北壁の住居構築時に顔を出した大石の周囲以外を貼り床してあり、柱穴はP_1、P_3、P_4、P_5の４本とした。炉は中央北西寄りの長円形に平石を配する石囲炉で、北壁側の床から顔を出している大石の上(№１)と炉の南から、２個体（№２、№３）の土器が出土している。浅く大きなピットの中から出土した№４は定角式磨製石斧である。

遺物は、土器のうち№３（写56-1）は頸部がふくらむ曽利Ⅰ式で、口縁の２分の１を欠き、頸部は隆帯による楕円形の区画の中を刺突を伴う沈線で、胴部は縦長の区画の中を斜行する沈線で埋めてある。表面が平滑であるのに比べて胎土がもろいところは345号住居址のものと同様である。№１（４）は胴下半の無文部、（２）は縄文地文で巨大な４単位の把手を結ぶようにして波状の縁どりが施されている。一部が329号住居址からも出土した埋土出土の（３）は、大きく開いたのち内湾する口縁部を粘土紐を貼り付けて埋めるもので、ほかに同形の大型土器の破片１個体分が出土したが、焼成が甘く、復元することもできなかった。破片も多く、加曽利Ｅ系が比較的多いのが目につく。石器は打製石斧９点、横刃型石器12点、叩石３点、乳棒状石斧１点、部分磨製石斧２点、定角式磨製石斧１点、石匙１点と、粗大剥片56点、黒曜石の剥片・屑片６点、石核２点。ほかに２点のミニチュア土器（図69）が出土している。

所属時期は中期後葉Ⅰ（曽利Ⅰ）期の新しい時期としていいであろう。

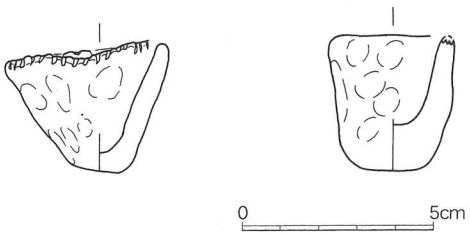
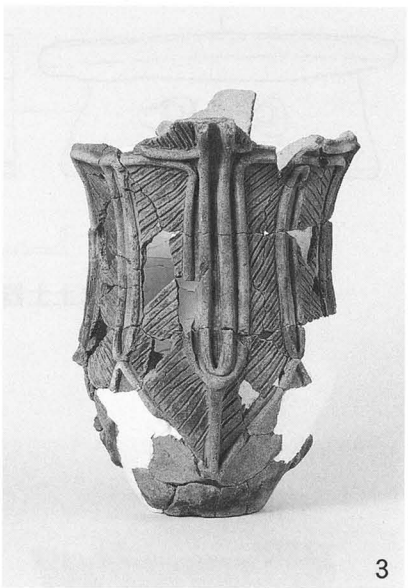


図69　334号住居址出土
ミニチュア土器実測図



1 No.3
2・3 埋土出土
4 No.1
5 埋土出土土器片

写56　334号住居址出土遺物

337号住居址

ＡＫ10、ＡＫ11グリッドの北端に発見された。南西に同じ床面の高さの329号住居址があるほか、西隅を334号住居址によって切られ、北東の332号住居址の埋土を切っているが、調査中に埋土中に床面を確認することはできなかった。検出面が南にゆるやかに傾斜しているため、床から検出面まで、北側で40㎝、南側で15㎝を測る。埋土と住居が掘り込む土との土色の差が少なく、特に南側は掘り上げたプランが正確とは言い切れない。平面形はほぼ円形で、直径4.6ｍほどの規模が想定される。周溝は確認されず、床面も中央のP_1、P_2の周囲と炉の南東で検出されただけであった。炉は中央南東寄りに築かれた平石を円形に置き並べた石囲炉である。この炉の南西に№１から№４の土器の大破片が出土している。

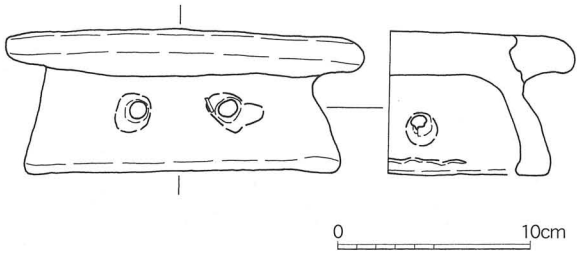


図70　337号住居址出土土器No.1実測図

遺物量は少ないが３点の完形土器が出土している。No.３(写57-1)は高さ36㎝、完形の円筒状の曽利Ⅰ式の深鉢。No.４(２)は頸部がふくらむ底部を欠く同じく曽利Ⅰ式の深鉢である。No.１(３・図70)は高さ8.0㎝の器台。厚手で脚部に２個１対の孔を穿つ。上面の台部は黒変しており、何らかの使用痕跡と考えられる。破片は井戸尻Ⅲ期が多い。石器は打製石斧７点、横刃型石器４点、粗大石匙１点、部分磨製石斧１点、石鏃１点と、粗大剥片11点、黒曜石の屑片５点が出土している。

所属時期は中期後葉Ⅰ（曽利Ⅰ）期である。

1 No.3　2 No.4　3 No.1
4 埋土出土土器片

写57　337号住居址出土遺物

６）330・332号住居址

330号住居址

ＡＫ11、ＡＬ11グリッドの西側に発見された。西側の半分以上が332号住居址と重なる。時期的には332号住居址よりも新しく、床面が同址よりも10～15㎝高いが、322号住居址の埋土中に本址の貼り床を見出すことはできなかった。遺構検出面から床面までは30～40㎝を測る。平面形は径4.0ｍの円形で、埋土は炭と小礫の混じる黒褐色土の上に、炭と焼土粒、小礫の混じる黒色土が中央に厚くレンズ状に観察されていて、332号住居址の埋土とは、小礫が含まれるか否か程度の差しかなかった。周溝はなく、P_1からP_{10}までが本址のピットと考えた。そのうち柱穴は、近くにピットがないことからP_8が該当するとすると、P_2、P_4、P_7、P_{10}の５本とすることが可能である。中央北西寄りに位置する炉は西北西に長軸をおく長方形に平石を配した石囲炉で、内部に焼土等は観察されなかった。

北東外に200号土坑がある。

遺物のうち土器は、№１（写58-1）の頸部がふくらむ曽利Ⅰ式のほか、埋土から大きな把手を１つと渦巻き状の把手を３つ付ける下伊那系（２）が出土している。破片は井戸尻Ⅲから曽利Ⅰにかけての土器である。

石器は打製石斧20点、横刃型石器16点、粗大石匙１点、叩石２点、乳棒状石斧５点、鑿状の小型磨製石斧２点、礫石錘２点と、粗大剥片45点、硬砂岩の棒状礫１点、黒曜石の剥片・屑片16点、石核１点が出土した。硬砂岩類を素材とする横刃型石器や粗大剥片が多い。

所属時期は、埋土から出土した完形土器と遺構の切り合いから、332号住居址よりも新しい、中期後葉Ⅰ（曽利Ⅰ）期としておきたい。

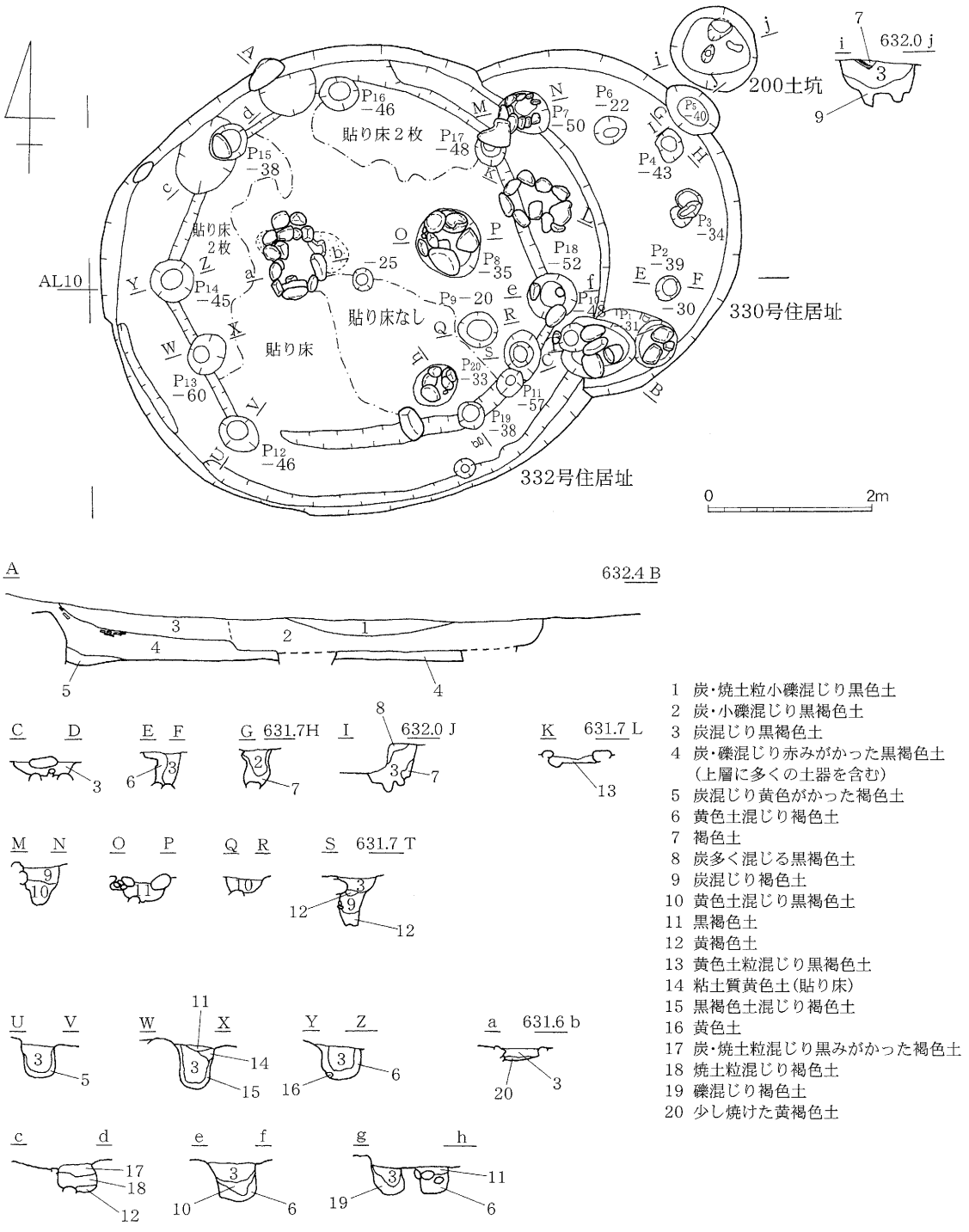
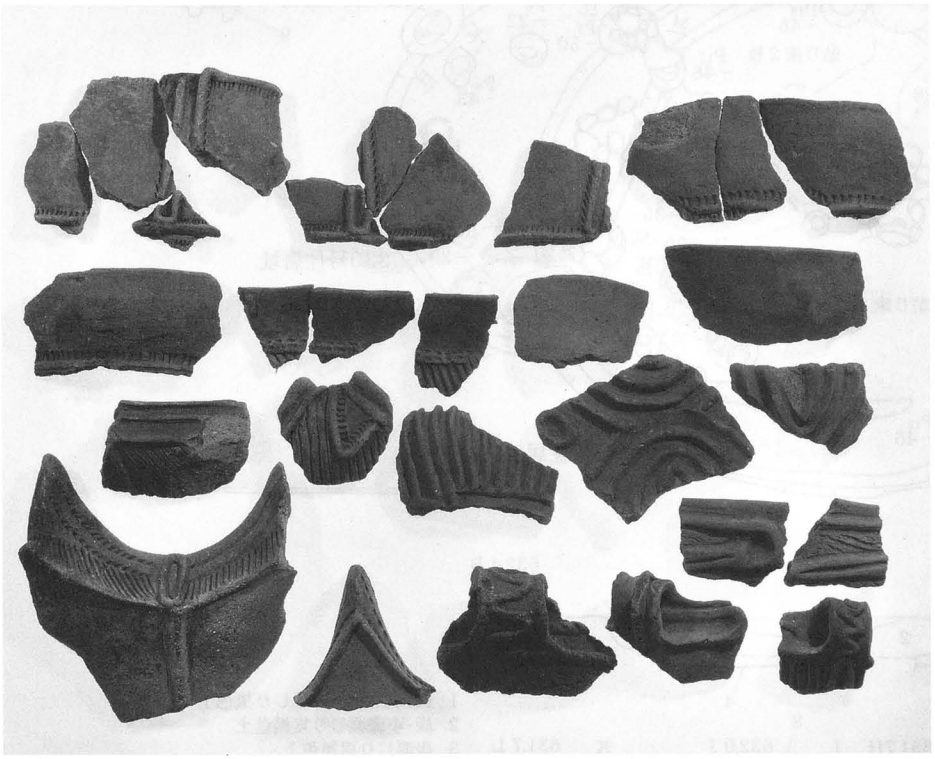


図71　330・332号住居址実測図

1 No.1、2 No.1＋埋土出土



埋土出土土器片

埋土出土土器片

写58　330号住居址出土遺物

332号住居址

ＡＫ11、ＡＬ11グリッドの西端に発見された。東側の埋土が330号住居址に、南西の隅の埋土が337号住居址によってそれぞれ切られているほか、西半分の埋土中に、規模の大きい６号集石が築かれている。遺構検出面から床面まで北側で75㎝、南側で50㎝と深く、炭と礫が混じる赤みがかった黒褐色土の上に炭混じりの黒褐色土がレンズ状に観察された。規模の大きい平面形は、東北東方向に長軸をおく6.2×5.8mの円形で、南半の壁直下と、ほぼ六角形に配された柱穴を直線で結ぶようにして周溝が掘られている。主柱穴はP12、P14、P15、P16、P17、P18、P19の７本で、P11、P13も柱穴であった可能性がある。床面はP19から炉にかけて貼り床されない部分があり、北側と西側の柱穴を結ぶ周溝の内側には、２～３㎝の厚さの２枚目の貼り床が観察されており、北西壁下のごく浅い窪みも丁寧に貼り床されるなど、この住居での生活期間の長さが見て取れる。中央西寄りの炉は、北北西方向に長軸をおく長方形に平石を置き並べた石囲炉で、炉の東と西の床面が焼けていたほか、炉底の土もわずかではあるが焼けていた。

埋土下層の赤みがかった黒褐色土の上層には、多量の土器が廃棄されていた。それらの中に、№18と№23が接合した井戸尻Ⅰ式(写60-1)が最も古いものとしてある。口縁を、棒状と半球状を対とし、その間に環状のいずれも非常に大きな４つの把手を付し、胴部は低い隆帯による一対の区画を三叉文と渦巻き状の沈線で埋め、底部は算盤玉状に屈曲するもので、胴部以下の焼きがあまい。

このほかの大量の土器は時期的には井戸尻Ⅲ期であり、それらは大きく３つの系統からなる。

一つは諏訪系の井戸尻Ⅲ式(写60-2～6・写61-7～10)で大型品が多い。№15(２)は低い隆帯によって胴上半を円形に、その下部を横位に区画した中を粗い沈線で埋め、口縁部との間に三叉文や渦巻文を施してある。内湾する口縁部にかけて隆帯による動物様の意匠文を貼付する。これと対をなすような土器が№14(８)で、同様に横帯の区画の中を沈線と最下段を前時期に主流であったキャタピラ状の沈線で埋め、口縁には三日月形の大きな把手を付ける。№８(10)はこの底部の可能性がある。このほか№16(７)と埋土出土の(９)は蒸し器である。一方、量的に最も多いのは口縁部がキャリパー型を呈する下伊那系(写62-17～写63-28)で、中型から小型の一群ということができる。口縁部は弧状の隆帯で埋めるものが多いが、刺突状の短い沈線だけで全面を埋めるもの（20、27）もある。胴部は櫛状文を連続させるもの（17、19、20、22、24、28）が多いが、口縁部と同様の隆帯で埋めるもの（21、23、25）や縄文を施文するもの(18)もある。これらに属しないものとして、胴部に櫛形文を配し、広い無文の頸部の上に櫛形文に似た文様帯の上に、ほぼ直立する短い無文の口縁を載せることを特徴とする、上伊那から諏訪湖盆に特有であろう土器(写61-11～写62-16・図73)がある。このほか、中信系の30や、東海系の鉢(34)と深鉢(33)などが出土している。337号住居址の埋土に一部が廃棄されていた32(図74)は、円みの強い大きな波状口縁に半肉掘りの隆帯によって目玉状の区画をした中を三叉文や沈線で埋め、胴部に、両端が４本指の掌の形となる櫛形文を、連結することなく４つ配してあり他に類例を見ない。

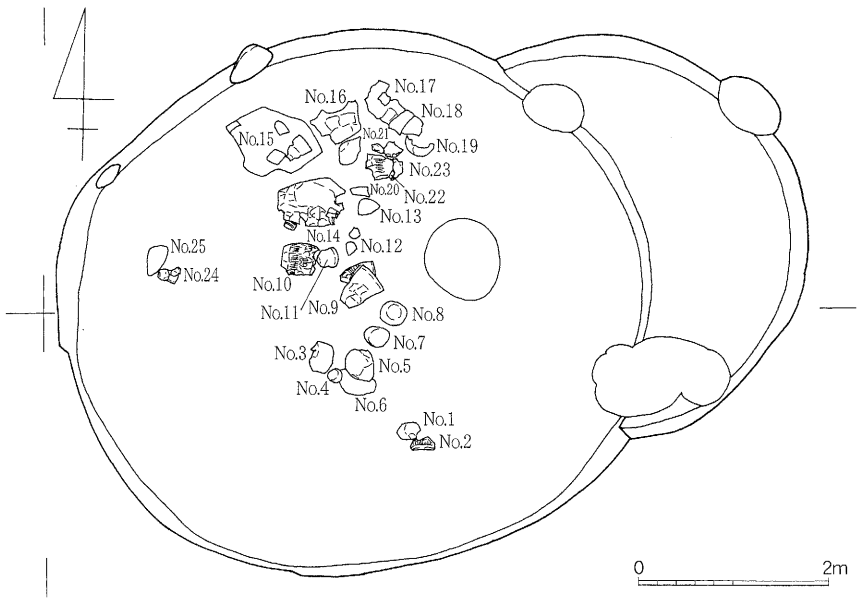
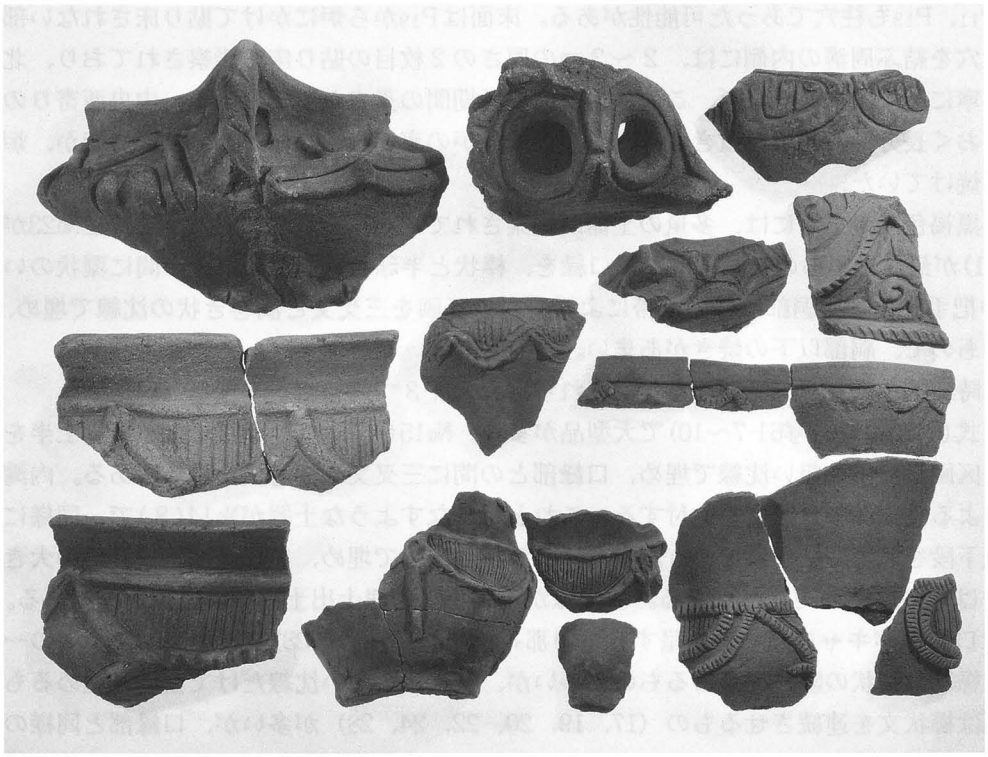


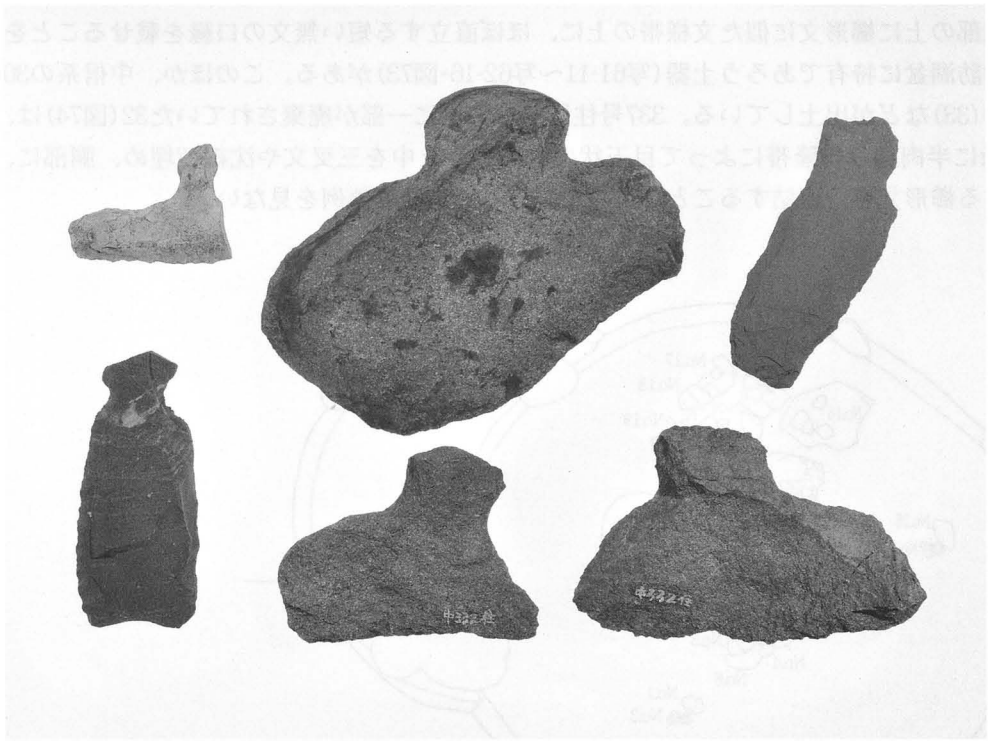
図72　332号住居址遺物出土状態図

石器も多いが土器ほど極端に多くはなく、石鏃１点、石匙２点、スクレパー１点、打製石斧32点、横刃型石器12点、粗大石匙４点、叩石１点、乳棒状石斧３点、礫石錘４点のほか、黒曜石類の剥片・屑片22点、石核３点、ピエス・エスキーユ３点、粗大剥片37点、粗大石核２点が出土している。石匙(写59下)のうち左下の１点は、328号住居址の石匙と同様、石質が下呂石に似ており、技術的にも中部高地で作られたとは言い難い。

所属時期は中期中葉末(井戸尻Ⅲ)期である。



埋土出土土器片



石匙と粗大石匙

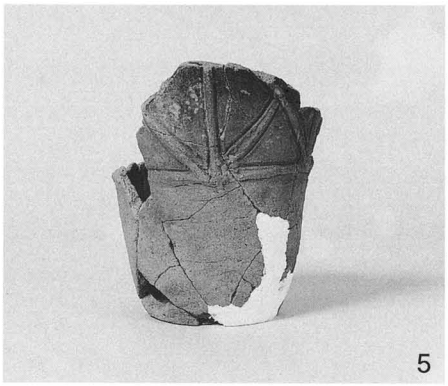
写59　332号住居址出土遺物

1

3

4

2


5

6

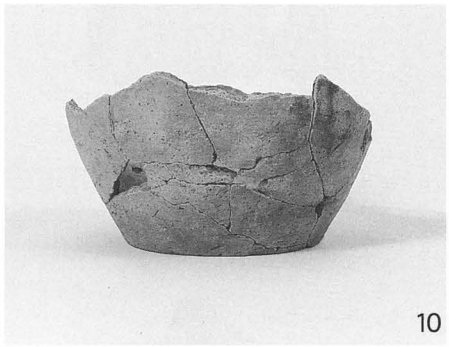
1 No.18＋No.23　2 No.1＋No.15　3 No.10　4 No.20　5 No.13　6 No.5

写60　332号住居址出土土器（１）

7

8

9


10

11

12

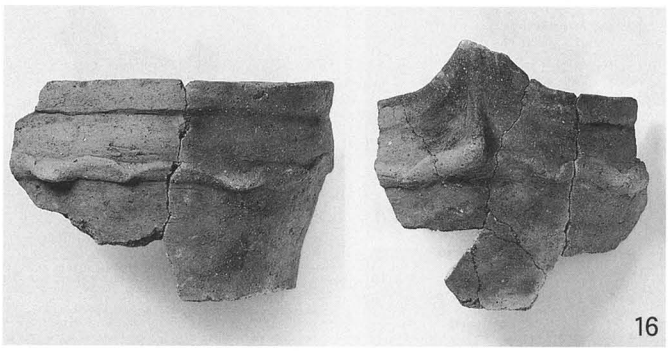
7 No.16　8 No.14　9 埋土出土　10 No.8　11 埋土出土　12 No.6

写61　332号住居址出土土器（２）

13

14

15


16

17

18

19

20

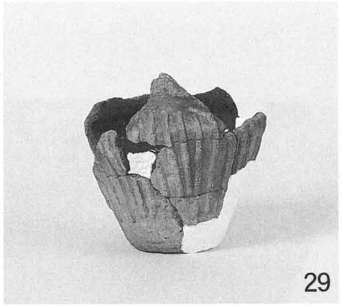
21

13 No.9　14 埋土出土　15 No.19　16 埋土出土　17 No.3＋No.4
18 No.11　19 No.24　20 No.7　21 埋土出土

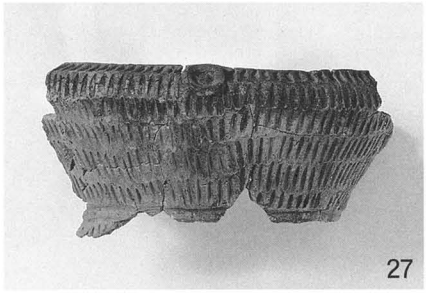
写62　332号住居址出土土器（３）

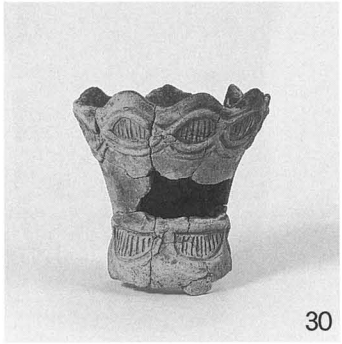
22

26

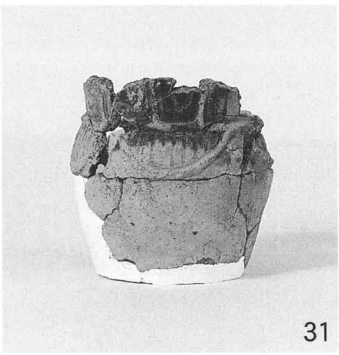

29

23

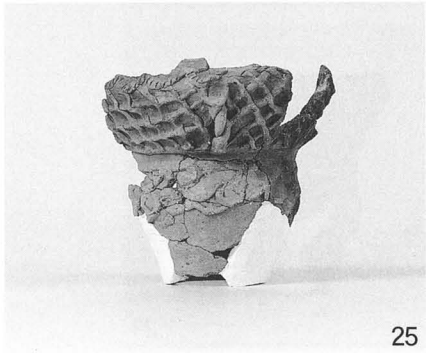

27


30

28


31

24


25

32

22 No.25　23・24 埋土出土　25 No.26　26 No.12　27 No.6　28・29 埋土出土
30 No.22　31 埋土出土　32 埋土出土（337号住居址埋土からも一部出土）

写63　332号住居址出土土器（４）

33 No.27　　34 No.1　　35 No.13

写64　332号住居址出土土器（５）

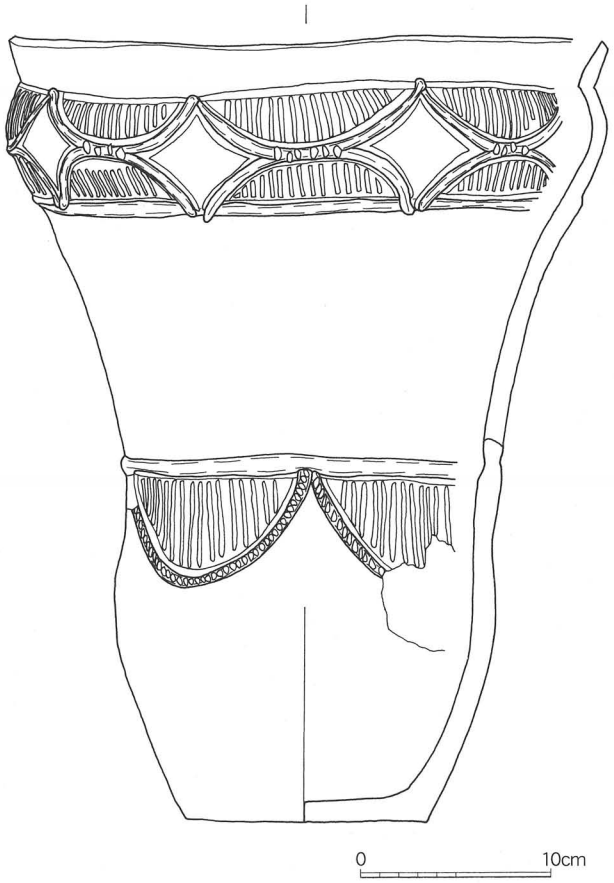


図73　332号住居址出土土器No.9実測図

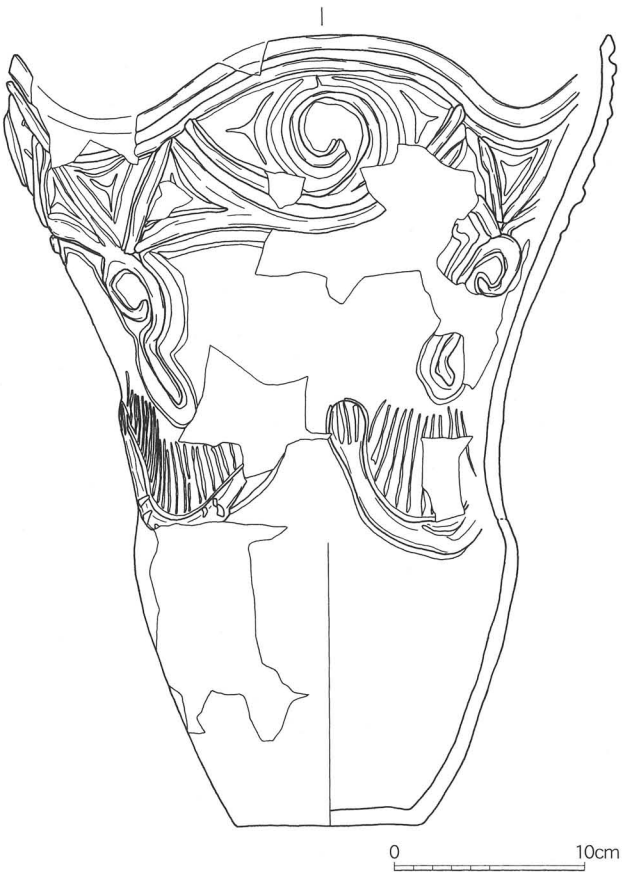


図74　332号住居址埋土出土土器実測図

７）333号住居址

ＡＬ12グリッドの南西隅で発見された。北側が用地外となるため平面形は推定だが、東西に長い6.8×5.8mの長円形とした。検出面から床面までは30㎝、炭混じりの埋土は黒みがかった褐色で、上層に小礫の混じる黒褐色土が観察された。全体の状況はわからないが、少なくとも南半は壁直下を周溝がめぐっており、そのうち南西側は極めて幅が狭い。P_1、P_2、P_3、P_5、P_6、P_8はいずれも柱穴である可能性があるが、北側が未調査のため特定するまでには至らなかった。あるいは建て替えがあるのかもしれない。炉は中央からかなり西に寄った位置に築かれた平石を長円形に並べた石囲炉で、内部にわずかに焼けた褐色土が観察された。P_6の土層観察の際、土色を記録しなかったところがある。

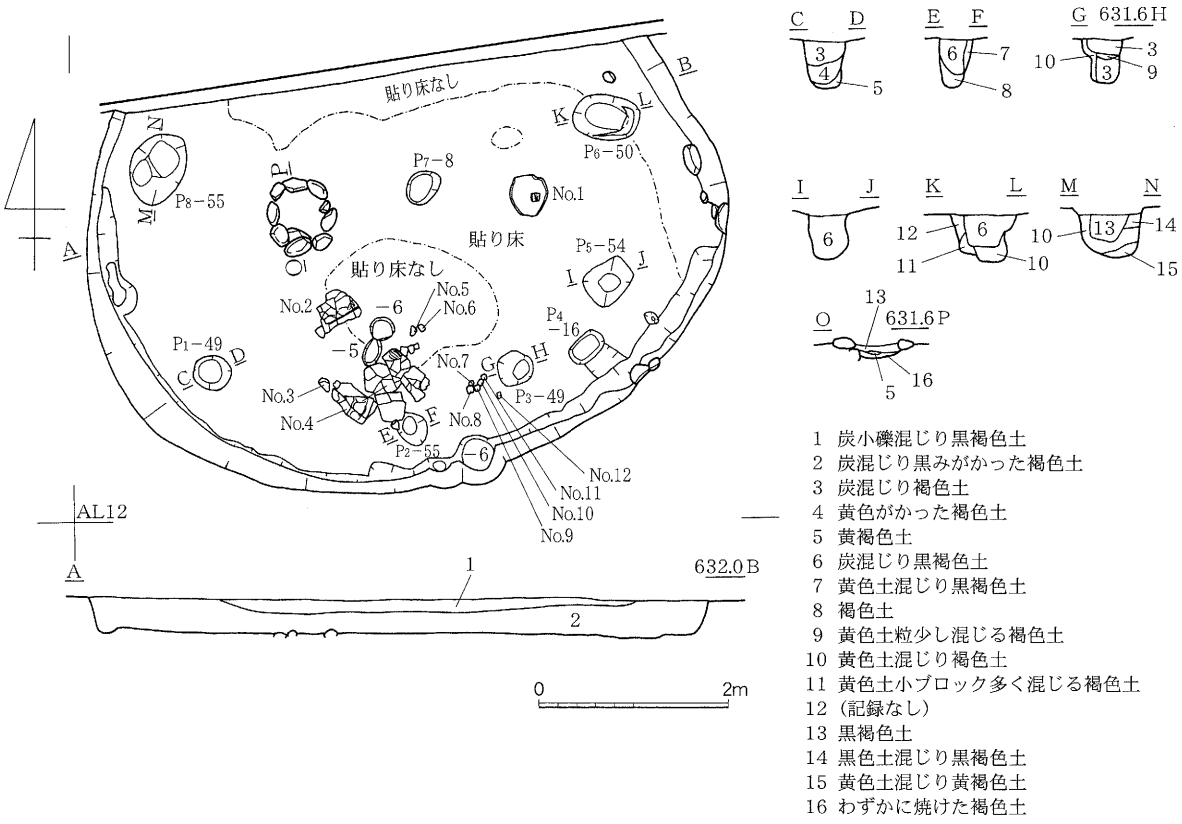
床面近くの埋土からNo.１からNo.４の土器が出土しているほか、P_2とP_3の中間の床上から８点の礫石錘（No.５～No.12）がまとまって出土した。

埋土中に西壁に接して８号集石が発見されている。

遺物のうち土器は多く、No.１（写65-1）は紐状の隆帯を貼付する井戸尻Ⅲ式で、極めて大型のNo.２＋No.４（２）と埋土出土の４は上伊那系、３は下伊那系の同時期の土器で、破片も井戸尻Ⅲ期が主体である。このほか中越遺跡で唯一の発見例となる焼町土器が出土している（写67左）。石器は床面にまとまって発見されたものを含めて礫石錘が18点と非常に多く、そのほか打製石斧19点、横刃型石器５点、粗大石匙２点、叩石１点、凹石１点、石鏃１点と、粗大剥片29点、黒曜石類の剥片・屑片18点、石核４点が出土している。

なお、出土位置を記録することができなかったが、埋土から多くの鹿角（写67下右）が、骨片とともに出土した。

所属時期は中期中葉末（井戸尻Ⅲ）期である。



1 炭小礫混じり黒褐色土
2 炭混じり黒みがかった褐色土
3 炭混じり褐色土
4 黄色がかった褐色土
5 黄褐色土
6 炭混じり黒褐色土
7 黄色土混じり黒褐色土
8 褐色土
9 黄色土粒少し混じる褐色土
10 黄色土混じり褐色土
11 黄色土小ブロック多く混じる褐色土
12 （記録なし）
13 黒褐色土
14 黒色土混じり黒褐色土
15 黄色土混じり黄褐色土
16 わずかに焼けた褐色土

図75　333号住居址実測図

1

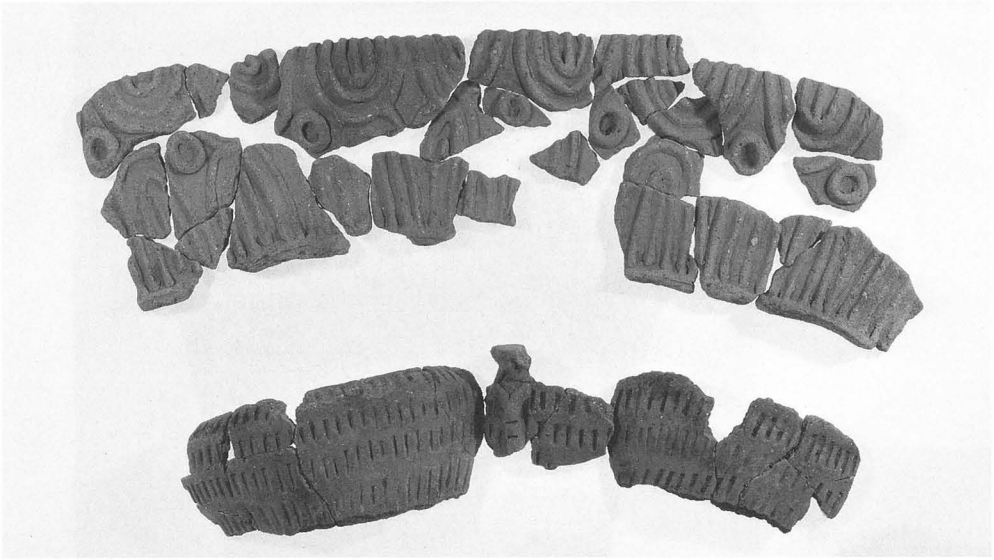
2

3

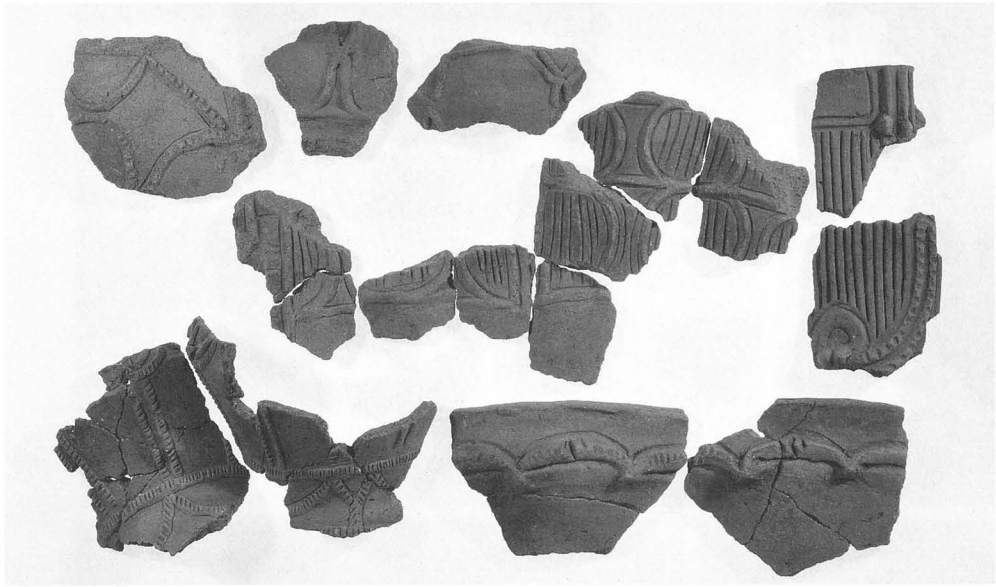
4

1 No.1　　2 No.2＋No.4　　3・4 埋土出土

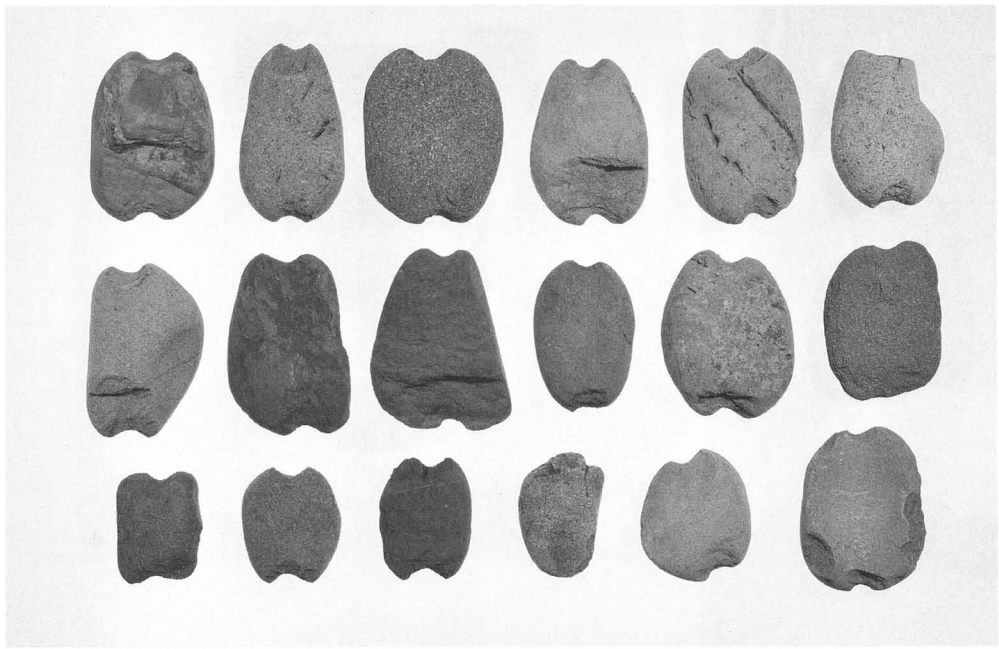
写65　333号住居址出土土器



埋土出土土器片

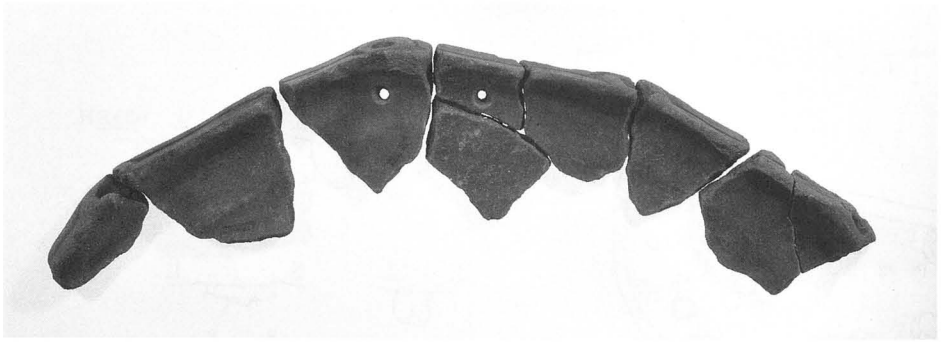


埋土出土土器片

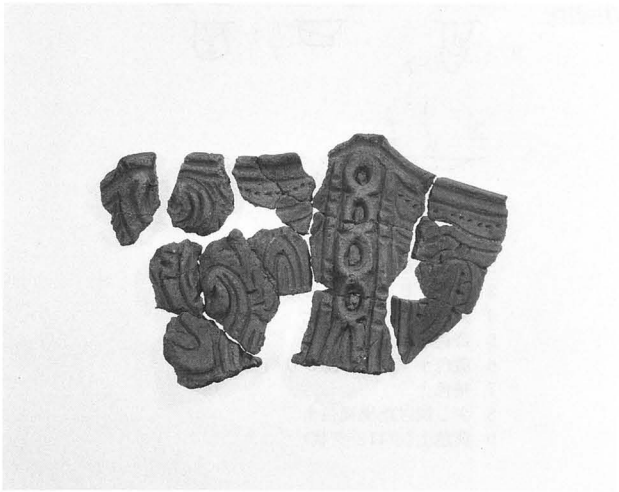


埋土と床面出土礫石錘

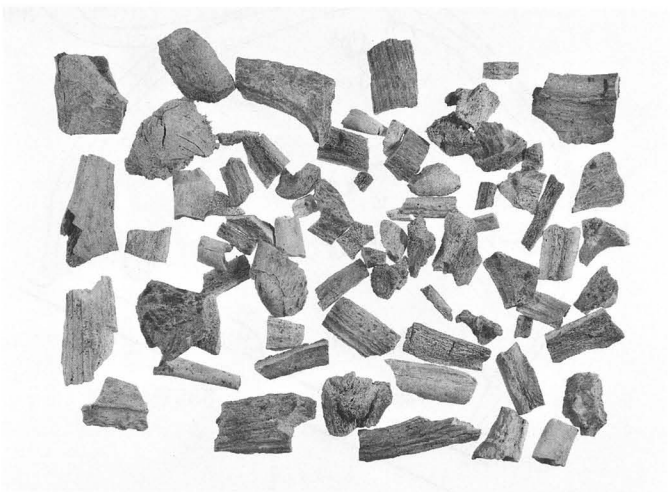
写66　333号住居址出土遺物



埋土出土浅鉢

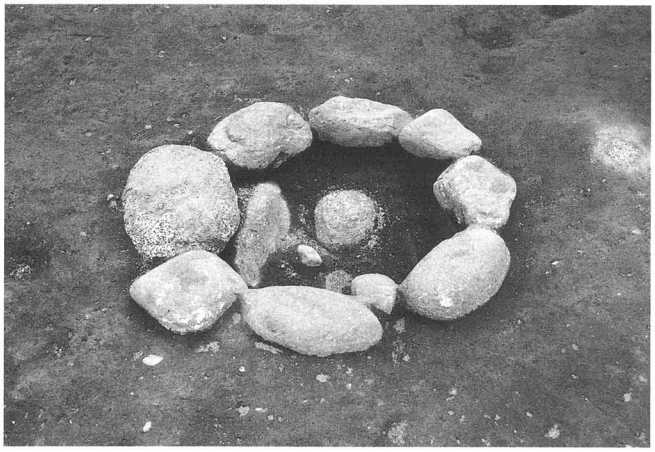


埋土出土焼町土器

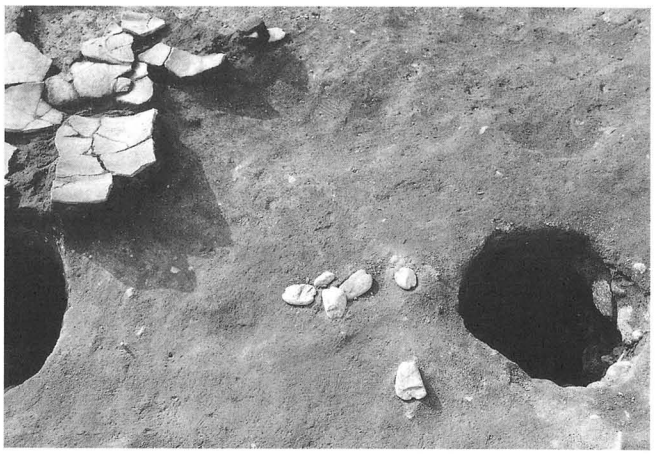


埋土出土鹿角

写67　333号住居址出土遺物



写68　333号住居址　炉



写69　333号住居址遺物出土状況

８）335・336号住居址

335号住居址

ＡＬ13、ＡＬ14グリッドから発見された。南側の一部は既存の道路にかかったため調査してない。北東に接するようにして336号住居址を切る。平面形は直径5.5mほどの北西方向にやや長いほぼ円形と推定され、東へ向かってゆるやかに傾斜する検出面から床面までは50㎝弱を測る。炭を含む褐色の埋土は、壁際の床面近くが黒みがかっており、中央上部が厚くレンズ状に黒褐色を呈する状況が観察された。やや幅広の周溝が壁直下を全周している。柱穴はP_1～P_5と未調査区に１本の６本で、正六角形に配されていると判断した。柱穴内には炭の混じる黒褐色土が多く観察され、床は全面に貼り床されていた。住居の中央北西寄りに築かれた炉は、中央に底部だけの土器を埋設する、長円形に平石を配した石囲炉で、炉底の中央が４㎝の厚さに焼けており、南の２個と北西隅の１個の炉石は抜かれてしまっていた。

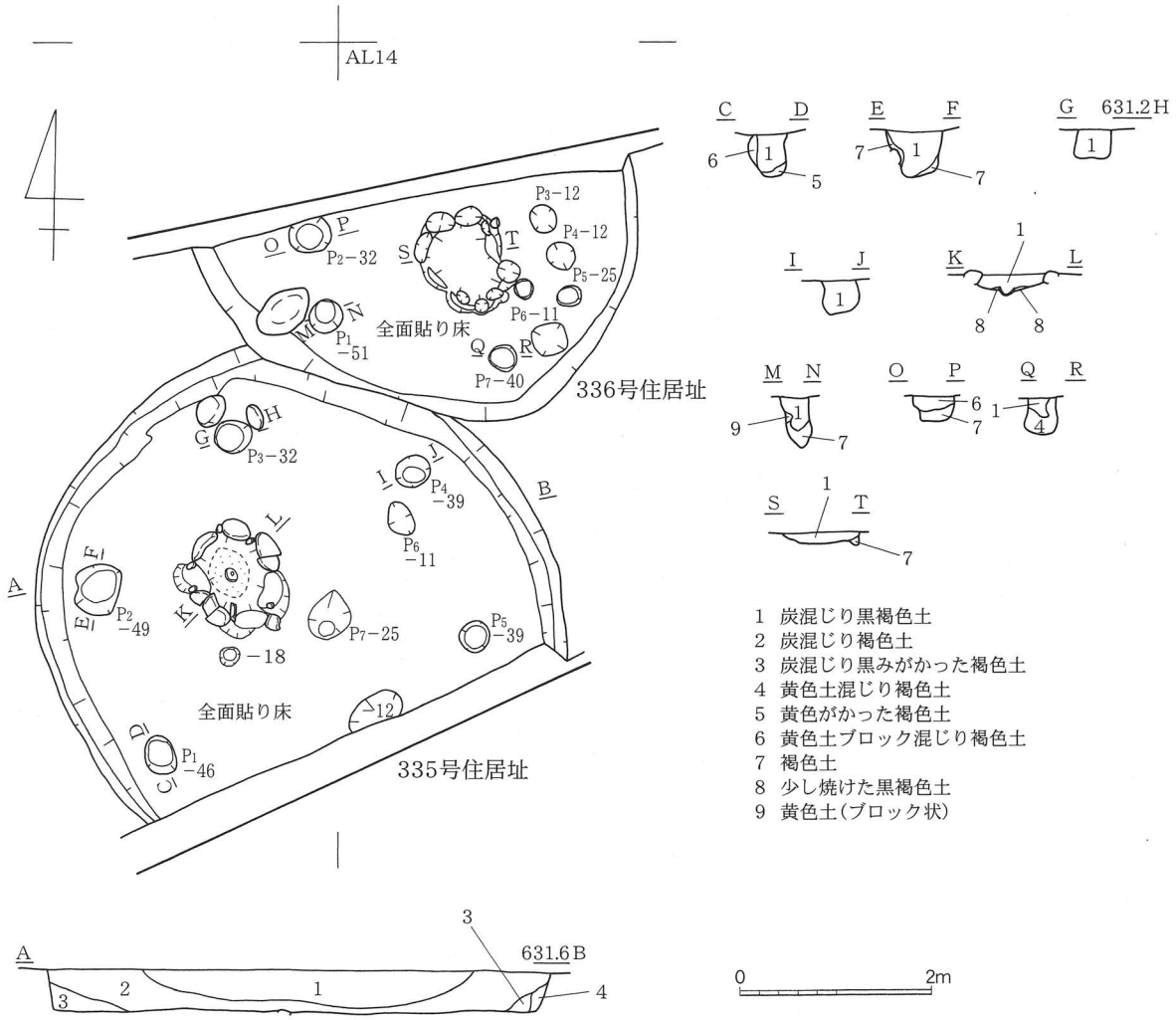


図76　335･336号住居址実測図

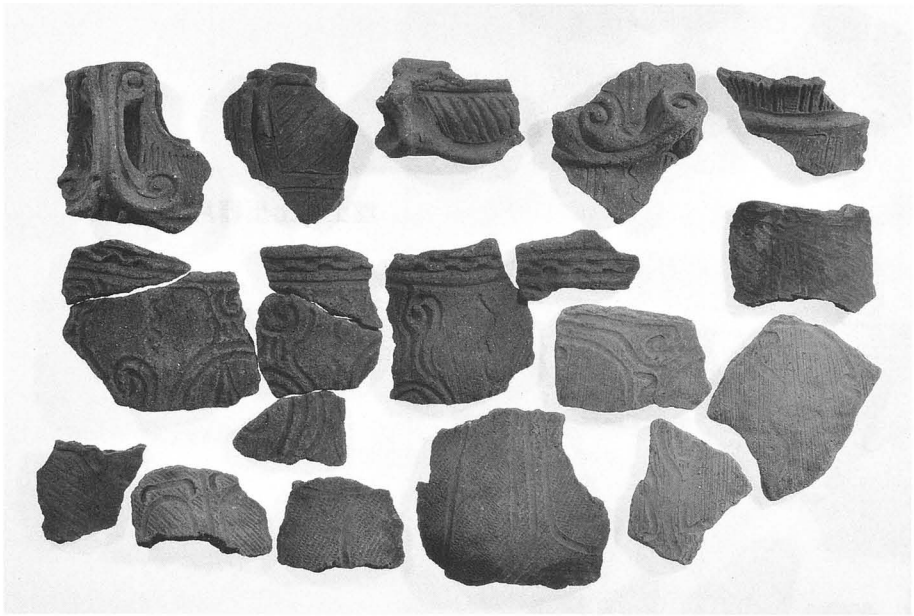
写70　335号住居址　炉

1 埋土出土　　2 炉内

写71　335号住居址出土土器

炉に埋設されていたのは縄文を地文とする加曽利Ｅ系の底部であり(写71-2)、埋土から出土した(１)は、縄文を地文とする胴部に渦巻き状の沈線を施文する下伊那系の中期後葉Ⅱ期の土器である。同様にして、縄文や条線を地文として渦巻き文を垂下させる下伊那系の土器が多いことも、この住居址の特徴としてあげることができる。石器は打製石斧10点、横刃型石器３点、粗大石匙３点、部分磨製石斧１点、石錐１点と、粗大剥片13点、硬砂岩の棒状礫２点、黒曜石類の剥片・屑片17点、石核４点が出土している。

炉の中央に土器を埋設するのは中期後葉Ⅰ（曽利Ⅰ）期に類例が見られるが、埋土出土土器から、所属時期は中期後葉Ⅱ（曽利Ⅱ）期としておきたい。



写72　335号住居址出土土器片

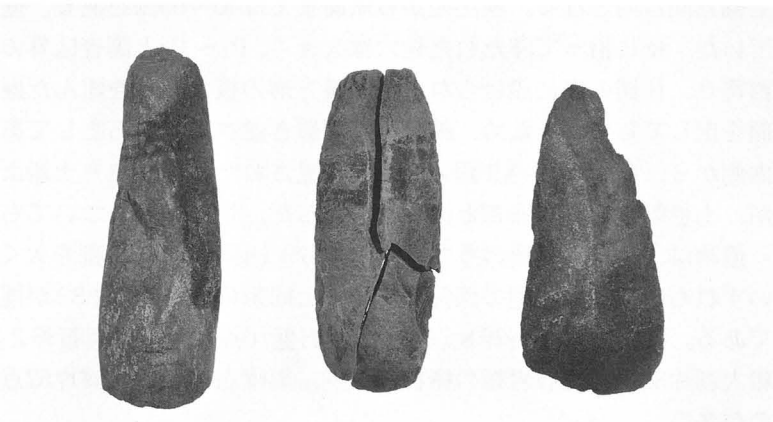
336号住居址

ＡＬ13、ＡＬ14グリッドの北隅から発見された。北側半分が用地外となるため調査してない。南西に接するようにして335号住居址に切られる。規模は直径4.5mほどと推定されるが、平面形は確定できない。北東方向にゆるやかに傾斜する検出面から床面までは53～35㎝を測る。周溝はなく、床面は全面に貼り床されている。P_1、P_7は柱穴としていいだろう。中央南東寄りに築かれた炉は、10個ほどの平石を長円形に並べた石囲炉であったであろうが、炉石は全て抜き取られていた。

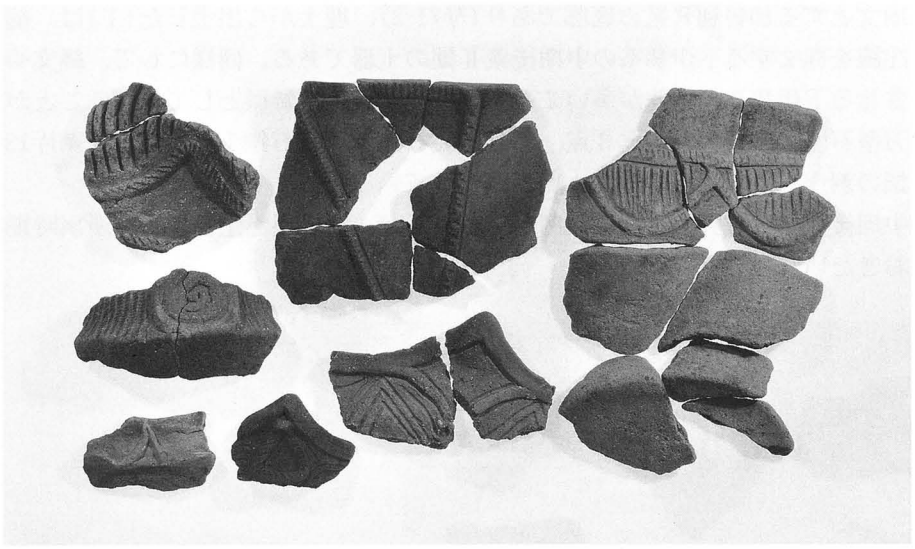
土器は少なく、中期中葉Ⅲ期が主体である。石器は打製石斧７点、横刃型石器３点、乳棒状石斧３点、部分磨製石斧３点、凹石１点、礫石錘４点と、粗大剥片４点、黒曜石の剥片２点がある。部分磨製石斧にはいずれもスス状の炭化物が付着しており(写74)、胴部に観察される筋状に炭化物が付着していない箇所は装着痕と考えられる。

所属時期は中期中葉Ⅲ（藤内Ⅰ）期としておく。

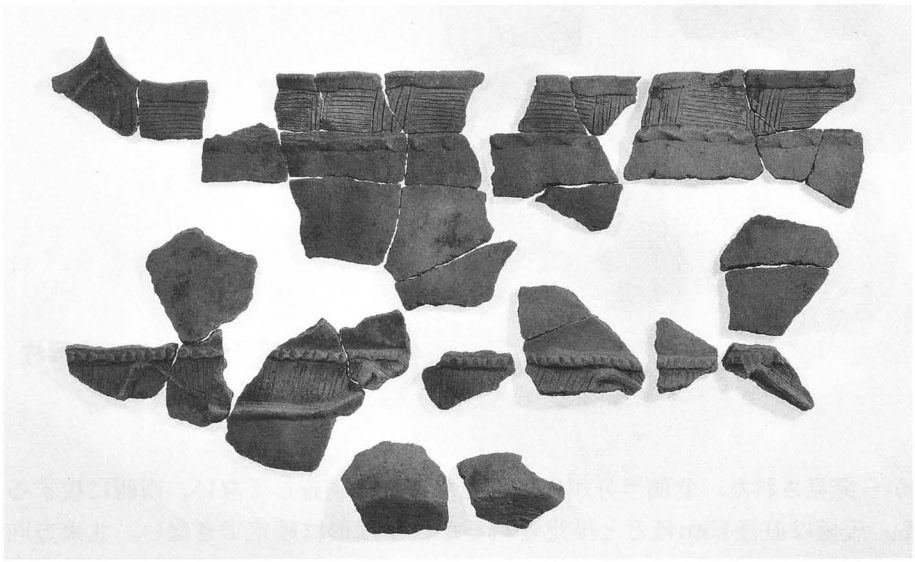
写73　336号住居址　炉



写74　336号住居址出土部分磨製石斧



埋土出土土器片



埋土出土東海系土器

写75　336号住居址出土遺物

９）341・344号住居址

341号住居址

調査期間の最終に近いときに発見された住居址であり、埋土の状態をはじめ充分な観察や記録を残すことができなかった。ＡＮ19グリッドの北西隅で発見され、北側の一部が用地外となるため調査してない。344号住居址の西側を切っている。規模は直径5.5m弱、平面形はほぼ円形になるものと推定した。埋甕と炉の配置から主軸方向は西となる。検出面から床面までは40～50㎝を測る。壁直下を周溝がめぐり、床は全面に貼り床されていた。壁に沿って穿たれた柱穴は大きく、P_1～P_4と調査区外の１本の計５本が五角形に配されている。中央西寄り、住居の奥に設けられた炉は長方形の板状の石を組んだ掘炬燵状の石囲炉で、南東側は大石が地山から顔を出してしまったため、細長い石を置き並べて炉縁石としてある。入口に相当する東側の壁から50㎝と80㎝内側から、蓋石のない２個の埋甕が発見された。いずれも土器よりも一回り大きな穴を掘って埋置されていたが、土色等を記録することはできなかった。炉の埋土についても記録はない。

遺物は、２点の埋甕のうち埋甕１（写79-1･図78）は口縁部を欠く唐草文系の、埋甕２（２）は伊那谷に特徴的ないずれも中期後葉Ⅱ期の深鉢で、後者と同形の深鉢底部（３）が埋土から出土している。破片も曽利Ⅱ期が主体である。石器は打製石斧８点、横刃型石器10点、部分磨製石斧２点、叩石３点、石鏃４点、スクレパー２点と、粗大剥片38点、硬砂岩類の棒状礫２点、黒曜石の剥片・屑片52点、石核８点が出土した。粗大剥片に小さなものが多い。

埋甕に使われた土器と、炉の形態から中期後葉Ⅱ（曽利Ⅱ）期とすることができる。

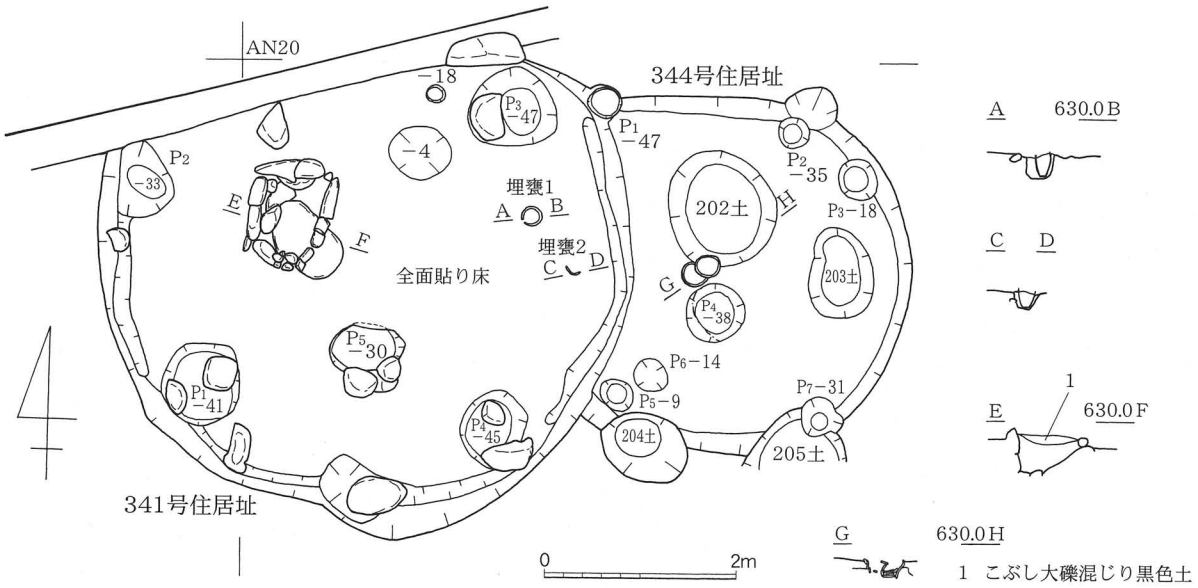
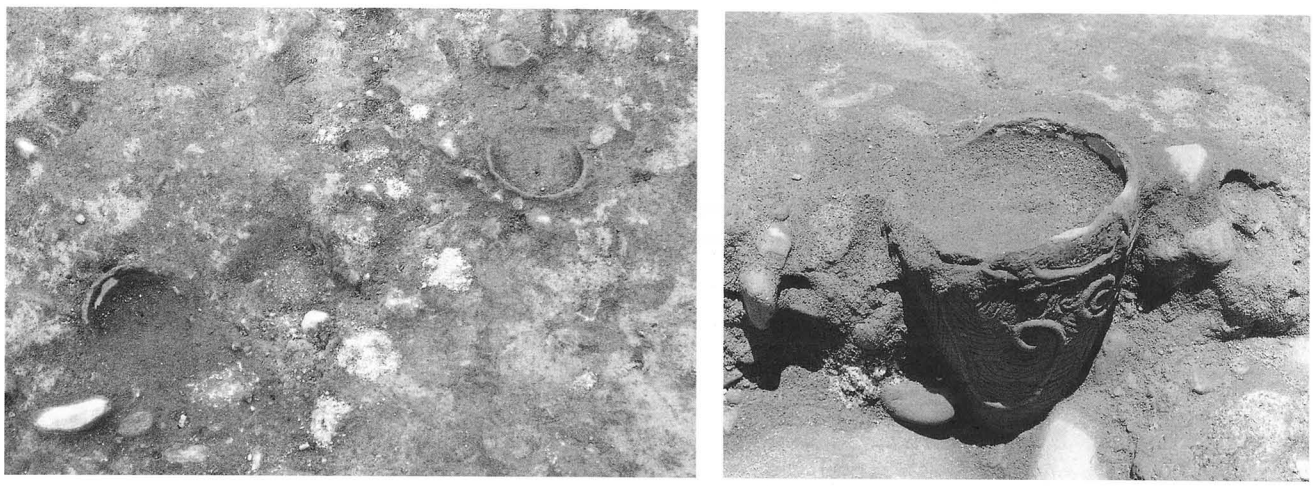


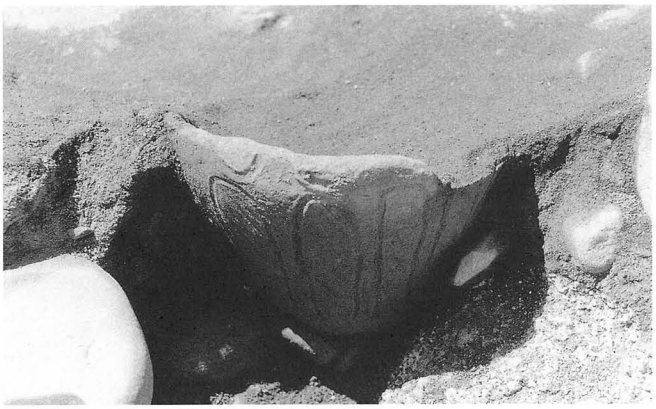
図77　341・344号住居址実測図

写76　341号住居址　炉



右　埋甕１　　左　埋甕２　　埋甕１

写77　341号住居址埋甕出土状況



写78　341号住居址埋甕２出土状況

写79　341号住居址出土土器（１　埋甕１　　２　埋甕２　　３　埋土出土）

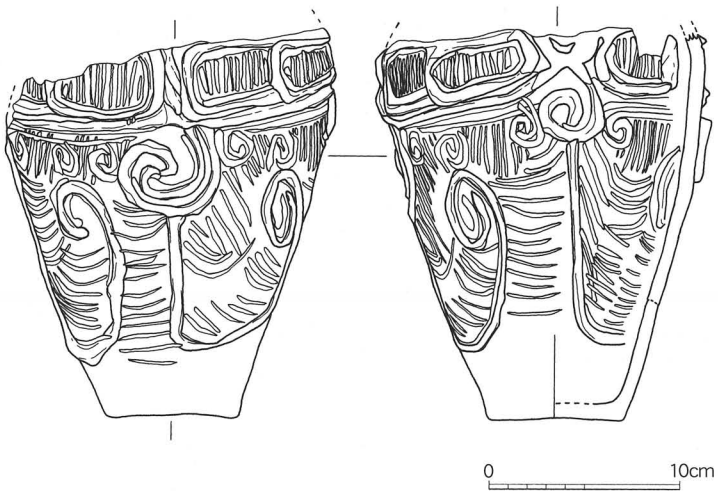


図78　341号住居出土埋甕１実測図

写80　341号住居址埋土出土土器片

344号住居址

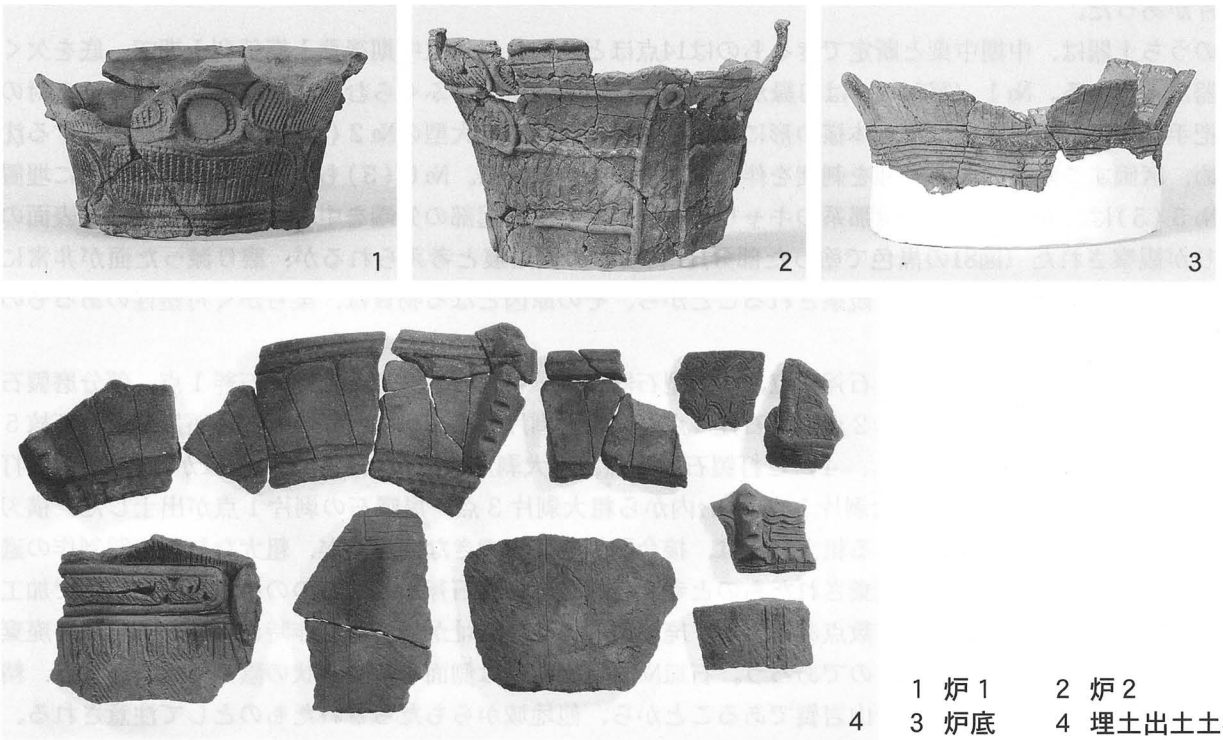
調査期間の最終に近いときに発見された住居址であり、埋土の状態をはじめ充分な観察や記録を残すことができなかった。ＡＮ19グリッドの北西隅で発見され341号住居址によって西側の一部を切られている。住居内や南の壁上に大きなピットが４基あり、土坑であると判断した（202～205号土坑）が、住居との前後関係までは確定できなかった。住居址の規模は直径４ｍ弱とやや小型で、平面形はほぼ円形になるものと推定した。周溝はなく床面も粘土質土が貼られている状態にはなかった。柱穴は壁を切るようにして穿たれたP1、P2、P7と204号土坑と重なる位置の計４本が南北に長い長方形に配されていると考えた。中央南寄りのP4は南西の一部を貼り床されており、炉は、中央にある土器埋設炉で、炉の土器は２個あり（写81）、炉１を埋置するときに炉２の縁を壊していることから、時間差をもって埋め置かれたと考えられるが、それが建て替えを伴うか否かまでの判断はできなかった。

炉に使われていた土器のうち、南西側の炉１（写82-1･図79-1）は楕円の区画の中を角押文で埋める狢沢式、北東側の炉２（２）は、顕著な指頭圧痕を残し紐状の隆帯で区画する同時期の千曲川水系の土器である。炉２の底には平出Ⅲ Ａの頸部片（写82-3）が敷かれていた。埋土には、中期中葉の土器に後期の堀之内併行期の土器が混在している。

石器は打製石斧３点、横刃型石器１点、小型磨製石斧１点のほか、粗大剥片８点、硬砂岩の小円礫１点、黒曜石の剥片・屑片６点、石核２点が出土した。

所属時期は、炉に使用されていた土器から、中期中葉Ⅰ（狢沢）期としたい。

写81　344号住居址　炉
（左 炉１　　右 炉２）



1 炉１　　2 炉２
3 炉底　　4 埋土出土土器片

写82　344号住居址出土土器

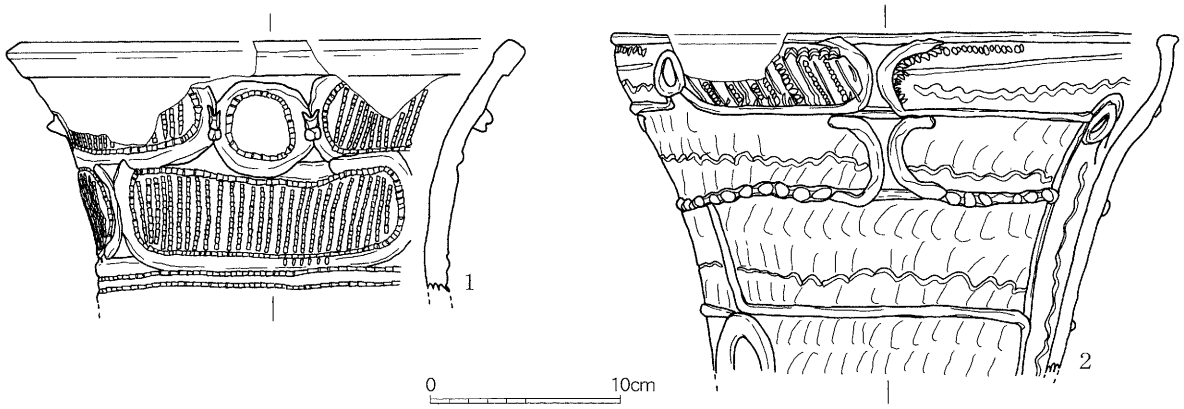


図79　344号住居址出土土器実測図（１炉１　２炉２）

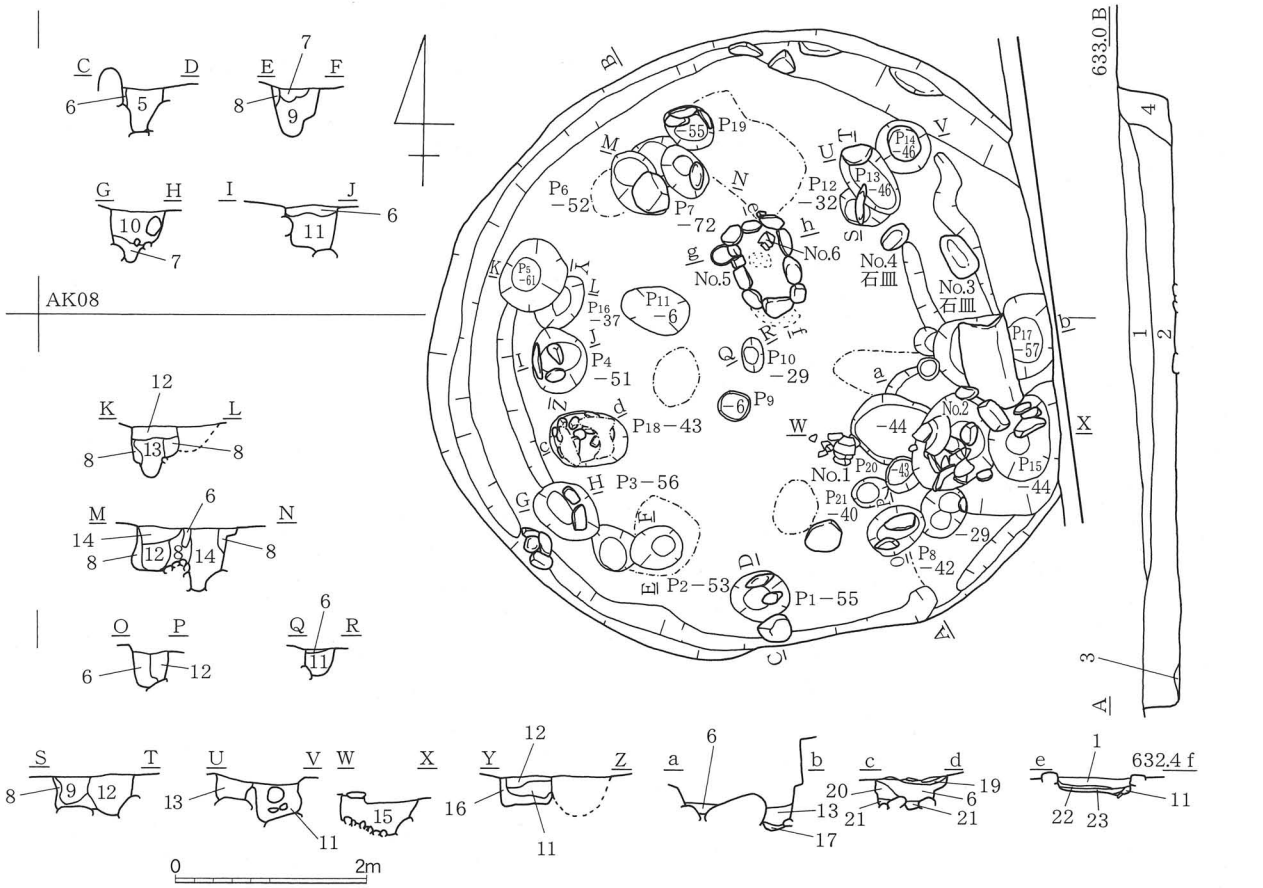
10）345号住居址

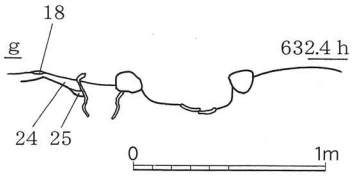
ＡＪ08とＡＫ08グリッドにまたがって発見された。東方で工事が進行する中で調査をした遺構であり、東端部はすでに調査済の区域として埋め立てられていたため全てを検出することができなかった。規模は南北6.5m、東西7.0mと大きく、軸線を北から少し西の方向におくほぼ円形の平面形を呈する。遺構検出面から床面までは約50cmを測る。埋土は炭の混じる褐色土の上に黒褐色土が観察された。周溝が壁下をほぼ全周する。床は貼り床されているがP2の周囲、P11の南、P6の西、P19の東、P21の西、P8の東に貼り床されていない部分があった。住居址内から非常に多くのピットが発見されたことに加えて、P18に周囲の床と同じ高さに貼り床が観察され、P3とP5を結ぶ周溝とそれと対をなすようにしてP13、P14とP15を結ぶ周溝が検出されるなど、何回かの建て替えが想定される住居址である。柱穴としては、P2、P4、P6、P14、P17、P8や、P1、P3、P5、P19、P13、P15など、いずれも六角形に配された６本柱が想定できる。いくつかのピットが土層観察をし切れていない。炉は中央から北北西に寄った位置に築かれた長方形に平石を組む石囲炉で、炉の北西外には№５の土器が正位に埋置されていた。炉の付属施設と判断したが、この土器の口縁の一部を欠きとるようにして炉石が並べられていること、土器の周囲に埋め土して貼り床した痕跡があること、その埋め土の下の、土器に近いところの表面が焼けていることなどから、建てかえ前の住居の炉内に埋置してあった土器を、そのまま再利用していると解することもできよう。炉の東方には床に据えた状態で２点の石皿が発見されたほか、南東寄りの床上に№１と№２の土器片があった。

遺物のうち土器は、中期中葉と断定できるものは14点ほど、それ以外は中期後葉Ⅰ期曽利Ⅰ期で、底を欠く完形土器が４点ある。№１（写84-2）は口縁がラッパ状に開き、頸部がふくらむ諏訪系の曽利Ⅰ式で、１対の大きな把手の間に、手足を広げた人体様の形に隆帯を貼付してある。大型の№２（１）は、口縁部を蛇行する沈線で埋め、区画する隆帯の間と頸部を刺突を伴う沈線で埋める中信系。№６（３）も同系である。炉の脇に埋置された№５（５）は、底部を欠く下伊那系のキャリパー形土器で、突起部の先端を中心とする口唇部に、表面の磨り減りが観察された（図81の黒色で塗った部分）。何らかの使用痕と考えられるが、磨り減った面が非常になめらかで、突出部でない場所にも観察されることから、その原因となる物質は、柔らかく可塑性のあるものということができるであろう。

石器は非常に多く、埋土から打製石斧24点、横刃型石器31点、粗大石匙３点、乳棒状石斧１点、部分磨製石斧１点、小型磨製石斧１点、敲打器２点、礫石錘４点と、粗大剥片63点、黒曜石類の剥片・屑片７点、石核５点が、床面に接して石皿２点（№３、４）と打製石斧２点、粗大剥片４点が出土しているほか、P15内から打製石斧２点、横刃型石器１点、粗大剥片１点、P17内から粗大剥片３点、黒曜石の剥片１点が出土した。横刃型石器とともに出土した60点を超える粗大剥片は、接合関係を確認できなかったが、粗大な打製石器制作の過程で生じた剥片類が遺構埋土中に廃棄されたものと考えられる。打製石斧としたものの中に、制作途中で加工を放棄したかのように見えるものが数点あるのも、廃絶後のこの住居址が、石器制作時に生じた不要品を廃棄する場所であったことを裏付けるものであろう。石皿№４（図82）は側面を渦巻き状の陰刻で埋めるなど、精巧な逸品であるとともに、石質が安山岩製であることから、他地域からもたらされたものとして注意される。

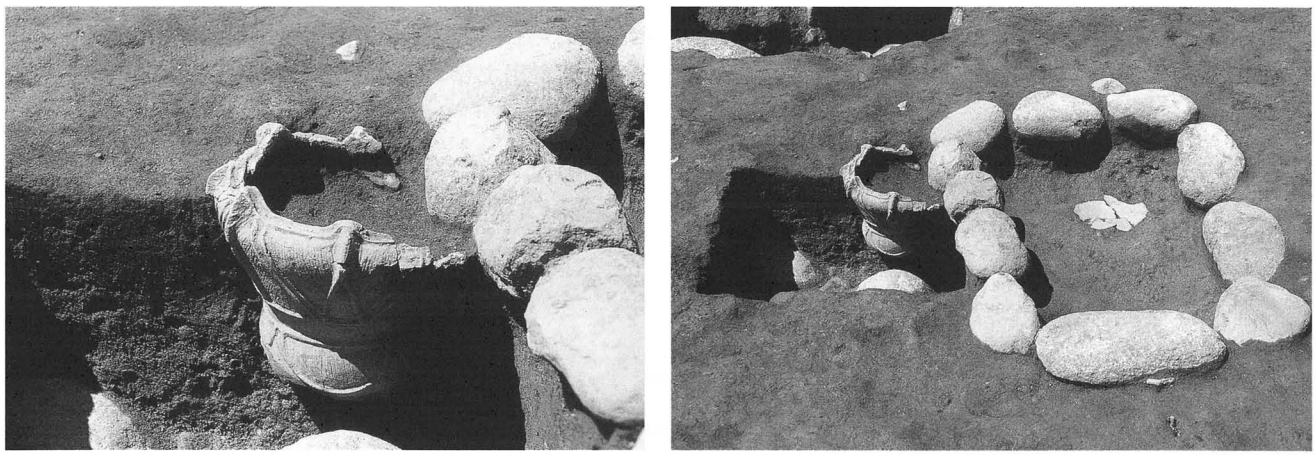
所属時期は、中期後葉Ⅰ（曽利Ⅰ）期としておきたい。



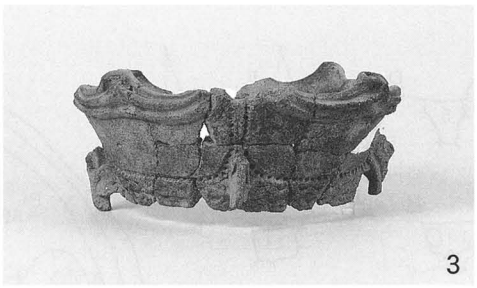


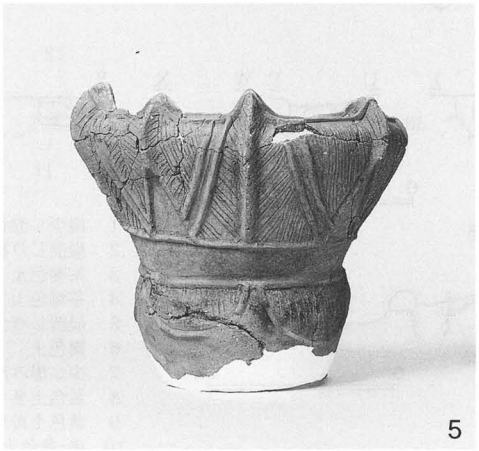
1　炭少し混じる黒褐色土
2　炭混じり褐色土
3　茶褐色土
4　茶褐色土ブロック・炭混じり褐色土
5　炭混じり少し黒みがかった褐色土
6　褐色土
7　少し黒みがかった褐色土
8　黄色土多く混じる褐色土
9　黄色土粒少し混じる褐色土
10　炭・黄色土少し混じる褐色土
11　黄褐色土
12　黄色土混じり褐色土
13　黄色土ブロック混じり褐色土
14　炭・黄色土小ブロック混じり褐色土
15　黄色土粒混じり黒褐色土
16　黄色土ブロック・黒褐色土大ブロック混じり褐色土
17　堅い黒色土ブロック非常に多く含む褐色土
18　粘土質黄色土(貼り床)
19　黄色土小ブロック・黒褐色土ブロック混じり褐色土(貼り床)
20　黄色土・黒褐色土ブロック混じり 褐色土(埋めた土)
21　黒褐色土
22　炭多く・焼土少し混じる褐色土
23　焼土多く混じる黒褐色土
24　黄色土混じり褐色土(埋めた土)
25　焼けた黄色土

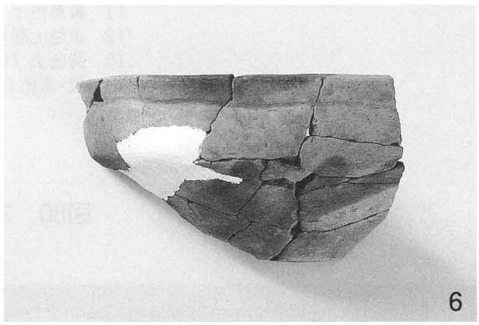
図80　345号住居址実測図



写83　345号住居址　炉と埋設土器

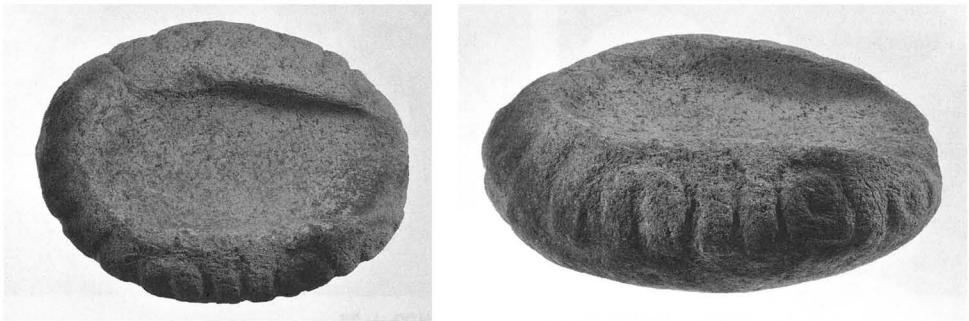




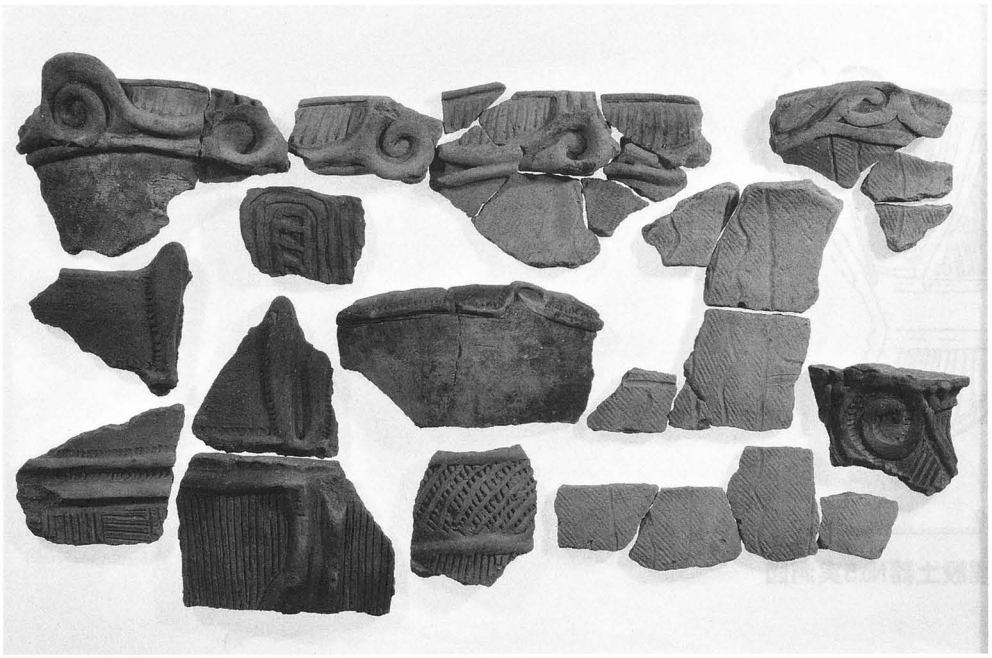


1 No.2　2 No.1　3 No.6　4 埋土出土　5 No.5　6 埋土出土（330埋土からも一部出土）

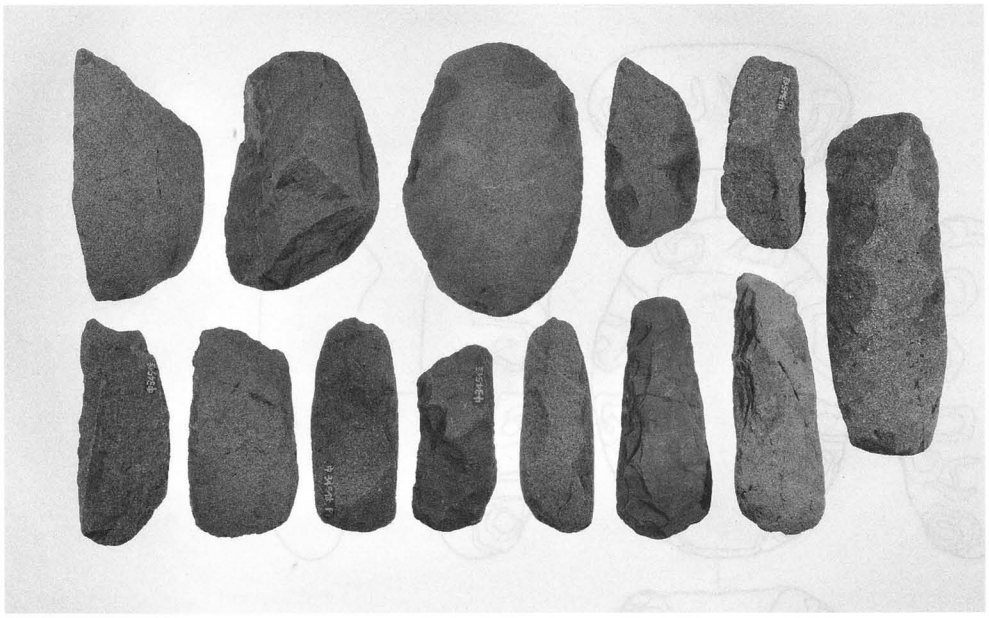
写84　345号住居址出土土器



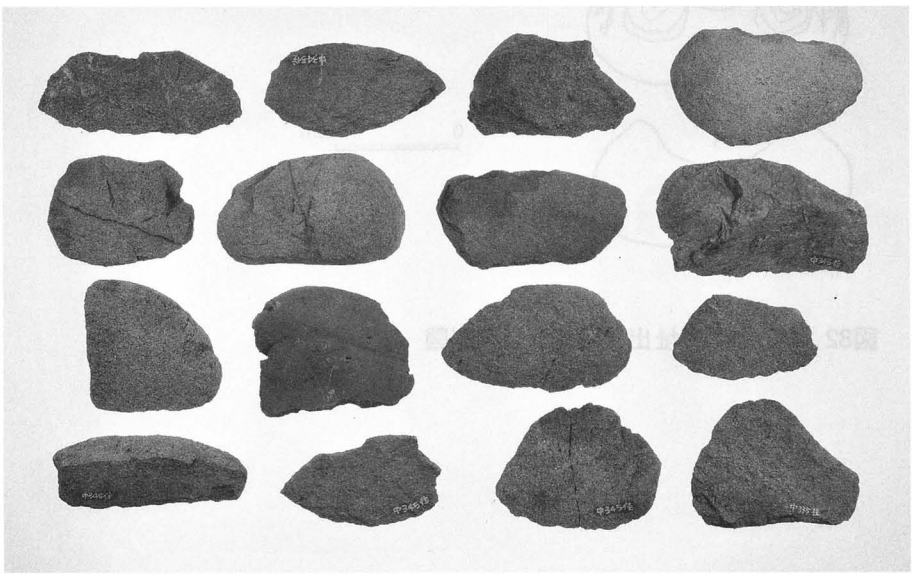
写85　345号住居址出土石皿　No.4



埋土出土土器片



打製石斧



横刃型石器

写86　345号住居址出土遺物

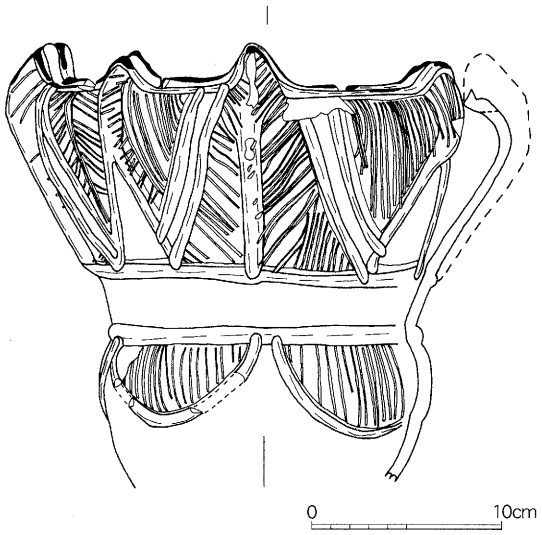


図81　345号住居址炉横埋設土器No.5実測図

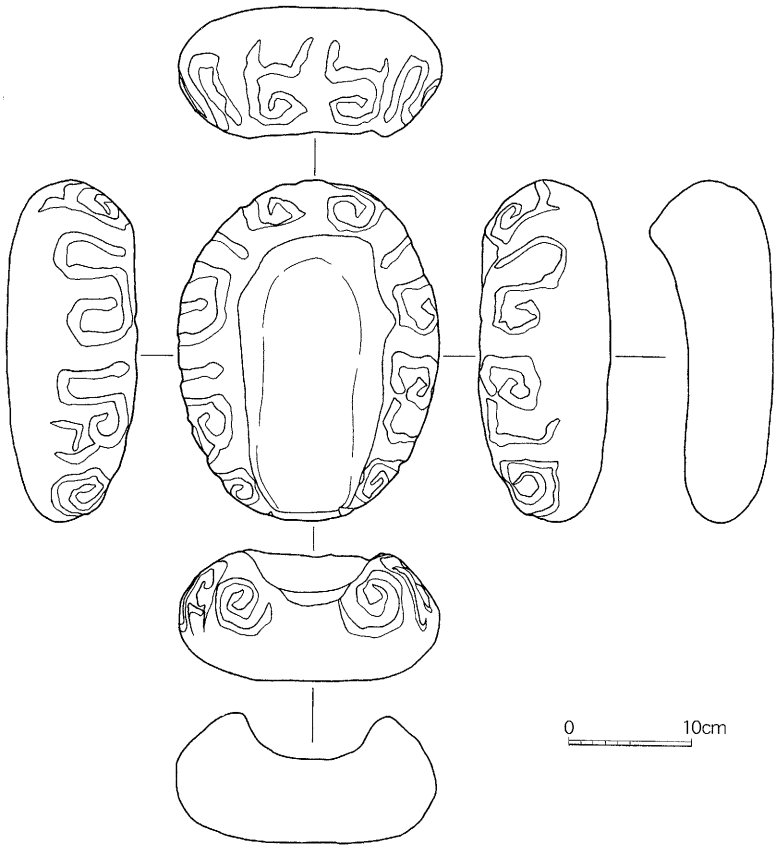


図82　345号住居址出土石皿No.4実測図

（２）59号竪穴

ＡＬ13、ＡＬ14グリッドの北で発見された。遺構検出面から遺構の底面までは20㎝ほどで壁はゆるく立ち上がる。埋土の状態は記録できていない。内部に深さ30～40㎝のピットがあるが、配置が不規則で、貼り床や炉に相当する施設も確認できなかった。

遺物は少なく、土器は曽利Ⅰ式期の破片、石器は打製石斧３点、横刃型石器１点、石鏃１点と、粗大剥片１点、黒曜石類の剥片・屑片10点、石核８点、原石１点、ピエス・エスキーユ１点が出土している。

所属時期は中期後葉Ⅰ（曽利Ⅰ）期である。

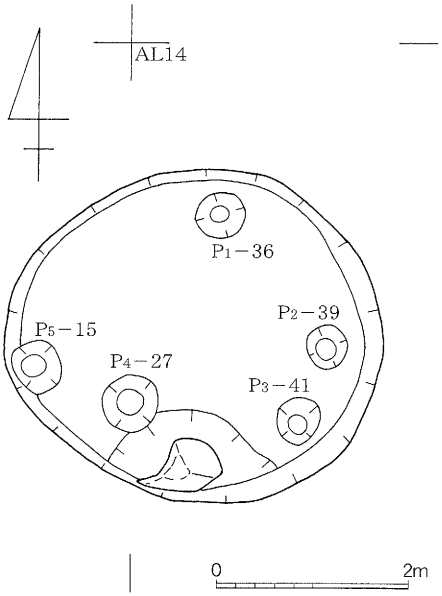


図83　59号竪穴実測図

（３）土坑

用地内で14基の土坑が発見された（194～207号土坑）。そのうち、327号住居址の壁と切り合う位置に３基（194～196号）と344号住居址と切り合うようにして４基（202～205号）の土坑があるほか、337号住居址の南東に３基（198、199、201号）が集中している。345号住居址の西方で発見された206、207号土坑は共に人為的なものとは言い切れない。

遺物は、196・199号土坑から中期後葉Ⅰ（曽利Ⅰ）期の、198号土坑から中期初頭の、200・202号土坑から中期中葉の土器片が出土しているほか、344号住居址と切り合う土坑から、中期後葉Ⅱ（曽利Ⅱ）期の土器が出土している。石器では、200号土坑から打製石斧と粗形刃器が２点ずつ出土したほか、344号住居址と切り合う202～205号土坑のうちから顕著な使用痕が観察される打製石斧６点、横刃型石器２点、乳棒状石斧１点、敲打器２点と、粗大剥片２点、黒曜石の石核１点とともに、黒曜石の大きな原石が１点出土している。黒曜石の原石は一辺10㎝前後の夾雑物の少ない良質なもので、意図的に土坑内に埋めたものと判断される。

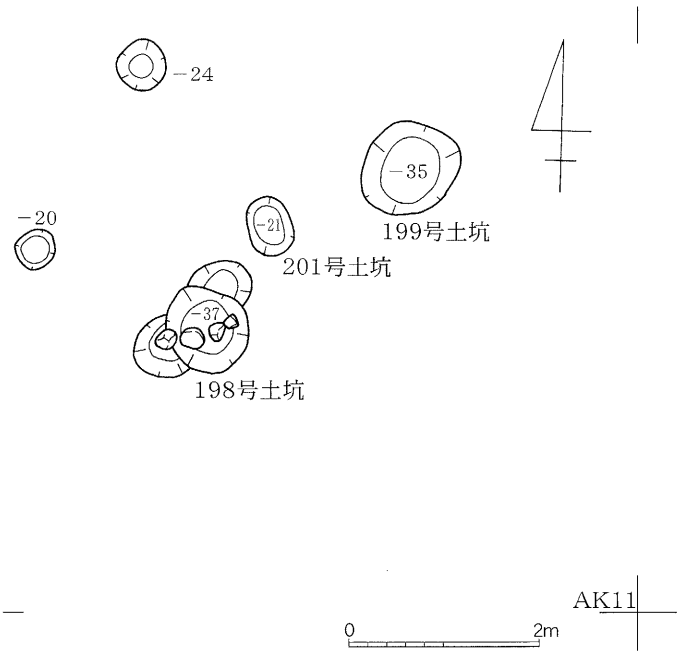


図84　198・199・201号土坑実測図

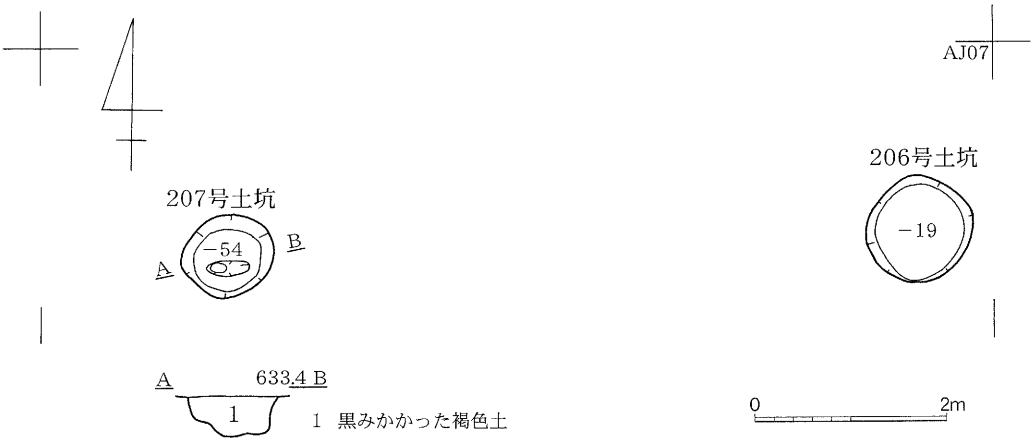


図85　206･207号土坑実測図

（４）集石

１）４号集石

ＡＫ09グリッドの南縁で発見された。平板な石を組むようにしてある。

２）５号集石

４号集石の西に発見された。ほぼ三角形にこぶし大程度の石が集まっていた。４・５号集石付近からは、中期後葉Ⅰ（曽利Ⅰ）期の土器片が少量出土している。

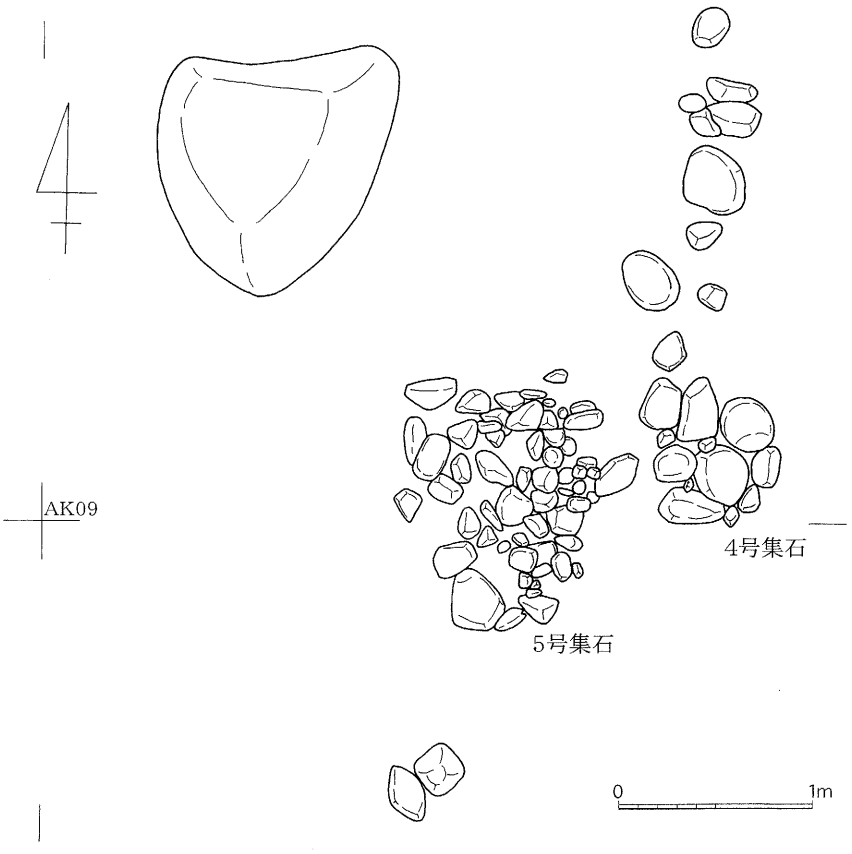


図86　４・５号集石実測図

３）６号集石

332号住居址の埋土中のＡＫ12、ＡＬ12グリッドの西端に発見された規模の大きな集石で、直径は2.6～2.8mを測る。石は下層ほど大きく、一番外側の石は内側に傾けて立てたような状態にあった。全体としては積み上げたような印象があるが、集石の下面が332号住居址の検出面よりも下位にあり、石の集まりにあまり崩れた様子がないところから、廃絶した住居がある程度埋まってできた凹みに積まれていた可能性が高い。

多量の遺物が遺棄された住居址埋土中の遺構であり、石の間から遺物も出土したが、集石に伴うと特定できた遺物はない。集石の間から打製石斧６点、乳棒状石斧１点、叩石１点と粗大剥片４点が出土している。

332号住居址との位置関係をみると、332号住居址廃絶後にその東側を切るようにして築かれた330号住居址があるが、６号集石は、ちょうどその330号住居址を避けるようにしながら、332号住居址の範囲に納まる円を描くようにして築かれている。332号住居址は、廃絶後の凹みが中期中葉末期に、破損した土器を中心とする使えなくなった道具を集中的に廃棄する場として使われており、そのようなことがおこなわれなくなったころ、すぐ近くに建てられた住居を避けて、以前は土器廃棄のための特殊な場所であったところに築かれたのがこの６号集石である、とすることが可能であろう。

集石が築かれたのは、中期中葉Ⅵ(井戸尻Ⅲ)期と後葉Ⅰ(曽利Ⅰ)期の間ということになる。

４）７号集石

ＡＫ11、ＡＫ12グリッドの北側、６号集石の南西に発見された。やや散漫に大きな石が集まっている。

５）８号集石

ＡＬ12グリッドの西端、333号住居址の埋土中に、その西壁に接するようにして発見された。こぶし大から人頭大の礫が円形に集められており、住居址の埋土を先に掘り上げてしまったため断定はできないが、密に集まって集石を構成する礫にほとんど動いた形跡がないことから、断面図で破線で示したように、礫はピット状の遺構の中に埋置されたものと想定した。集石に伴う遺物は特定できなかった。333号住居址が井戸尻Ⅲ式期であることと、周辺に曽利Ⅱ期以降の遺構がなく遺物も出土していないことから中期後葉Ⅰ(曽利Ⅰ)期の遺構としておきたい。

６）９号集石

集石に伴って中期中葉末の土器片と、打製石斧２点と粗大剥片５点が出土している。

７）10号集石

ＡＬ19グリッドの北東に発見された人頭大の礫がやや散漫に集中する集石である。この集石の北東から土器(写87・図90)が発見されている。正位の状態で発見され、胴部上半から上だけが欠損していることから、正位に埋置されていたものであろうが、埋置時の状態まではわからない。井戸尻Ⅲ式である。

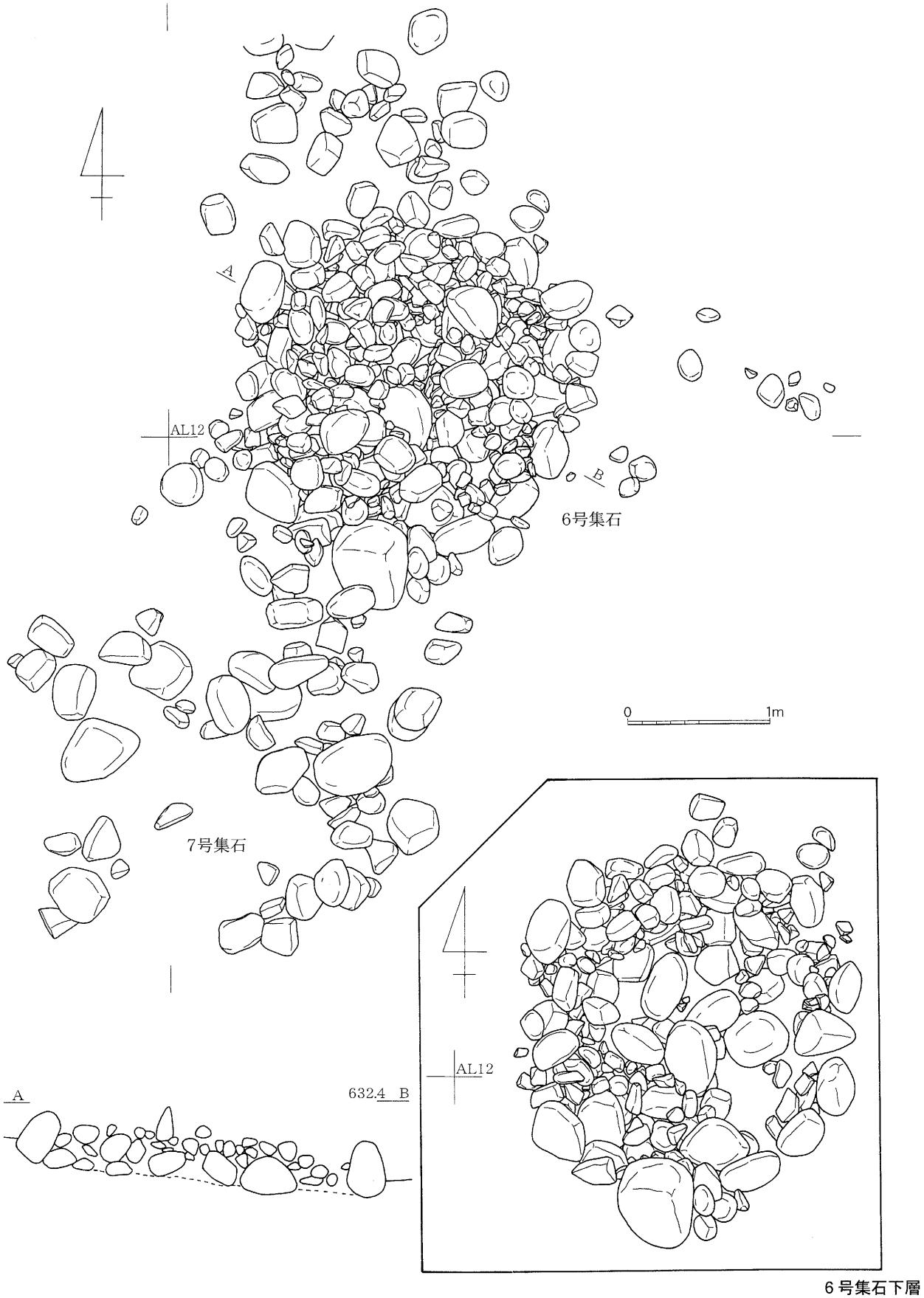


図87　６・７号集石実測図

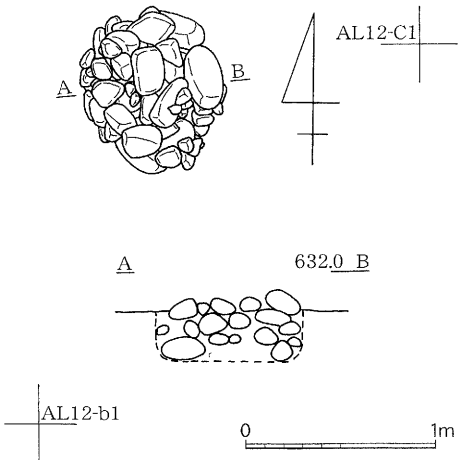


図88　８号集石実測図

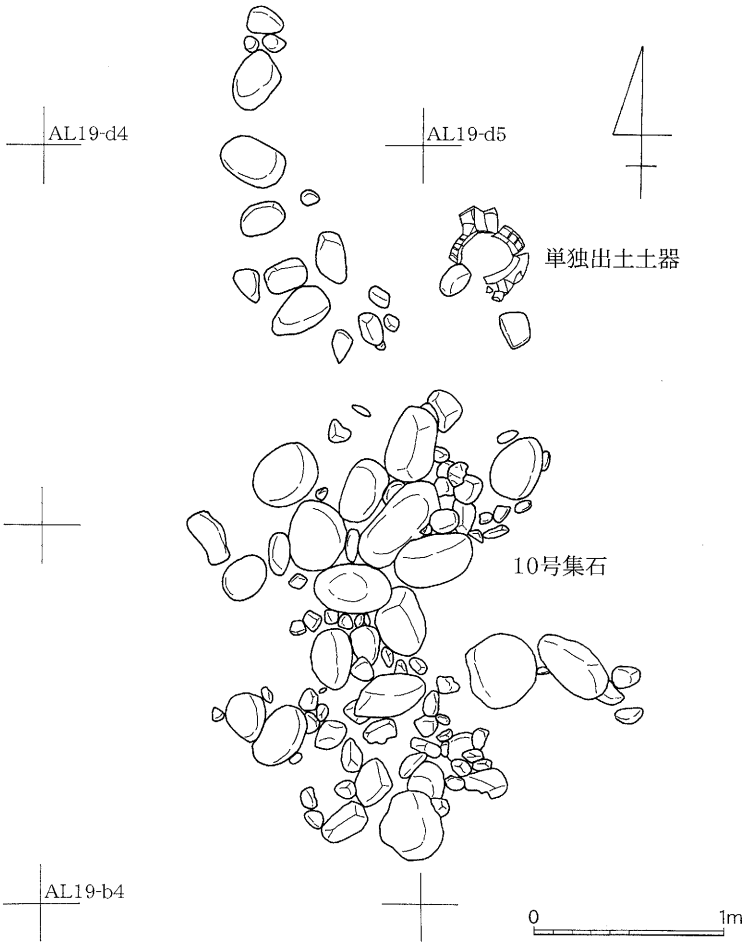


図89　10号集石実測図

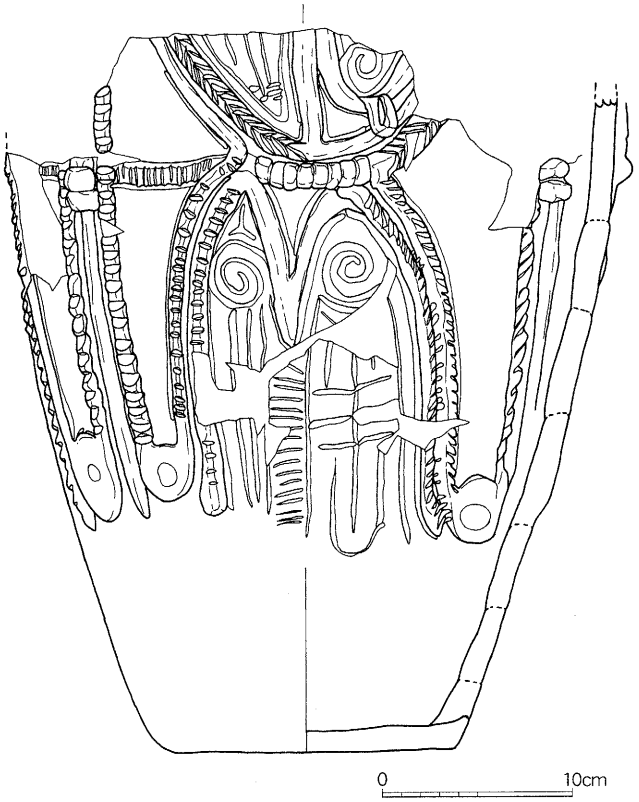


図90　10号集石北東出土土器実測図

出土状況

写87　10号集石北東出土土器

7　12街区

（１）62号竪穴

ＡＬ20グリッドの北側で発見された。北側は調査を終えた駅仲町線の工事によってすでに掘削されており、西側は調査前の地表面観察をもとに調査予定地外とした部分であり、調査できたのは南東の４分の１ほどである。遺構検出面から底面までは35～40㎝、壁はゆるく立ち上がり底面にピット等の施設はない。石を含む土中に築かれた遺構であり、壁や底面から多くの石が顔を出している。

遺物は少なく、縄文を地文とする加曽利Ｅ系の土器片が出土している。

所属時期は中期後葉Ⅱ（曽利Ⅱ）期である。

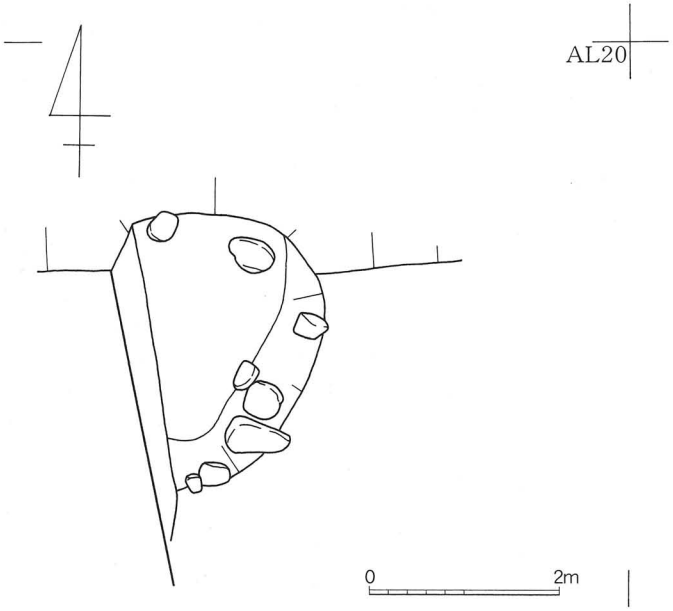


図91　62号竪穴実測図

第３節　縄文時代後期の遺構と遺物

１　区画道路８号線

（１）石棺墓

１）３号石棺墓

ＡＯ23グリッドの北東に３基並んでいる石棺墓のうちの南の１基である。平面形は西から少し北の方向に軸線をおく2.1×1.0mの長方形を呈し、人頭大の石を積み上げて築いた土坑の短辺の内側に、壁に沿って立てて置かれた平石が西側のみ確認された。

３基の石棺墓は乱雑に積み上げられた人頭大から人頭２倍大の石によって覆われており、石棺墓の埋土と掘り込まれた土との間に、土色に大きな差がなかったことから、取り除くことができると判別しながら石と土を除去した結果、一定の形が現れて遺構の形態を特定したものであり、調査時に遺構の埋没状況を記録することはできなかった。

埋土から出土した遺物はごく少量で、土器片の中に斜走沈線を付すものがあることから、後期中葉～後葉の遺構であろう。

２）４号石棺墓

ＡＯ23グリッドの北東に３基並んでいる石棺墓のうちの中央の１基である。平面形は３号石棺墓と同じく、西から少し北の方向に軸線をおく長方形を呈し、規模は2.2×1.4mである。３基の中では形態的に最も整っており、長辺は人頭大の石を３段ほど斜めに積み上げてあり、短辺の内側には丸みをおびた平石が壁に沿って立てて置かれている。埋土から出土した遺物は多いが副葬品はない。土器は大部分が小破片で、中に、内湾する口唇部にコブ状の突起を付し、その下を斜走沈線で埋めるものがあり、後期後葉、曽谷・安行併行期の遺構と考えられる。西の壁外から土偶の頭部が出土している。

３）５号石棺墓

ＡＯ23グリッドの北東に３基並んでいる石棺墓の北端の１基である。西端が用地外となるため長さは推定で2.0×0.7mの平面長方形を呈し、他の２基と異なって西から少し南の方向に軸線をおく。人頭大の石を積み上げて築いた土坑の短辺の内側に、同様にして平石が壁に沿って立てて置かれていた。

埋土からの出土遺物はごく少量で、土器片の中に斜走沈線を付すものがあり、３号石棺墓と同様、後期中葉～後葉の遺構と考えられる。土偶の脚部１点が出土している。

（２）配石・石積遺構

３基の石棺墓の北東が35cmの比高差をもって一段低くなっており、その斜面の部分を覆うようにして石が密集して発見された。調査区の北端に近いＡＱ23グリッドにも大きな石が集積しており（図６）、現在は整地されて地表面では確認できないが、用地東側一帯が、以前は北側の方が低くなっていたことから、居住域の東端に斜面があり、そこに石積みをしてあったものと判断した。一段低い面には、この石積み下端に接して、直径1.8mの範囲に、一辺70cmの大きな平石１点を含む十数個の石が、敷き並べたような状態で発見されており、これも人工的な遺構であると判断した。

遺構が築かれた時期を特定できるような遺物は出土していないが、集落に伴う施設であると考えられることから、西方で発見された遺構の所属時期、つまり縄文後期の加曽利Ｂ併行期あたりに求めることができよう。

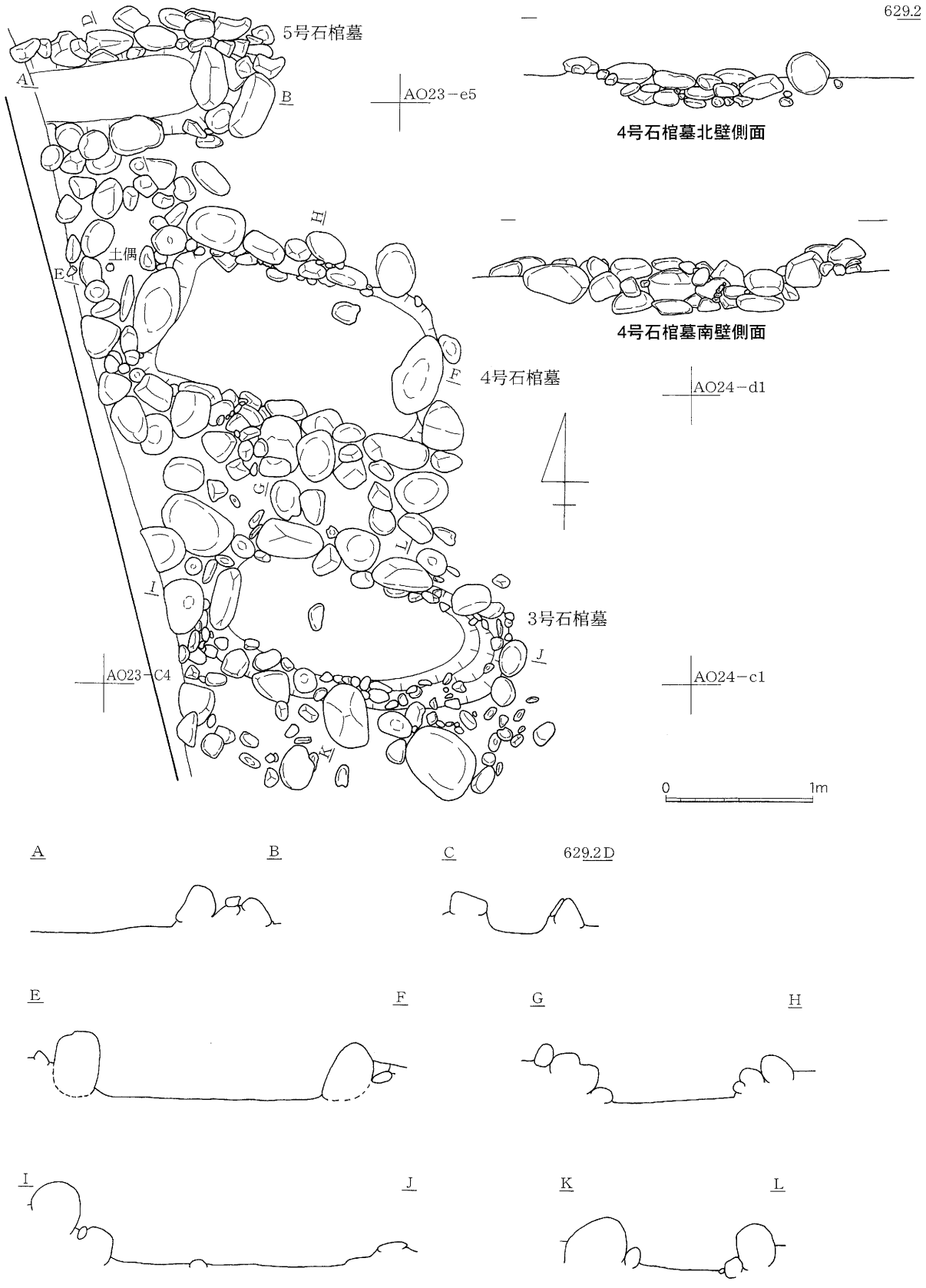


図92　３・４・５号石棺墓実測図

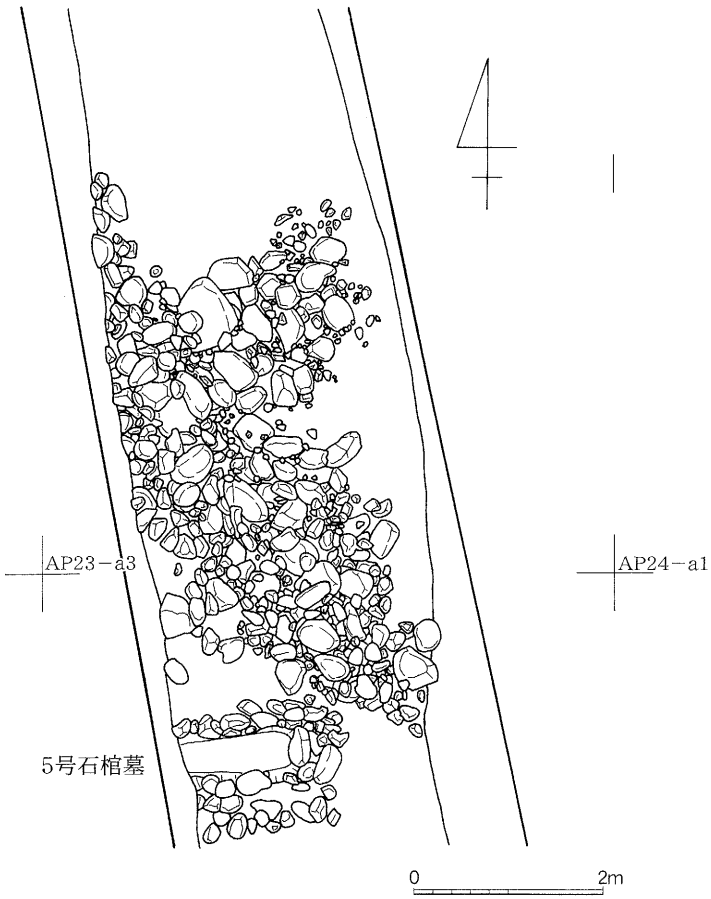


図93　石積遺構南側実測図

2　駅仲町線

（1）住居址

1）338号住居址

ＡＮ22グリッドの南西隅に発見された。平面方形に積み上げた石で壁を構成する「方形石囲住居」である。他の同形の住居と同様に、浮いた石をはずしながら掘りすすめた結果姿を現したものであり、図化した石が全て住居の壁を構成するとは言い切れないが、平面形は東北東方向に長軸をおく5.0×4.0mの長方形で、内法は隅の部分の石が多いことから長円形を呈する。掘り上がったところでは石で囲まれた床面は周囲よりも10㎝ほど低くなっている。西から南にかけての壁は石がかなり整然と積み上げられたように見えるが、南東側の石はさほど密ではない。床の中央の焼けている部分が炉で、西壁近くに径20㎝の小さな柱穴２本を検出したが、それ以外の施設は検出できなかった。東に遺構検出面に置き並べたようにして発見された大きな平石の集まりは、隣接する339号住居址の入口施設と判断した。

遺物包含層中に発見された遺構であり、埋土の範囲から出土した遺物の中から遺構に伴わない遺物を峻別することは難しい。土器はすべて破片で、加曽利ＢⅠからⅡ併行が主体である。中に深鉢土器の底部片を皿状に加工したもの(写88)と、ミニチュア土器(図95)がある。石器は横刃型石器２点、棒状の扁平礫を使った叩石２点、石棒１点だけで、ほかに粗大剥片９点、硬砂岩の棒状礫２点と黒曜石の剥片・屑片23点、石核６点、原石７点、ピエス・エスキーユ１点が出土した。基部の断片と判断した石棒が安山岩製でかなり大型となるであろう以外は、石器に見るべきものはない。

所属時期は加曽利Ｂ併行の古い時期とすることができる。

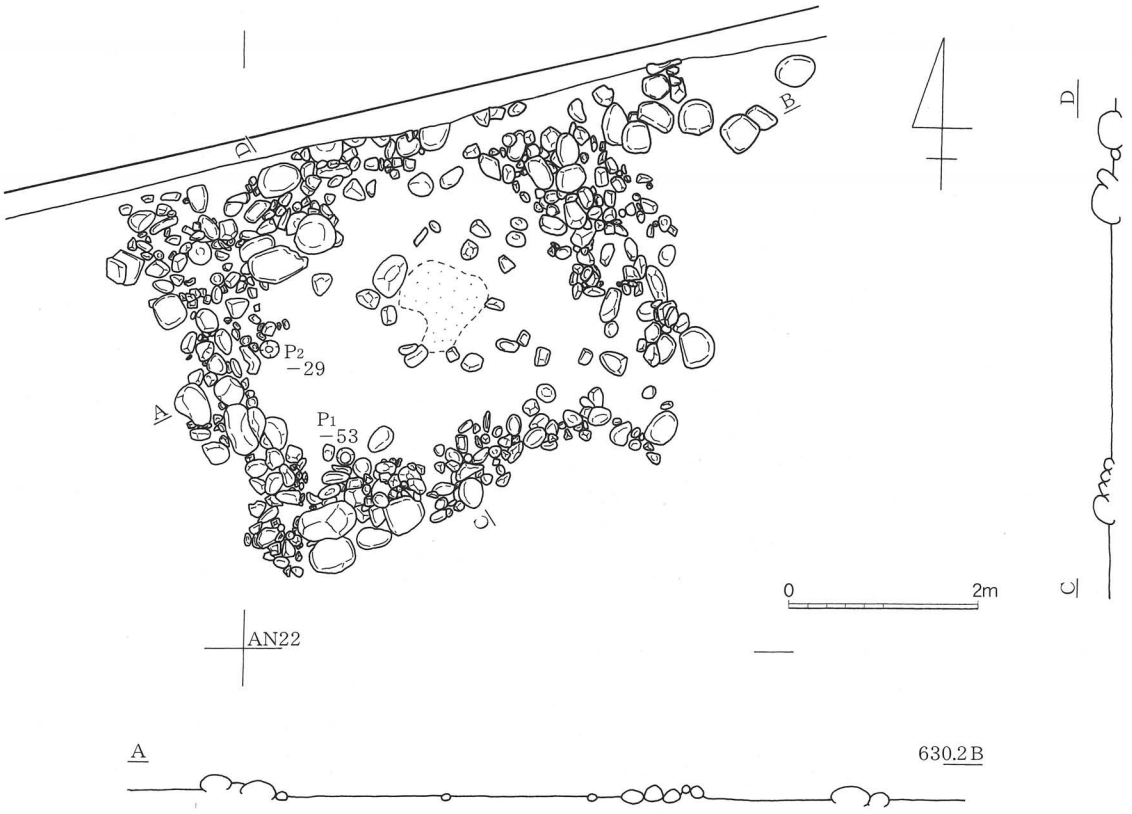


図94　338号住居址実測図

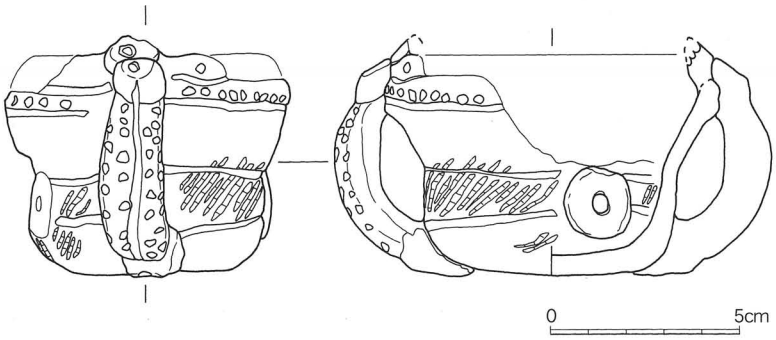
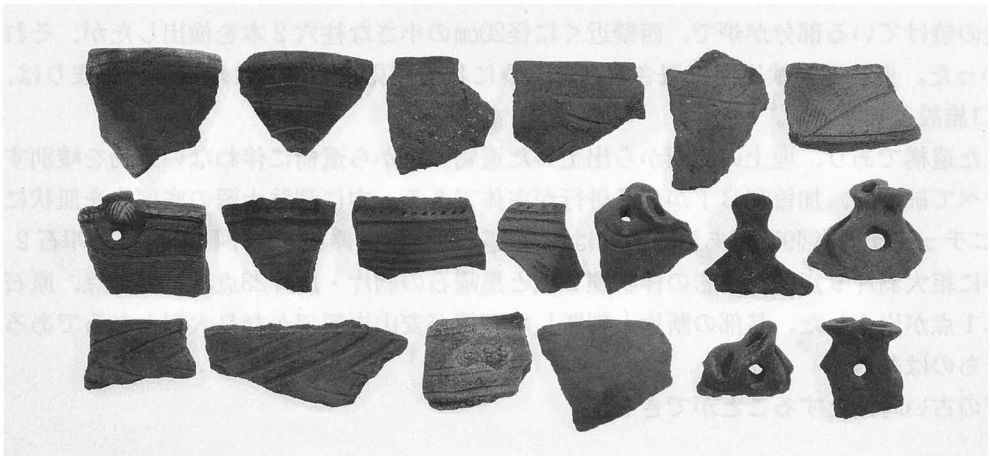


図95　338号住居址出土ミニチュア土器実測図

皿状に再加工した深鉢底部

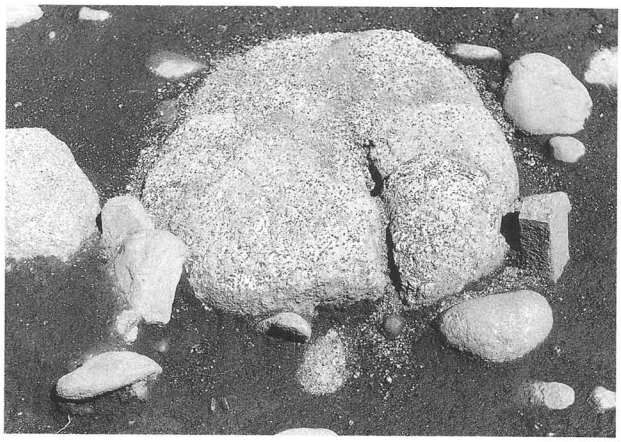


埋土出土土器片

写88　338号住居址出土遺物

２）339号住居址

ＡＮ22、ＡＮ23の南端に発見された。遺構検出面から床面まで10㎝ほどと浅く、平面形は東から少し北に軸線をおく直径5.0ｍの不整五角形となる。壁はゆるく立ち上がり、周溝は検出されず、主柱穴は壁直下に配されたP1、P2、P4、P5の４本で、P3も柱穴としていいであろう。黒色土中に築かれた住居であり、床面も地山までは達しておらず、周囲よりも軟らかい土が埋まっている範囲で柱穴のプランを決めた。炉は中央西寄りに位置する細長い石を組んだ方形石囲炉で、炉の周囲に同じ高さに平石が並べられていること、北西の壁上に大きな平石が置かれていること、北西外に入口施設と思われる配石があることから、大部分に石がないものの、敷石住居であると考えた。北西の壁上に置かれた平石は表面の風化が進んでおり、その石を固定するように、東と南に接して6.0×4.5㎝長さ42㎝の角柱状の石を二つに折ったものが杭のようにして埋め込まれていた(写89)。



写89　339号住居址西壁上の平石

遺物はさほど多くない。土器は全て破片で、加曽利Ｂ併行の新しい段階のものも少量あるが、曽谷・安行併行の古い段階のものが主体を占める。石器は打製石斧と思われるもの１点、横刃型石器１点、叩石１点、石冠１点、石鏃２点と、粗大剥片２点、硬砂岩の棒状礫３点、黒曜石類の剥片・屑片23点、石核13点、原石１点、ピエス・エスキーユ３点が出土した。石冠はあまり精巧でなく、形も整ってはいない。黒曜石の剥片類はいずれも小さい。

所属時期は出土土器から曽谷・安行併行期に求められる。

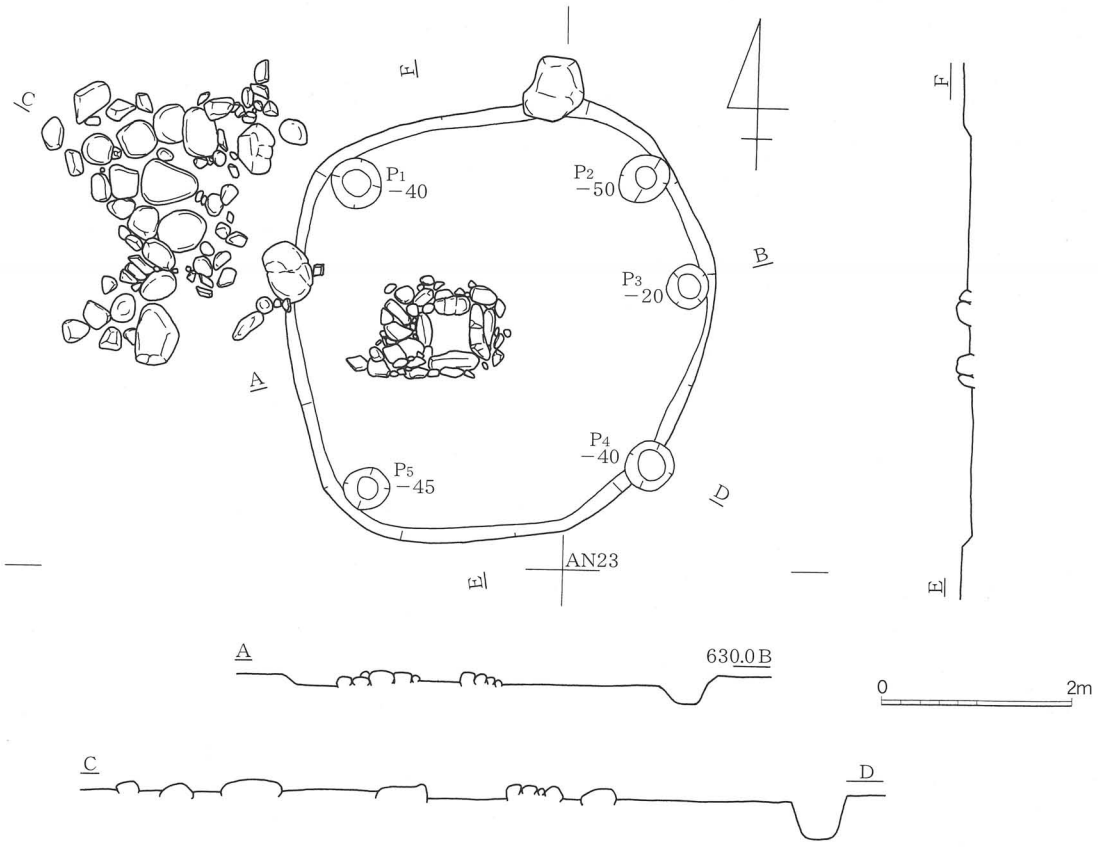
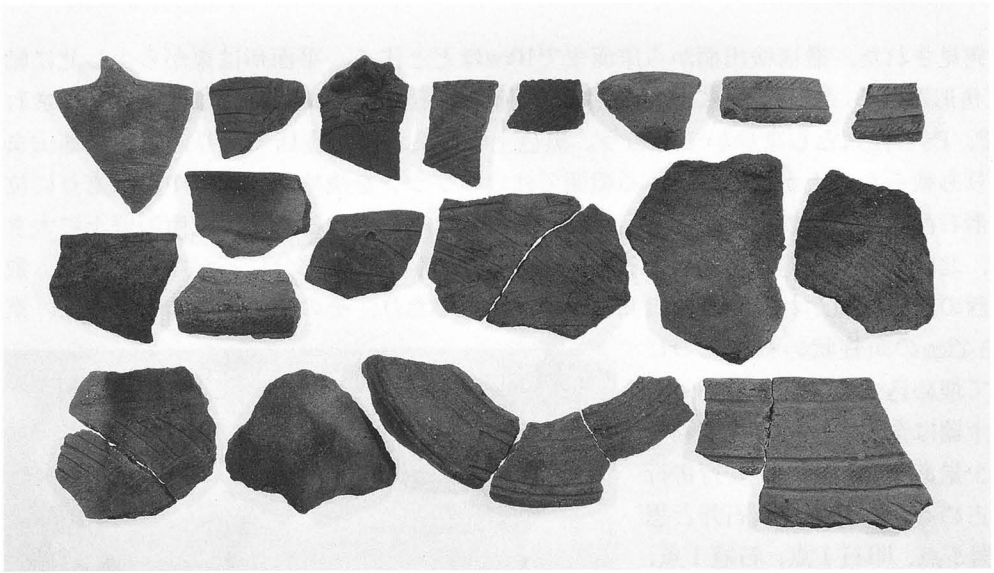
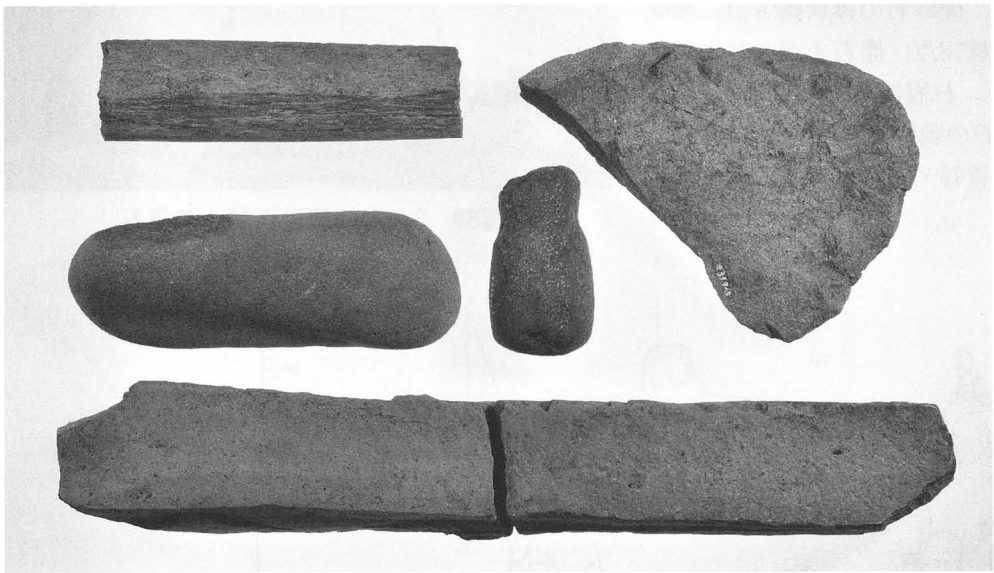


図96　339号住居址実測図



埋土出土土器片



角柱状礫・棒状礫・石冠

写90　339号住居址出土遺物

３）340号住居址

ＡＮ22グリッドの北西隅で発見された。北の隅が用地外となる。他の住居と同様、浮いた石を取り除く過程で方形に並ぶ石列が見えて遺構としたものであり、積み上げた石で壁を構成する「方形石囲住居」である。平面形は西北西方向に長軸をおく、外縁で6.0×5.0mの長方形で、内法は4.6×3.6mほどである。南西の壁が保存状態が比較的良く、それによると壁を構成する石は、内側から外に向かって次第に高くなるように積み上げてあり、下層よりも上層の方が石は大きいように見受けられる。南の角に三角形を描くようにして石が集められている部分や、北西の壁から80㎝内側に検出された小さな石の列、南西壁から炉に向かって弧を描いて張り出す石の列なども、何らかの意味があるものと判断される。床面に貼り床はなく柱穴も検出することができなかった。中央南東寄り床面の焼土は炉としていいであろう。

遺物のうち土器は多く、加曽利ＢⅠ併行の深鉢（写91-1、2）、鉢（３）、注口土器（５）のほか、破片も同時期のものが主体を占める。石器は乳棒状石斧２点、定角式磨製石斧１点、叩石３点、礫石錘３点、石鏃６点、スクレパー１点と、不定形な粗大剥片23点、黒曜石の剥片・屑片61点、石核21点、原石３点、ピエス・エスキーユ３点が出土した。礫石錘のなかに打剥後擦切切目加工がみられるものが１点あるほか、分銅型土製品１点（写92下右）が出土している。

所属時期は、加曽利Ｂ併行の古い時期である。

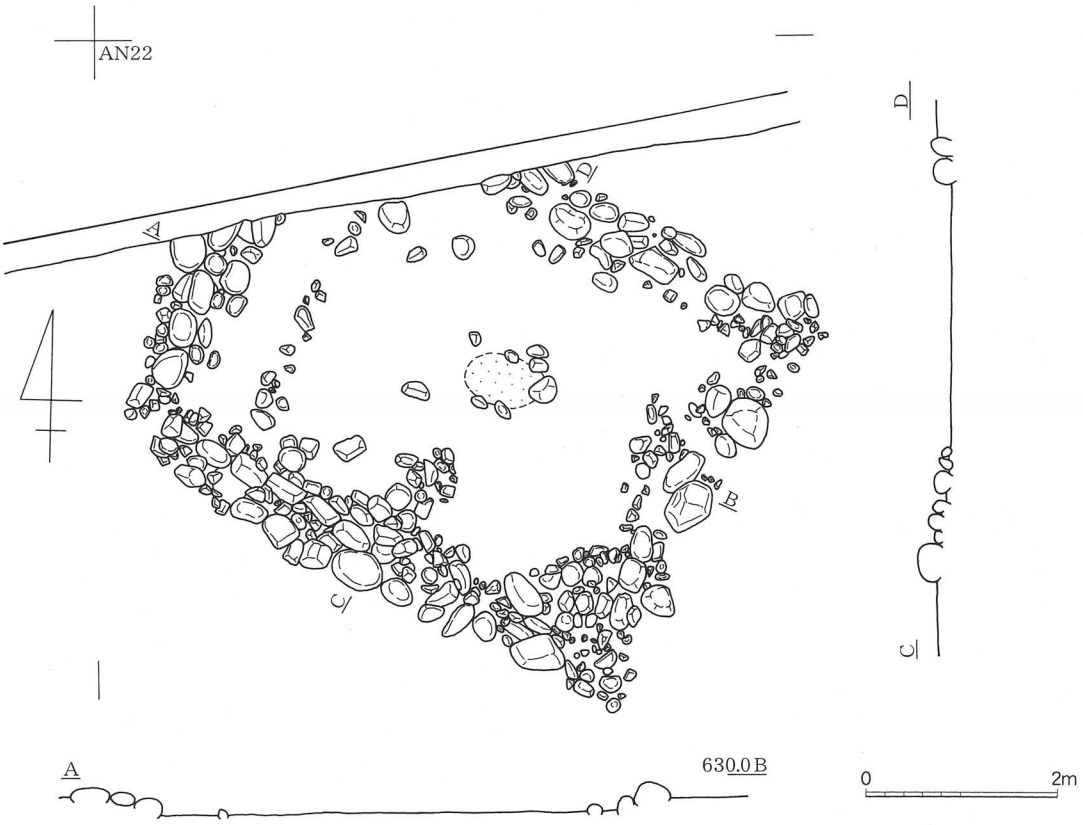
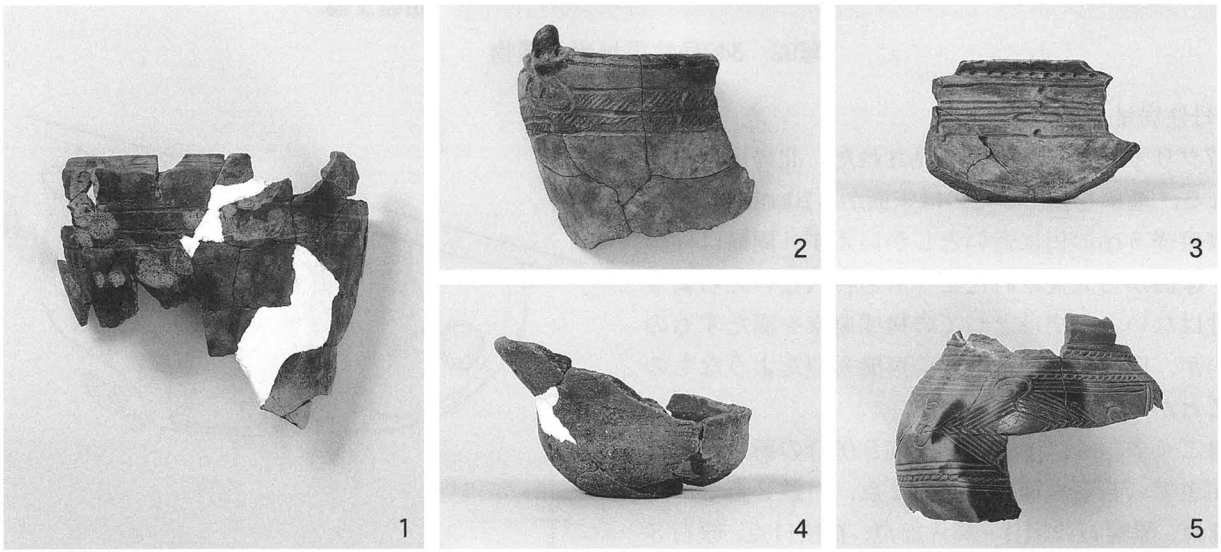
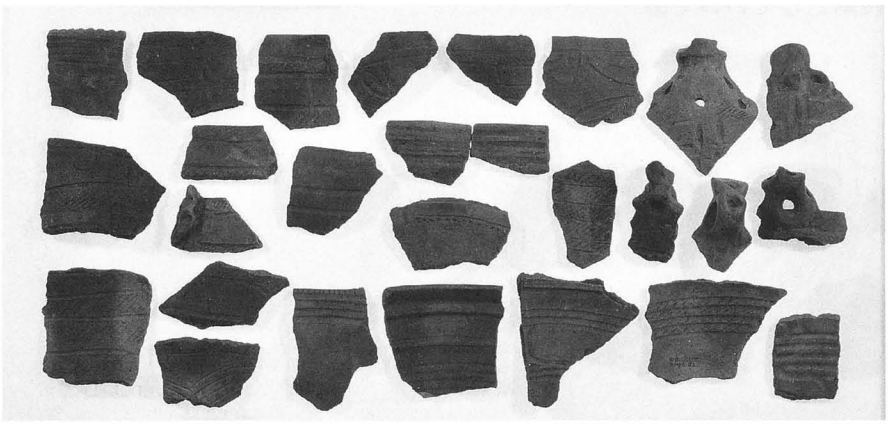


図97　340号住居址実測図

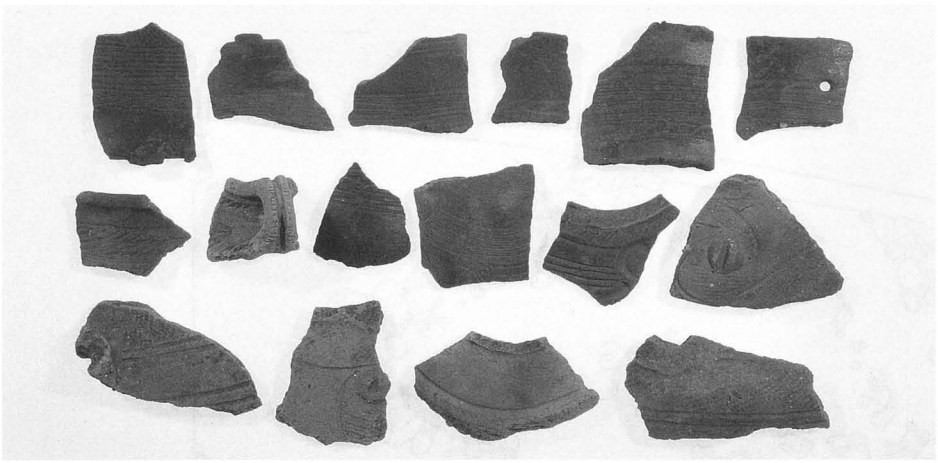


埋土出土土器（１・２は1/6、他は1/4）

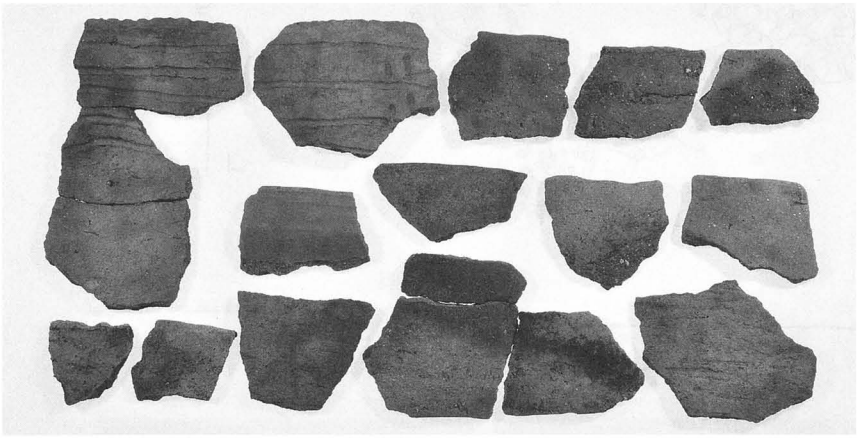


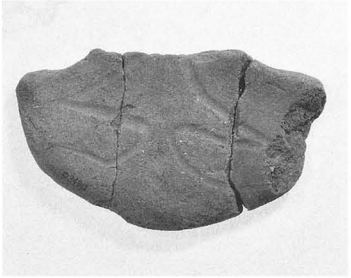
深鉢・鉢

写91　340号住居址出土遺物



注口土器





分銅型土製品

粗製土器

写92　340号住居址出土遺物

４）342号住居址

ＡＭ17グリッドの南西隅で発見された。北の半分は用地外となる。遺構を検出したのは床面から10㎝ほど上で、平面形は直径５ｍの円に近いとしかいえず、周溝は検出されず、床面から発見されたピットも柱穴といえるような規則性はない。住居址としての構成要素を満たすものではないが、同時期の他の住居の形態も似たようなものであることから住居址と判断した。

遺物はごく少なく、土器は加曽利Ｂ併行の新しい時期のものが主で、石器も横刃型石器２点、石鏃２点と、粗大剥片４点、黒曜石の剥片・屑片25点、石核11点、原石３点、ピエス・エスキーユ１点が出土しているだけである。

所属時期は加曽利Ｂ併行の新しい段階としていいであろう。

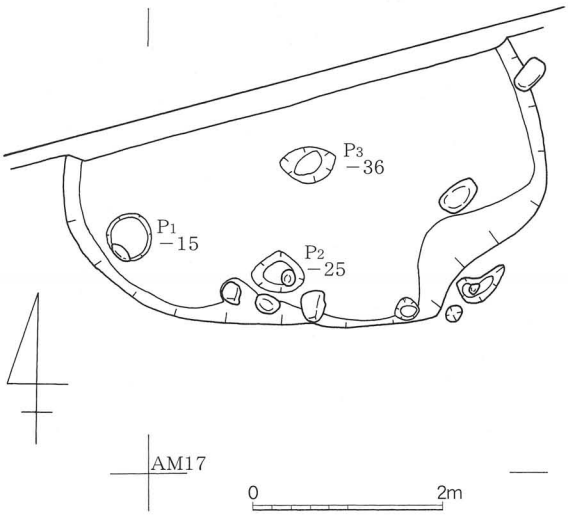
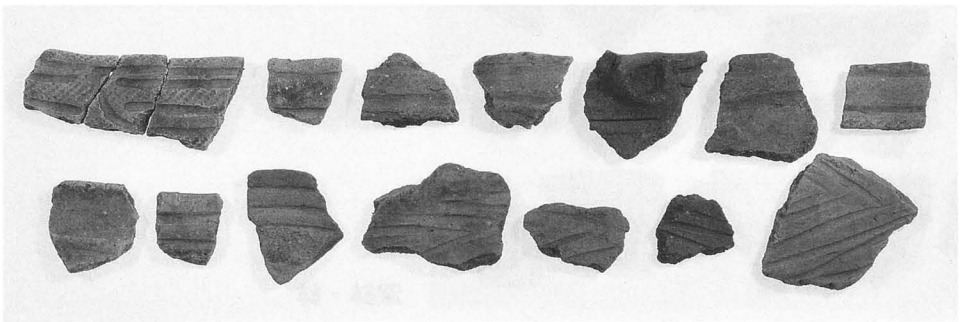


図98　342号住居址実測図



写93　342号住居址出土土器片

５）343号住居址

ＡＭ23グリッドの北西から発見された竪穴住居址である。北東の壁は確認することができなかったが、平面形は直径5.4mほどの円形となろう。規則的に並ぶ大きな石の発見によって把握した住居址であり、結果としてその石は、住居掘り方の外側に並ぶことになった。遺構検出面から床面まで深いところでも25㎝ほどしかない。東側の壁下に周溝があり、ほぼ中央に発見された焼土が炉となろう。

遺物は少ない。土器は加曽利Ｂ併行の破片のみで、石器は打製石斧５点、横刃型石器２点、叩石らしきもの２点、礫石錘10点、石皿１点、敲打製石器１点、石鏃４点、石匙１点と、粗大剥片７点、黒曜石の剥片・屑片21点、石核16点、ピエス・エスキーユ６点が出土した。数多く出土した礫石錘は、いずれも小円礫の両端を打剥するもので、縄文中期のものと形態上の差はない。

所属時期は加曽利Ｂ併行期の中に求められよう。

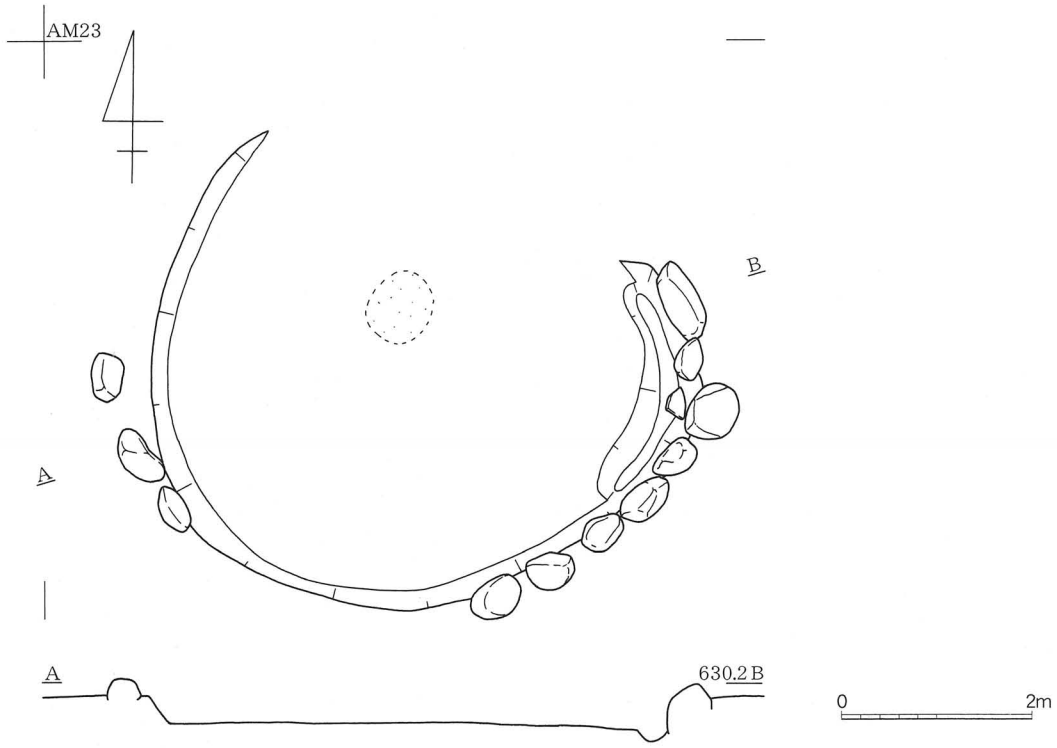
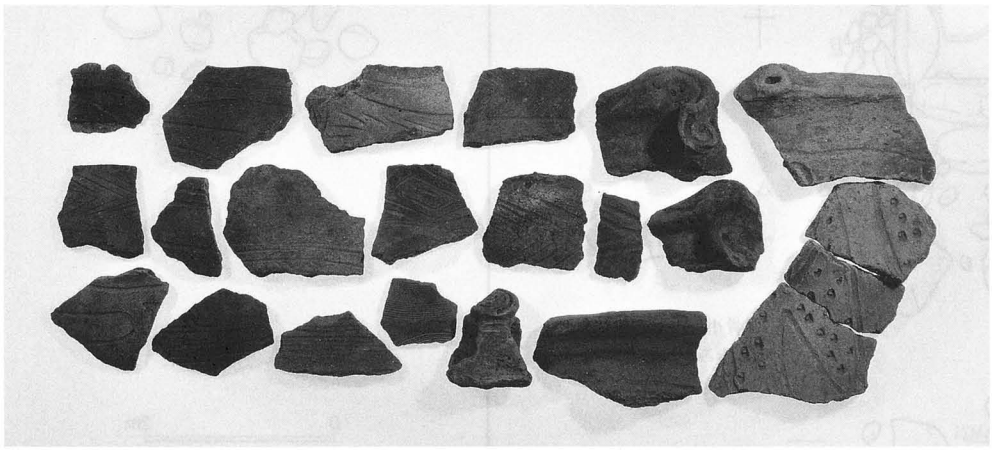


図99　343号住居址実測図



写94　343号住居址出土土器片

（２）２号石棺墓と11号集石

ＡＭ20、ＡＭ21グリッドの南側に大きな４個の平石を方形に組んだ遺構があり石棺墓であるとした。少し赤みがかった黒褐色土中に築かれた遺構であり、内部には炭と小さな骨片が混じる黒色土が観察された。南北に軸線をおく石棺墓は、外形で一辺90㎝を測る。北側の石が斜め内側に傾いている。埋土から黒曜石の小さな剥片・屑片６点が発見されたほかは遺構に伴って出土した遺物はない。

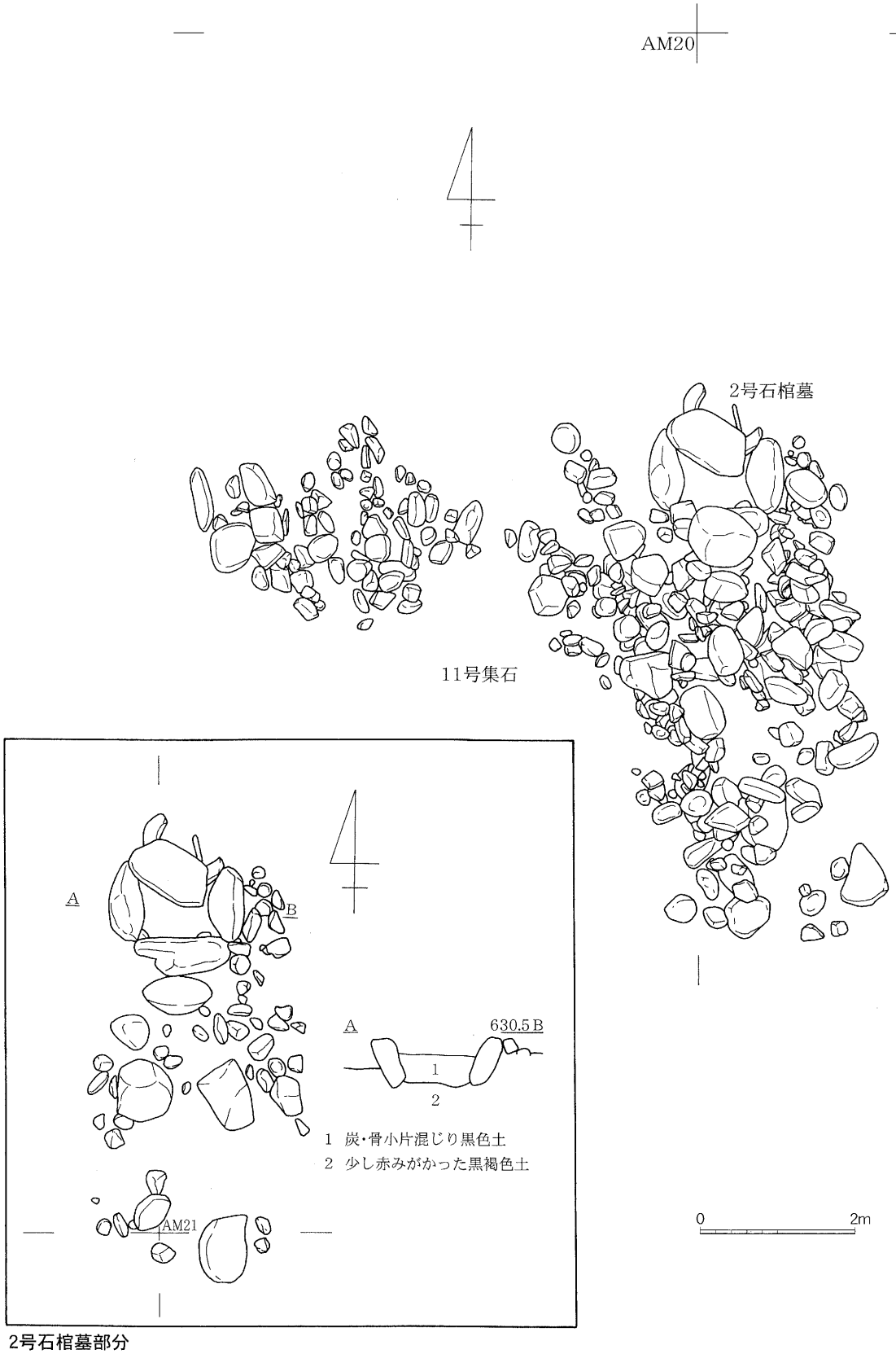
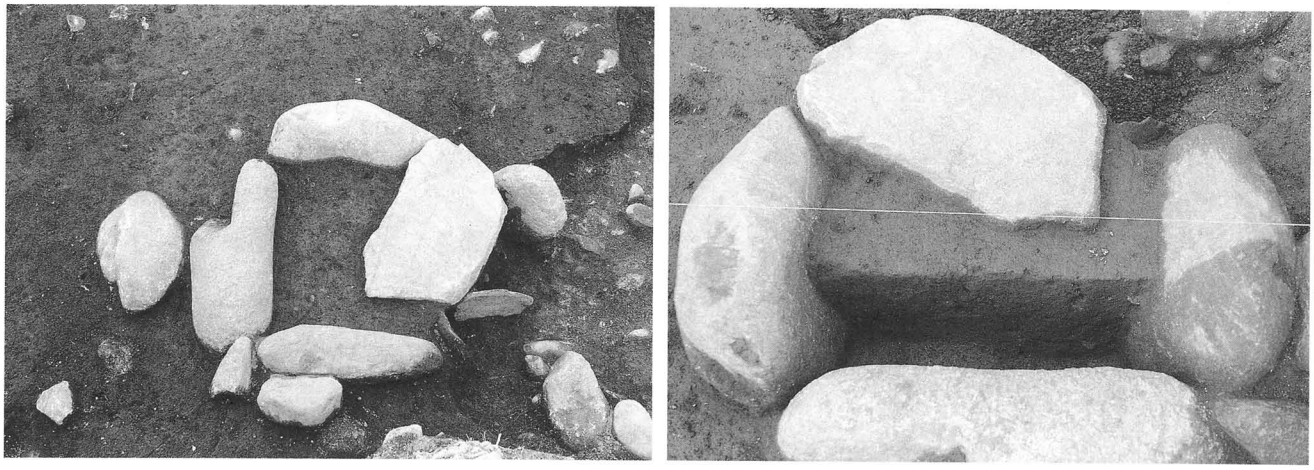


図100　２号石棺墓・11号集石実測図

この石棺墓の南に11号集石があり、その一部が石棺墓の上に重なるが、集石に規則性は見出せず、石棺墓との関係は不明である。石の間から打製石斧４点、横刃型石器３点のほか、粗大剥片14点、黒曜石の剥片・屑片28点、石核７点、原石２点、ピエス・エスキーユ１点が出土している。



写95　２号石棺墓

3　12街区

（1）住居址

1）365号住居址と環状集石

ＡＬ23、ＡＬ24、ＡＭ23、ＡＭ24グリッドに発見された。小さめの住居址の周りに、環状に石が集められた遺構であると判断したが、北側は区画整理事業の道路、東側は同事業に伴う整地のために調査時にはすでに掘削されてしまっていた。住居址は壁に相当するところに石を積み上げた「方形石囲住居」である。平面形は北北西に軸線をおく南北3.6m、東西3.4mのほぼ方形で、東西の壁がゆるく立ち上がっていることから下端では3.0×2.4mの長方形となる。黒色土中で浮いた石を順次取り除いた結果姿を現した遺構であり、調査過程で遺構の埋没状況を記録することはできなかった。壁に積み上げられたとした石は、きっちりと組まれた状態にはなく、図化したものが全てそれであると断定することはできない。床面に貼り床等はされておらず、埋土と判断した土を取りのぞきながら、移植ゴテに伝わる感触で掘り下げをやめた結果、南壁の内側が８㎝ほど半円形に高く残された。住居内に柱穴や焼土は発見できなかった。南の壁外に直径90㎝の、西の壁外に直径40㎝のそれぞれ深いピットがあり、住居址に関係するものと判断した。柱穴であるとすれば少なくとも西壁外に同様のピットが配されなければならないのだが、検出することはできなかった。P_2から一定量の加曽利Ｂ併行の新しい段階の土器片が出土している。

住居址の周囲を環状に取り巻くと考えた集石は、北と東がない状態での推定だが、外周の直径11m、石群の幅は２ｍとなる。住居址に近い側に比較的大きな石が並び、外周や石群の中には石が発見されなかったところも多い。ＡＬ24グリッドに大きな石がありそれらを結ぶと直径５ｍほどの円形となる。この大きな石は図上ではそれだけで何らかの遺構を構成するように見えるが、南東への斜面であり遺構とは考えられなかった。少なくとも西側の環状集石の内側の石列は、365号住居址と関連するものとしたい。

遺物は多い。土器は全て破片で、加曽利Ｂ併行Ⅱ段階が主体となる。住居址埋土から出土した石器は少なく、打製石斧の破片２点、叩石１点、礫石錘１点、石鏃８点、石錐２点と、粗大剥片５点、黒曜石類の剥片・屑片59点、石核26点、原石１点、ピエス・エスキーユ７点だけである。埋土から骨片が出土し、環状集石に伴って整理箱９箱分の遺物が出土しているが、それらについては分析できていない。

所属時期は加曽利Ｂ併行の新しい時期としておきたい。

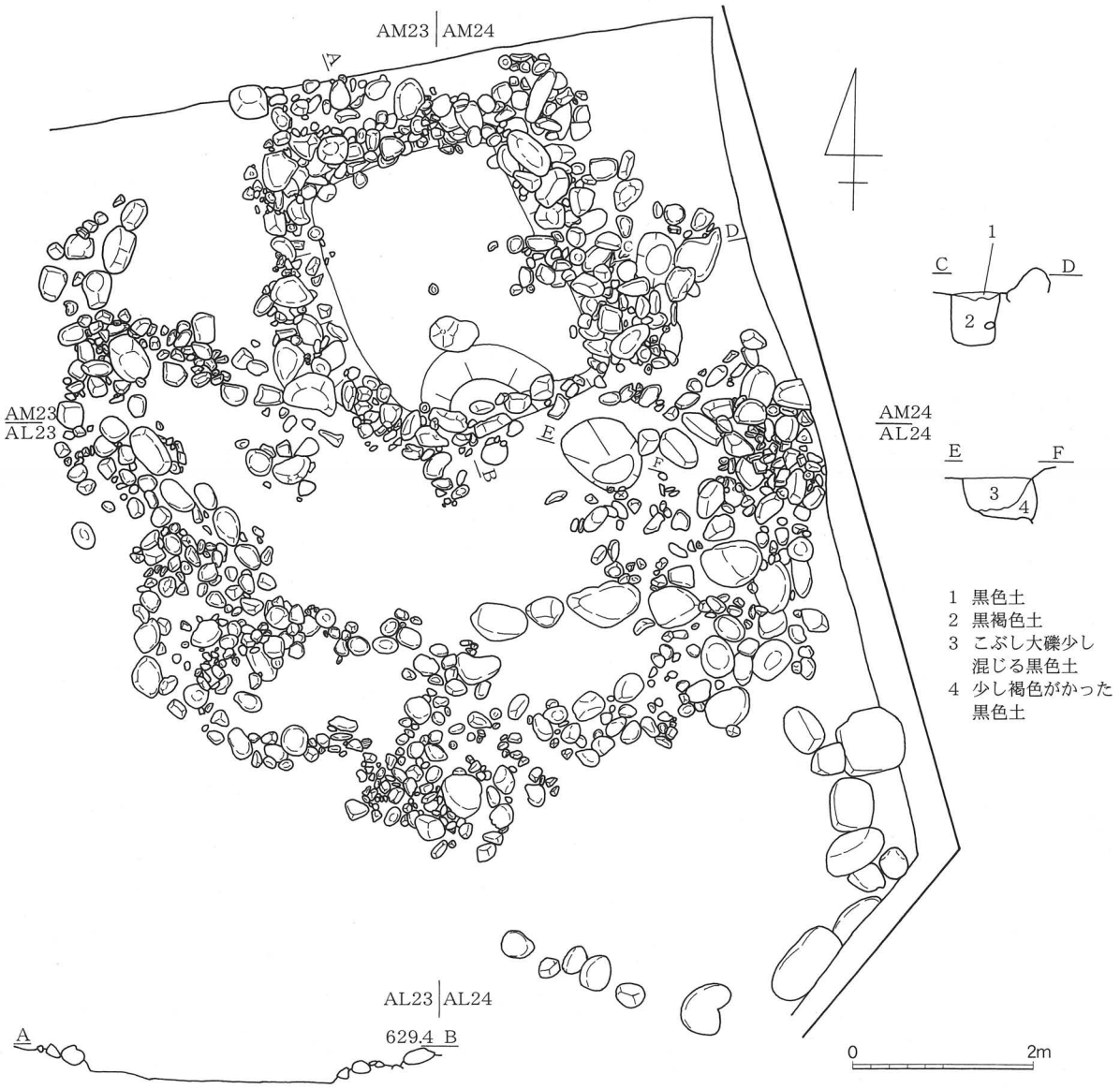
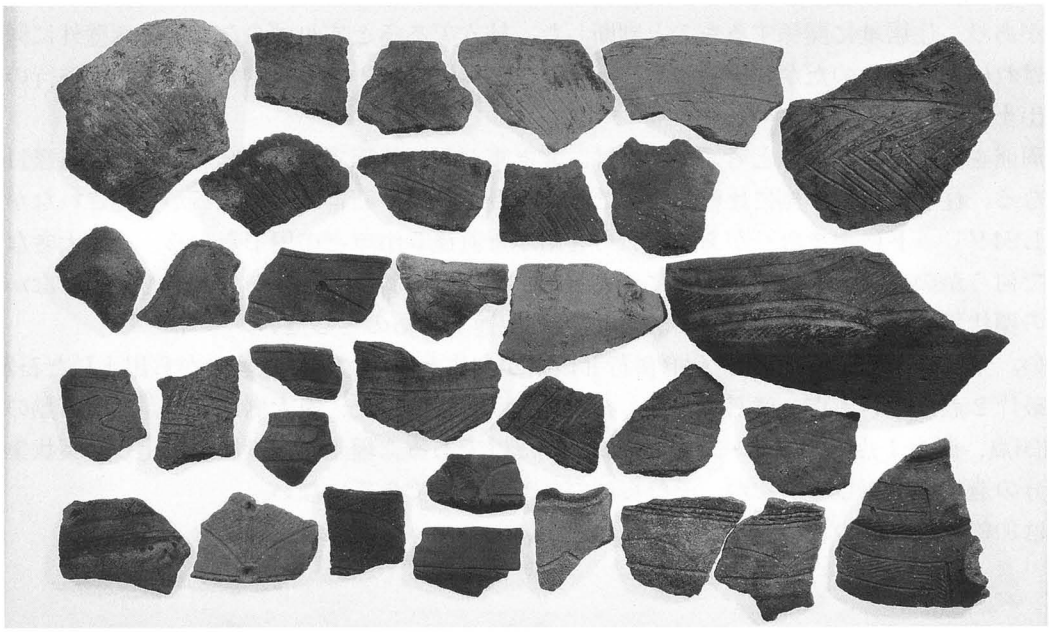


図101　365号住居址・環状集石実測図



写96　365号住居址出土土器片

写97　365号住居址出土骨片

２）366号住居址

ＡＫ21グリッドの南東で発見された竪穴住居址で、北東に209号土坑がある。平面形は南北4.5m、東西3.6mの不整円形。遺構検出面から床面までは20㎝と浅く、埋土は炭が少し混じる黒みのつよい黒色土となっていた。周溝はなく、礫を含む土中に築かれた住居であることから多くの石が床上に顔を出している。中央西寄りの床面から深鉢形土器の底部が２個発見され、いずれも床に埋め込まれた状態にあったことから炉と判断した。

遺物はさほど多くない。炉１は粗製土器の、炉２は小型の精製土器のいずれも深鉢の底部である。埋土から出土した精製土器は加曽利Ｂ併行Ⅰ期であろう。他は破片で、加曽利Ｂ併行の古い段階のものが主体となる。石器は分銅型１点を含む打製石斧４点、叩石２点、礫石錘１点、石鏃３点、打製石錘１点と、粗大剥片２点、緑色岩の棒状礫１点、黒曜石類の剥片・屑片21、石核27点、ピエス・エスキーユ２点だけである。ほかに土偶の頭部が１点出土している。

所属時期は加曽利Ｂ併行の古い段階であろう。

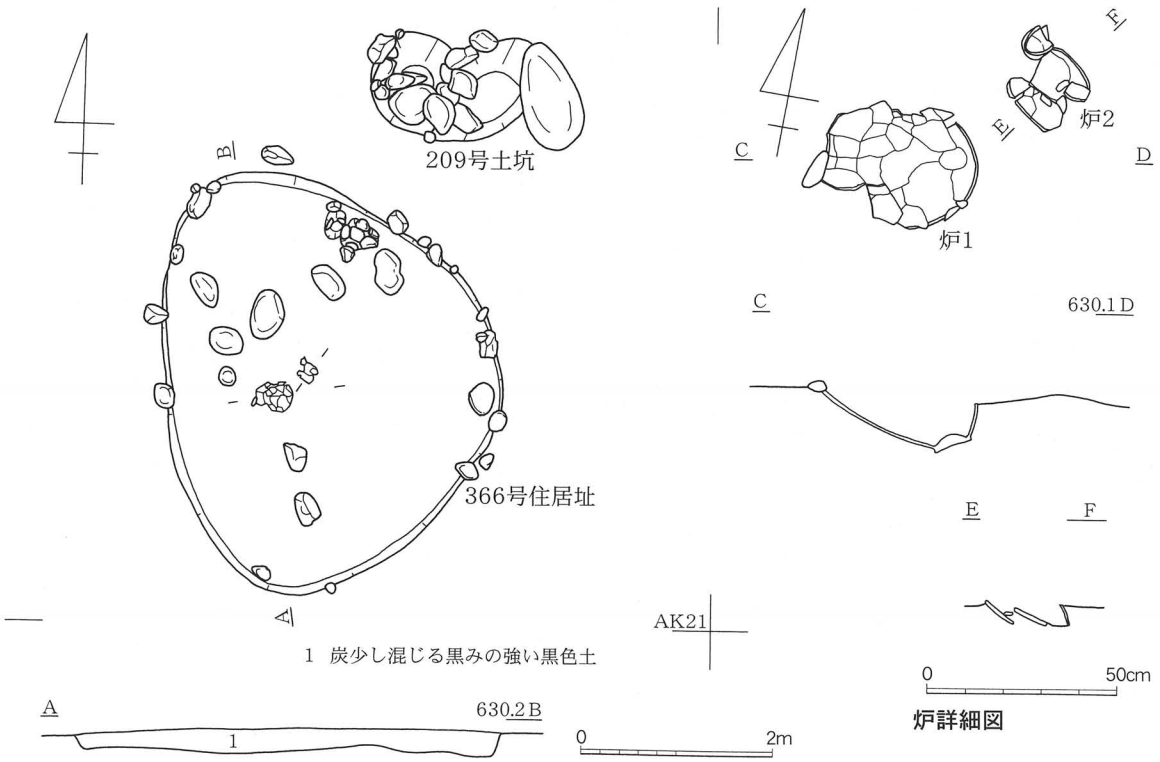
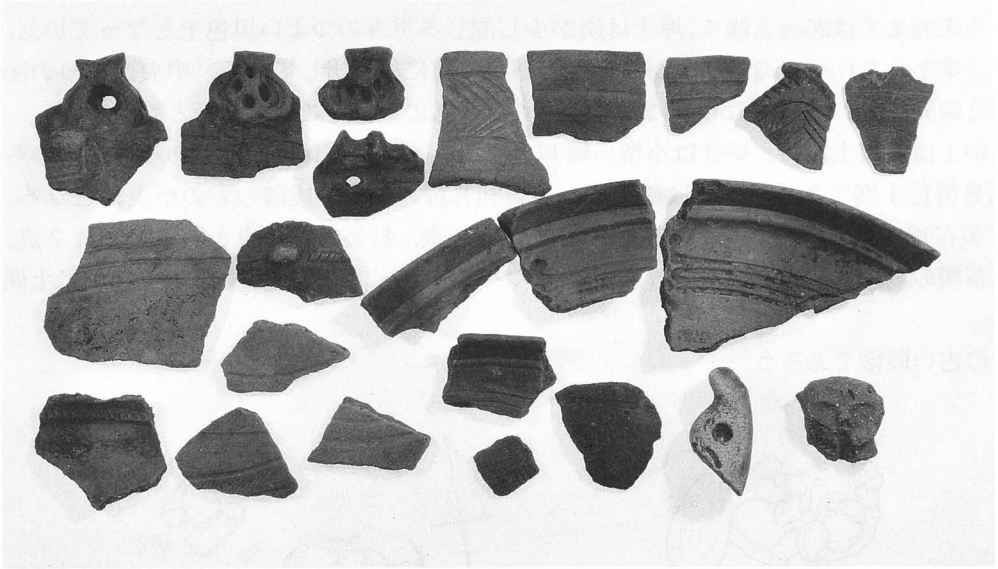


図102　366号住居址・209号土坑実測図

写98　366号住居址　炉（右１・左２）



写99　366号住居址出土土器片

３）367号住居址

ＡＬ21グリッドの南西隅を中心にして発見された竪穴住居址で、西壁を63号竪穴によって切られ、東外に大きな礫が集まっている。遺構検出面から床面まで、北側で５㎝、南側で20㎝と浅く、平面形は直径４ｍほどの不整円形である。炉や柱穴が確認できないなど構成要素が十分ではないが、縄文後期の遺構であり住居址として扱うこととした。東外の石のうち、雑然と積み上げたような状態にあった北東の壁上の一群は別としても、図103で網掛けした石は、いずれも上面が平坦でほぼ同じ高さにあり、据えたものであると判断した。少し離れているが、339号住居址の例などから、この住居の入口施設とすることも可能である。

遺物はさほど多くなく、埋土出土土器は、羽状沈線を付す深鉢をはじめとする加曽利ＢⅡ併行が主体で、石器は横刃型石器２点、叩石２点、石鏃４点と、粗大剥片７点、硬砂岩の棒状礫１点、黒曜石の剥片・屑片45点、石核19点、原石１点、ピエス・エスキーユ３点だけである。

所属時期は加曽利ＢⅡ併行期である。

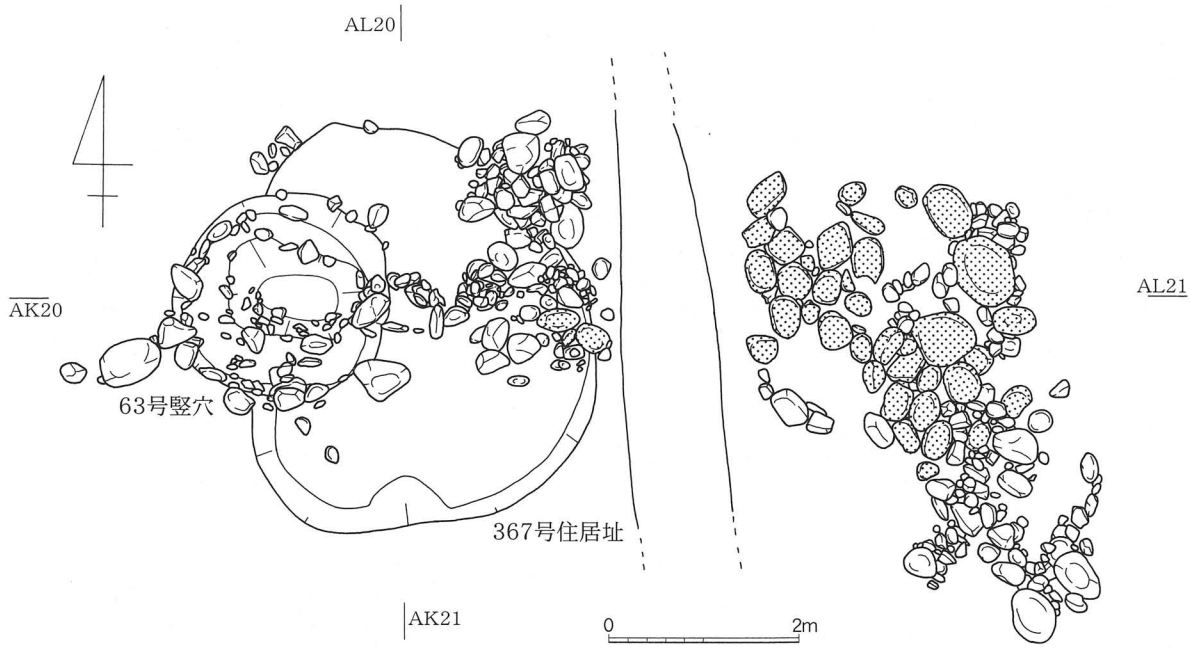
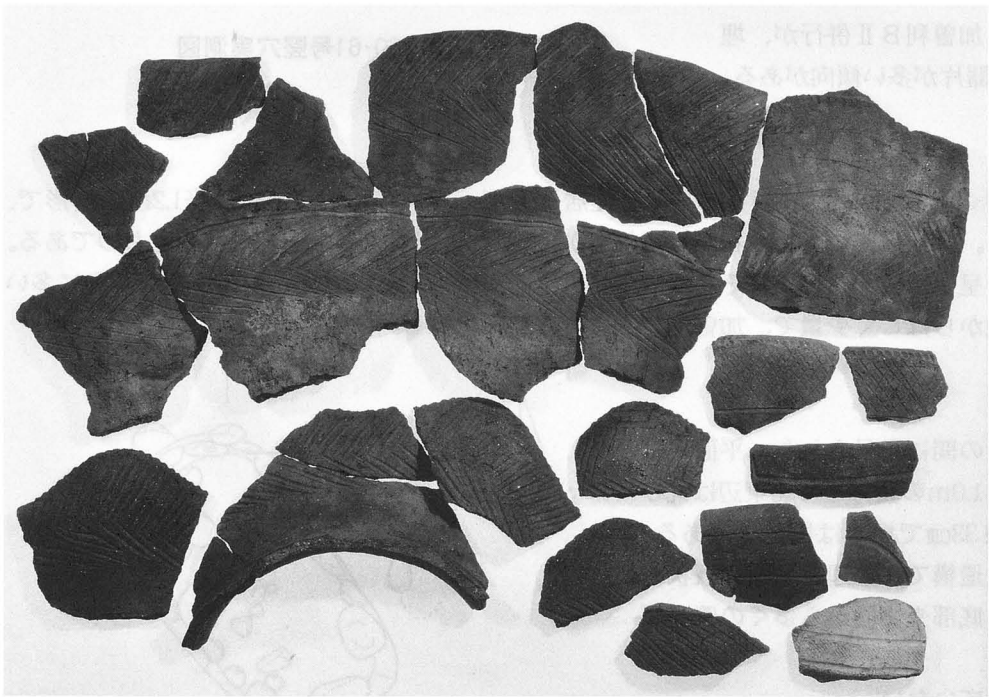


図103　367号住居址63号竪穴実測図



写100　367号住居址出土土器片

（２）竪穴

１）60号竪穴

ＡＬ23グリッドのほぼ中央で発見された。平面形は北西方向に軸線をおく1.4×1.2mの方形で、底面は円形となる。石を含む土中に築かれた遺構であり、壁や底面から多くの石が顔を出している。掘り方は浅い。

遺物は少なく、土器はほとんどが無文の粗製土器で、中に加曽利Ｂ併行の新しいものが見られる。

２）61号竪穴

60号竪穴の南に接するようにしてＡＬ23グリッドに発見された。平面形は北東方向に長軸をおく2.6×2.0mの隅丸長方形で、検出面から底面までは20㎝ほどである。埋土の黒褐色土には細かい土器片が混じっている。やはり石を含む土中に築かれた遺構であり、壁や底面から多くの石が顔を出している。

遺物は多く、土器は全て破片で、圧倒的に無文の粗製土器が多く、上層に加曽利ＢⅡ併行が、埋土には加曽利ＢⅠ併行の土器片が多い傾向がある。

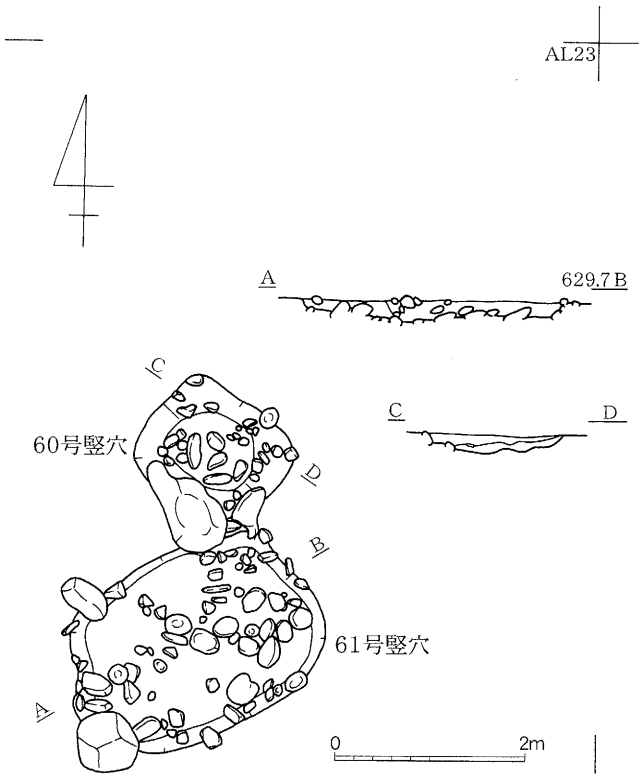


図104　60･61号竪穴実測図

３）63号竪穴

ＡＫ20、ＡＬ20グリッドの東端から発見された。367号住居址を切っている。平面形は直径1.2mの円形で、深さ90㎝の摺鉢状を呈する。壁や周囲に多くの石が見られるが、いずれも掘り込んだ土中にあったものである。

上層に黒みの強い黒色を呈する包含層がありそこから多量の土器が出土した。無文の粗製土器が非常に多い加曽利Ｂ併行である。埋土からはごく少量で、加曽利ＢⅠ併行と判断される。

（３）６号石棺墓

ＡＬ22とＡＬ23グリッドの間に発見された。平面形は北東方向に長軸をおく1.7×1.0mの長方形で北東辺は丸みがある。検出面からの深さ33㎝で埋土は黒色土である。礫混じりの土中に築かれた遺構で、短辺の壁際に板状の礫が立てて置かれており、底部や側面から多くの礫が顔を出している。

遺構に伴う遺物は出土していない。

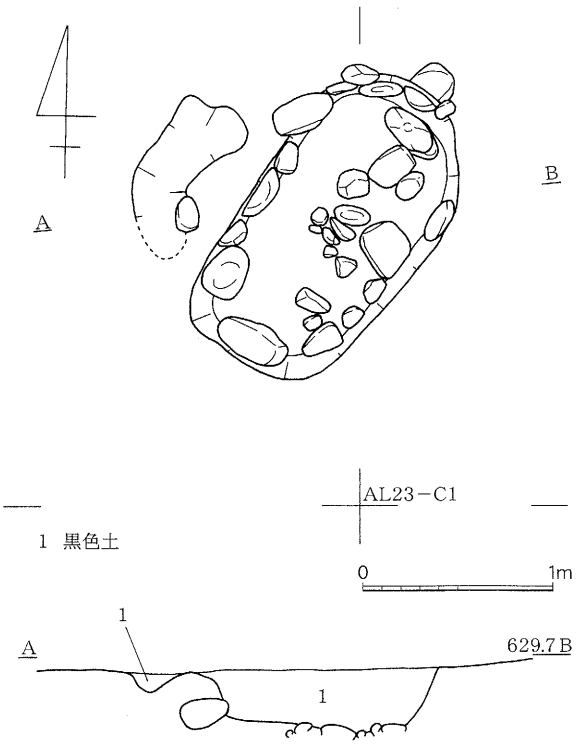


図105　６号石棺墓実測図

４　区画道路５号線

（１）379号住居址

用地の南端、ＡＭ14グリッドの遺物包含層中に多くの石があり、その石を記録しながら遺物とともに掘り上げたところ、遺物包含層の下面が東北東方向に向かう大きな溝状を呈し、その底で縄文中期の371号住居址を検出したわけだが、調査範囲の全体図を作成するために記録を整理したところ、グリッドの中央に、焼土とその東側にコの字状に石が並び、その南東の外側に多くの石が集積している状態が見えた。現場では認識することができなかったが、縄文中期の包含層の上に重なる縄文後期の方形石囲住居があるものと判断した。平面形はほぼ東西に軸線をおく矩形で、南北5.0m、東西は明らかでない。床面のほぼ中央に位置するであろう、焼けた範囲としてしかとらえられなかった炉のほかは、柱穴などの施設は発見できていない。

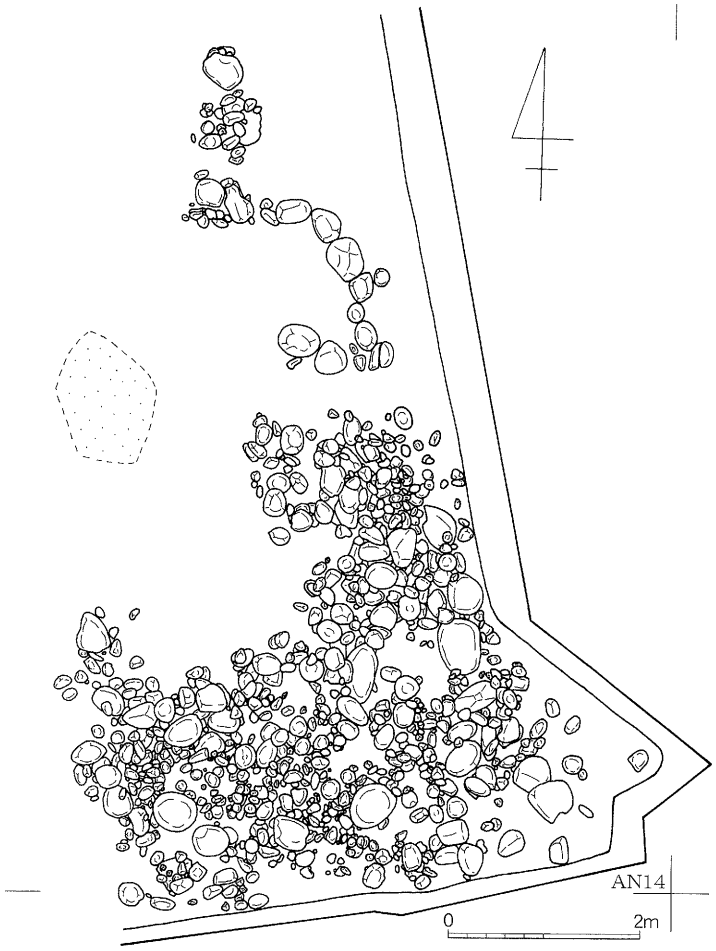


図106　379号住居址実測図

住居址埋土から出土したと断定できる遺物はない。該当するグリッドからは整理箱６箱分の土器が出土している。主体は縄文中期だが、上層の黒色土中には羽状沈線を施す後期の土器片がある。

所属時期は、加曽利Ｂ併行の新しい段階から曽谷・安行併行の初めあたりに求めることができよう。

第４節　中世の遺構と遺物

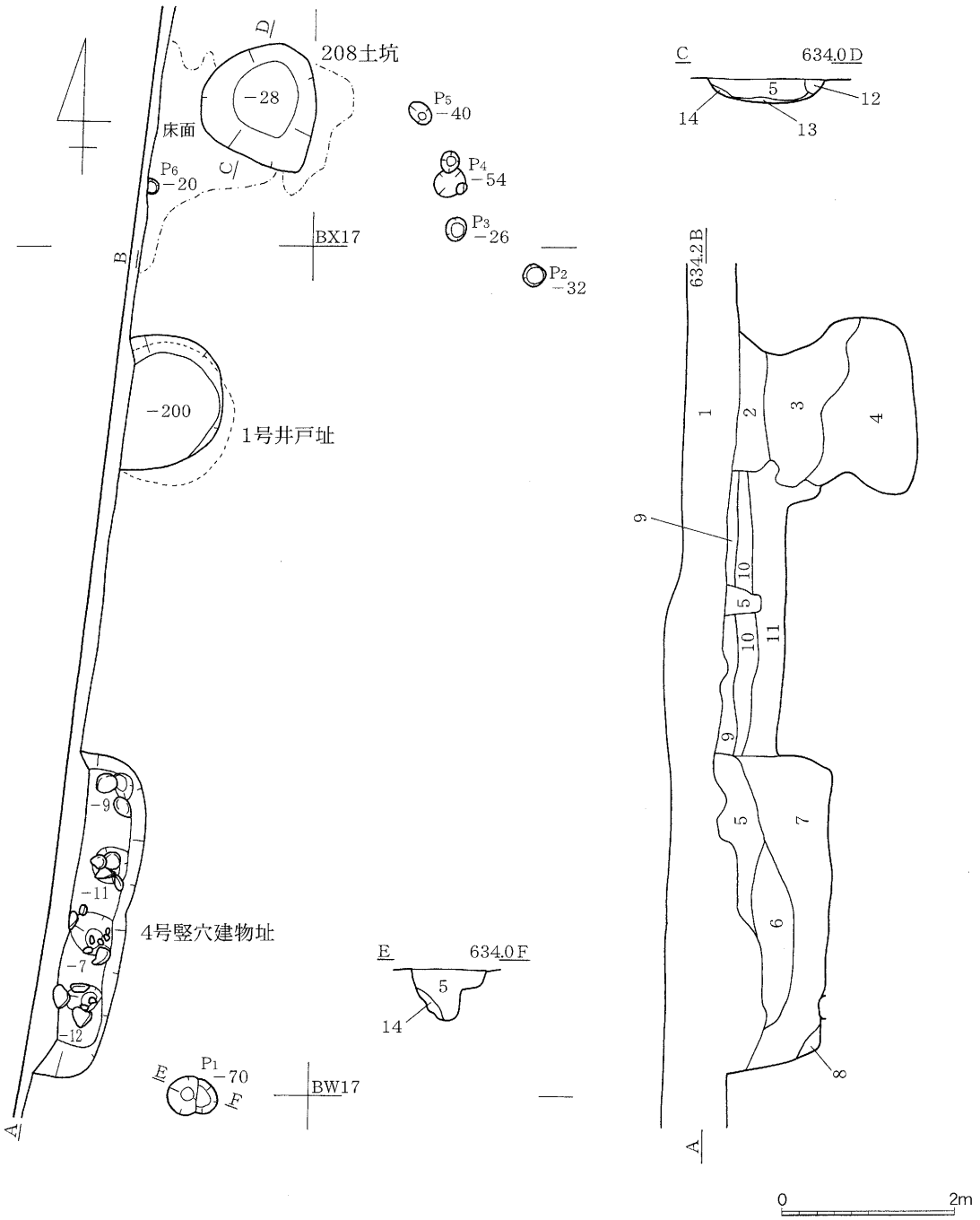
１　区画道路38号線

（１）中世建物址４

４号竪穴建物址と１号井戸址、208号土坑　床面、ピット群からなる。

ＢＷ16からＢＸ16グリッドにかけて発見された。用地外となる部分が多く、竪穴建物址は東端のごく一部、井戸址は東半分、床面も東側の一部を調査したにすぎない。竪穴建物址は、平面形は北から少し東の方向に軸線をおく一辺3.8mの方形で、検出面からの深さは105～140㎝を測る。埋土には黄色土ブロックが混じる黒褐色土の上に、人頭大礫混じり黒色土が中央に厚くレンズ状に堆積し、その上に黒色土が観察された。壁際には深さ10㎝前後の浅いピットが４基連なり、いずれのピットもその中や周囲に人頭大の礫がいくつか置かれていた。竪穴建物址の北3.4mにある井戸址は口径80㎝、検出面からの深さ225㎝。平面形は円形で、断面はフラスコ状を呈するが、埋土下層の黒色土には、壁面から剥落した大きなブロック状の土が多く入っており、その上の褐色がかった黒色土には、人頭大から人頭３倍大の礫が多く混じっていた。井戸が使われなくなり、壁が剥落する時間を経過したあとに埋めたものと判断される。この井戸址からさらに北北東2.3mに208号土坑がある。平面形は直径1.4mの不整円形で、たらい状の土坑の埋土は黒色で、最下層に薄く黄色土が混じっているのが観察された。この土坑の周囲に硬化した床面が、東方には４基の小さなピットが発見されたが、いずれも明確な遺構の形を見出すまでにはいたらなかった。

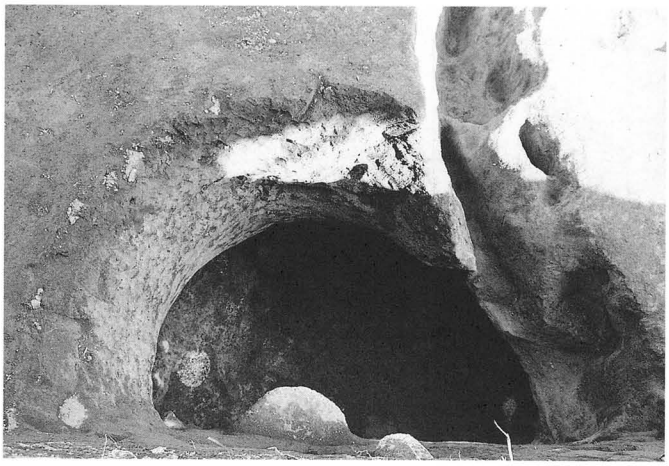
遺物は、４号竪穴建物址から、内耳土器片１点と明銭「洪武通宝」(1368年鋳造) １点が出土しているだけである。所属時期は中世としか言えない。



1 少し灰色がかった黄褐色土(耕土)
2 褐色がかった黒色土
3 人頭大～人頭3倍大礫混じる褐色がかった黒色土
4 黄色砂土・黄色土・黄褐色土のブロック多く混じる黒色土
5 黒色土
6 人頭大礫混じり黒色土
7 黄色土ブロック混じり黒褐色土
8 黄色土
9 黒褐色土
10 黒みがかった褐色土
11 褐色土
12 やわらかい灰色がかった黒色土(撹乱)
13 黄色土混じり黒色土
14 黄色土少し混じる黒色土

図107　中世建物址４実測図

竪穴建物址



井戸址

写101　中世建物址４

２　区画道路39号線

（１）中世建物址５

ＢＸ21グリッドの南西に発見され、掘立柱建物址と硬化面からなる。P1からP8の柱穴で構成されている掘立柱建物址は、調査範囲では東西の柱間1.5～1.7m、南北の柱間0.9～1.0mの２間×２間分が確認されたが、後述する東の硬化面が北に延びていることから、建物も同様に北に延びている可能性はある。P7とP8の間では、ほぼ東西に敷設されている上水道と重なっていたため、柱穴を確認することができなかった。P2と縄文前期の住居址の埋土中で確認したP7はピットの掘り方までは調査してない。P2とP4で柱痕跡がみられ、P7とP8は方形の柱の形をしていた。それによると柱は一辺10～15㎝の角柱となる。

P2、P3とP5、P6の間に硬い面が確認された。平面形はほぼ長方形だが輪郭は不定型で、北の用地外まで延びている。土層図（図108　平面図と縮小率が異なる）にあるように、硬化面は黒みがかった褐色を呈する土が2.0㎝ほどの厚さに硬くなっているもので、深さ数㎝の南北方向のごく浅い舟底状の窪みが、二つ並んだ形状を呈している。貼り床というよりも、何らかの原因で当時の地表面が凹み、その表面が硬くなっているという印象である。当時の地表面は遺構検出面よりも上であったはずであるから、舟底状の窪みは断面で確認できたよりも深かったことになろう。

遺物の中に板状青銅製品があり、残存長4.5㎝、幅7.5㎜、厚さ１㎜弱で、欠損していない片方の端に釘の頭部が錆着している。

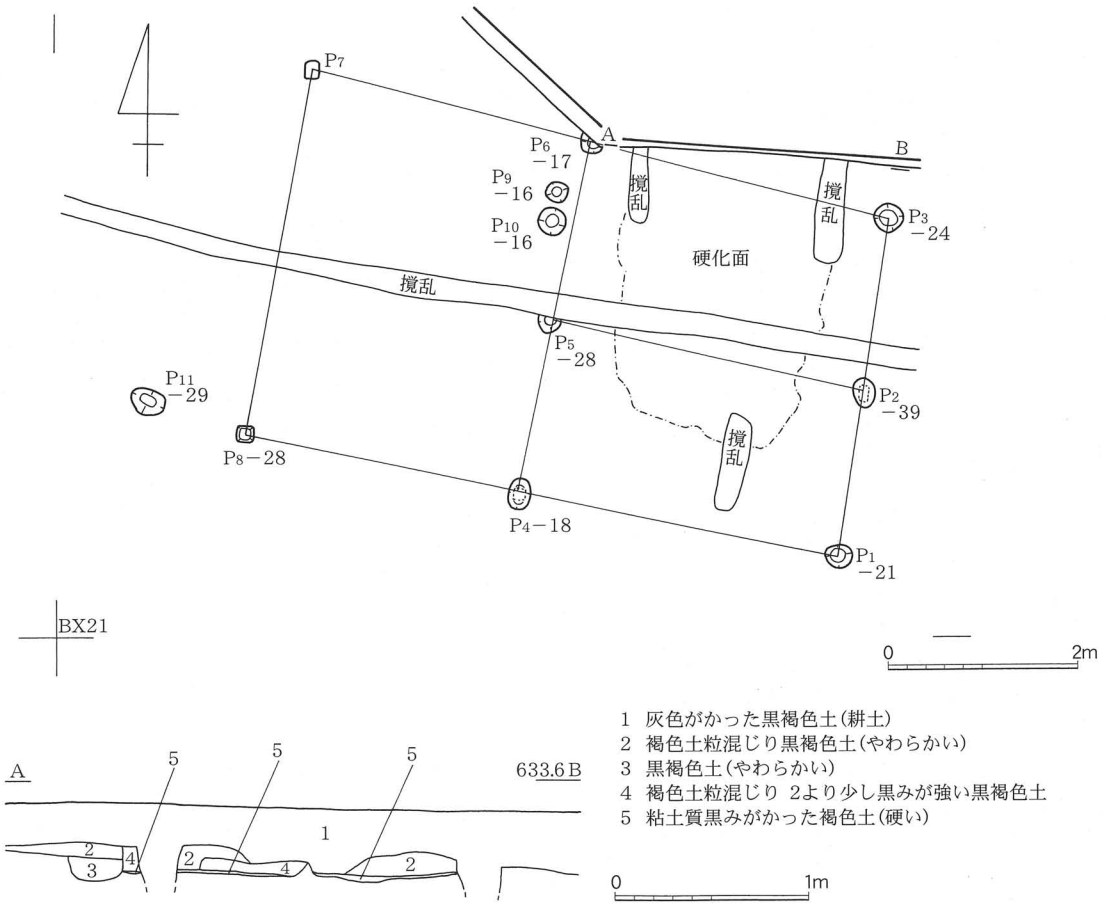


図108　中世建物址５実測図

写102　中世建物址５(掘立柱建物)

（２）中世建物址６

ＢＸ21グリッドの北西に発見され、57号竪穴と硬化面からなる。57号竪穴は直径2.0m、検出面からの深さ60㎝の摺鉢状を呈する。埋土は下層の黒褐色土にブロック状の黄色土と黒色土が含まれる。赤みがかった黒褐色を呈する硬化面は竪穴の東に位置する。耕作によって筋状に破壊されているため平面形は確定できないが、中世建物址５の硬化面と同様、ほぼ矩形となるであろう。

遺構に伴う遺物は硬化面付近から出土した内耳土器の破片１点のみである。

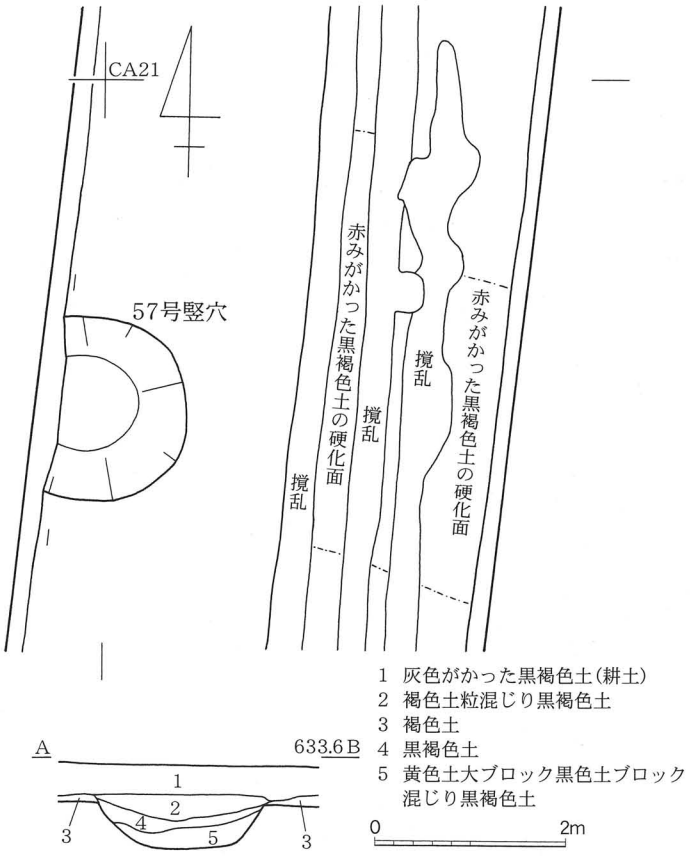


図109　中世建物址６実測図

写103　中世建物址６（57号竪穴）

３　区画道路36号線

（１）中世建物址７

掘立柱建物址の一部となるピットが発見された。耕作等により遺物包含層はすでに削平されており、遺構が検出されたのは黄色土中であった。ピットは３基が直線上に並ぶものであり、柱間約１ｍの掘立柱建物址の一部と判断したが、調査範囲からは全体の構造まではわからない。埋土中から内耳土器が出土している。

駅仲町線　溝状遺構

区画道路６号線暗渠

写104　近世以降の遺構

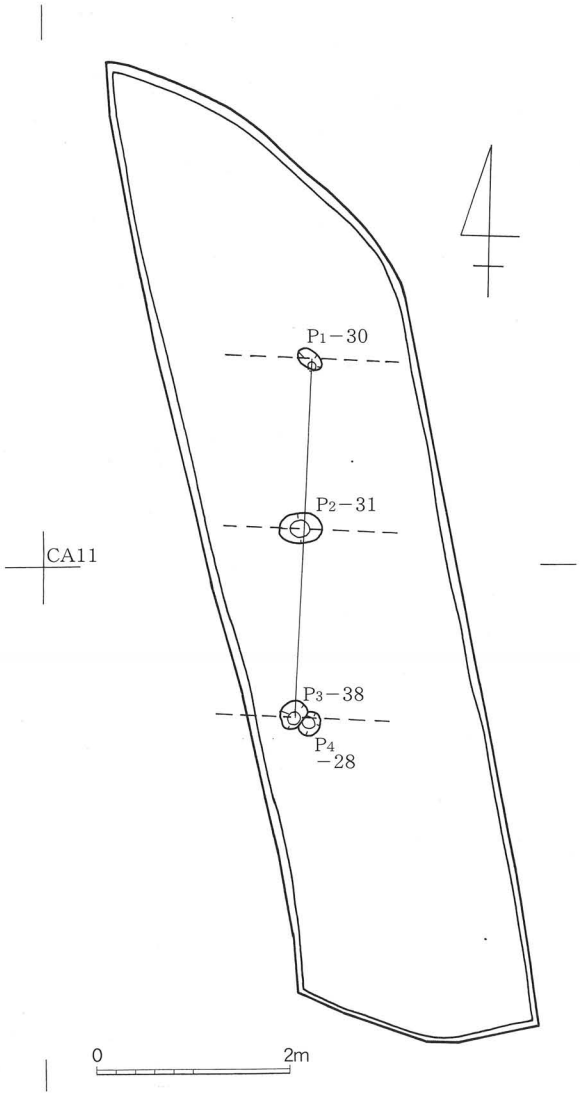


図110　中世建物址７実測図

第５節　近世以降の遺構

駅仲町線の黒色土中に東西方向とそれと直交する２本の溝が発見された。白色の砂が埋まっていたことから明らかに水が流れていたことがわかる。遺構に伴う遺物は出土していない。確かに駅仲町線地点は、調査前には幅の広い東西方向の溝状を呈する地形をなしてはいたが、本来台地上にはそこに水を供給する自然流路はない。江戸時代に宮田宿が設置されたときに同宿のために引かれた井が５本あり、現在もそのうちの３本の末流が、駅仲町線の道路側溝へ集まっていることから、江戸時代の、宿場の余剰水の流路としていいであろう。

1970年代の圃場整備事業以前の地下水量が豊富だったころ、水田の段丘崖下は湿地であった。それを解消するため耕作者は排水用の暗渠を設置しており、今回の調査でも、６号線の西側で、水田の耕作土下に暗渠排水遺構を認めた。構造としては、溝を掘り、側壁に立て並べた石の上に平石を並べたものである。当該水田は宿場町へ引かれた井を流れる水を用水としている。江戸時代はそのような水を使用して開田することは認められていなかったはずであり、明治以降、もっといえば、上水道が整備される第二次世界大戦以降の遺構であろう。

なお、事前に調査しなかったが、36号線北端から西に折れて国道153号線へ出る区画道路35号線の工事の際、寛永通宝３枚が発見されている。

第３章　まとめ

今回調査したのは広大な遺跡のごく一部にすぎない。遺跡全体について言及することはできないので、ここでは本書をまとめる中で気の付いたことを記しておきたい。

縄文前期の安山岩製磨石

縄文前期の遺跡から出土した磨石の中に安山岩製のものがある。

磨石は、磨石や叩石、凹石などとして使われた複数の痕跡を残す扁平な長円礫である。遺跡から出土する磨石の圧倒的多数は、三峰川水系から運ばれた硬砂岩や緑色岩類の転石を使用しているが、それらは天竜川の河原から採取したもので、遺跡からは、原石から始まって、磨りや叩きなどの使用痕が次第に広くなり、凹みを生ずる使用痕の深さが深くなる過程の、各段階のものが発見されている。

一方、これまでもごくまれに中越遺跡から出土しているこの安山岩製の磨石は、摩滅面が全面におよび、敲打面も広く、石鹸状に整った形をした、非常に使いこまれた道具であるという印象が強いものばかりである。

安山岩は上伊那南部の宮田村には転石として存在しない。

この安山岩製の磨石は、宮田村以外の土地からもたらされたものであり、その整った形態から、使いこまれた石器の形で遺跡地へ持ち込まれている可能性が高い。言われているように、磨石が、植物食、とりわけクリやクルミ、ドングリなどの堅果類の加工のための道具であるとすれば、この安山岩製の磨石がどこから来たかを知ることが、堅果類を食料とする文化の伝播経路の解明につながるのかもしれない。

縄文前期の石皿

石皿については、中越遺跡では、集落形成の当初である中越期にはすでに普遍的に存在するといい量が確認されるようになってきた。住居址床面の壁近くや壁上などから出土している例が多く、他の石器と異なり、住居内で使われていたものが、そのまま残されていると解すことができる石器である。中越遺跡から出土する中越期の石皿は、板状の大きな石をそのまま使用し、表面の一部に摩耗が観察されるもので、摩耗は平滑で使用面を変形させるほどではない。

けれども今回の調査で、区画道路38号線の349号住居址から皿部分を敲打調整した石皿が、同地点の354号住居址からは深く凹ませた皿面をもつ石皿が出土した。これまで中越遺跡の縄文前期には、縄文中期のような凹みを持つ石皿はないとされていたから、特に後者の出土は、該期の石皿について新知見をもたらすものであった。

縄文中期の332号住居址埋土出土土器

332号住居址埋土から出土した大量の完形土器は、１点を除き、縄文中期中葉末井戸尻Ⅲ期に限られるが、そこには、中部高地ばかりでなく、東海地方の北屋敷式まで、バラエティーに富んだ土器が含まれている。

そこから、東海地方の土器と、安山岩に起因する砂礫を含む、明らかに胎土の異なる八ヶ岳山麓の土器を除くと、花崗岩系の砂礫を含む土器が残るわけだが、膨大な量となるそれらは、これまでいわれている諏訪湖盆から下伊那にまでわたる形態的特徴を持つものが、まさに混在しており、特に、口縁部がキャリパー状に開く下伊那系のいわゆる蒸し器は、宮田村でかつてない量が出土した。

埋土から出土する土器は住居址毎に特徴がある。いわば個別性が強いわけで、その出土量の多さから、この332号住居址の廃絶後の凹地を、複数の集団が土器廃棄の場として共用していたとしても、それらが主として下伊那系の土器を持つ集団と、諏訪湖盆系の土器を持つ集団、上伊那系の土器を持つ集団の集まりであったなどとは考えにくく、これらの系統の異なる土器を、いずれも「自分の道具」として使っていた一つの集団があったとするのが妥当であろう。

目視では花崗岩系の砂礫を含む土器の産地を特定することはできなかった。そのため、天竜川水系の各地で作られた様々な形態の土器そのものがこの地に集められていたのか、文化の伝播を受けて様々に異なる形態の土器がこの地で作られたのかは明らかでない。

縄文中期の咲畑式土器を使用する埋甕

埋甕に咲畑式土器が使われている住居が２軒あった（369･372号住居址）。一方今回の調査範囲の中では、この２軒の住居址の埋土も含めて、岐阜から愛知に分布の中心を置くこの咲畑式土器は、この埋甕のほかに出土

例をほとんど見ることができなかった。もちろん縄文中期後葉に限っても集落規模は非常に大きく、これは特殊な例なのかもしれないが、出産に関係し、後産を入れるための遺構であるとされている埋甕として、遠方から持ち込まれた咲畑式土器を選択的に使用したと解されるこの出土状態は、当時の婚姻圏や婚姻に伴う習俗を示すものとして注意していいだろう。

しかもこれらの土器は、2点とも口縁部を意図的に欠き取った上で蓋石を載せてある。強く内湾する口縁と高い突起部を特徴とするこの手の土器は、そのまま埋設すると口縁部が蓋石の重さに耐えられずに破損してしまうから、それを未然に防ぐために欠いたと解することもできるであろうが、そのような行為によって土器の特徴的な形が失われるわけで、口縁部を欠くこと自体に何らかの意味があったのかもしれない。

縄文後期の方形石囲住居址

今回の調査で縄文後期の遺構が検出された一帯には、人頭大からひと抱えもある大きさまでの多数の礫が散在し、その間から土器片や石器などの遺物が出土した。そのようなところで初めて発見されたものに4軒の「方形石囲住居」がある。検出された住居の形態は、壁にあたる位置に石を積み上げたものといっていい。

石で囲まれた内側の土は炭粒や焼土粒、骨片を含んでおり、調査時にはそれらが見られなくなった面を床とした。石囲住居は竪穴住居のように深い掘り方を持つことはないようで、床に粘土質土を貼ることもなく、柱穴はほとんどみつけることができなかった。石囲の石は石積みといえるほど整然としたものではなく、床を掘り凹めた際に出てきた石を壁の位置に積み上げたものであるのかもしれない。

なお、1977年に駅仲町線の北側のＡＯ18、19グリッドで発見された、不定形な集石遺構が多数集まっているとした縄文後期の礫群が、礫を多用する柄鏡型敷石住居であったのではないかと指摘されている(1990)が、それもこの方形石囲住居だった可能性があろう。

今回の調査では、この方形石囲住居のほか敷石住居と竪穴住居が検出されたが、それらの多くは壁外の一箇所に十数個の平石を伴っている。この平石は少し隙間があるが、平坦な面を上にほぼ同じ高さで発見されていることから、柄鏡型の敷石住居に見られる入口施設と考えた。

中越遺跡から発見された9軒の縄文後期の住居址埋土から出土している遺物の所属時期は、方形石囲住居が加曽利ＢⅠ～ＢⅡ併行期、入口部に敷石を設ける竪穴住居は加曽利ＢⅡ～ＢⅢ併行期、敷石住居としたものは曽谷・安行併行期である。資料数が少なく一概には言えないが、中越遺跡の縄文後期の住居形態は、方形石囲住居から石敷の入口施設を伴う竪穴住居を経て、敷石住居へと変遷した可能性が指摘できよう。

中世の屋敷構え

中世の遺構は、竪穴建物址、竪穴、土坑、掘立柱建物址、井戸址などが発見されている。

これまでの調査では、範囲が狭小であったこともあり、それらを別々の遺構として把握してきたが、この報告書では「屋敷」を単位としてとらえなおしてみた。当時の「家」は、母屋のほかに厩や倉庫、物置、井戸があり、それらを囲む塀や土手、さらにその外側の堀もしくは溝からなる屋敷構えによって成り立っていたはずで、その遺構は、例えば母屋に相当するであろう竪穴建物址を中心に、何種類かの遺構によって構成される遺構群として検出されるはずだからである。

この屋敷構えの単位の一つとなりそうなものとして硬化面があげられる。この硬化面は、土壌化した土中に発見され、中越遺跡の場合、黒色土下面あたりに、浅い船底状に表面が堅くなっている面として把握されたもので、表面は凸凹しており、縁がゆるやかに立ち上がる。

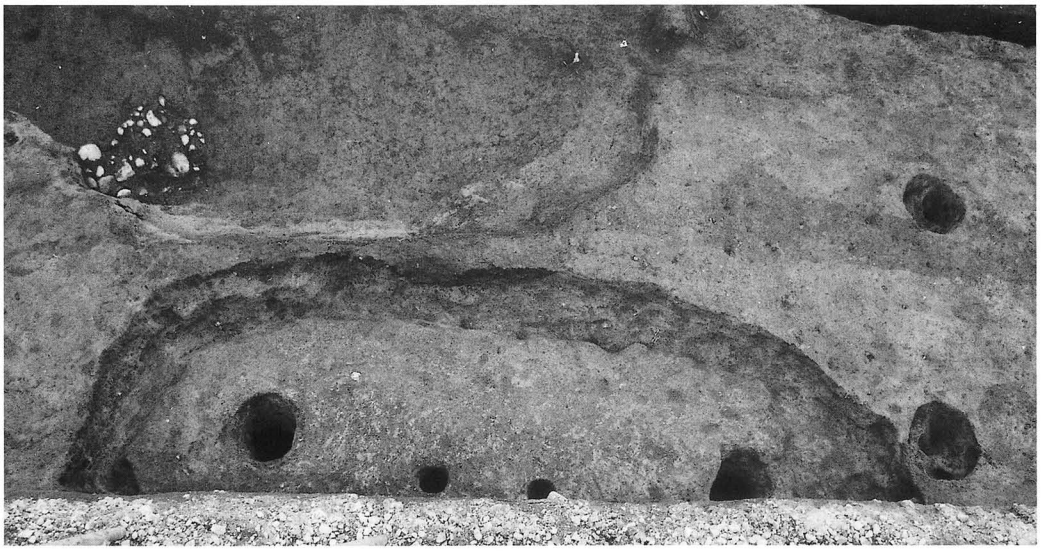
古い民家では土間の一画に厩を設けてあり、厩肥を貯め置くのに便利なように、その部分は掘り窪められている。そこは家畜によって踏み固められていたはずであり、形態上の類似点から、この硬化面を厩の痕跡と考えたのである。下牧へ通ずる道が大沢川の河原面へと下る台地北縁に営まれた中世の集落は、道を押さえるという性格を持っており、ほとんどの家が、情報伝達にも欠かせない馬などの家畜を屋敷内で飼育していたのではないだろうか。

写　真　図　版

中越北線 310号住居址

中越北線 311号住居址

中越北線 311号住居址



中越北線
312号住居址

中越北線 313号住居址

中越北線 314号住居址

区画道路38号線
48号住居址

区画道路38号線 290(右)・359(左)号住居址

区画道路38号線
297号住居址

区画道路38号線
331号住居址

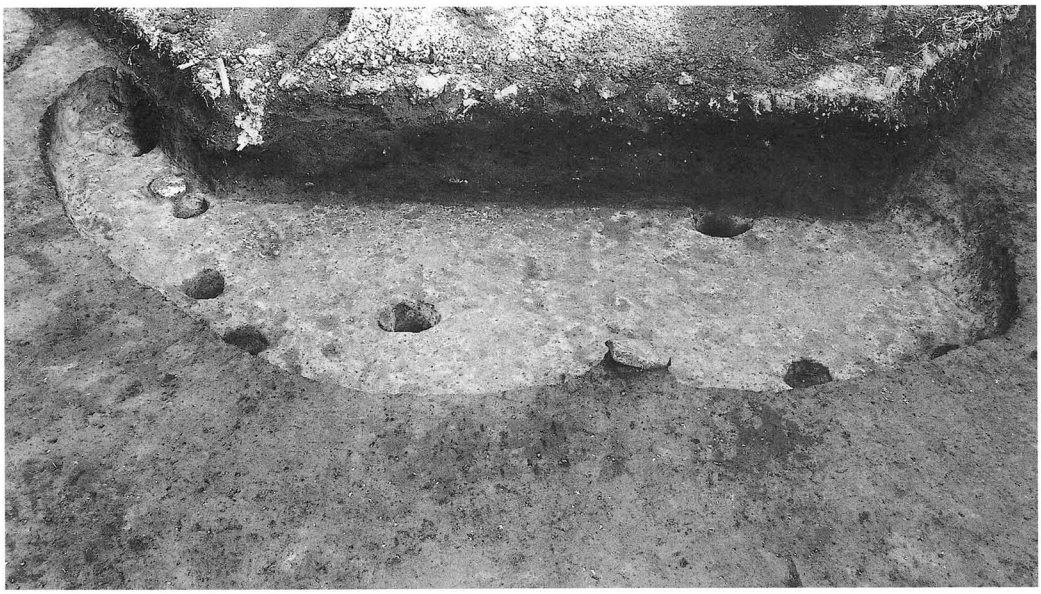
区画道路38号線
346号住居址

区画道路38号線
347号住居址

区画道路38号線
348号住居址

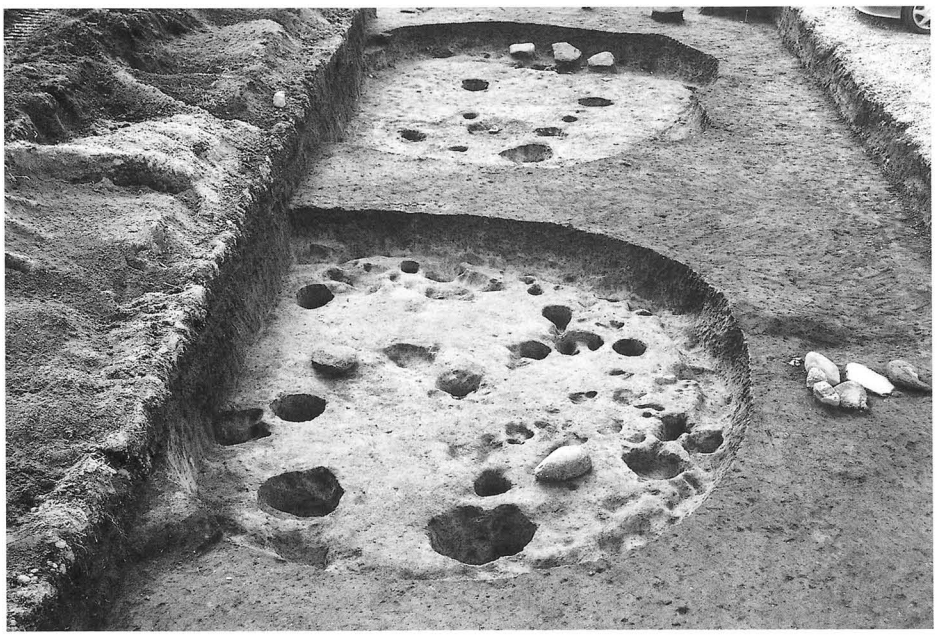
区画道路38号線
349号住居址

区画道路38号線
350号住居址

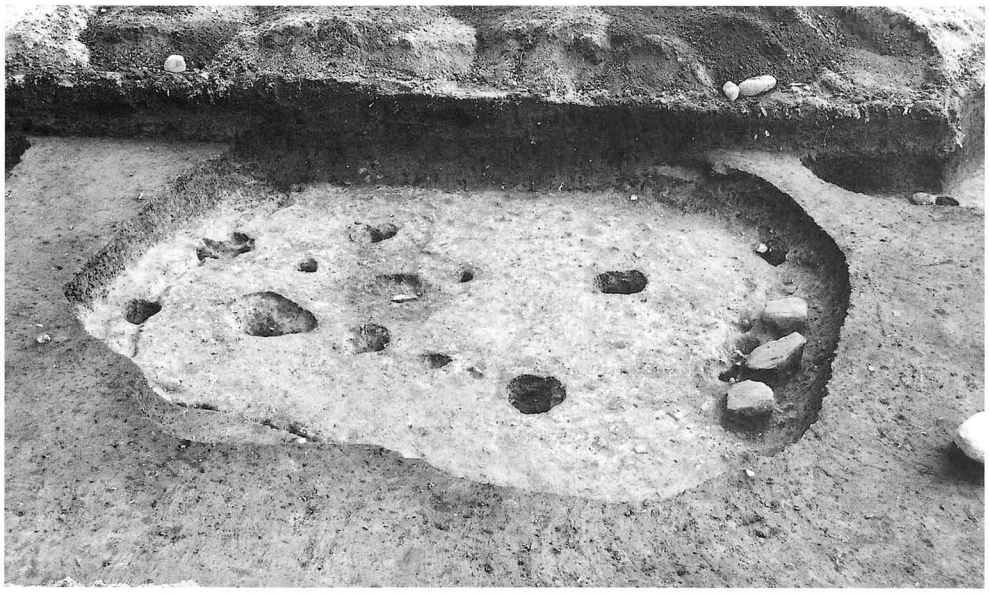


区画道路38号線
351号住居址

区画道路38号線
351号住居址



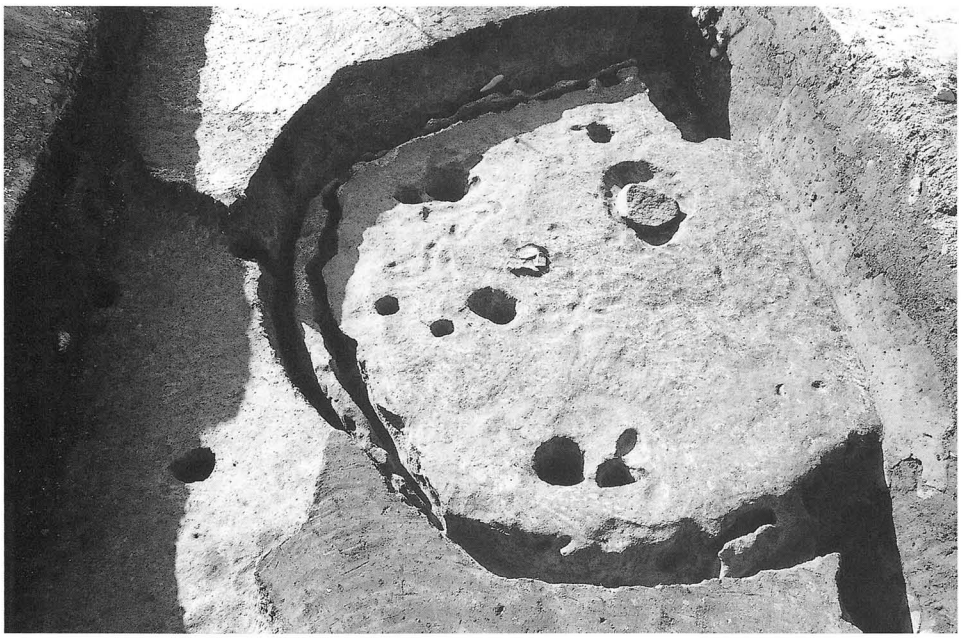
区画道路38号線
352(奥)・353(手前)号住居址



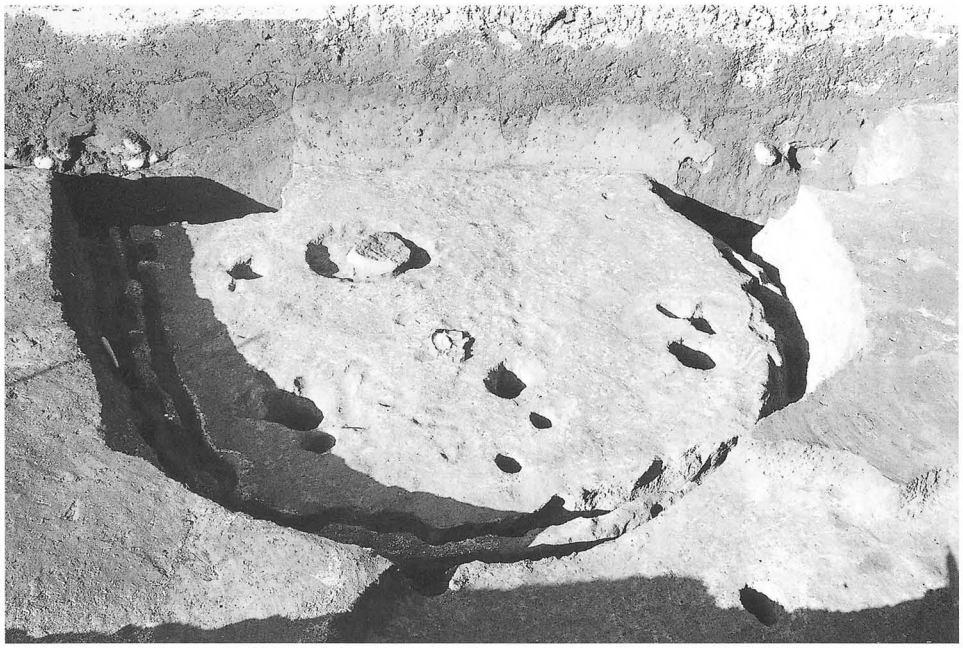
区画道路38号線 352号住居址

区画道路38号線 353号住居址

区画道路38号線 354号住居址



区画道路38号線
355(右)・356(左)号住居址



区画道路38号線
355号住居址

区画道路38号線
357号住居址(新)

区画道路38号線 357号住居址（新）

区画道路38号線
357号住居址（旧）

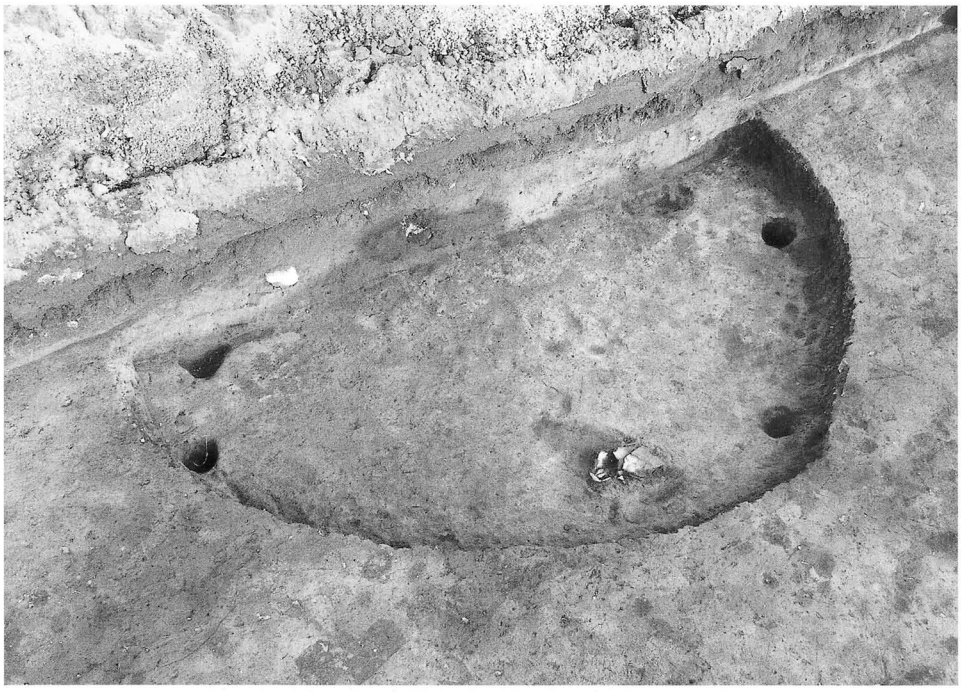
区画道路38号線 358号住居址

区画道路38号線
358号住居址

区画道路39号線　166号住居址

区画道路39号線
315号住居址、186・187号土坑

区画道路39号線 316号住居址



区画道路39号線
316号住居址遺物出土状況

区画道路39号線
317号住居址

区画道路39号線
318号住居址

区画道路39号線 319号住居址

区画道路39号線 320号住居址

区画道路39号線 320号住居址

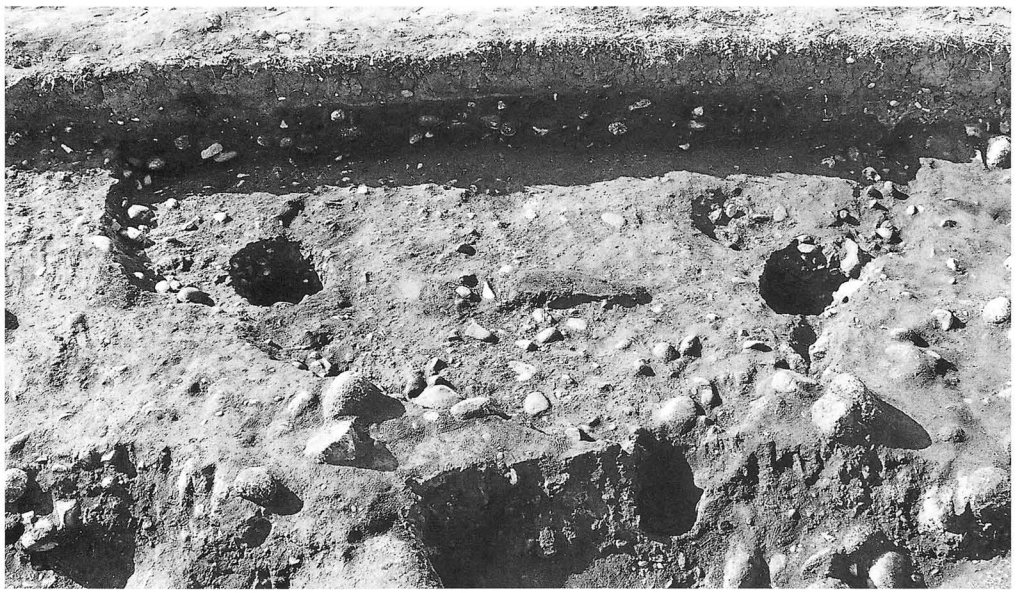
区画道路39号線
380号住居址

区画道路42号線 360号住居址

区画道路42号線 361号住居址

区画道路42号線 362号住居址

1街区 373・374号住居址・212号土坑



区画道路４号線
368号住居址

区画道路４号線
369号住居址

区画道路４号線
369号住居址遺物出土状況

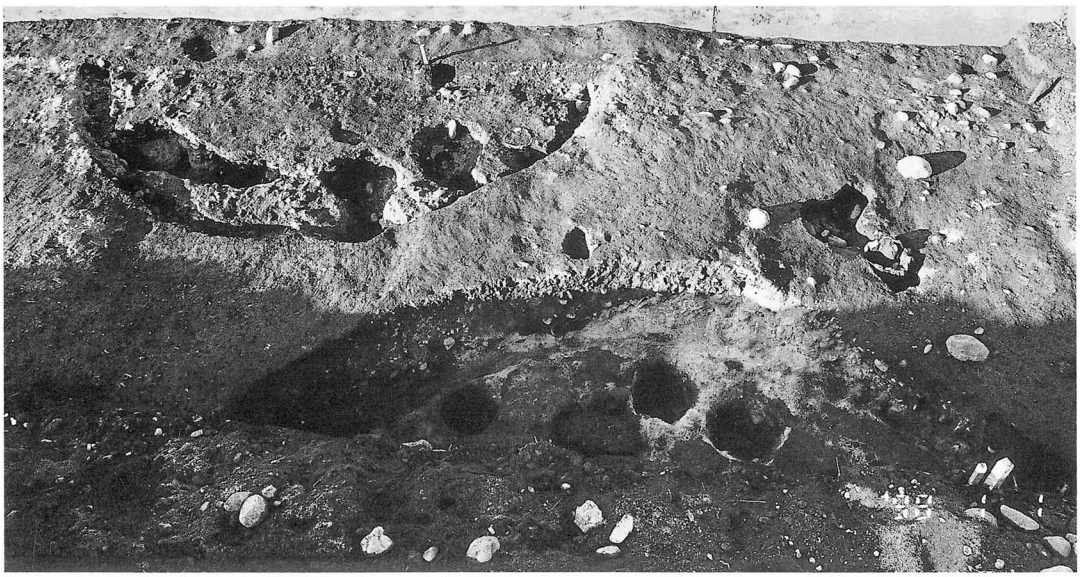
区画道路４号線　369号住居址遺物出土状況

区画道路４号線　370号住居址

区画道路５号線　371号住居址

区画道路 6 号線 372号住居址

区画道路 8 号線 363号住居址

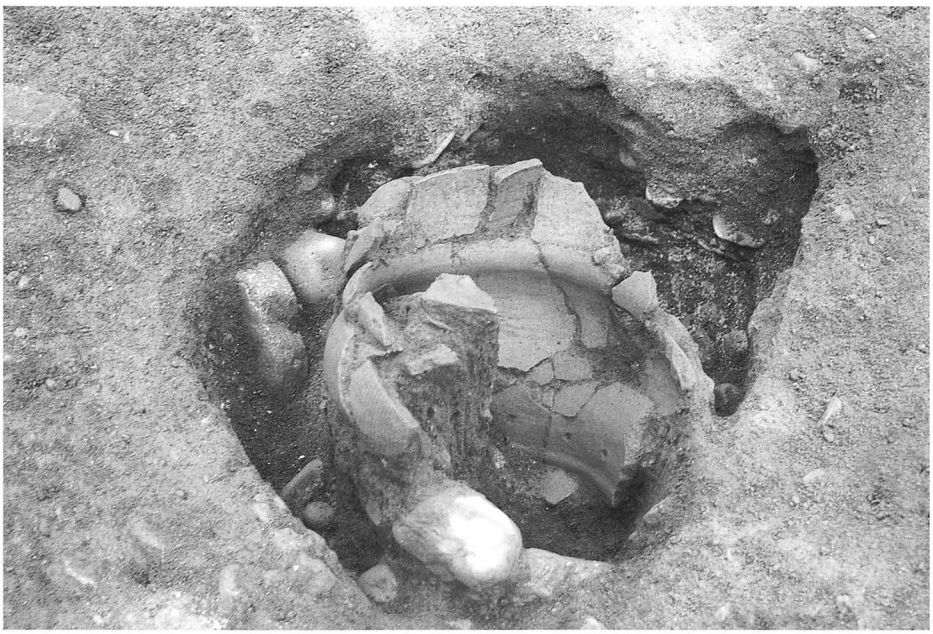


区画道路11号線 376(手前)・377(左奥)号住居址

区画道路11号線
377号住居址

区画道路11号線 378号住居址

区画道路11号線
213(右)・214(左)号土坑

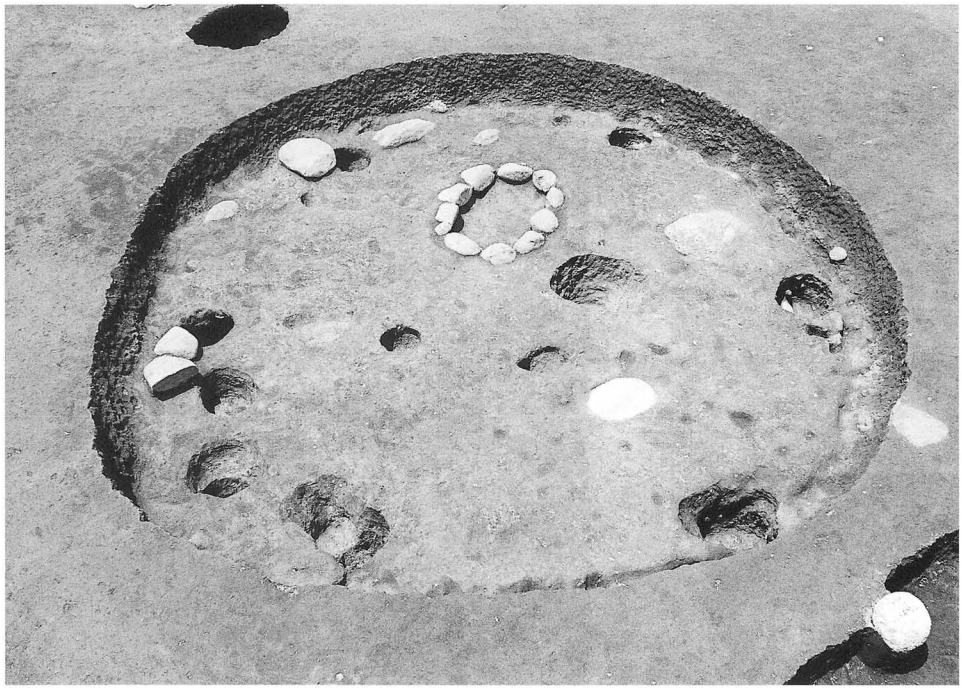


区画道路11号線 213号土坑

駅仲町線 325号住居址

駅仲町線 325号住居址

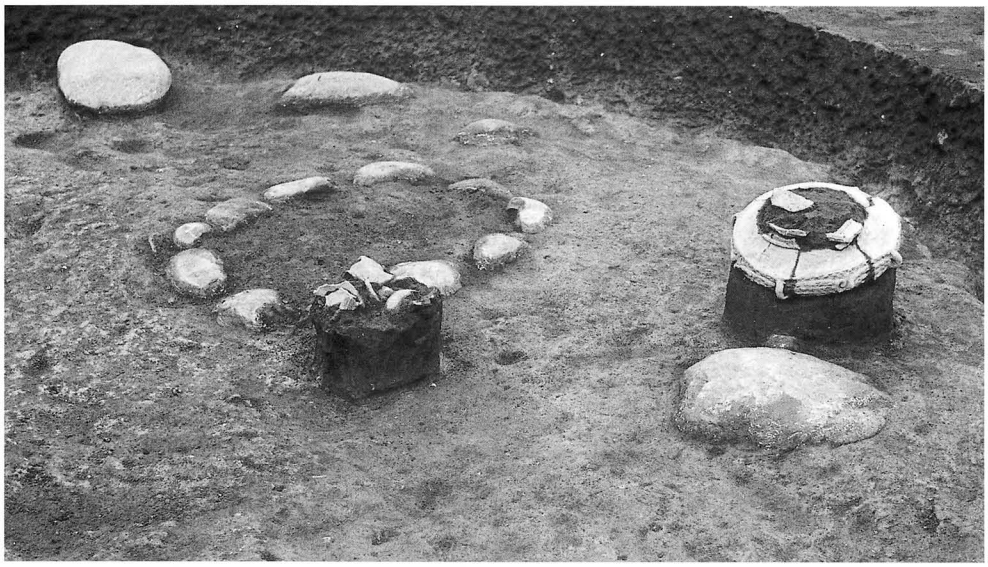
駅仲町線 325号住居址



駅仲町線 326号住居址

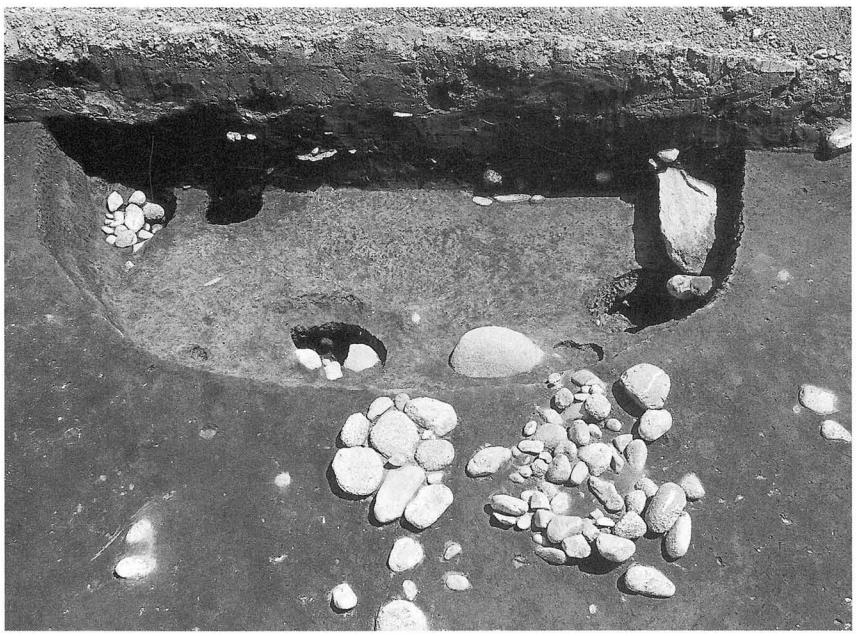
駅仲町線 326号住居址炉

駅仲町線
326号住居址遺物出土状況



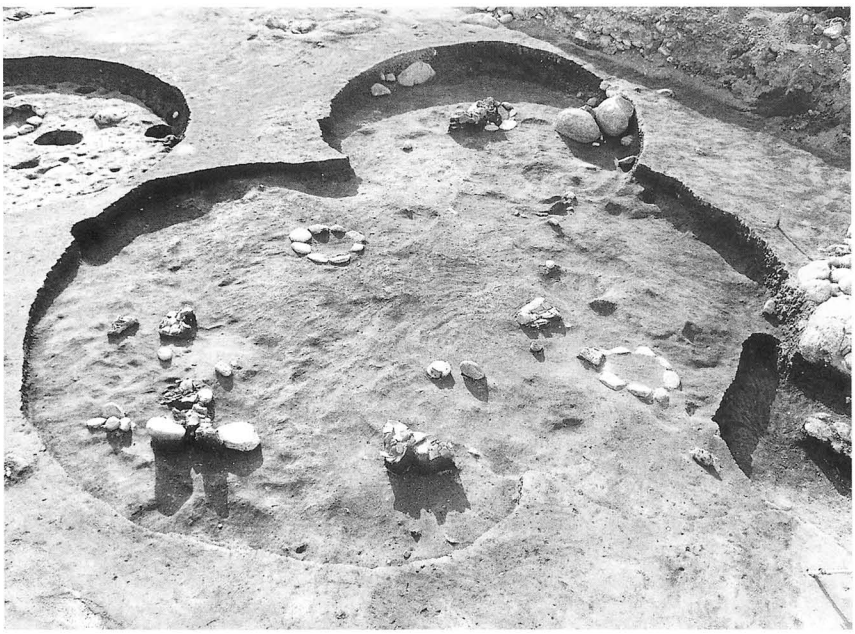
駅仲町線
326号住居址遺物出土状況

駅仲町線 327号住居址

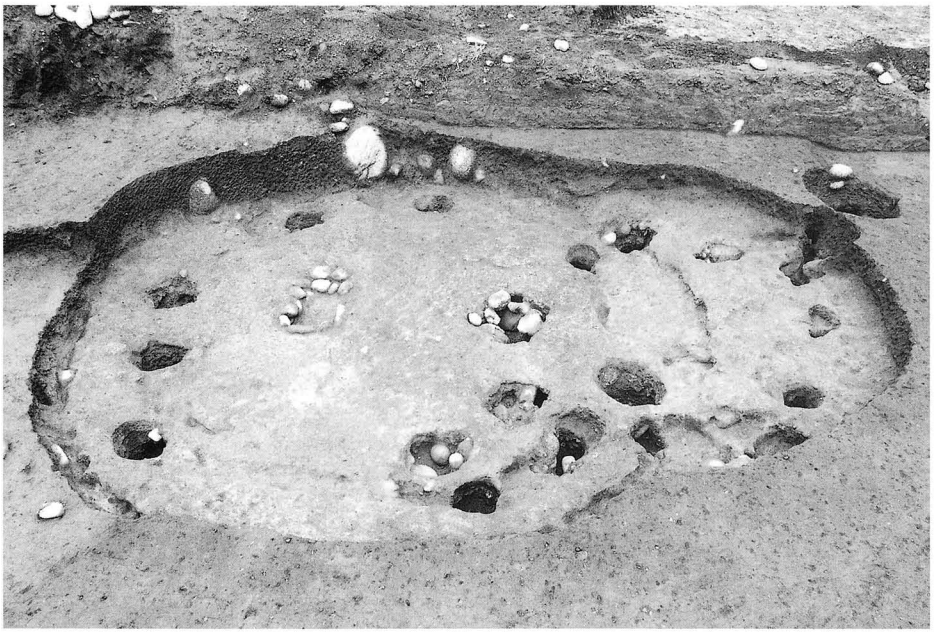


駅仲町線
328号住居址、4号(左)・5号(右)集石

駅仲町線
329(左)・337(右)・334(奥)号住居址



駅仲町線
329(左)・337(右)・334(奥)号住居址



駅仲町線
330(右)・332(左)号住居址

駅仲町線 330号住居址

駅仲町線
332号住居址遺物出土状況

駅仲町線
332号住居址遺物出土状況

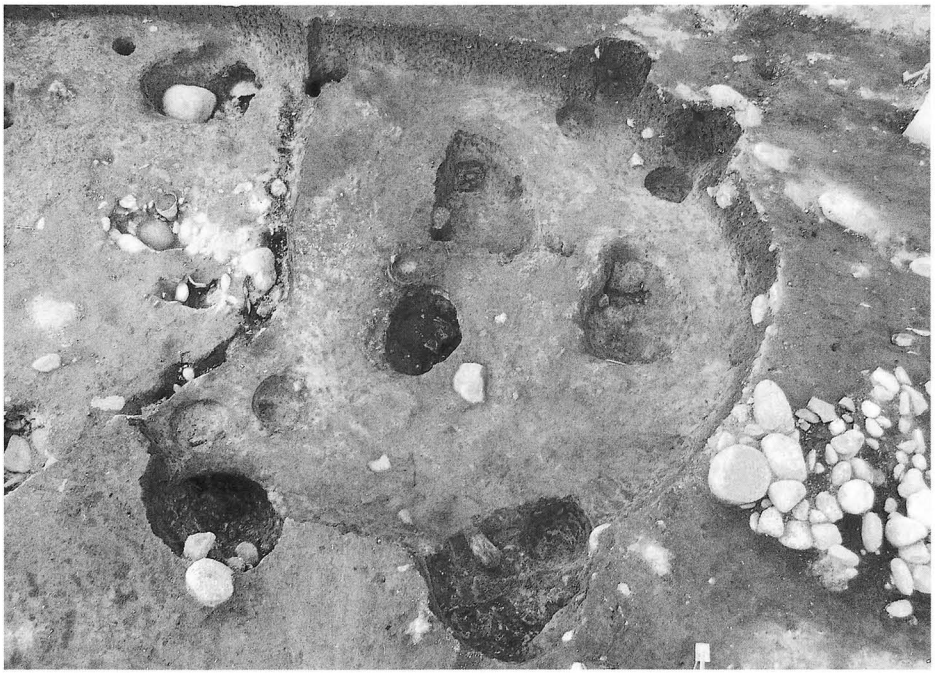
駅仲町線
332号住居址遺物出土状況

駅仲町線
333号住居址・8号集石

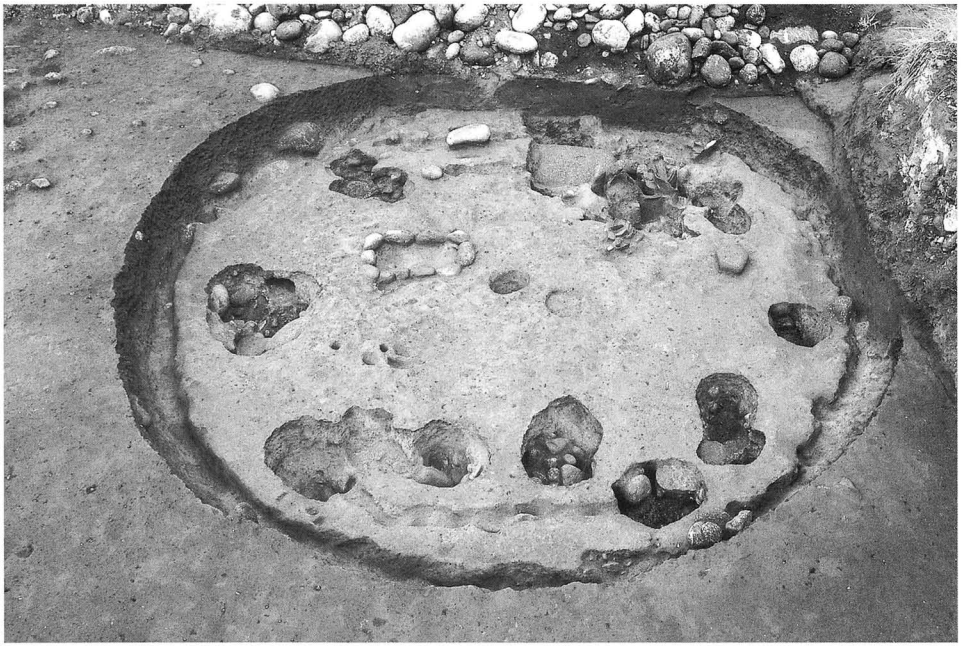
駅仲町線 333号住居址

駅仲町線
335(右)・336(左)号住居址

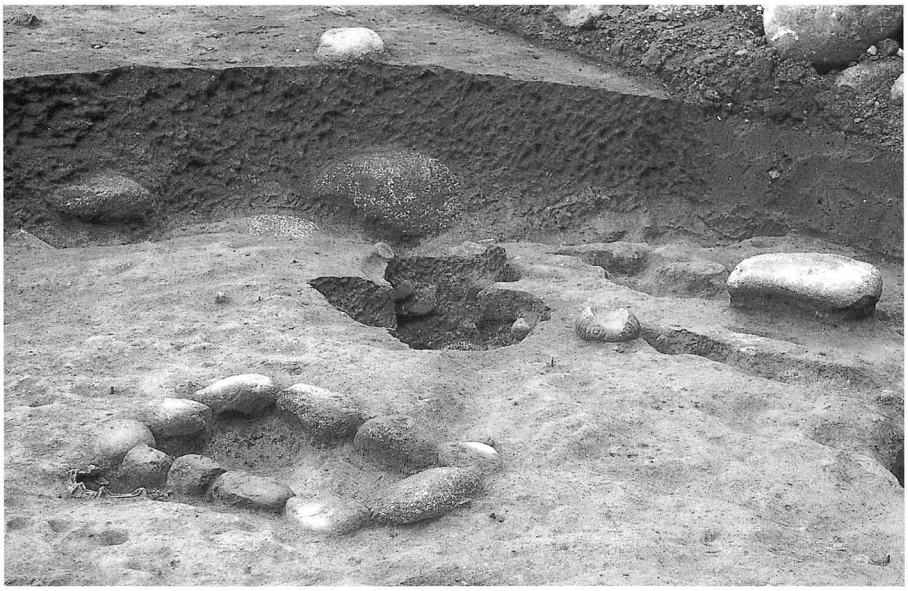
駅仲町線 341号住居址



駅仲町線 344号住居址

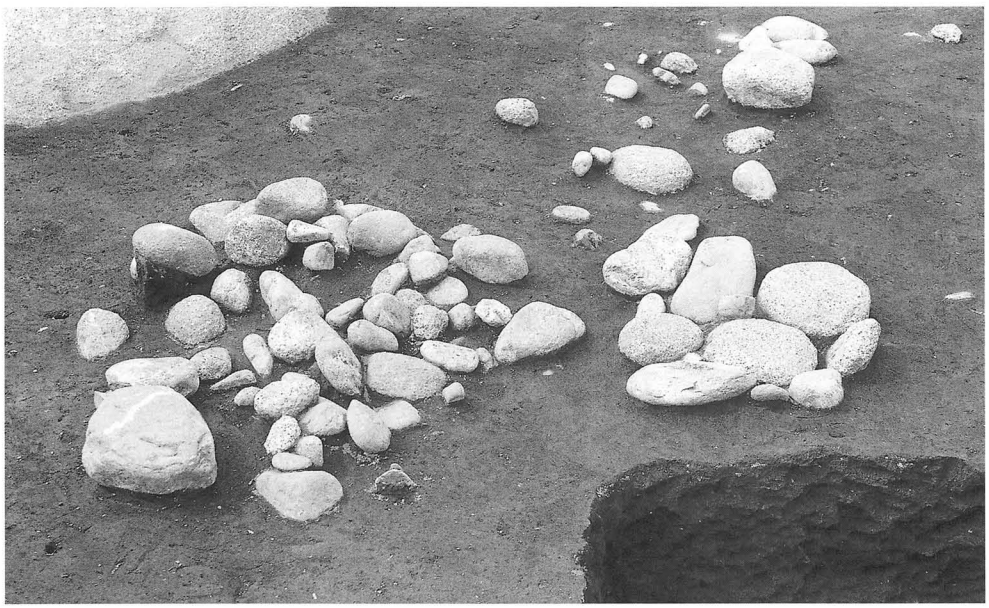


駅仲町線 345号住居址

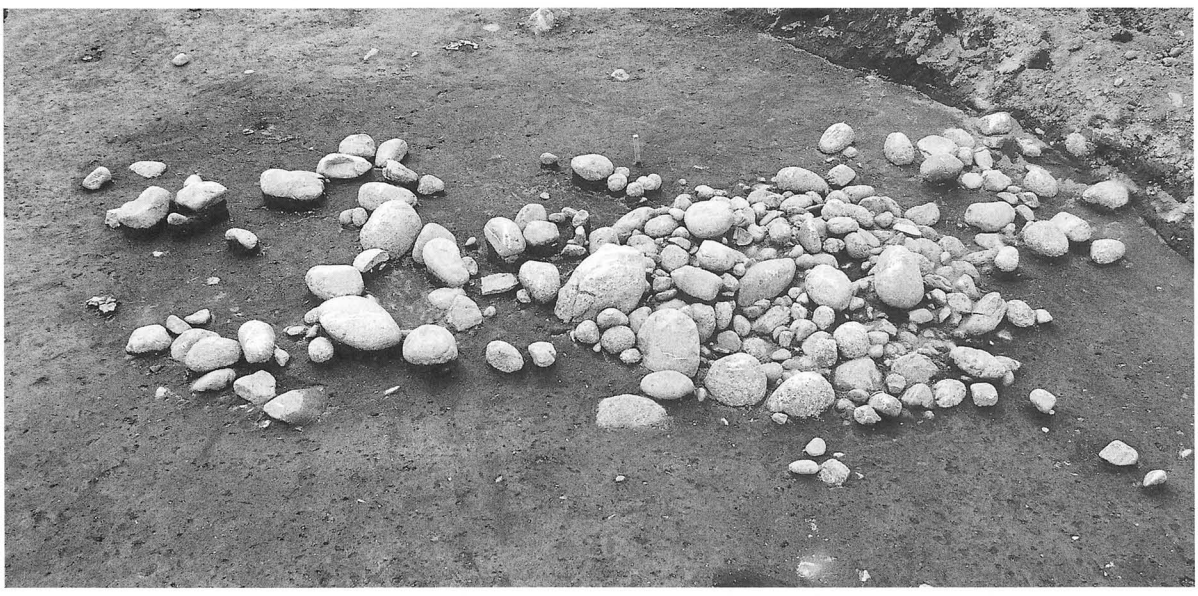


駅仲町線
345号住居址炉と石皿出土状況

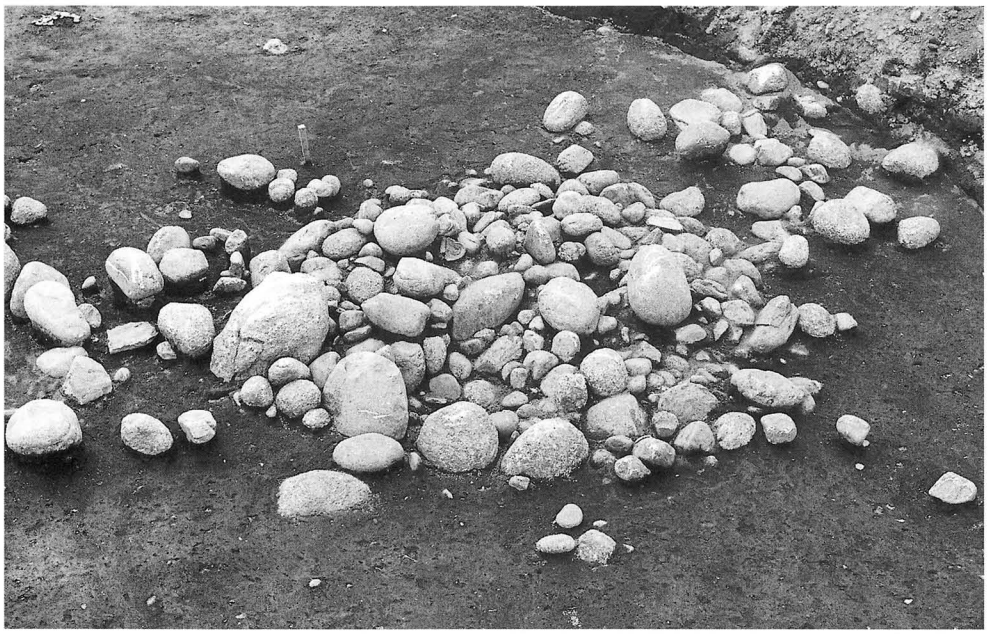
駅仲町線 59号竪穴



駅仲町線
4号(右)・5号(左)集石



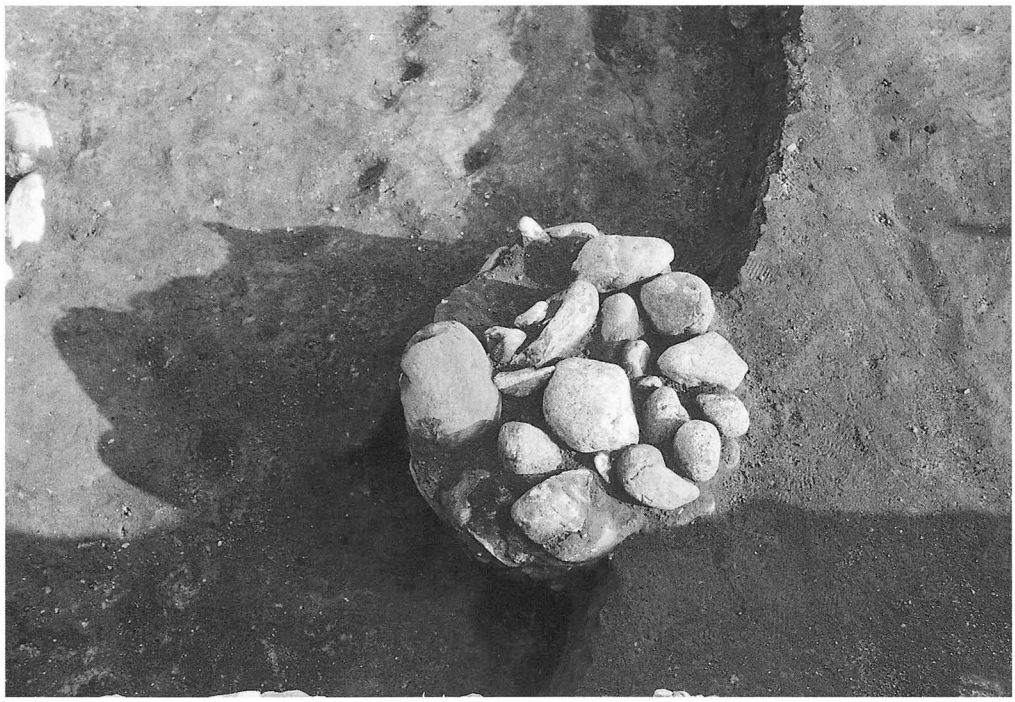
駅仲町線 6号(右)・7号(左)集石



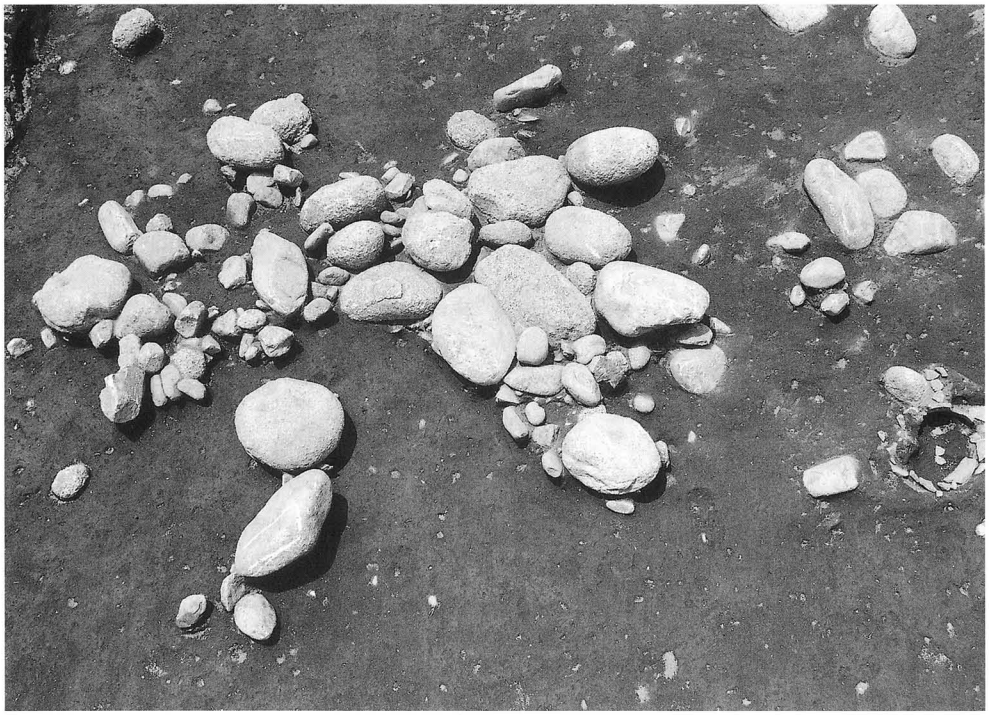
駅仲町線　6号集石

駅仲町線　6号集石下層－1

駅仲町線　6号集石下層－2



駅仲町線　8号集石



駅仲町線
10号集石、単独出土土器

区画道路８号線
３号石棺墓（北より）

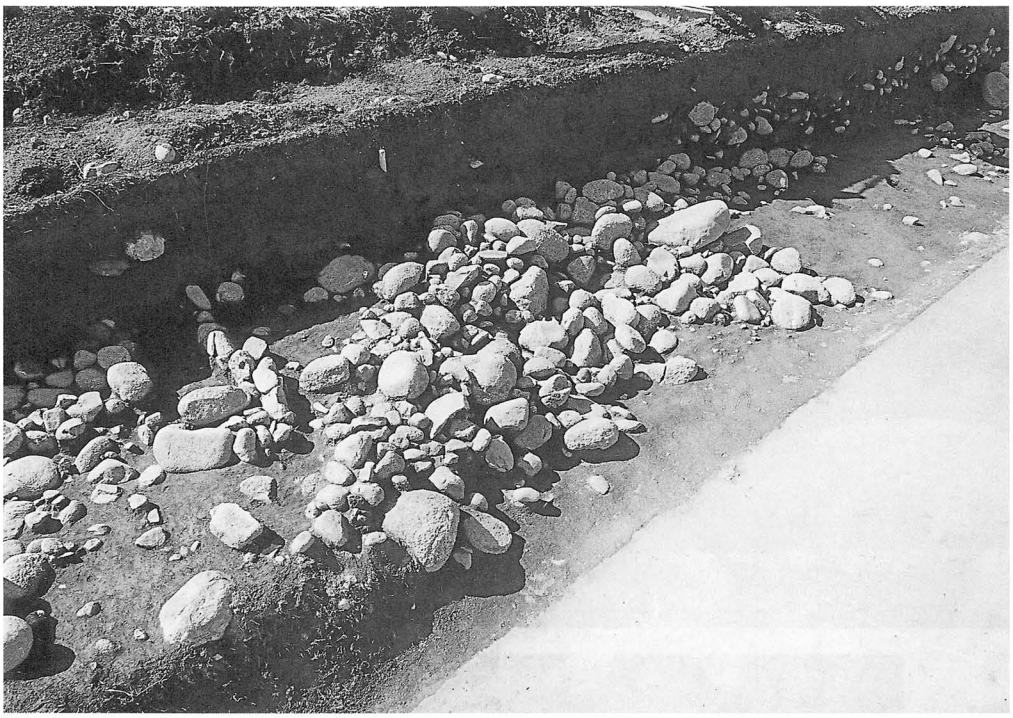
区画道路８号線
３号石棺墓（東より）

区画道路８号線
４号石棺墓（北より）

区画道路８号線
４号石棺墓（東より）

区画道路８号線
５号石棺墓（北より）

区画道路８号線
５号石棺墓（東より）



区画道路８号線
石積遺構（南側）

区画道路８号線
石積遺構（北側）

駅仲町線 338号住居址

駅仲町線 339号住居址

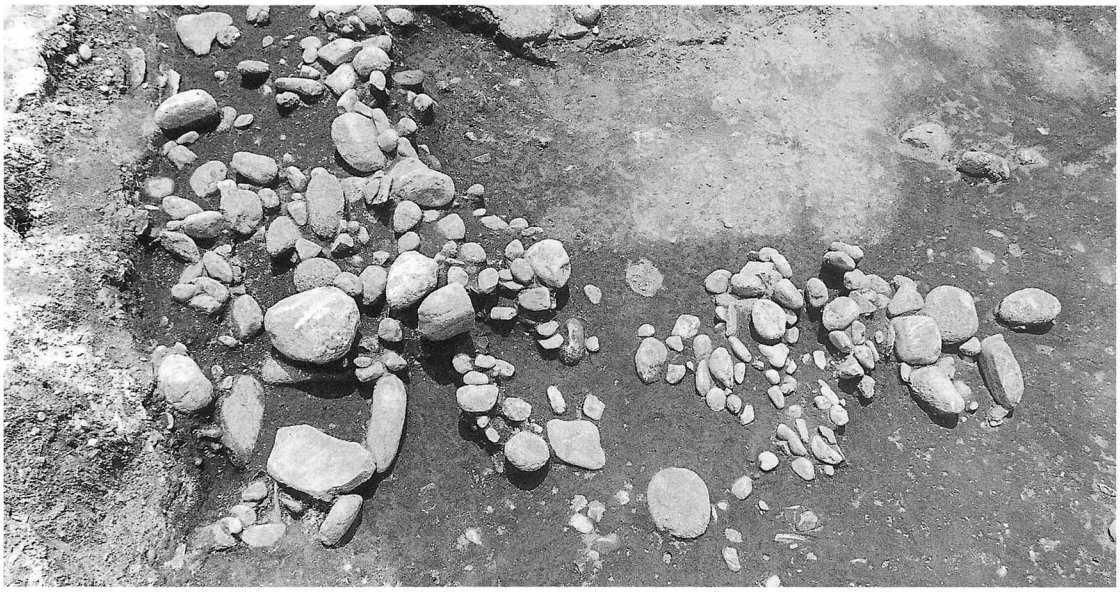
駅仲町線 339号
住居址 炉

駅仲町線 339号住居址 炉

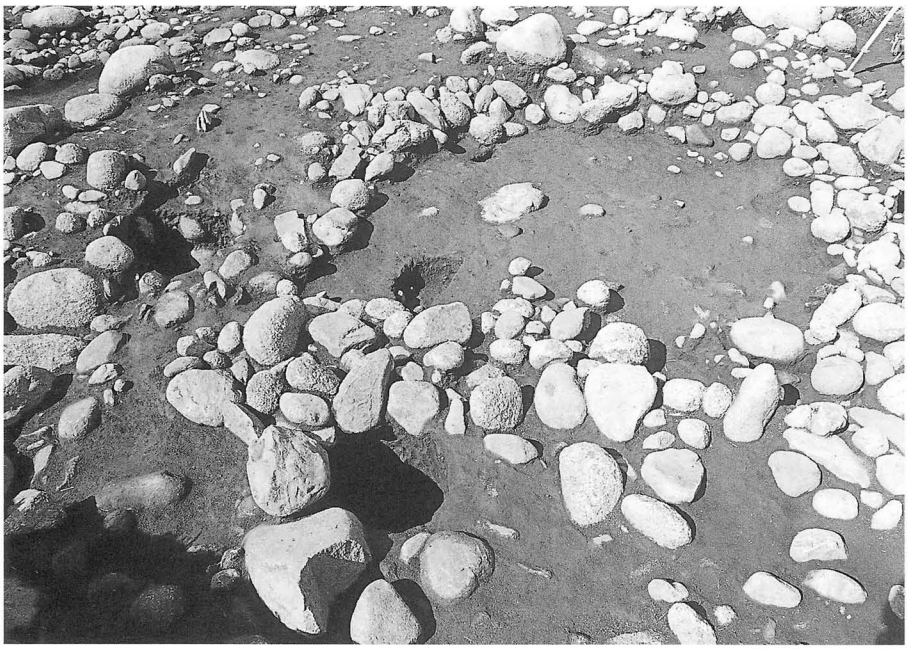
駅仲町線 340号住居址

駅仲町線 340号住居址

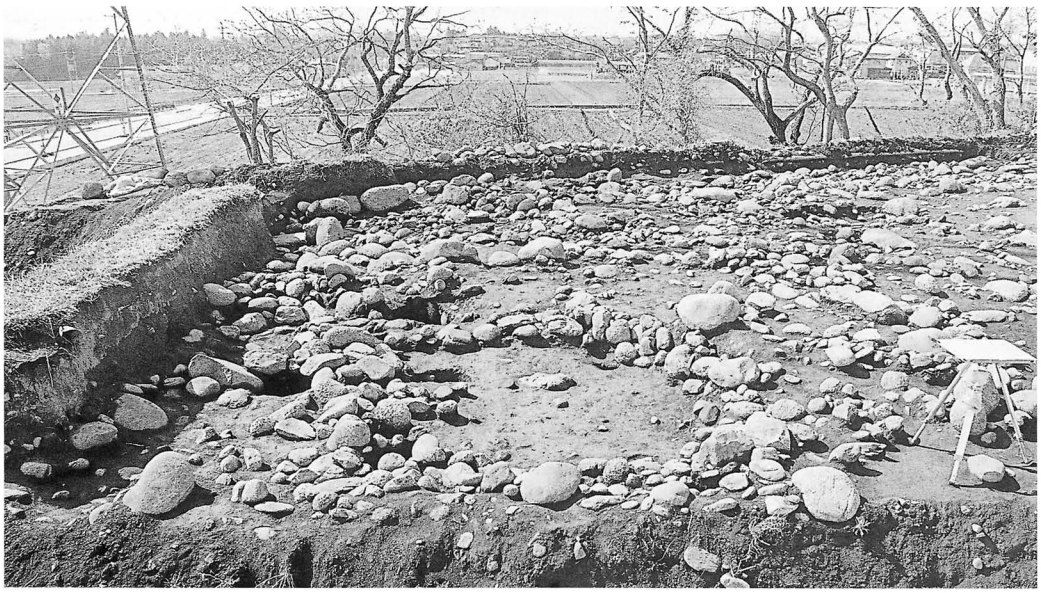
駅仲町線 343号住居址



駅仲町線　2号石棺墓、9・11号集石



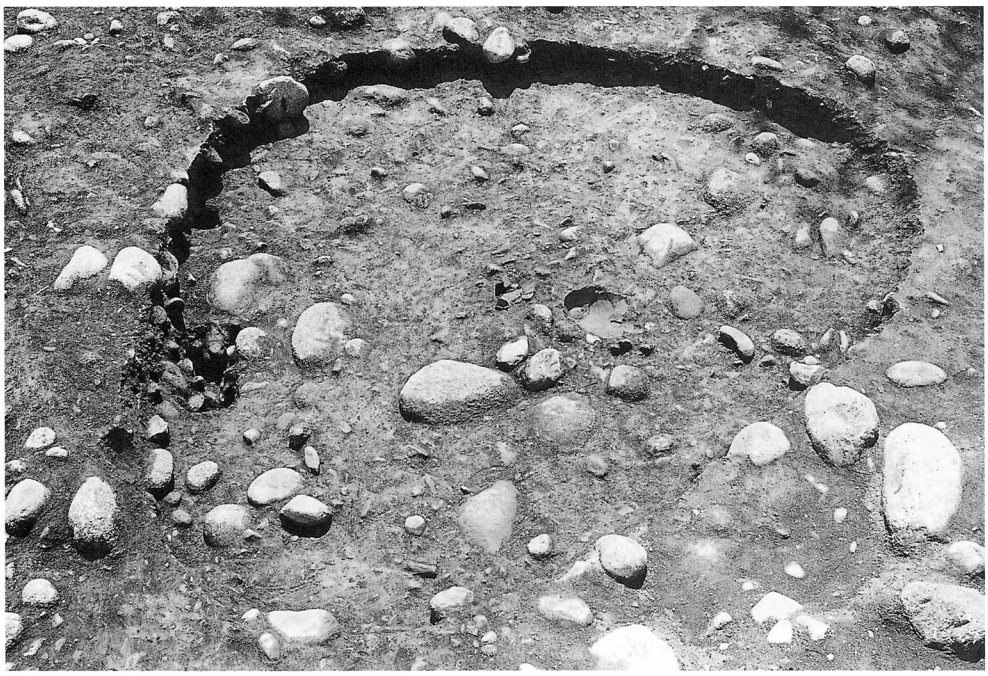
12街区　365号住居址



12街区　365号住居址遠景

12街区
365号住居址と環状集石

12街区
365号住居址と環状集石

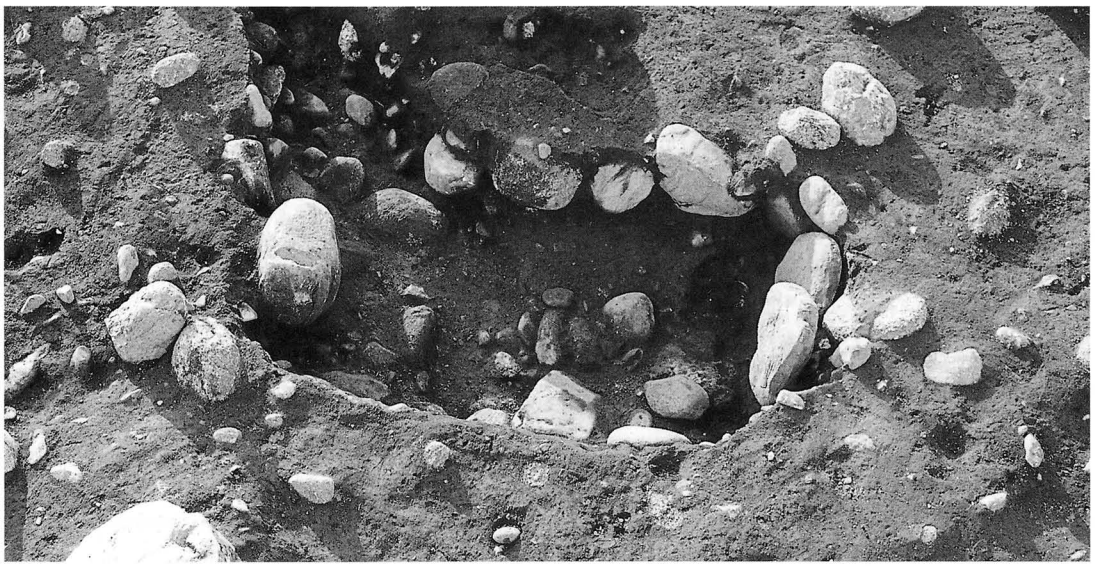


12街区 366号住居址

12街区 367号住居址・63号竪穴

12街区
367号住居址埋土の礫

12街区 367号住居址東方



12街区
6号石棺墓

12街区　6号石棺墓

区画道路5号線
379号住居址

報 告 書 抄 録

ふりがな	なかこしいせき
書　　名	中越遺跡
副 書 名	西原土地区画整理事業第２工区に伴う第15～17次調査報告書
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者	小池　孝
編 集 機 関	宮田村教育委員会
所 在 地	長野県上伊那郡宮田村7021
発行年月日	平成14(2002)年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
		市町村	遺跡番号				
なかこしいちいせき 中越1遺跡	長野県上伊那郡宮田村7600-5ほか	20388	1	35°46′12″	137°56′43″	H12.1.11～2.2 H12.2.7～3.2 H12.11.7～13.1.24 H13.2.22～2.26 H13.10.22～10.25	1680㎡
なかこしにいせき 中越2遺跡	長野県上伊那郡宮田村7460-9ほか	20388	2	35°46′07″	137°56′44″	H12.9.28～10.12 H13.7.10～11.1 H14.1.15～2.14	1300㎡
なかこしさんいせき 中越3遺跡	長野県上伊那郡宮田村7460-1ほか	20388	3	35°46′02″	137°56′42″	H12.4.13～8.7 H13.2.13～6.11 H13.6.25～7.9 H13.9.20～9.28	3860㎡

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物
中越１遺跡	集落跡	縄文時代 中世	住居址 土坑 竪穴建物址 井戸址 掘立柱建物址	43 12 1 1 2	縄文時代前期の土器・石器 中世の内耳土器・銭
中越２遺跡	集落跡	縄文時代	住居址 土坑	5 3	縄文時代中期の土器・石器
中越３遺跡	集落跡 墓域	縄文時代	住居址 土坑 石棺墓 集石	30 15 5 8	縄文時代中期の土器・石器 縄文時代後期の土器・石器

特記事項

これまで縄文時代後期の遺跡とされてきた中越3遺跡の、縄文時代中期の遺物包含層の下から、規模の大きな縄文時代中期の集落が発見され、中期中葉末の良好な資料を得た。これにより中越2遺跡で確認されている縄文時代中期の集落の規模が大きく拡大したことになる。また、中越3遺跡で発見された縄文時代後期の、方形石囲住居と石棺墓は、中越遺跡における該期の遺構の典型例となる可能性がある。

中　越　遺　跡

2002年3月　発行

編集・発行　長野県上伊那郡宮田村7021番地
宮田村教育委員会

印　　刷　龍共印刷株式会社